大正十五年十二月十五日印刷
大正十五年十二月二十日發行

〔非賣品〕

日本古典全集第一回

榮華物語

下卷

編纂者　與謝野寛
同　正宗敦夫
同　與謝野晶子
裝幀圖案者　廣川松五郎

東京府北豊島郡長崎村一六二
發行者　長島豐太郎

東京府北豊島郡長崎村一六二
印刷所　新樹製版印刷所
印刷者　高瀬清吉

東京府北豊島郡長崎村一六二一
日本古典全集刊行會
振替口座東京七三〇三二
電話番號小石川七〇九九

發行所

右赤染衞門集、以二流布本一校合了。〔群書類從本ノ刊記ナリ。〕

〔日本古典全集編者附記。「赤染衞門集」は作者自ら其末に書ける如く、關白藤原賴通の需に應じ、老後に自選したるものである。この以後の作は遺憾ながら傳はらない。此歌集と「榮華物語」（正編）とを茲に合せたから、正に「赤染衞門全集」と稱すべきである。〕

諸共なる人、淀川を見て、恨めしき人の西國へ往にしを思ふにや、「此處より舟には乘るかな」と云ふ
氣色の心苦しうて

是れよりや舟に乘りしと淀川の聲は冷然く焦がるめるかな

春より秋に成るまで月日の行方も知らぬに、虫の聲を微かに聞きて

過ぎ換る程も知らぬに微かにも秋とは虫の聲にてぞ聞く

同じ頃、雁の鳴くを聞きて

起きも居ぬ我が常世〔床夜〕こそ悲しけれ春歸りにし雁も鳴くまで

尼に成りたりし人に遣りし

往時の雁の數にも遲れにき此世にもまた先だちぬとか

高陽院殿の麓にて紅葉を見て

秋行けど長閑けき宿の紅葉かな風だに荒く吹かぬなるべし

關白殿〔賴通〕に集ども集めさせ給ふとて、「此處にも有らん、參らせよ」と仰せられたれば、皆忘れにけるを、唯だ覺ゆる限り書き出でて參らする奥に

是れならで思ふ事のみ數無きを書き集めてぞ君に見せばや

山里の卯の花がくれ時鳥うしろめたきを然かや鳴くらん

菖蒲

五月雨の何時か過ぎてもあやめ草軒の雫は玉と見えけり

床夏

庭の面に唐の錦を織るものは猶常夏の花にざりける

戀

つれもなき人も哀れと云ひてまし戀する程を知らせだに爲ば

祝

數知らぬ濱の眞砂の年を經て君が數へん世をぞ見るべき

遠く行く人に扇を取らすとて

手に鳴らす扇の風を添へたらば動搖ぐ草葉に付けて忘るな

女「江侍従」の風甚う吹きし日、物に詣でしに

風にだに當てじとこそは思ひしを吹くに障らで行くが悲しき

六月に櫻井の聖の許に行きたりしに、鶯鳴きしを

春めける聲に聞ゆる鶯はまだ櫻井の里に住めばか

同じ日、菖蒲に付けて、兼房の君の　〔兼房〕

かき絶えて問はぬに見えぬ菖蒲草如何なる事の憂きにか有るらん

返し

菖蒲草思はぬ方に根を差すは□しかか小沼〔來ぬ〕に生ふるなりけり

十月に有明の月のいみじう明きに、俄かにかき時雨れ、また打明りつつ、哀れなるを獨り眺めて

神無月有明の空の時雨るるもまた我ならぬ人や見るらん

畢周が急がしき事ありとて久しう見えざりしかば、覺束なう覺えて

逢ひぬべき此世にだにも見難くて長く別れん後ぞ悲しき

鷹司殿の上〔倫子〕の御賀、關白殿〔賴通〕の爲させ給ふとて、御屏風の歌召ししに、「臨時客」

紫の袖を列ねて來たるかな春立〔裁〕つことは是れぞ嬉しき

子日

萬づ代の例に君が引かるれば子日の松も羨みや爲ん

花見

春毎に惜めど散るがつらければ花の心を恨みにぞ行く

山家卯花

返し、　　　　中納言

清水をば南に訪ふと見ゆれども心は西に掛くと知らなん

秋より病ひて、十月一日頃に宜しく成りて見れば、庭草も霜枯れて、薄の花ども爽やかに成りにけるを
知らぬも哀れにて

過ぎにける秋ぞ悲しき時雨れつつ獨りや死出の山を越えまし

猶心地苦しうて、夜一夜惱み明して、外を見出だしたれば、下草の露のいと微かなるが朝日に當りて、
賴もしげ無く見えしに

下草の有るか無きかに置く露の消ゆとも誰か知るべかりける

擧周が住む方に立部など爲さするを見て、此方にも爲させよと云ひし次でに

又も又歪き方をば造るめり荒れは荒れたる宿に在れとや

通ふ女の許に薰香乞ひたる、おこすとて、「燻ゆる煙」などやうに云ひたる。「返しして」と云ひしに〔擧
周に代りて〕

薰香の燻〔悔〕ゆるばかりの事や何ぞ煙に飽かぬ心なりけり

五月五日、内大臣殿〔敎通〕の若君の菖蒲のいと長きを賜はせたりしに、擧周に代りて

長き根も何時かは見ましあやめ草君が引くこそ嬉しかりけれ

道命阿闍梨亡くなりて後、法輪に詣でたりしに、住みし坊の櫻の咲きたりしを見て

誰見よと猶匂ふらん櫻花散るを惜みし人も無き世に

兼綱の君、妻亡くなりて、忌過ぎての程に云ひたる　〔兼綱〕

問はぬかた別れて後の悲しさは忘るる程に成りやしぬらん

返し

如何にとも云はぬ涙の咽せ返り心に歎く程を見せばや

前齋院「選子内親王」の御祭送に、其夜「斯かる事を、筑紫へ下りにし御乳母の孫は知らじかし」と戀ひしに、哀れにて、其人を知りたる人に遣りし

燃え果つる烟を知らで靈山外の空なる雲と見るらん

女院「上東門院」の尼に成らせ給ひし日

歎かじとかねて心を偽しかども今日になるこそ悲しかりけれ

又の日、辨内侍の許に

導かん影に付けては嬉しきを猶悲しきは何の心ぞ

横川のかくてふ僧都出でておはせしに、四條中納言「定賴」經習ひにおはしたりしに聞えし

行く方も無くこそ物は悲しけれ如何で南を尋ね來つらん

成衡〔擧周ノ子、作者ノ孫〕が男兒〔匡房〕生ませたりしに、産衣縫ふ程に覺えし

雲の上に上らんまでも見てしがな鶴の毛衣年經とならば

〔同じ時〕七日夜

千代を祈る心の中の涼しきは絶えせぬ家の風にざりける

擧周が殿上して草深き庭にて拜みしを

草分けて立ち居る袖の嬉しさに絶えず涙の露ぞこぼるる

是れを聞きて兼綱の君の云ひたる

こぼるらん涙の露も道理や絶えず吹くらん家の風には

返し

吹き增さる家の風だに絶えせずば露こぼるとも更に歎かじ

和泉の果てて後、三河に成りての年、石淸水の祭の使を見に出でて

色深く插しの藤も見ゆるかな嬉しき瀨瀨の涙添はりて

五節の料とて、女院〔上東門院〕より菊重ねの汗衫を「善うと思ふものながら、人に縫はすな」とて賜はせたりし、縫ひて參らすとて

色色に匂へる菊に手を掛けて露には代ふる心地こそすれ

我宿の庭の尾花の折れ返り招くとだにも見でや過ぎぬる

後の九月晦日の日　兼綱の中將

長月の日數惜まれる年だにも飽かぬは秋の別れなりけり

返し

秋の唯だ日數に添はで今日に斯く別れぬ年の有る世なりけり

紅葉見に戸無瀬に行かんと契りし人の、音も爲ざりしかば

うしろめた疾くと急がでもみぢ葉は戸無瀬の瀧の落ちもこそすれ

女院「上東門院」左近の命婦にのりただ住みしを、蜻蛉の少納言の内侍に移りたりと聞きて、のりただに遣りし

まことにや姨捨山の月は見る世に更科の邊りと思ふに

夜更くるまで月を見て

物思はぬ人もや今宵眺むらん寢られぬままに月を見るかな

「月夜よりは、曇り雨降らん夜は必ず來ん」と契りける人の、雨いみじく降りける夜、見えず成りにければ、「翌日遣らん」と云ひし「江侍從」に代りて

曇るとも有らじと思ひし空言の顯ればかり降りし雨かな

何事も浮きて浮葉に空蟬の涙は露と置きて消えける

とて有りし。折しも子どもの、生きたる蟬に緒を付けて遊ぶを取りて、置き換へて遣るとて

空蟬の露の命の消ぬべきをたまたま結び留めつるかな

語らふ人の、七月八日の夜、物語して、曉に歸りしに、翌旦贈りし

織女の昨日別れし空よりも明くるは今朝ぞ理無かりける

前栽を植ゑしに、食はれたるを見て、往にし人、「己が家の花のをかしきを見せばや、殘らず成りぬめりしこそいとほしけれ」と云ひたるに、色色の花を見て、遣るとて

我宿をせめて見たれば秋の野の花てふ花は秋「無きカ」にしも有らず

人の家貴るを見に行きて、歸りて、とも斯うも云はねば、あれより、「見劣りしたるか、音もせぬは」と云ひたるに遣る。草深く萩多かりし所なり。

茂かりし萩の籬こそ戀しけれ然か「鹿」ばかりだに我宿は無し

物へ詣づる路に、刈萱草の花のいと多かるを、佛に奉らんと云へば、「我が多う折らん」と爭ふを見て

行く道の左右なるすまひ草方分けてこそ取るべかりけれ

殿の上「倫子」の八幡より歸らせ給ふとて、門の前過ぎさせ給ふに、風甚う吹きしに　庭の尾花甚く招きしを折りて、追ひて參らせし

何れとか分くべかるらん梅の花香をだに遣る人の有りせば

人の許より櫻の枝をいと大きに折りておこせたりしに

我が爲めに折れる心は嬉しくて花惜まずと見ゆる枝かな

櫻多かる山寺見んとて詣でたりしかど、散りにけり。其夜月の明かりしに〔此歌重複せり〕

花の色は散るをだに見で散りにけり慰めに見る春の夜の月

四條中納言〔定賴〕の「此處に花の無き折、をかしき花見えばおこせよ」となん有りしと云ふ人の有りしかば、「花を傳へよ」とて遣りし

櫻さへ盛りになべて成りぬとも花無き宿は知らずや有るらん

返し　中納言

我宿に劣らぬ花は有りやとも今は尋ねし無き名立ちけり

散りて後、人、春盡きたる花のをかしきに付けて聞えし〔代りて〕

山隱れ人は尋ねず櫻花春さへ過ぎぬ誰に見せまし

小さき櫻を植ゑたりしに、年經て花咲きたりしに

植ゑ置かば人も見よとぞ思ひしを花咲くまでも在れば在りけり

人の許より蓮の浮葉に露を置きて、婦の死にたるを入れておこせて　〔某〕

山里に行きたりしに、送りの人人歸りて、二三日音せざりしかば、心細う覺えて

送り置きて人も見えねば古の柴の舟とも思ほゆるかな

出づべき程は近く、蛙の鳴きしを

歸るべき程の近きを惜むかと蛙の聲の哀れなるかな

「王昭君が胡の國に行き着きての思ひ詠みて」と人の云ひしに

歎き來し道の露にも增さりけり馴れにし里を戀ふる涙は

内侍の督の殿の御葬送の翌旦

燃えつらん夜の煙の寂しきに今朝浮雲の立つをこそ見れ

皇太后宮「妍子」崩ぜさせ給ひて、四十九日の御佛の料の玉とて人の召ししに、參らすとて

別れにし玉「魂」は歸るに難ければ涙のみこそ袖に掛かれる

入道殿「道長」おはしまさで後、御堂に詣でたるに、いと寂しく、池の浮草繁かりしに

往時の跡にだにこそ有りと聞け池に映れる影も見えなん

兼房の君、春待つ心の歌詠みて、「是れ定めよ」と有りしに、正月一日聞えし

何時しかと霞める空の氣色かた春待つ人は如何が見るらん

梅の造り花に里のを取り交ぜたるを見て

夜に疾く車に乗りて京に入る程に

貝拾ふ浦は何とも見えねども都の方見嬉しかりけり

舉周が和泉果てて上るままに、いと重う病ひしに、「住吉の祟り給ふ」と人の云ひしが、御幣奉られしに書き附けし

頼みては久しくなりぬ住吉の先づ「松」此度は驗なん〔二字竄入ナラン〕見せてよ

千代經よとまだ緑兒に有りしより唯だ住吉の松を祈りき

代らんと祈る命は惜からで別ると思はん程ぞ悲しき

奉りての夜、人の夢に、鬚いと白き翁、此御幣を皆がら取ると見て、愈りにき。

五十日の程する兒を父の迎ふるに、遣る人〔江侍從〕に代りて

別れとも知らず顔なる面影に戀しとだにも思はずもがな

産衣を留めたりけるを、「守りにする物なり」とて乞ひたりければ、遣るに代りて

見る程の守りと思へばみを衣此「兒」だに形見の無きぞ悲しき

其兒の父亡くなりて、妹の許に在るを迎へければ、「捨て放ちてしものは何しに斯樣に」と云ひたる返り事に代りて

撫子は同じ垣根と思ひしを露さへ消えんものとやは見し

分ちけん昔に有らぬ涙こそ猶然り〔舍利〕ながら悲しかりけれ

　龜井を見て

劫を經て救ふ心の深ければ龜井の水は斷ゆる世も有らじ

　太子の額つき給ふとて、額に當て給ひける石を見て

立ち居ける跡を見るこそ悲しけれ石や其世に逢へらましかば

　塔の露盤の黄金、太子塗り給ひて、「此光亡せん折、佛法も亡すべし」と誓ひ給ひけるが、曇りて見えしに

磨きけん黄金の色も曇りつつ法の光も消えぬべきかな

　念佛寺にて起き明す曉に、鴫の鳴くを聞きて

夜もすがら我が取る數の亂るるを鴫の羽搔きや告ぐらん

　歸るに風のいと荒くて、石部と云ふ所に留まりて日頃あるに、雁の鳴きしを

波間待つ舟は泊りに休らへど風に延へては雁ぞ聞ゆる

　水鳥の多く浮びたる所を見て

水鳥の浮きて憂き世を過ぐす間に幾夜の瀨瀨を試みるらん

　供なりし侍士の、あの寺にて俄かに亡くなりにしに、歸るに聲も爲ぬが哀れにて

出でて來し日やは限りと思ひけん歸るに變る玉だにも無し

重く成り増さり給ふと有りしに、物の哀れなるに、雉の立ち居せしに
山深く住まふ雉のほろほろと立ち居に付けて物ぞ悲しき
亡せ給ひしかば、命長きも心細う覚えて
厭へども飽り憂き身の長らへて人に後るる齢ぞ積りぬ
御忌に籠りたる僧どもの料に、「引き干し」して奉りしに
引き干して袂「一袖カ」に軽くと思へども涙ぞ増さる見る目「海松、海布」絶えては
天王寺に詣でしに長柄の橋を過ぐとて
我ばかり長柄の橋は朽ちにけり何は「難波」の事も古く悲しき
住吉にて
末の世は護せら留めらん住吉の先づ「松」其神を見たらましかば
西大門にて月のいと明かりしに
此處にして光を待たん極楽に向ふと聞きし門に来にけり
聖靈院に夜更けて詣でたりしに、御燈の明く見えしに
世を照す法のともし火無かりせば佛の道を如何で知らまし
舎利拝み奉るとて

我が爲めに著よと思ひし藤衣身に代へてこそ悲しかりけれ

同じ頃、源大納言亡せさせ給へりしに、御女の美作の三位に聞えし

親の爲め落つる涙や如何ならん此は「子は」世に知らず悲しかりけり

年頃使ひし人の常陸へ下るとて、住みし方の前に菊を植ゑ置きしが、花咲きたるを未だ斯くとも知らじかしと思ふに、悲しければ

東路の人知るらめや植ゑ置きし菊の露だに無く消えぬとも

風吹くに木の葉の散りしを

散り紛ふ紅葉を見ても音をぞ泣く我木「子」枯の風のつらさに

又の年の秋、住みし方の前栽、色色に咲き亂れたるに、のりたゞが來て哀れなる事など云ひて、「のりたゞ」

植ゑ置きし人は露より徒なれど花の昔の秋に變らぬ

と云ひしに

朝夕に我が撫子の枯れしより垣ほの露は秋も分かれず

大原少將入道病ひ給ひしに、參うでて、近き程に在るに、月の明かりしに

炭竈の煙は空に通へども大原山の月ぞさやけき

女［江侍從］に代りて返し

今更に何かは露の洩りつらん忍び草の然ても止みなで

祇陀林に在りし聖、竹の枝に蜂の巣くひたるをおこせて、「釋迦佛の述給ふなり」とて「竹葉」

我宿の汀に生ふる嫋竹の蓮「蜂巣」と見ゆる折も有りけり

と有りし返し

末の世は竹も蓮に成りければ佛に疎［空洞］き身とも思はず

同じ寺に、五月に水増さりて、「流れぬべし、釋迦佛、横川に渡し奉らん」と聖の云ひしに

濁り無き横川の水に君住［澄］まば此方の岸は如何か渡らん

花見しに皆散りければ、口惜しうて、庭なるをかき集めて

花をこそ散らぬ前にと尋ねつれ雪を分けても歸りぬるかな

久しく音せぬ人に、荻に付けて遣りし

音づれぬ人の心の秋や猶如何なる荻の葉かはそよめく

筑前守みちなり、國にて亡くなりぬと聞きて、罷り申しに來りしが思ひ出でられて

歸るべき程を賴めし別れこそ今は限りの旅には有りけれ

女「江侍從」の亡くなりたりしに、服すとて

遠き程に男の往きたる人、九月ばかりに風の甚く吹く夕暮に云ひたる　〔江侍從カ〕

待つ人の打來る駒は音もせで風の聲のみ荒き宿かな

返し

荒く吹く風を心に恨みつつ獨りし寢らん袖ぞ悲しき

同じ頃、法輪に籠りたるに、風の甚く吹きしに、睡も寢られで〔此歌重複セリ〕

山おろしに風の聲のみ烈しくて堰塞の水は洩〔守〕れど寢られず

十月ばかりに耻かしき今參りの有る頃、物憑きて恐ろしげなる聲をし、人の在りしかば、耻かしうて、斯く云ひし

霜枯の虫も音弱く成る頃に何の聲とか人の聞くらん

擧周が兒の五十日の物を爲させられたりしに

常磐山木高き松を初めにて枝さし添はれ千代の春春

時時來る男の「淵は瀨に成る」と云ひたるに、云はせし

淵や然は瀨には成りける飛鳥川淺きを深く爲す世なりせば

年頃思ひ掛けたりけれど、え云ひ出でで有りける人の、氣色見せて後、男〔某〕

忍草忍びし折も有りにしを飽かぬは人の心なりけり

春花見し山寺を見れば、庭に紅葉の散り積りたるを

花散りし庭を紅葉の積れるを何れ時りて惜しと見えけん

或寺の僧房の前に柴と云ふ物を多く積きたる中に、紅葉の交りたりしを

柴人に交せて刈りけんもみぢ葉は燃えぬばかりの色も甲斐無し

人の許より暗き程に氷魚おこせたるに

網代木に寄るとは聞きし物なれど日を「氷魚」暮すとは今日こそは見れ

物へ行く路に川に男どもの下り立ちて、樟して水を掻き撒かせば、波の立つやうに見ゆるを、「何わざするぞ」と問はすれば、「魚塞くなり」と云ひしに

白波の寄する門と見えつるは魚の命の断「立」つにぞ有りける

山寺に籠りたるに、刈る野の中に火の見ゆるを、「亡き人の事する」と人の云ひしに

心細誰か煙と成るならん遥かに見ゆる野辺のともし火

草の中に蝶の死にたるを見て

憂き世には長らへじとぞ思へども死ぬてふ「蝶」ばかり悲しきは無し

いみじう世のはかなき頃、久しく音せぬ人に

消えも敢へずはかなき頃の露ばかり有りや無しやと人の問へかし

身を隠す方無きものは我ならでまたは焼野の雉なりけり

　人に驚きて、いと華やかに啼きしに

御狩する人もこそ聞け春の野に誰が來ると見て雉鳴くらん

　梅の花を折りて、幼なき人の炭櫃に挿したるを

うしろめた風吹かずとも埋火の邊りの花は散りや増さらん

　同じ頃、法輪に詣でたりしに、花はまだ咲かぬに、雨の雫の花の散ると見えしに

常は唯だ散るだに惜しき山櫻降りに降るとも見ゆる雨かな

　花見に歩りきて

花にだに逢はでやとこそ思ひしか今は命に任せてを見ん

　いみじう散り紛ふを

惜みにと來つる心も有るものを見るさへにしも散る櫻かな

　庭に積る花を風の吹き散らすを

散りてだに見るべきものを櫻花庭を然も掃く風の心よ

　菊の花をかしき所ありとて往ぬる人の、遅う歸るに云ひ遣る

菊一開く」にだに心は移る花の色を見に行く人は歸りしものを

月影は花の色かと見ゆれどもまだ舊〔降〕年の雪にざりける

　正月七日、若菜、人に遣るとて

春日野の今日七草の是れならで君を問ふ日〔烽火〕は何時ぞとも無し

　蓮の蕾みたるを身にて、茄子の恐ろしげに節づきたるを顔にして、法師の形を造りて、人のおこせたり
　しに

極樂の蓮と身をば茄子にて憂きは此世の顔にざりける

　然も云ひつべき人の、安藝守に成りしに、使ふべき用ありて、榑を乞ひたりしに、唯だ少しの下し文を
　爲たりしかば、書き付けて、返しし

なかなかに我名ぞ惜しき杣川の少なき榑の下し文かな

　人に忘れられたる人〔江侍從カ〕の、五月五日、枕の上に菖蒲を人の置きけるを見て　〔江侍從カ〕

乾く間も無き獨寢の手枕に菖蒲の根〔音〕をやいとど添ふべき

　返し

二人寢し年變るまであやめ草問はぬを我も哀れとぞ見る

　秋、蜘蛛の維をいみじく掛きたるを見て

我宿の主も今は歎くまじ蜘蛛の八重垣隙も無く見ゆ

で、渡りにけりと聞きて、七月七日に遣りし

天の川今日や今日やと待ちつたれば早く渡りて君は住むとか

正月七日、稲荷の邊りに住む人、鍬と云ふ物申し渡り、若菜をおこせたりしに

春日野の若菜かとこそ思ひしに稲荷の山の鍬「杉」も積みけり

同じ子日なりしに

何れにか先づ「松」手掛けまし子日野に若菜も今日は摘むべかりけり

子日しに行きたる人の、小松に海藻を結び付けて、「是れをや海松と云ふらん」と云ひたりしに

松山に波の掛けたる物「藻」見れば危ふかりける子日なりけり

三月卅日に花の散るを

惜むにし花の散らずは今日も唯だ春行くとこそ外に見ましし「をノ誤カ」

山寺にて逆修せしに、四十九日に成る日

思ふにぞ悲しかりける我ならで今日をば誰か問ふべかりける

思ひ掛けたる人の、云ひ絶えて、年經て「文遣らん」と云ひし。人「江侍從」に代りて

年經ぬる思ひとだにも思へかし今に忘れぬ心長さを

師走に月の明き夜、木木に雪の降り掛かりたるを

電の如し

いなづまの光留まる程見れば我身ばかりぞ「假」の物にぞ有りける

語らひし人の久しく音せざりしに

心にも有らず憂き身の命かた消えなば絶ゆる程を見ましや

或寺に八講せしに、日頃局並びにて云ひ初めたる人、常に文おこせなどして有りしが、秋の戀しき事など云ひたるに

眞にぞ西に心を懸けしより秋を忘れぬ身と成りぬべき

同じ人の、講する所に語り合ひて、歸りに、あの人の車に遲れにしを、又の日、「暫し待ち付けざりし」と恨みたりしに

廻りけん程ぞ悲しき遲れては獨りや六つの道に惑ひし

或所の女房の、忍ばんと契りしかど、絶えて、「昔忘れにき、今より」と云ひたりしに

今よりと云ふ行末も如何かあらん昔契りし物忘れせば

また然樣なる人に

忘れじと互に云ひし言の葉を誰が空言に成して善からん

定基僧都の母、「家造りて渡らんには、先づ消息せん、池のをかしきも見せん」と契りしかど、音もせ

憂「浮」きながら身には譬へん水の泡の例に取らば消えぬべきかな

水の泡の如し

雨降れば水に浮べる泡沫の久しからぬは我身なりけり

焔の如し

夏の夜の火影に惑ふ蛾見れば唯だ自らの事にぞ有りける

芭蕉の葉の如し

秋風に砕くる草の葉を見てぞ身の固からぬ事は知らるる

幻の如し

夢や夢現や夢と分かぬかな如何なる世にか覚めんとすらん

影の如し

水に浮ぶ影は中にも有らねども其れは有りとは頼むべきかな

響の如し

何時までか聲も聞えん山彦の萬づに付けて物ぞ悲しき

浮べる雲の如し

行方無く空に漂ふ浮雲に煙を添へん程ぞ悲しき

赤染衛門集

流れても徒にすなとてかき撫づる得ること難き法を說けとて

藥王品

燃しつる我身一つの光にてあまたの國を照しつるかな

妙音品

此處にのみ有りとやは見る何處にも妙なる聲に法をこそ說け

觀音品

身を分けて遍く法を說く中にまだ濟されぬ我身悲しな

陀羅尼品

法守る誓ひ深く立てつれば末の世までも淺せじとぞ思ふ

嚴王品

佛には遇ふこと難き讓るとて子を許してぞ親も勸めし

普賢品

行末の法を弘めに來りける誓を聞くが哀れなるかな

維摩經十喩

此身は集まれる蟻の如し

涌出品

如何でかは子よりも親の若からん老いては若く成るにや有るらん

壽量品

有りながら隱れる父は子の爲めに止めし藥を服すなりけり

分別品

佛にて得たる功德を數へすには尾ばかりだに知らず有らまし

隨喜品

世の中に滿てし寶を得んよりは法を聽くべき事には勝れり

功德品

持ち難き法をかき讀む報いには身ぞ澄み清き鏡なりける

不輕品

見る人を常に輕めぬ心こそ終に佛の身には成りぬれ

神力品

空までに至れる舌の眞をば法を持たん人ぞ知るべき

囑累品

五百品

こしらへて假の宿りに休めずは前の道には猶惑はまし

人記品

衣なる玉とも掛けて知らざりき夢覺めてこそ嬉しかりけれ

法師品

もろともに悟りを開く是れこそは昔契りししるしなりけれ

寳塔品

住み難き心し室に留まらねば法說くことぞ稀に成るべき

提婆品

大空に寳の塔の現れて法の爲めにぞ身をば分けける

海の宮を出でたる程も無く障りの外に成りにけるかな

勸持品

身に代へて法を愛まん人にこそ忍び難きを忍びては見め

安樂行品

名を擧げて讃めも謗らじ法を唯だ多くも說かじ少たくも爲じ

契りこし心の程を見つるかなさめて命の長き限りに

法華經の心を詠みし

序品

・いにしへの妙なる法を說きければ今の光も然か「[illegible]」とこそ見れ

方便品

說き置かで入りなましかば二つ無く三つ無き法を誰れ弘めまし

譬喩品

燃ゆる火の家を出でてぞ悟りぬる三つの車は一つなりけり

信解品

親とだに知らで惑ふが悲しさに此「子の」寶をも讓りつるかな

藥草喩品

法の雨は草木も分けで注げども己が下とぞ受け増さりけり

授記品

次次の佛に多く仕へてぞ蓮を開く身とは成るべき

化城喩品

五十日の程なる兒に、藥玉を遣るとて

生ひたらん程ぞゆかしき菖蒲草二葉よりこそ玉と見えけれ

花盛りに雨いみじう降りし頃、御前の花如何ならんと思ひて、殿〔道長〕に參らせし

散り易き雨にや移る櫻花見る間の色を誰に問はまし

殿の御前御返し　〔道長〕

まだ散らで雨に匂へる花傘を如何でか雨の降りて著〔來〕つらん

また仰せられたる　〔道長〕

云はねども耳慣れにたる春雨に花の言葉は降〔古〕りにこそ降〔古〕れ

花見に歩りきしに、山の井と云ふ寺の櫻の二木あるを、諸共なる人　〔某〕

山の井の二木の櫻咲きにけり

と云ひしに

君に語らん來ぬ人の爲め

またいみじく散るところに、庭の間も無くをかしく見えしに

踏めば惜し踏まずば行かん方も無し散り積む庭の花櫻かな

殿〔道長〕に侍ひし女房を語らひしに、久しう音も爲ざりしに

秋の夜獨り起き明して

露共に起〔置〕きゐる夜半の鷲無くは誰とか秋の夜を明さまし

「人の難く思ふは罪深くなるものを、斯う覺ゆる事と云ひ來たる人に、如何に答へん」と云ひし人〔江侍從〕に代りて

深からぬ心の執は何ならじ僞を云はぬ罪は有りとも

四月一日鞍馬に詣でたりしに、鶯の鳴きしを

鶯の耳慣れにたる聲よりは山ほととぎす今日音鳴けかし

久しく音づれぬ人の來て、前近き萩に結び付けて往にけるを、〔匡衡〕見て、遣りし。人〔江侍從〕に代りて

今宵こそ世に在る人はゆかしけれ何處も斯くや月を見るらん

補陀林に八講聞きしに、殿のをむしさ（そゞろさ）逢ひて、葵に書きておこせたりし。此歌は忘れにし。返し

葵葉の露をば置きてそのかみに〔のカ〕人に葵〔逢ふ日〕も嬉しかりけり

津の國に通ふ男の、妻の許に「今なん行く」と云ひて、後もまだ有りと聞きし人に代りて

有りてやは音せざるべき津の國の今ぞ生〔行〕田の森と云ひしは

花見に、俗聖の堂の庭に花いみじう散り積りて、人影も見えず、聖の掃ひ裝ろひし思ひ出でられて

植ゑ置きし主無き宿の庭櫻散り積るとも誰か掃はん

閏幾の待つに月日の添ふよりは餘り七日の有らば有れかし

閏月一日まで散らぬ櫻ありしを道明阿闍梨に遣りし

まだ散らぬ花に心を慰めて春過ぎぬとも思はざりけり

返し　　阿闍梨

春は然は花より外の事や無き野邊の霞の立ちもこそ聞け

また是れより

惜めども立ちやは留まる春霞妬たし殘れる花も思はん

五月一日頃、　　阿闍梨

時鳥待つ程とこそ思ひつれ聞きての後も寢られざりけり

返し

まことにぞ打だに臥さで明しつる山郭公鳴くや鳴くやと

同じ頃、山寺に籠りたりと聞きしに遣りし

山深く鳴くらん聲を時鳥聞くに增さりて思ひこそ遣れ

朝顔、夕顔、植ゑて見し頃、

晝間こそ慰む方は無かりけれ朝夕顔の花も無き間は

時時渡る所に、好い「こは」の數多あるを一つ乞ふに、惜みしかば、出でたる間に取りて歸りたるを、
「如何でか消息無くては」と云ひたりしに

盜むともこは「此は」惡しからぬ事と知れ乞ふには知らず如何にかは鎖ん

物詣に詣でて、路に留まりたる家の松の木に、杖をつかせたるを見て

老いにける我身は何に掛からまし松も千年の杖は附きけり

のりなが母の、春頃、糸を乞ひたりしを、賜ひたる事ありし頃、「今此程過して」と云ひて後、忘れて、七月七日思ひ出でて遣るとて

何をして網の圖を忘れけん「以下蝕シテ缺ケタリ」

同じ人、久しく音せで、物語繪のをかしきをおこせたりしに

笑みながら猶こそつらき君なれやかき絶えてやは音せざるべき

此人の、國に多田と云ふ所に、斯うとも云はで往にけるを聞きて、遣りし

今とだに云はんはいとや難かりし唯だ「多田」に行きけん人のつらさよ

六月二つ有りし年の、後の六月七日、多田の滿賢法眼の云ひたりし

常ならば今日急がまし織機の天の羽衣濕ふ「闕」べきかな

返し

移ろはんことをだに見で菊の花行くらん路の露をこそ思へ

夜、時雨のいと荒らかに降るに、待つ人ありける人に云ひし

いとどしく目だにも合はじ獨寢に驚くばかり降る時雨かな

夜深き月の入るまで眺めて

見れば唯だ我世かとこそ思ほゆれ西へ傾ぶく山の端の月

人の冠する所に、人に代りて

位山高く仰げば萬づ代の雲の上まで見え上るかな

或尼の袈裟の下ろし乞ひたりしに遣るとて

導かん佛の出でん朝まで是れは迦葉〔貸〕の衣とを知れ

若き人の尼に成ると聞きて遣りし

憂き世とは且つ見ながらも背かぬに如何ばかりにて思ひ立ちけん

暦得させたりける人の、心變りにければ、師走の晦日に返し遣るに、人〔江侍從〕に代りて

忘らるる程も知らでや過ぐさまし是れに月日の且つ無かりせば

忘れにたる人の、常に前より渡るを、「如何に云はん」と云ひし人〔江侍從〕に代りて

今は斯く外の外にぞ涙川渡ると見るに濡るる袖かな

風に唯だ思はぬ方に吹きしかど渚の原立つ「腹立つ」波も無かりき

四月ばかりに向へなる人の小家に、公信中納言のおはすと聞きし夜、卯の花に付けて車に挿させし

卯の花の垣に忍べど郭公人と語らふ聲さへぞ聞く

隆家の中納言のおはしける女に、男の忍びて文遣りたりけるを聞き付けて、使を捉へて打ちなどして、

文をば取りて破り捨てられたりと聞きて、女の許に遣はしし

如何なりし逢瀬なりけん天の川踏み「文」違ひにも騒ぎけるかな

返し、　　　　中納言「隆家」

空言よ踏み「文」も違へず天の川然らば撞きてぞ肩打たれにし

また是れより

なみなみ「浪浪」の事にも有らず天の川さてはた瀬「背」をも斯くぞ打たまし

撫子の瀬に成りたるを見て

生ひ繁る此や撫子の花すすき招かば人も行きて見つべし

桜馬にて衣の瀧と云ふ所を

秋毎に紅葉の錦着「来」て見るを衣の瀧と云ふにぞ有りける

菊を植ゑて花咲くべき程に、遠く往にし人を思ひ出でて

えし

人を訪ふ便りとは見で濡れ衣著〔來〕たるかと〔門〕こそ嬉しかりけれ

兼經の中將、花に附けて、人〔江侍從ナラン〕に　〔兼經〕

暇無み山邊の櫻見る程に春は浮華なる名ぞ立ちぬべき

返し、代りて

心こそ野にも山にも漫行れめ花に付けては思ひ出よかし

同じ人〔江侍從ナラン〕雪の降りて程無く消えたる翌旦〔代りて〕

路ぶりの便りばかりは待ちもせん解けては見えじ雪の下草

或やんごとなき人、忍びて物語給ひて、程經て音づれ給へりける返事に、代りて

人にだに語らざらなんうたた寢の夢ばかりにて絶えぬとならば

同じ樣なる人、夏〔薄氷〕など有りける返し、〔江侍從に〕代りて

人だにもまだ知らぬ間の薄氷見分かぬ程に消えねとぞ思ふ

怨じたる事あり、何ども聞き給へらん、女〔江侍從〕の許にと、もとただの宰相

海の原立つ白波の如何なれば名殘久しく見ゆるなるらん

返し、〔江侍從に〕代りて

今は何と待つとだにやは云はれける頼むる事に嘆きて過れども

同じ人「大将」、或所の五節の侍女に思ひ移りたりしに、例の代りて聞えさせし

天照す豊の日影に面馴れて山藍の衣何れ珍らし

北の方「大将」の母君の御乳母ちよにと云ふに、よしみちが物を云ひ初めて遣る人に代りて

世もすがら千代に誰とか契りつゝ我が為めにこそ短かかりけれ

同じ大将殿の絶え給ひて後、常に来し侍士行きて、殿の思し出でて仰せらるる事など語るを聞くに、珍らしく覚えて

思ひだに掛けぬに聲の聞ゆれば更に昔の心地こそすれ

見を人に取らせて、疎遠なげに思ひたる人「江侍従」、五月五日、薬玉を遣るに代りて

如何さまに生ひ成りぬらん菖蒲草見ぬ間「水沼」は根「音」のみ絶えぬ袖かな

女「江侍従」の方に、夜更けて門叩く人の有りしを、開けねば、翌日、男　［某］

然「鎖」して待つ人をば知らで八重むぐら心もとなく叩きけるかな

返し、代りて

八重葎さし「鎖」はへてやは来りけん門開くからに憎くくも有るかな

或やんごとなき人、此門より車を引き入れて、傍らたる人の家に中垣の明きたる所よりおはせしに、聞

海(わたつみ)の年經る漁人(あま)の身なれども斯かる嬉しき目〔海布〕ぞ見ざりける

御心(みこころ)枯れ枯れに成らせ給へりし頃、嵯峨野に花見になん行くと述給(の)はせたりしに、女(むすめ)〔江侍從〕に代りて

忘れ行く心の秋のつらければ我こそ嵯峨の花をだに見ね

同じ人〔大將〕の久しく音づれ給はざりしに、例の代りて聞えさせし

忘れなば我も忘るるわざもがな我心さへつらくもあるかな

御返し　〔大將〕

片時も忘れぬものをおしなべて忘ると云ふや誰が身なるらん

と述(の)給はせたれば、また

人をのみ忘れざるらん心にて昔をだにも思ひ出よかし

同じ人〔大將〕久しく音づれ給はで、「何(な)ど恨みぬ」と述(の)給はせたりしに

恨むとも今は見えじと思ふこそ切(せ)めてつらさの餘りなりけれ

また頼めたるに、程經て　〔大將〕

頼めつつ來(こ)ぬ夜は經とも久方の月をば人の待つと云へかし

御返し、代りて

月の明き夜、大井川白く見えたりけるに

大井川白く照せる月を見て黄金の池を思ひこそ遣れ

野分したる朝に、幼なき人を如何にとも云はぬ男「よりきよ」に遣る人「江侍従」に代りて

嵐吹く風は如何にと宮城野の小萩が上を露も問へかし

法輪に籠りたりしに、風のいみじう吹きしに

山おろしの風の聲のみ烈しくて懸樋の水は洩「守」れど聲はれず

圓融寺の鐘の、土の下に聞ゆるを、「如何なるぞ」と問へば、「鐘堂は無く成りて、御堂の陰に掛けられたれば、斯う聞ゆるぞ」と云ひしに、后「圓融皇后」の思し出さ哀れにて

有りしにも有らず成「鳴」り行く鐘の音撞「盡」き果てゝ世ぞ哀れなるべき

入相の鐘に物心細かりしかば

はかなくて暮るゝ入相の鐘聞けど我世盡「猶」くとは覺えやはする

石山より歸りしに、粟田山にて日暮れて松火持たる者遲れにけりとて留まりたるに、月も未だ出でぬ程にて

あしびきの山路は暗く成りぬとも月を待つにて恨むとぞ思ふ

大將殿「教通」に女「江侍従」の侍ひし時、尼にとて、海布を賜はらせたりしに

が云ふべき」と云ひしに、代りて

花の色は行きて見ずとも秋の野の折りつる間をぞ待つべかりける

同じ人の許に、すゑのりが來たるを見て云はせし。八月十五夜の事なり

君ならぬ人來りなば問ひてまし今宵の月は殊に見ゆやと

法輪に籠りたりしに、曉に蔀を押し上ぐる人の、「鹿のいと近くも在りけるか」など云ひしに

朝ぼらけ蔀を上ぐと見えつるは鹿の近く立てるなりけり

雨降り、物心細かりしに

然らでだに訪ふ人も無き山里に雨にや言を傳てんとすらん

大井川に舟の漕ぎ渡るを見て

雨止まぬ影をし渡る高瀬舟遠方人の來るかとぞ待つ

轡虫の近く啼きしに

秋の野を分けてばかりは誰か來ん轡の聲の近くするかな

或る君達のおはして、嵯峨野に花見つる次でに、其處ね〔にカ〕なん心ざし〔し脫カ〕と云ふ。「便りと

はな思ひそ」と述給ひしに

便りにも來ずは如何がは待たれまし花見つるとも云ふぞ嬉しき

風吹き雨降る夜、例の簀子に居明して歸り、翌旦　「よりきよ」

海に夜半とも云はず世を過ぐす漁人の小舟も斯くは潛が「焦」れじ

返し

潛が「焦」るらん小舟も波に沈むとて雨夜の風の吹きあき「さ（冴）カ」えつる

氣近く成りて文おこする返事を、胸病みて爲ねば　「よりきよ」

胸潰げ歎く歎きも在り經れば開く「倦」心地するものと知らなん

返し、例の代りて

程も無く開く「倦」と開くこそゆゆしけれとても斯くても歎かしの世や

斯くて在り著きて後、何事に怨ずるにか、夜夜のみ來て、曉にいと疾く歸るに、少し日高くなりて出でめる翌朝、手箱の蓋に菓子を入れておこせて、「今朝はいと明くなりつれば、はしたなく覺えつること」と云ひければ、其蓋に書き附けて遣りし

明けげ何ど悔しきことか浦島の此「籠」は何時よりの心遣ひぞ

「小鷹狩しになん行く」とて、大刀取りにおこせたりしに、結び附けさせし

狩「假」にぞと云はぬ前より賴まれず立ち「大刀」留まるべき心ならねば

此人の車を借りて、嵯峨野に花見に出でける人の、返すとて、色色の花を挿しておこせたるを、「如何

浦慣れぬ千鳥の跡は有りも爲じ室に書けるを人は見よかし

また同じ人　　　　［よりきよ］

沖つ島玉藻刈舟浦風に靜心無き物をこそ思へ

返し

玉藻刈る沖つ島人東風に甚くも侘びじ浦慣れぬらん

常に返事も爲ねば、「思ひ絶えなんと思ふに、止まらぬ涙」とやうに［よりきよの］云ひたる、返し

止まらぬ涙ばかりぞ哀れなる思ひ絶えなん人は人にて

「さかしらなり」と云ひければ、又の日

さかしらの嬉しかりしを同じくは好きさし出の有りと聞かばや

返し　　　　［よりきよ］

好からばぞ好き樣さると答ふべき引立も無き心地こそすれ

夜毎に簀子に臥明すを、見入るること無ければ、歸りて、翌旦　　［よりきよ］

起きて臥し臥しては起きぞ明しつるあはれ安くや人は寢つらん

返し

歸りつる程は寢［往］ぬると見えつるを何時の間にかは起きて臥しつる

掬ひけるしるしも有りて見ゆるかな雪間を分けて出づる泉の

と仰せられたる御返しに

人よりも分「湧」きて嬉しき泉かた雪消の水の増さるなるべし

「夢語らぬ日」と云ふ物の有りしを、書き寫して置きし次でに

夢にだに見えずなりなん後よりは是れや形見に成らんとすらん

櫻の花を折らせて、定基僧都の母

徒然と物思ふことも忘れけり幾日も有らじ花を見る間は

返し、人人のいと多く亡くなりにし頃にて

見るままにいとど物のみ悲しけれ散り行く花に世を譬へつつ

或寺に鐘鑄しが、いみじう恐ろしげに見えしを

後の世をかね「鐘」て見るこそ悲しけれ斯かる焔に入「鑄」るにや有るらん

五月ばかり、草の繁き中に、山吹の咲きたりしを

我宿は八重むぐらかと見し程に八重山吹の花ぞ匂へる

女の許によりきよが文おこせたりけるに、「まだ手も書かず」と云はせたれば、「唯だ鳥の跡を見ん」と

云ひたるに

人をこそ待つに前にと思ひしか後るるばかり戀しきは無し

橋造りたる聖の、河原にて橋の會すべしと聞きて、行きたれば、制ありとて、「清水にてなんする」と
云ひしかば、打詣づとて

今日こそは嬉しき橋と思ひつゝ渡し果てずば如何さまに爲ん

詣で着きたれば、皆事始まりて、花など散らす程なりしに

春毎に櫻咲くやと待つよりは佛に散らす花をこそ見め

女院「上東門院」に啓すべき事ありて參りたりしに、一條院の御事仰せられ出でて、匡衡が御願文仕うま
つりし程の事ども仰せられて、いみじく泣かせ給ひしかば、悲しく覺え、退かでて、翌旦參らせし

常よりもまた濡れ添ひし袂かな昔を掛けて落ちし涙に

御返し　〔上東門院〕

現とも思ひ分かれで過ぐる世に見し世の夢を何語りけん

正月に除目始まる夜、同じ院「上東門院」に、雪いみじう降りしに參りて、擧周が事啓して、退かでて
參らせし

思へ唯だ頭の雪を拂ひつつ消えぬ前にと急ぐ心を

「和泉を」と申ししに、「擧周」成りて後の翌旦に御返しに賜はせたりし　〔上東門院〕

梅の花に挿して、人のおこせたりしに、香の悪ろかりしかば

春毎に櫻鐘とぞ聞きしかど梅を挿せる香ぞ附きにける

五月五日、語らふ人の許より、藥玉をおこすとて　「某」

何時とても戀ひぬ日は無し今日はいとど斯くとばかりの菖蒲にも見よ

返し、燈心の根に係たるが、殊に長からねば

同じくは長く引けかし菖蒲草根を更へてさへ短きや何ぞ

六月晦日、庚申なりしに

夜もすがら置きける露の涼しきは秋の隣や近くなるらん

蟬の蛻見て

消えて後我が試みるわざもがな被りし殼の哀れなるかと

秋の初めに床夏に附けて、定基僧都母

床夏の花をのみ見て今日までに秋をも知らで過ぐしけるかな

返し

花は然は常夏にのみ匂はなん人の心に秋を知らせじ

石山に詣でしに、鷲山の杉の纔かに見ゆるを、「近く成りぬや」と問へば、「杉の彼方いと遥かに侍る」

故里を見れば物のみ戀しきに家を出でぬる身とや成らまし

同じ頃、初瀬に詣でて、夜留まりたる所に、草を結ひて、枕の料とて得させたり。諸共に詣でたりし殿の有樣思ひ出でられて

有りし世の旅は旅とも有らざりき獨り露けき草枕かな

雁の往き返り啼くに

哀れなる旅の空とや思ふらん雁居を過ぎず鳴く聲のする

路にて、いと苦しければ、野に臥して

はかもなき野邊の露とや消えなまし烟とだにも誰か爲すべき

きどのと云ふ所に宿らんと云ふを、誰れぞと思ひて問へば云はせし

名告りせば人知りぬべし名告らずば木の丸殿を如何で過ぎまし

石上にて

行くとては我も目慣れぬ石の上便りに觸るる名にこそ有りけれ

歸るに、宇治の邊りに前前宿りし所の、「穢らはしき事あり」と云ひしに

日を「氷魚」經ても昔見なれし網代木に寄せじとや爲る宇治の川波

雪いみじく降りたりしに、石山に涅槃會に詣でしに、打出の濱にて、いと深く積りたりしに

花を見て

去年の春散りにし花は咲きにけり哀れ別れの斯からましかば

同じ頃、花をおこせて云ひける　〔某〕

我宿の櫻の咲きて散るを見ば物思ふ人も慰みなまし

返し

散る花の常無き世とは見えぬれど猶ぞ昔の春は戀しき

美作三位、花に附けて　〔美作三位〕

花の色も宿も昔に違はじを變れる物は衣なりけり

返し

花にだに心も掛けず主無き宿は昔の心地やはする

五月五日、同じき三位　〔美作三位〕

墨染の袂はいとど小〔濃〕泥にて菖蒲の草の根〔音〕や繁るらん

返し

あやめ草今日の袂の玉とては涙を掛くる根〔音〕のみなりけり

同じき日、定基僧都の母

別れても對る秋だに有りと云はば假「雁」の世ながら嬉しからまし

其頃、詩を、人の「善ければ還るなり」と云ひたりしに

悪し善しの綾目も分かず今は唯だ藤の衣は閉ぢてこそ着れ

聲いみじくなりたる蟋蟀、人の云ひたる　「栗」

眺むべき方にも無き秋霧に哀ればかりや誰れきるらん

返し

涙のみ霧り塞がれる頃なれば心の空の晴るる夜「世」も無し

前なる櫨の木、紅葉したるに

涙のみ時雨るる宿の梢には外よりさきに紅葉しにけり

十月に、屋の上に木の葉の散り積みたるを、風の吹き散らしたるを見て

我ならで荒れ行く閨の上とてや木の葉を風の吹き散すらん

人を悦びやおりしき、「千歳の杖」と書き附けたりけるを見て

問ひして年積む道に迷ふらん千年の杖も身に添はずして

「梅の花も咲きけり、櫻の花皆咲く氣色に成りにたり」と人の云ふを聞きて

君とこそ春來ることも待たれしか梅も櫻も誰とかは見ん

冬に成りて、物へ行く路に、一條院に人も無ければ、車を引き入れて見れば、前栽の霜枯れたるも萬づ哀れなり。火炬屋を見て

消えにける衛士の焼く火の跡を見て煙と成りし君ぞ悲しき

物へ詣でし路に、川に影の映りたりしを見て

河水に沈める影を且つ見ても憂［浮］くこそ物は思ひ知らるれ

地獄繪に、秤に人を掛けたるを見て

罪は世に重きものぞと聞きしかどいと斯ばかり［秤］は思はざりしを

丹波守［匡衡］亡くなりて、七日の誦經にすとて、装束ども取り出でたるに、正月に著たりしかば、練襲の下襲の鮮麗なりしに

重ねてし衣の色の紅に涙に沁める袖と成りけり

夜深き月を眺むるに、虫の聲のみして、人は皆寢靜まりたるに、定基僧都の母の云ひたる

雲居にて眺むるだにも有るものを袖に宿れる月を見るらん

返し

有明の月は袂に流れつつ悲しき頃の虫の聲かな

雁の啼くを

返し

もみぢ葉の散るをも思ふ菊ならで見るべき花の無きも歎かじ

初瀬に詣でたりしに、奈良に留まりたる夜、月の明かりしに

幾世經て荒れし都の御垣根ぞ三笠の山の月は變らで

春、門の方を見出だしたれば、實成の兵衛督下りて立ち給へるを、思ひ掛けぬ心地して、「梅の立枝や」と書きて奉りしかば、打笑みてなんおはしぬる。と有りし後、程經て殿〔道長〕に歸り入りたりしかば、辨内侍參り合ひて、「兵衛督なん斯かる事の有りしを、其歌を知らざりしかば、物も云はでたゞ止みにし。後に人に問ひてなん聞きし。然ばかりの恥なん無かりし。逢ふ事あらば、斯くなん侘ぶるとだに語れとなん述給ひし」と云ふを、殿の御前〔道長〕聽かせ給ひて、いみじう笑はせ給ひき。然て退かでて、二月ばかり有りて、師走の中に節分したりし朝に、辨内侍に「一夜の御物語こそ思ひ出でらるれ」とて

便り有らば來ても見よとや微闇〔霞〕めまし今朝春めける梅の立枝を

殿の御前御覽じて、自ら仰せられたる　〔藤原道長〕

春毎に來ても見よと云ふ氣色あらば霞を分けて花も尋ねん

立ち返り參らす

みこおこせて　　　「菅原道真」

唐国の物のしるしの稲穂を日本心に乏しとや見ん

返し

初めから日本心に狭くとも終りまでやは固く見ゆべき

又の年の春、丹波に成り侍りて上りき。殿「道長」の三十講に参りたるに、道雅の君の哀れなる色にて、局の前に渡り給ひしに聞えし

墨染の袂に成ると聞きしより見しにぞ墨の色は悲しき

秋雨のいみじく降る日、萩の花に附けて、人に遣りし

露繁みに鹿の臥しや秋萩を消さへ涙ぞ惜しき頃かな

朝顔の花を疾く見んとて、妻戸を明けたれば、霜いみじく置きたるを

朝顔の疾くゆかしさに起き「出」たれど我より前に露ぞ置きにけり

大覚寺の滝殿を見て

褪せにける今だに斯かり滝つ瀬の早く来てこそ見るべかりけれ

十月に、紅葉のいと濃きと、移ろひたる菊とを包みて、人　　［某］

秋「飽」果てて今は盛りのもみぢ葉と移ろふ菊と何れ勝れり

「少名神と云ふ所に成りにけり」と楫取云ふを聞きて

千早ふる少〔彦〕名神〔紙〕てふ神代よりかみかへごと〔考事カ〕は云ふにや有るらん

また車にて行く路に、河に落ち入りたる侍の有るに、「歌詠みて取らせん」と女房どもの云ひしに

深からぬ水の底にや沈むべき淺しや人も如何に見つらん

返し、左近大夫頼忠と云ひし者なり　〔頼忠〕

下り立ちて君に仕ふる今日なれば淵をも知らず惑ふなるべし

國に行き着きたりしに、初雪の降りしに、守　〔大江匡衡〕

初雪と思ほえぬかな此度〔旅〕は猶故〔降〕里を思ひ出でつつ

返し

珍らしき事は舊り〔降〕ずぞ思ほゆる行き〔雪〕返り見る所なれども

泝りに來りし人人、京へ歸るを見て、留まりにし人の隸ならう覺ゆるに、羨ましければ。雪降りし日なり

行き〔雪〕歸る人に心を添へたらば我が故〔降〕里を見ても來なまし

參河守菅原の爲善下るとて來て、早う姉妹に住みし人なれば、「昔の人あらましかば、近き程にてよは〔二字、好かナラン〕らまし」など云ひて、歸りて、宇佐の使に行きたりければ、丁子圓など、樣樣包

知りにけりと知らんと思ひて

尋常ならず避き踏しつる事こそ有れ面並ぶる今日は嬉しな

同じ御社に籠りしに、暮るれば鶏どもの囂ましかりしかば

夕暮は木末の床や競ふらん是れか彼れかと啼く鶏かな

月の明かりしに

天照らす神の光や添はるらん森の木の間に月ぞ明亮けき

正月に長谷寺に詣でし路にて、子日なりとて、知る人、松引きなどして、みのをの庄見しかば

思ふこと皆路「満」すかな子日してみのゝを山の松を引き見ん

鞍馬に詣でしに、昔鯖に御幣挿させし程に、いと暗う成りしかば

灯すらん方だに見えず鞍「暗」馬山昔鯖の宿に留まりしぬべし

尾張に成りて、珍らしげ無う物憂き心地して、十月に下りしに、関山の紅葉の袖に散りかかりし

あさからず袂に掛かる紅葉かな錦を着ても行かじと思ふに

女の大津まで来て、昔しは此処に在るべしと聞きて、歸りぬるに、今宵鵜舟出だしてんとて、夜もすがら漕ぎ行くに、斯うとも知らじかしと思ふに、哀れにて、睡も寝られぬに、雁の啼くを

睡も寝ず舟に宿居に成りぬとも都の人は知らずや有るらん

返し、　　　　中將の尼

眺め遣る山邊も見えず思ふより杉の木の葉や雪隱すらん

此人を此處に迎へて住みしを、はかなし事怨じて、煩かしき事どもなど有りしに、其頃、長谷に詣でたりしに、紅葉を折らせ見せんと思ひしに、斯う腹立ちにしか。物に挿して置きたりしかば、枯れたりしを見て

苞にとて折りし紅葉も枯れにけり嵐の甚く吹きし紛れに

春に成りて外へ渡りしに、其前の梅の咲きたりしを折りて遣りし

如何ばかり何どかは經まし咲く花の散らんまでだに待てば待てかし

兒を此處に迎へて置きたるに、駒の形を造りておこせて　「あきのぶの女」

我が野邊になつかぬ駒と思ふには手馴れにけるを慰めに爲ん

返し

その駒は我に草飼ふ程こそ有れ君が許には如何に遊れば

此人、「あきのぶの女」他男の許に遣りける文を持て違へて來りしに、擧周に書き附けさせし

誰とまた踏み「文」通ふらん浮橋の遠かりし宵も憂き心かな

知りたる人の、賀茂に詣で合ひて、避き路を爲つつ隱るるが、御前にては、供の人を隱して居たるを、

また荻に挿して、同じ人に

風そよぐ荻の上葉の露よりも頼もしげ無き世を頼むかな

また

間遠すゞ夜はの白露起「置」き返れ日だにも見えで明す頃かな

また同じ人に、夕暮に

夕暮は蜘蛛の營む巣がきかた宿も無き身の心細さに

また十月ばかり遣らんと云ひし

霜枯れの野邊に朝吹く風の音の身に沁むばかり物をこそ思へ

參川かあきのぶの女に物云ひ初めて、新藏人にて暇無くて、え行かぬに、「遣らん」と云ひしに、代りて

曉の鴫の羽搔き日を覺めて搔くらん數を思ひこそ遣れ

返し、　　中將の尼

夢にだに見ぬ夜の數や積るらん鴫の羽搔き手こそ弛けれ

同じ人に、雪の降る日遣らんすかへ「□二字、と云ひか」しかば

三吉野の山の初雪降るらん春日の里も思ひこそ遣れ

羨まし如何なる人か我が覺めぬ夢まぼろしの世を背くらん

　得たる人に代りて

貫ける玉の光を頼むとも暗く惑はん道ぞ悲しき

　七月七日、「妻に遣らん」と擧周が云ひしに代りて

羨まし今日を待ち出でて織機の如何なる心地して暮すらん

　早う住みし所に今住む人、「外へなん往ぬべきを、然らぬ前に此處にて對面せん、故里の御行には猶あら
　んなん好かるべき」と云ひしに

忘れにし昔や更に戀ひられん世に故「經る」里の御行せりとも

　人の許に時時來る男の、をかしげなる瓜持て來て得させたるを、「如何に云はまし」と云ひしに代りて

冷淡げなる氣色と見るに瓜生山潰ら「生」し顔にも打見えたるかな

　人の女の幼なきを掛想しけるに、「まだ手も書かずとて、返りごとも得せぬに遣らん」と、擧周が云ひし
　に代りて

和歌の浦の潮間に遊ぶ濱千鳥踏み「文」すさぶらん跡ぞ惜みて

　「大人に成る程を暫し待て」と、親の云ひたるに遣はせし

高砂の松とて宿り過ぐすとも我を越すべき波なきこそ有れ

何事を思はんとこそ思ひしか見ぬも苦しき思ひたりけり　［大江

白馬の日、式部丞にて渡りしを見て、又の日、雅致が女の云ひたりし。去りての後なれば、

雅致女］

何處にか目の留まりけん行き過ぐるおほよそ人と目つは見ながら

返し、代りて

行き過ぐる姿を誰そとや休らひしおほよそ人の哀れたりしに

其人、［雅致］一條院長官か、云々と云ふ人に婿ひぬと聞きて、舉周に代りて遣りし

千早ぶる岡の神「上」とや思ふらん人は人とも聞かぬ所に

返し、姉の和泉式部

往昔の人をも人と思はねばさし離れたる注連の言葉

除目に洩れて恥かしく思ふに、梅の花を見て

思ふ事春とも身には思はぬに時知り顔に咲ける花かな

同じ春、花見に歩りきて

我宿の梢には春も知られねば出でてこそ花の盛りとも見る

尼と成るべしと聞く人に、數珠をおこせて、

一條院左京命婦

同じ國にて、また女房の、人に物云ひける翌日、「關越えて」など云ひたる返しに、代りて

行きちがふ關の此方ぞ歎かしき如何に鳴海「成身」の浦ぞと思へば

三河守すけただ下る道にて、暫し居て、若人の方に扇おこせて　「すけさだ」

扇「逢」かと猶頼みてぞ人知れず心を寄せて君に任する

返し、代りて

浮華人の行く手に鳴らす扇かな風立つべくも有らぬ所に

任果てて上りしが哀れにて

心だに留まらぬ假の宿なれど今はと思ふは哀れなりけり

尾張より上りて、殿「道長」に參りたりしに、辨内侍參り合ひて、所の物語などして退かでて、翌日

昔のと今のと云はば多かるを先づ何事を我れ語りせ「けカ」ん

返し　「辨内侍」

舊事も新しくのみ思ほえて今は昔も聞きや分れし

擧周が藏人望みしに、成らで、内記に成りしかば、左衛門の命婦の許に、「奏せよ」と思しくて

我が歎く心の中を記しても見すべき人の無きぞ悲しき

然て藏人に成りて、暇無うて、え出でざりしが、覺束なくて、裝束遣りし次でに

また薄のみ多かる野にて、誰を招きしに

何方に行き留まりまし花すすき誰にも招く此方かとも見ゆ

野近き所に夜留まりたるに、虫の甚う鳴きしに

一夜だに明し佗びぬる秋の夜に泣く泣く過ぐす虫ぞ悲しき

擧周、雅致が女に物云ひ初めて程も無く、雅致に參らせて、歸りては、京にして暫しも無くて下りしかば、いみじくて遣らせし

心にも有らでぞ歎く吉野山君を御一見に籠り程無かりしを

また後に

出でて來し道のままにまに花薄招くやとのみ顧みぞ爲し

返し、姉の和泉式部

留まるべき心ならねば花すすき唯だ秋行くと任せてぞ見し

親在りける所、美作に成りて行く供に罷るとて、京へ行くを、「一本京無うや思ふ」と云ひし女房に

契りけん昔は此處の中なれば久米の笹山更に恨みん

また女房の夫の、京へ上りたるに、文をおこせたるに、云はせし

何處まで思ひ出でにし今はとて忘れ行きけん路ぞゆかしき

道貞下るとて、道なれば尾張に來て、物語などして、「斯く遙かに罷る事の心細き事」など云ひて歸り
ぬるに、然るべき物など遣るとて

此處をだに行く片「方」野とは思はなん是れより道の奧「陸奧」遠くとも

返し　道貞

いざ然らば鳴海の浦に家居せんいと遙かなる末の松「待」とも

一條院に侍ひし左京の命婦、和泉守の妻にて下るに云ひたる

都路の心も著く枝折して君だに在ると思ふ路かな

返し　一左京命婦一

枝折るとも誰か思ひし山路に君しも跡を尋ねけるかな

また「是れより如何で自ら」など云ひて

逢はじてふ路にだにこそ逢ふと聞け尋常にて過ぎん人のつらさよ

返し　命婦

山をだに思ひ隔てぬ路なれば是れより過ぎん心地やはする

秋の野を歩るきし、嵯峨野にも劣らず見えしかば

花の色は都の野邊に有らねども何處も秋の性「嵯峨」にざりける

水増さりて、其處に二三日ある程に、氷魚を得て來たる人あり。「此頃は如何で在るぞ」と問ふあれば、

「水增さりては斯くなん侍る」と云へば

網代かと見ゆる入江の水深み日を「氷魚」經る旅の路にも有るかな

其れより杭瀬川と云ふ所に留まりて、夜、鵜飼ふを見て

夕闇の鵜舟に點す篝火を水なる月の影かとぞ見る

また馬津と云ふ所に留まる。夜、假屋に暫し下りて涼むに、小舟に男二人ばかり乘りて漕ぎ渡るを、

「何するぞ」と問へば、「冷やかなる御水汲みに沖へまかるぞ」と云ふ

沖中の水はいとど淺からん他濟名湯を人の汲むかし

「京出でて九日にこそ成りにけれ」と云ひて、守　「大江匡衡」

都出でて今日九日に成りにけり

と有りしかば

十「遠」日の國に到りにしかな

國にて、春、熱田の宮と云ふ處に詣でて、路に鶯の甚う啼く森を問はすれば、「中の森となん申す」と

云ふに

鶯の聲する程は急がれずまた道中の森と云へども

と有りしに

今日葵「逢ふ日」にも成りにけるかな

尾張へ下りし、七月一日頃にて、理無う暑かりしかば、相坂の關にて淸水の下に涼むとて

越え果てば都も遠く成りぬべし關の夕風暫し涼まん

大津に泊りたるに、「網引かせて見せん」とて、まだ暗きより下り立ちたる男どもの、哀れに見えし

に

朝ぼらけ下ろせる網の綱見れば苦しげに引くわざに有りける

其れより舟に乘りぬ。袋掛と云ふ所にて

往時に思ひ入りけん便り無き山の袋の哀れなるかな

七日、越知川と云ふ所に行き着きぬ。岸に假屋造りて下りたるに、夜さり月いと面う、波音高うてをか

しきに、人は寢にたるに、獨り目覺めて

彥星は天の河原に舟出しぬ旅の空には誰を待たまし

又の日、天津と云ふ所に留まる。其夜風甚う吹き、雨いみじう降りて、洩らぬ所無し。韜光示所なりけ

り。曉に書き附けし

草枕露をだにこそ思ひしか誰が古「降」屋とぞ雨も止まらぬ

返し　　〔これすけ〕

思ふ事無きにもあらず玉かづら神〔髮〕をば掛けじ否煩はし

久しう音せぬ人に、瓜に書きて

問へと思ふ人の音せで瓜生山久しくなる〔生〕はつらきわざかな

せいき君と云ひし人の、傍らの局なるに「經讀み給へ」と云ひしかば、「暗し、火をともさせ給へ」と

云ひしかば、油を遣るとて

消えぬべき法の末には成りぬらん身を燃してぞ聞くべかりける

或寺に八講聞きしに、傍らの局に、男亡くなりたる女の、いみじう泣く氣はひの爲しかば

袖の上に掛けし佛き「のカ」玉ならば衣の裏も濡れや爲ぬらん

殿〔道長〕に「花櫻」と云ふ物語を、人の參らせたる包み紙に書いたる　　〔花櫻の作者某〕

書き積むる心も有るを花櫻徒なる風に散らさずもがな

「返しせよ」と〔道長の〕仰せられしかば

見る程は徒にだに爲ず花櫻世に散らんだに惜しとこそ思へ

祭の日、或若達の葵に橘を生らして云ひたりし　　〔某〕

休時の花橘を尋ぬれば

置き「起」て見る菊の假初の露の上に黄金の浪の影ぞ映れる

紅葉見に歩きさしに、獨り見るに飽かず覺えしかば

誰にかは告げに遣らんさもみぢ葉を思ふばかりに見ん人もがな

十月に賀茂に詣でたりしに、外の紅葉は皆散りにたるに、中の御社のがまだ散らで有りしに

注連の中の風さに儘ぬの紅葉かな神の心は畏こかりけり

元輔が清住みける家の傍に清少納言住みし頃、雪のいみじく降りて、隔ての垣も無く倒れて見渡されしに

跡も無く雪降る里「故里」の荒れたるを何れ昔の垣根とか見る

公所に、内にも外にも數多居て、物語して、「今宵よりは思ひ隔えん、明日文奉らん」と云ひし人に、

程經て誰れとも無くて云はせし

明日よりはと待にためし昔の葉を開けても待ちし今も恨めし

人を思ひ掛けたるを、女も其心を得て、物越に顏を見へて、答をして、經て通るに代りて

昔は君君は我とも知らざりき誰と名告りて誰を問ひしぞ

讃岐守これすけが妻の好き者持たりと聞きて、「借りて」と云ひしかば、「睦まじう齎らふためか、斯かる事までに云ふよは」と、要なん云ふと云ひしに

疑ふを苦しと思はば玉鬘「髮」を掛けても誓ふばかりぞ

程経て、私に詣でたりしに、彼の君「相方」の許に通ふ人の詣でたりしに付けて遣りし

君は来て思ひや出でし月見れば面影さへぞ添ふ心地する

返し　　相方

行き返り見る度毎に戀しくて月無き時も思ひ出ぞ爲し

九月晦日、業遠が云ひたりし　「業遠」

今日を猶同じ心に惜まなん秋果て「飽果」ぬとは誰も思はじ

返し

暮れ果つる秋の一日を留めてんいくと「三字、いとどナラン」長さの心ならまし

同じ人「業遠」、丹後に通ひし頃、橋立の砂子を得させたりしに

行き歸る道の便りに閑心た濱の眞砂の數や知りにし

十月に前女院「東三條女院カ」の菊合に

露よりも玉の臺に菊の花うつろひてこそ色増さりけれ

庚申の夜、菊を

月影の霜にや菊は移るらん夜こそ色は照り増さりけれ

同じ題を人に代りて

女院「上東門院」の、姫君と聞えさせし頃、「石などり」の石召すを参らすとて

天皇の後への庭の石ぞ此に拾ふ心あれ動なきまで取れ

御障子の繪に、前栽植ゑさせて男女の見たる所、殿の御前「道長」の　「道長」

掘り植うる草葉に虫の音を添へて千代の秋まで聲を聽かせん

とて、又「詠め」と仰せられしに

花を見て野邊に心を遣れつれば千代の秋に經ぬべし

殿の上「倫子」法輪に詣でさせ給へりしに、月のいと明かりしに、相方の侍

西へ行く月を慕ひて來し程に深き山にも入りにけるかな

「女房此月を見給ふらんや」と「相方より」有りしに

都に見し山の此方に見る時も月には飽かん夜も無かりける

濟政、經房の中將など、笛吹き合はせて「曇滿の寺の」と口ずさび給へる、所がらにや、いとをかし。

「今宵のやうなる夜、又有りなんや、いみじき夜のさまかな」と、相方聞えん

忘られん身をば思はず小倉山今宵の月を思ひ出でなん

と有りしに

君をこそ先づは偲ばめ小倉山次にぞ月も戀しかるべき

珍らしく今日聞く聲を時鳥遠山里は耳慣れぬらん

五月五日、左大將殿〔賴通〕より、菖蒲合したる扇に藥玉を置きて、「是れが勝負定めさせ給へ」と有りしに、殿〔道長〕はおはしましかば

左にも袂の玉も結ぶらん右は菖蒲の根こそ淺けれ

殿の御前〔道長〕物語作らせ給ひて、五月五日菖蒲草を手まさぐりにして、氣近く見る女居しをとて

〔御堂道長〕

我宿の端〔妻〕とは見れど菖蒲草根〔寢〕も見ぬ程に今日は來にけり

「是れが返しせよ」と仰せられしかば

菖蒲葺く宿の端〔妻〕とも知らざりつ根をば袂の玉とこそ見れ

氣近く成りて、曉に、男

掻く〔書く〕からに暫しと愼むものながら鴫の羽掻のつらき今朝かな

返し

百羽掻知らるなる鴫の手も強く如何なる數を掻〔書〕かんとすらん

斯かること聞えて、すげなう持てなされて物歎かしげにて、女

如何に寢て見えしなるらん曉の夢より後は物をこそ思へ

りたる花を包みて賜はせたりしに

訪はれぬ身にだに歎く櫻花散るを見つらん人は如何にぞ

「弘徽殿に親しき人の縁戚なりしは、え參るまじとなん有る」と聞きしかば、里に在る程上の、御前の仰せ言にて、「花の盛りなるを見せまほしくなん有る」と仰せられたりしに、參らせたる

諸共に見る世も有りし花を人傳に聞く春ぞ悲しき

然て參りたれば、庭に積りたるを掻き集めて、「雪參らせん」とて出だされたりしに

雪をのみ花とは見しか打返し花も雪かと見ゆる春かな

春の月明き夜、君達あまた參りて遊ぶに、内裏より「御物忌に籠り給へ」とて來たれば、「難きものを」とて、道方の辨　「道方」

出づる空無き春の夜の月

と有りしに

故里に待つらん人を思ひつつ

櫻多かる山寺に見んと思ひて詣でたるに、皆散りにけり。其夜、月の明かりしに

花の色は散るをだに見で散りにけり留めに見ん春の夜の月

五月一日頃、夕暮に時鳥の鳴くを、殿の御前「道長」「をかしき程かな、歌詠め」と仰せられしに

返し　〔業遠〕

分きてこそ思ひかけ［日影］さす山の端に我が言玉の枝も伐りしか

殿の上（倫子）の春日に參らせ給ひし路にて、伊與［豫］守兼資が女の花を折りて　［兼資女］

手も弛く折りてぞ來つる梅の花物見知られば共に見んとて

返し

山隱れ匂へる花の色よりも折りける人の心をぞ見る

殿［道長］に侍從と云ひし人に、業遠が物云ひて後、とをほど［四字、遠江カ］に下りて、歸りて音づれざりしかば、いと遠うて、業遠に云ひし

來て鳴かば哀れならまし鶯の花に外なる春も有りけり

六條の權中將と經房の中將と花見んと契りて、俄かに源中將は御嶽精進して、「如何にぞ花見には歩りき給ふや」と云ひたるを、「如何が云ふべき」と有りしに、代りて

我はまだ思ひも立たず花櫻君や御嶽の山も越ゆらん

御前の花盛りなる頃、御物忌にて外に渡たらせ給へる頃、折りて參らせし

折こそ有れ匂ふ盛りに漫行れて歸りて花の散るを恨むな

一條殿［の脫カ］櫻御覽じに渡らせ給ひしに、憚る事ありて御供に參らざりしかば、歸らせ給ひて、散

玉梓の路の空にて消えにせば憂き事ありと誰か告げまし

返し

告げつらん人の誠に有らずとも憂き身の儘に成りこそは為め

筍を幼なき人におこせて　〔某〕

親の儲めし昔の人は抽きけるを竹の子に由り見るも珍らし

返し

笋を分けて抽くこそ親の儲めならぬ此〔子〕は盛りなん為めとこそ聞け

京極殿〔道長〕の池に篝火ともして、人人小舟に乗りて遊ぶに蔵人為資が楫取したるに遣る

波随ぐ風に任せて行く舟の灯〔帆〕影に見ゆる楫取や誰れ

返し　〔蔵人為資〕

思へども岩根〔云はね〕の浦を漕ぐ程は磯の莫告〔名告〕藻せられざりけり

同じ殿の池水に、業遠が夜の形造りて浮かしたりしを見て

君が御代流れて澄める水の面に千年を造〔棹〕して見ゆる筏師

正月に業遠が卯杖して大盤所へ入れたりしに

如何なりし枝の盛りの日影とも誰が言玉と見えも分かれず

獨寢の鴛鴦の上毛の霜よりも起き〔置き〕ては我ぞ思ひ遣りつる

返し　〔某〕

小莚に染めし羽衣敷きつとも上毛の霜は誰れか拂はん

恨むべき事や有りけん、さらずく〔四字、裝束〕せさせし人の久しく音も爲ぬに、しし〔二字しる(記)ナラン〕して帶に結び付けて遣りし

結ぶとも解くとも無くて中絶ゆる縹の帶のこひは〔三字、此はナラン〕如何がする

返し、扇など具したればにや　〔某〕

結べとか解くとか帶の結ふ方〔夕方〕を待つに扇の風ぞ涼しき

また返し

疾くとまだ扇の風の急がぬに裏を我れ何結ひめやたなり

世の常無き事を云ひて、「法師にや成りなましと思へども思ひ捨てぬこと」と云ひて　〔某〕

世の中を皆空しとは知りながら憂き身の君に障るべきかな

返し

我も無し人も空しと思ひなば何か此世の障りなるべき

恐ろしき目見て、外に在る頃、空言を人の告げければ　〔某〕

返し　〔某〕

人を待つ〔松〕山路分かれず見えしかば思ひ患ふに踏み過ぎ〔杉〕にけり

人の車にて殿〔道長〕に参りしを見て、同じ人　〔某〕

門の外の車に乗りて出でしかば思ひ〔火〕に胸の内ぞ焦るる

返し

門の外の車には猶乗りぬべし思ひ〔火〕の中に入らぬ身なれば

兵衛佐なる人を思ひ疑ひて言ひたる　〔某〕

柏木は気色の森に成りにけり歎きを今は何地遣らまし

返し

柏木や楢葉の如何に成るとてか〔以下蝕シテ缺ク〕

竹なる霜の解けて、下草の露と見えしに

竹の葉に結べる霜の解けぬれば木の露とぞ成りにけるかな

返し、同じ人　〔某〕

笹結び解けて露とは成りぬれど本に落つれば霜とこそ見れ

同じ頃、物へ行く程に、方違に人の来りしかば、寝具を出だして、外に渡りて、翌日遣りし

冷淡き今を戀ひし昔に返しては思出だにも無くや成りなん

恨むべき事や有りけん、「今日を限りにて又は參らじ」とて往ぬるが、晝つ方音づれたるに、遣りし

明日ならば忘らるる身に成りぬべし今日を過さぬ命ともがな

返し　〔某〕

後れゐて何か明日まで世にも經ん今日を我日に先づや成さまし

然て日頃音せぬを、是れよりは何しにかは驚かさん。程經て、相撲草に插して　〔某〕

相撲草倒るる方に成りぬるか心強しと且つは見えつつ

返し

何にかは心も取らん相撲草思ひ移るに方こそ有るらめ

殊に思はぬ女の許に物忌に鎖し籠められて云ひたる　〔某〕

身は此處に心は空に飛ぶ鳥の籠に籠りたる心地こそすれ

返し

空にのみ習へる鳥の心にも猶籠の目「此目」には障るとぞ見る

今は絕えにたりと云ふ所に在りと聞きて遣る。三輪の山の邊りにや

我宿は松「待つ」に標「驗」も無かりけり杉むらならば尋ね來なまし

思ひ疑ふに、やがて云ふ　〔某〕

難かりし岩に根ざせる松の上にはかなき露な結び置かせそ

返し

種蒔きて松ぞ寂しき岩の上に根ざしてのみや止まんとすらん

又云ひたる　〔某〕

虫の血を潰して身には附けずとも思ひ染め「初め」つる色な違へそ

返し

虫ならぬ心をだにも潰さでは何に付けても思ひ染むべき

「ゆめゆめ千引の石にてを」と云ひたりしに

待つとせし程に石とは成りにしを又は千引に見せ分かてとや

返し　〔某〕

松山の石は動かぬ氣色にて思ひ掛けたる波に越さるな

常に逢ふ事も難ければ

我戀は逆さまにこそ成りにけれ昔を今に成して思へば

返し　〔某〕

霜やおく風にやなびく床夏の夜の上こそ問はまほしけれ

返し

風に折れ霜に枯るとも床夏の我世〔夜〕の事は誰れか知るべき

秋病ひしを問ひに來たるを、疑ひて、同じ人　〔某〕

假り〔雁〕に來る人に常〔床〕世を見せければ世を秋風に思ひなるかな

返し

秋風は雁より前に吹きにしをいとど雲居に成らば成らなん

津の國に行きて云ひたる　〔某〕

戀しきに難波〔何は〕の事も思ほえず誰れ住吉の松〔待つ〕と云ひけん

返し

名を聞くに長居しぬべし住吉の松〔待つ〕とは留まる人や云ひけん

「公所にては、え參らじ」など云ひて　〔某〕

住の江に羽打交はすあし鴨の獨りに成らん程の秋風

返し

羽交はす程も稀なるあし鴨の浮寢無からん思出や爲ん

久しう音も爲で、師走晦日に　〔大江爲基〕

頼みつつ問ふを待つ間に春來なば我が忘るるに成りもこそすれ

返し

春來なば忘るる數や增さらまし年こそ切めて嬉しかりけれ

早う住みし所に頭洗ひに行きて

故里の板井の中に住みながら我れ自ぞ漫行れにける

方違に來たる人の、寢具を出だしたれば、翌旦云ひたる　〔某〕

夜宿りの朝の原の女郎花移り香にてや人は咎めん

返し

宿借せば床さへあやた女郎花如何で移れる香とか答へん

雨の降る夜、局に人の在りし。翌旦、大原少將入道の、瞿麥に挿して　〔少將入道〕

瞿麥の紅深き花の色も今宵の雨に濃さや增される

御返し

雨水に色は返れど紅の濃さも增さらずなでしこの花

風甚う吹く夜、外に在りて、翌旦、床夏に挿して　〔某〕

紅の袖包ふまで貫ける玉何の洩る〔盛る〕とも數へかねつつ

返し

洩り〔盛り〕つらん物は殊にて紅の袖には何の玉かとぞ見ん

或る君達、庭を借りて、歸るとて　〔某〕

今少し木繁き森の邊りには人頼めにて雨洩らしけり

返し

來ずは來ず木繁き森の下なれば雨宿かする人も有るらん

大原の少將入道、童におはせし頃、秋、白き扇をおこせ給うて　〔少將入道〕

白露の置きてし秋の色更へて朽葉に如何で深く染めまし

黄朽葉にして奉るとて

秋の色の朽葉も知らず白露の置くに任せて試みや爲ん

思ひ掛けたる人の、鮒をおこせて　〔某〕

樣變へて世を試みん飛鳥川小泥〔戀路〕に得つる鮒〔鮒〕人ぞ是れ

返し

飛鳥川淵こそ瀬には成ると聞け鯉〔戀〕さへ鮒に成りにけるかな

同じ路に、恥かしげなる男の行き逢ひたりしかば、理無き心地して
憂き影を行き交ふ人に初瀬川悔しき路に立ちにけるかな
思ひ掛けたる人、數珠をおこせて　〔某〕
思ひ侘びて忍びに落つる涙こそ手に貫ける玉と見えけれ
返し
千行なる涙の玉も聞ゆるを手に貫ける數は幾らぞ
さがなき人「思ひ掛けけり」と聞くに、やがて云へり　〔某〕
荒波の打ち寄らぬ間に住の江の岸の松蔭如何にして見ん
返し
住の江の岸のむら松蔭遠み波寄するかを人は見きやは
同じ人
岩代の松に掛かれる露の命絶えもこそすれ結び留めよ
返し
結びても絶えんを松の攀りに掛けはにて見る露の命ぞ
苺を檜破籠に入れて同じ人　〔某〕

我は早や忘れ果てにき等閑の心は絶えぬ人こそ有りけれ

親の亡く成りたる頃、雨の降りたりし日訪ふとて　「爲基」

人の世は無しと聞くこそ悲しけれ降るも哀れに見ゆる雨かな

返し

天「雨」雲と終に成るべき世の中は降ると見ゆるもげにぞ悲しき

此人「爲基」法師に成りての頃、正月七日、鬚籠に若菜を入れて遣るとて

春日野に今日の若菜を摘むとても猶三吉野の山ぞ□「戀ナラン」しき

返し

さ夜更けて獨り歸りし袖よりも今日の若菜は露けかりけり

物へ行きし道に雨の降りしかば、蓑を借りて返すとて

三笠山麓の露「路カ」の露けさに刈り「借リ」試みし野邊の蓑草

文遣るを「假字の返事は今是れより」と云ふを、「如何が云ふべき」と述給へりし人に代りて

僞りに昨日頼めし今日の日を暮れなば明日をまたや待つべき

初瀬に詣でて、路に深きを川と云ふが、いと淺かりしかば

小小ら波容の影さへ隠れぬに深きを川と名に流れけん

もゐ侍きて　〔経基〕
程遠き外田の山路に変りなば豊東なりとも増さりこそ侍め
返し
斯ばかりも在りじと思へば外田の山越えなんはかれ悲しきは無し
「猶心地悪しかず、死ぬべきなめり。必ず導き給へ」とて　〔経基〕
今はとて憂き世を外に見るまでも花橘は植ゑてを見ん
返し
頼むべき色異ならぬ橘の唯だ斯「香」ばかりの契りなりとも
心にも有らぬ事出で来て、久しう音づれで、云ひたる　〔経基〕
陸絶えて忘れ果つるな冷淡しとも思はぬ程に成りにけるかな
返し
つらしとも思はぬ人や忘るらん忘れぬ我は猶つらきかな
此人の親なる人、名は萬づ隱れ無し。頂質やかに成りにたる事の嬉しき事とて　〔経基〕
等閑の心も今は絶え果てて我を問はねど哀れとぞ聞く
返し

返し

在りし夜の有明の月は曇らめや吉野の山に入り果てぬとも

また程經て、彼れより　〔爲基〕

在り果てぬ身だに心に愜はずて思ひの外の世にも經るかな

と有るを見るに、三河守なりし程の有樣、父の左大辨の覺えの程など思ひ出づるに、いと哀れにて

心にも愜はぬ事は有りやせし思ひの外の世こそつらけれ

病ひしに「君よりも」と云ひたりしに書き附けておこせたる

昔より浮世に心留まらぬに君より物を思ふべきかな　〔爲基〕

返し

浮世には何に心の留まるらん思ひ離れぬ身ともこそ成れ

病ふことも重く成り增さりて、常もえ音づれで云ひたる　〔爲基〕

程經つつ覺束なきが悲しきは今消えぬとも誰れか告ぐべき

「と思ふなん哀れなる」と有る返事に

在りてだに覺束なきは有るものを消えなん後の世は如何がせん

また程經て、「怪しき亂り心地の猶今は限りと思ふにも、聞えぬは覺束なければ」など、哀れなる事ど

文の返事を爲ねば、同じ人　〔信基〕

忍べども慰む方も無きよりは厭ふも知らぬ身と成らば成れ

返し

厭ふべき浮世をだにも厭はねば人をば然しも思はざりけり

「斯くてのみ過ぎぬべかめること、亂り心地に今はにも思ほゆる」とて　〔信基〕

程をだに人の告げなん消えぬとも世に絶えしかば今日ぞと思はん

返し

定め無き此世の程を盡すとも後の世までも猶頼めかし

同じ人の許に葵を遣りたりしを、年經て祭の日おこせて　〔信基〕

年毎に昔は遠くなりゆけど

と云ひたりしに

逢ふ日〔葵〕は今日の心地こそすれ

此人攝津國取られたりしを、問ひたりしかば、「世に在り經んと思はぬ身に侍れば、斯かる事も歎かし

うも有らぬを、母の思ひ歎かるるを見るなん、啻ならぬ」など、哀れなる事どもを書きて　〔信基〕

吉野山月の影だに變らずば在りし有明に比へても見ん

返し

逢ひ見ても別れの後のつらさをば唯だ我のみや思ひ知らまし

老いたる人の病ひし頃、同じ人問らひに來て、物語し明して、歸りて二日ばかり有りて、「昨夜も參らんとせしかど、亂り心地理無くてなん」とて　〔爲基〕

眺むらん事を思ひて寢ぬる夜の月は心も空にてぞ見し

返し

君が見し有明の空に有らねども獨り眺むる月は經にけり

程經て、月の明きに來たるに、方違に人のおはせしかば、便無うて歸して、翌旦遣りし

歸りけん空は如何にぞ月影の宿を過ぎしも哀れとぞ見し

返し　〔爲基〕

曇明の月や我身と思ふまで見しに悲しく成りし空かな

時雨甚う降る日、同じ人　〔爲基〕

神無月今は目慣れて告げずとも時雨るるだにも空に知らなん

返し

夜と共に眺むる空の氣色にて時雨るる程も知りぬべきかな

返し　　　　　　　　　　　　爲基

程遠き此世をさして往時に誰れ事知りて先づ契りけん

　此人（爲基）三河に成りて下りしに、扇して遣りしに、洲濱に書き附けし

惜むべき身かは「三河」と思へどしかすがの渡りと聞けば尋常ならぬかな

　其時とも云はで差し置かせたれば、繪師どもを呼びて見せければ、其人の斯く爲しと云ひければ、斯く

　云ひける　〔爲基〕

惜まぬに尋常にもあらぬ心して別れを侘ぶる人を知らなん

　と有るに、猶知らず顏にて、其頃初めて通ふ人ありと聞きしかば、云ひし

尋常ならぬ別れを侘ぶる心をば惜まぬ外の人も知れとや

　下るべき程も近う成りぬるを、「如何で對面せん」と云ふを、然も有らねば下るとて　　〔爲基〕

人知れず袖は濡れつつ別るとも絶えじとぞ思ふ八橋の水

　返し

八橋の蜘手の水の別れなば問ひわたりつることや待たれん

　國より云ひたる　　〔爲基〕

都にて逢ひ見ざりしを冷淡しとは遠き別れの後ぞ知りける

八講する寺にて　　大江爲基

覺束な君知るらめやあしびきの山下水の結ぶ心を

返し

今日聞くを衣の浦［裏］の玉にして立ち離るを［とカ］も香をば尋ねん

又　　爲基

昔をも兼けて忘れぬものなれば持つに玉の數や增さらん

返し

數增さる玉とは兼［掛］けじ頂の一つの玉も惡ろきものかは

「今よりは」など云ひしかど、音もせで、五月も過ぎぬ。六月一日頃に橘に附けて

待ち暮らし五月の程も過ぎにけり花たちばなは如何が成りにし

七月七日說法せさすと聞きて遣りし

たまさかに浮木寄りける天の川鵜の住みかを告げずや有るべき

同じ人［爲基］病ひし頃、藥王品を手づから書きて、「是れ形見に見よ、苦しきを念じてなん書きつる。後の世に必ず導け」と云ひたりしに

此世より後の世［夜］までと契りつる契りは前の世［夜］にも爲てけり

赤染衛門集

秋、法輪寺に詣でて、嵯峨野の花をかしかりしを見て

秋の野の花見る程の心をば行くとや云はん留まるとや云はん

翌日歸るに、空いみじう霧わたるに、鵯の啼きしに

いとどしく霧降る空に鵯の啼くや小倉の渡りなるらん

中の關白殿（道隆）の藏人の少將と聞えし頃、姉妹の許におはして、「内裏の御物忌に籠るなり、月の入らぬ前に」とて出で給ひし後も、月の長閑かに有りしかば、翌日奉れりしに代りて

入りぬとて人の急ぎし月影を出でての後も久しくぞ見し

同じ人〔道隆〕頼めておはせず成りにし、翌日奉れる

休らはで寢なましものを小夜更けて傾ぶくまでの月を見しかな

同じ人、理無き裳の腰を解き取り給ひて返し給ふとて　〔道隆〕

幾度の人の解きけん下紐を稀れに結びて哀れとぞ思ふ

返し、代りて

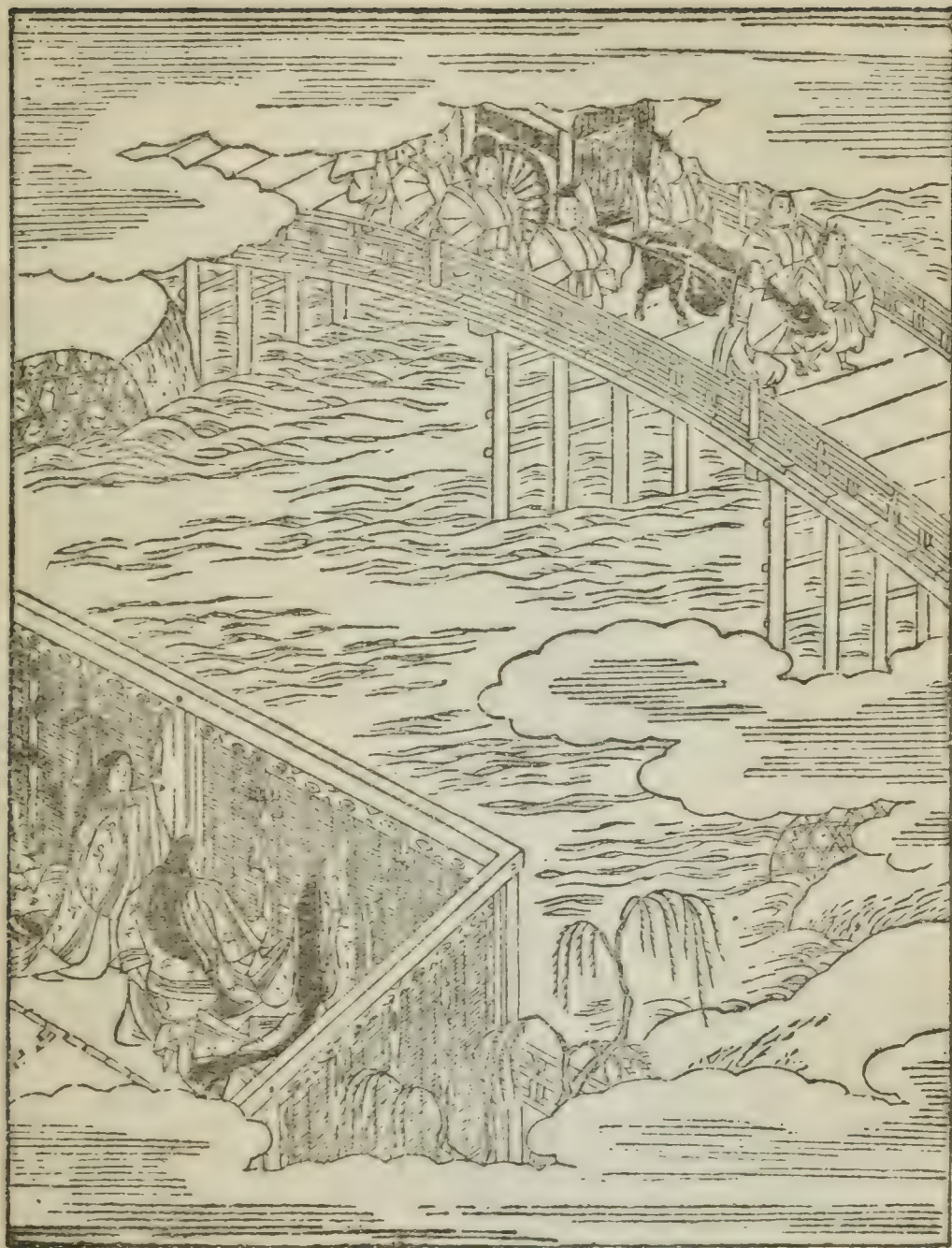
幾度か人も解くべき下紐の結びに侘める心地する身を

赤染衛門集

行末もいとど榮えぞ增さるべき春日の山の松の木末は

など、舊めかしき人の思ひける。

榮華物語下卷　終

けれど、「昔を今に」とぞ、げに覺えける。何時とも無くて下る女房の心地どもも、哀れならんかし。京に思ふ人など有らん人に況して如何に思はん。下種などの歩み續きて、物の具、馬などに具して往くらん、いと哀れなり。内の大殿の少將、今は三位中將とて、世に無く華やかなる御有樣なり。左の大殿の御婿にぞ成し奉らせ給へる。内裏の宮になど思召ししかども、殿の申させ給ふに從はせ給ふも道理にぞ。程無く中納言に成らせ給ひて、中將の中納言にて、春の春日祭の上卿せさせ給ふ。御供に世に殘る無く、君達の殿上したるも爲ぬも、藏人、五位ども仕うまつれり。御裝束をかしう、心心、思ひ思ひ、心を盡し色を盡さぬ無し。宇治殿に四條の宮おはします頃にて、宇治橋見遣らるる程に、御棧敷いみじうめでたくて、女房の衣のこぼれ出でたる程、繪に書かまほし。頂に川も彩なり。思ひ掛けぬ宇治の邊りに御棧敷の前渡る人人、女使の內侍など、用意無くて、いと片腹痛く、憚ましながら、渡る程、目眩く思ひけり。木津河など渡らせ給ふ程、えも云はず面白うをかしかりけり。斯くて佐保殿に着かせ給いて、祭の儀式、有樣、世の常ならず、めでたくて參らせ給ふ。積れる人、大殿の斯くておはしまししに、御孫にて斯くおはしますを、枝枝榮え出でさせ給ふを、春日の神も心行かせ給ひてや、めでたく見奉らせ給ひけんと、心の中に思ひ餘りけるを、同じ心に、賤の男まで愛で思ひ申しけり。又の日歸らせ給ふ。御供の人人、皆今日ばかり裝束打亂れ、今少し思ひ遣り深く、世にまた三笠の山の斯かる類ひ無く、めでたう思ひ餘りて、車引き留めつつ、道すがら見る人の、

り。年積りて、げに都に變りたる春の氣色も哀れなるに、月をかしき程に、民部卿參り給へり。故院の殿上人にて睦し給ひしかば、哀れにて、夜更け參り給へる事など云ひて、又の日、女房の云ひ遣りける。

いにしへの慣れし雲居を忍ぶとや霞を分けて君尋ねけん

御返し、民部卿、

哀れにも見えし昔の雲居かな谷の鶯聲はかりして

哀れなる事のみこそ多く、皇太后宮も小野にのみおはします。四條の宮も宇治に御堂建てて通ひ住ませ給ふ。故中宮の姫宮一所、此宮におはします。愛護淋しからせ給ふ樣、賑かならず。斯くて瑠璃女御と聞えし、亡せ給ひぬれば、齋院下りさせ給ひぬ。いと有心にめでたかりつる幸ひ人なり。一院の姫宮、殿におはします。齋院に居させ給ひぬ。いと華やかに、めでたき御有樣なり。定まらせ給ひなば御對面難かるべければ、院に渡らせ給ふ。四條の宮の姫宮も渡らせ給ふ。若き人八人、羅、綾、織物の一重襲の色色なるに、裳、唐衣など、めでたくをかしう、花の色色を織り盡して十人、無らぬ大人などは、織りたる五重なる、三重なる、浮線綾など着たるも有り。四條の宮の姫宮の御方にも、四人ばかりぞ侍はせさせ給ふ。齋院、有様、心殊に據らせ給へり。齋宮の御方にも賑かならんやは。院、何れをも賑かならず見奉らせ給ふ。斯くて六月晦日方に居させ給ひぬ。人の家におはします。又の年の御禊にぞ大膳職に渡らせ給ふ。御禊の有様など、いとめでたし。屏十穿きなどさへ擬らせ給へり。齋宮も、母女御具し奉りて下らせ給ひぬ。久しくなる事も無

す帝、久しくおはしまさざりつれば、世にめでたき事にぞ有りけると、愛で申しけり。齋院の、御車留めさせ給ひて、入り果てさせ給はず、院の還らせ給ふを御覽ずるを、人愛で申しけり。有るべき程は何と無くて過ぎぬ。鳥羽に宮達渡し奉らせ給ひて御音樂あり。御心を遣らせ給ひて過ぐさせ給ふ。二條院、故院の御墓所に御堂建てさせ給ひて、菩提院とて、東山なる所に三昧堂建てられたる傍に御堂建てさせ給ひて、御八講、五十講など爲させ給ふ。故院、故宮のおはしましし邊りにて斯く爲させ給へば、「御罪も滅び給ふらん」など申す。いと尊し。後一條院、故中宮、後冷泉院の御事など申す。いと尊し。彼の「源氏」の輝く日の宮の尼に成り給ふ願文讀み上げけん心地して、やんごとなくめでたし。御堂には故院の御影を書き奉りたり。似させ給はねど、御直衣姿にて、御脇息に押し掛かりておはします、いと哀れなり。上東門院の御方に、故院の御子と云はれける中納言と云ふ人、

如何にして寫し留めけん雲居にて飽かず隱れし月の光を

雲居にて住みけん世をば知らねども哀れ留まれる月の影かな　　乳母君

御前渡らせ給ひて見奉らせ給ふ。幼なくおはしましし程にて、確かにも覺え奉らせ給はぬに、年頃ありて、御繪にても見奉らせ給ふ、いみじう哀れに思召さる。皇后宮よりも、ゆかしがり奉らせ給ふ。道理なり。斯かる御山里住いと哀れに、幼なくより內裏にのみおはしまし、九重の隔て多かりしに、斯かる御山里住思ひ掛けずいみじう哀れに、御垣の中にて霞める山の氣色御覽ぜられざりしに、など思ふに、いと哀れな

れ、齋宮をも見奉り、内裏にも御對面の後、行幸、大饗ありなどして、野におはします齋宮見奉らせ給ふなりけり。日一日遊び、萬づのをかしき事を盡して御覽ぜさせ奉らせ給ひて、還らせ給ひぬれば、名殘戀しく思召さるらんかし。唯だ齋宮の御方にのみおはします。折折の春秋の花紅葉の盛りにも、をかしき歌多く、御消息あり。心を遣りておはします。功德の方の事も打捨へ、思ふ樣にめでたき御有樣なり。唯だ宮のおはしまさぬのみぞ哀れに口惜しき事なる。四月に成りて、祭、院、齋宮など御覽ずべしとて、世の中の人、心する中にも、齋宮の童女、小さき、大きなる、いといみじく美くしきに、女房、我も我もと競みて、えも云はず裝束したり。浮線綾の上衣に綺に描きて、縫物し、錦の袴を著、云ひ盡すべくも有らず。殿にも樣樣にいみじう裝束したり。院の御車は、殿の御棧敷見遣らるる程なり。午の刻ばかりに、院と齋宮と一つ御車におはします。齋宮をば口に乘せ奉らせ給ひて、後におはします。いと忝く哀れなり。御直衣の袖の僅かに見えさせ給へる、いみじう哀れに、忝し。女房、花の色なる山吹どもに、唐衣いと華やかに今めかしう見ゆ。「一主は誰れ」と云はまほしうぞ。殿を初め奉りて、左右の大殿、内の大殿、大納言達、其れより下はた殘り無く仕うまつれり。殿を放ち奉りては、大臣達も皆御馬にて侍ひ給ふ。世の人いみじき見物になん爲ける。世擬すりたる年なり。齋院などの藤氏の后腹などの御子などにておはします事は、めでたけれど、斯くは無かりき。讓さるも同じ事にて御覽ず。先づ院のおはします路、紫野へ競ひ急ぎたる車の轡き滿ちて見ゆる」とは、斯かる折にやと見えたり。前前斯く心長閑かに事無くて下りさせ給ひておはしま

ましつらん。終の事と哀れにこそ。左の大殿薨づに掫ひ申させ給ふ。年廻りぬれば、內裏還り例の事にて、御給仕、御藥など參る有樣、めでたく華やかなり。十九日院に行幸あり。めでたく裝ほしき儀式なるに、御角髮結ひて下りさせ給へるは、漫ろなる人だに淚止まらず、況して院の御心の中には、云ふ方無くなん思召されける。院の人、殿の人など加階し、めでたし。二月廿二日、院、高野に詣でさせ給ふ。世の人、見喧騷る。殿、左右の大殿、內の大殿、皆參らせ給ふ。殿、內の大殿は、御送りばかりして歸らせ給ふ。左右の大殿は詣でさせ給ひけり。近く成りて步ませ給ふ。御輿ならでは步りかせ給はざりしに、烈しき山を越えさせ給ふ。いといと哀れに見參らす。雪など降りて、いと哀れなりけり。廿九日に還らせ給ふ。臨時祭に、內の大殿の若君、殿に生し立て奉らせ給ひつる、此正月廿一日に御元服せさせ給ひて、侍從に成し奉らせ給へるが、少將におはしましし時、春日の臨時祭の舞人せさせ給ふ日、殿の大盤所に賴綱が參らせける。

　咲き初むる插頭の花の千代を經て木高く成らん影をこそ待て

殿はいみじき事どもを盡させ給へり。八幡行幸、晦日方に有りて、歸さに彼の鳥羽院におはしまさせ給ふ。十餘町を籠めて造らせ給ふ。十町ばかりは池にて、遙遙と四方の海の氣色にて、御船浮べなど爲たる、いとめでたし。故宮崩せさせ給ひては、何れの宮達をも見奉らせ給ふ事も無く、なかたかに見奉らんに付けて催されぬべしとて、此二三年ばかり、斯くいみじき御有樣どもを見奉らせ給はざりつるを、御禊の程よ

匝を御孫にて見奉らせ給ふ。いとめでたき御有樣なり。師走十六日御即位なり。御輿に御髮結ひて奉れる、めでたきにも涙ぐましく、故宮の況して見奉らせ給はましかばと哀れなり。御乳母達、典侍に成りなど、いとめでたし。殿、攝政せさせ給ふ。道理の事なれど、差し當りては又いとめでたし。院の御有樣、斯くてしも御心に任せさせ給ひ、所所御覽じ、御物詣など安らかにめでたき御樣なり。齋宮には故内の大殿の女御の御腹の姫宮居させ給ひぬ。覺束なからん事を女御殿は思し歎かせ給ふ。前齋宮上らせ給へれば、殿にも同じ御後見愛護き申させ給ふ。院に入らせ給ひて、院にのみおはします。持て愛護き奉らせ給ふ事限り無し。故宮の御事を思召し忘れさせ給ふ世も無くて、此宮の御方にのみ渡らせ給ひて、哀れに昔をのみ思し出でさせ給ひて、一所におはしまし、いと頼ひ無く哀れなる御心なり。御禊十月廿一日なり。女御代には殿の姫君立たせ給ふ。母は故右の大殿の御子の美濃守基貞と聞えしか御女、女院に侍ひ給ひしが腹なり。前前斯くのみぞ常人の腹なれど、一の人の御女は爲給ひしかば、況して是れは何どてかは。裝束は色色萬造の織物、葡萄染の唐衣、今と成りては故中宮も、皇太后宮も、皆色一つに爲させ給ひしかば、唯前前の樣にてと思召すなるべし。攝政殿を初め奉りて、殘り給ふ人無く仕うまつり給へり。殿の上、姫宮達、院、前齋宮など、皆御棧敷にて御覽ず。陽明門院、四の宮なども御覽じけり。梅壺の女御、東宮の御事を思し出づらんかし。三の宮御元服せさせ給ひて、いと淸げに大人大人しくておはします。五節なれ[衍カ]ど、例の事なり。大嘗會などめでたくて過ぎぬ。宇治殿の上亡せさせ給ひぬ。九十ばかりはおはし

時雨れつつ朽ちにし袖は如何がする哀れ憂かりし秋は來にけり

斯くては如何でか長らへさせ給ふべきと見奉れど、限り有る事にや。其年瘡と云ふ事起りて、子ども、若き人など、いみじう病むに、東宮重く煩はせ給ひて、應德二年十一月八日に亡せさせ給ひぬ。あさましくいみじう、近くは聞えぬ事なりかし。女御殿、一品の宮など歎かせ給ふ樣、道理なり。云ひ遣るべき方無し。宮司、然るべき親族など、「時失ひたる山賤」にて、如何にとこそ、內裏にも哀れにいみじく思召さる。打續き、あさましき年なり。月日は換れど、誰も思し歎くに、內裏は猶前時に變らず、政などにも出でさせ給ふ事も無く、哀れに心深く思し入らせ給へり。如何に思召すにか。九條の彼方に鳥羽と云ふ所に、池、山廣う面白う造らせ給へば、「下りさせ給ふべき御心設けにや」など申し思へる程に、十一月廿六日に二の宮に御位讓り申させ給ふ。今年ぞ八つに成らせ給ふ。故宮の御事の後は、五節、臨時祭、樣變りて、出でさせ給ふ事も無く、萬づを捨て、荒涼じく假初に思召し成させ給ひにける、いと哀れなり。賀茂に御生の日每に行幸の有りつるも止まり、齋宮なども、また居させ給はざりつるも、斯く思召しければにこそと、哀れに心深く、世の常ならぬ御心の程なり。斯かる類ひは有らじと見えたり。是れを見奉らせ給ふにも、右の大殿には、如何に哀れに有り難く見奉らせ給はんと、いとど催さるる御心の中ならんかし。土御門の右の大殿の上亡せさせ給ひぬれば、殿の上、左右の大殿、御服に成らせ給ひぬ。めでたき御幸ひなりかし。后には成らせ給はず、常人にておはしましつれども、御命は八十餘にて、大臣達、關白殿の上を御子にて、內の大

を、中宮例ならずおはしますと云ふ事ありて、華やかなる事は止まりぬ。遊など、院の御方、宮の御方にも、諸樣をかしくて多かり。宮の御心地重くおはしますとて、十七日に御髪下ろさせ給ひぬ。いと重くおはしましけれ。日を經て重く成らせ給ひて、九月廿二日崩せさせ給ひぬ。あさましなども世の常なり。何方にも思し歎かせ給ふ樣、云ひ遣る方無し。右の大殿の上、殿の上など、唯だ思ひ遣るべし。内裏の御前には道理とは申しながら、云ふ方無く、類ひ無く思召し入らせ給へり。また是れをいみじき歎きに、殿より初め歎かせ給ふ。東宮大夫など思ひ歎き給ふ事限り無く、宮内も殿に出でさせ給ひぬ。齋宮下りさせ給ひぬ。内裏には月日の往くも知らせ給はず、つゆの御湯なども召さず、沈み入らせ給ひて、夜の大殿の外へも出でさせ給はず。女房なども睦ましく然るべき限りぞ參りける。殿にも宮達の籠らせ給ふを見奉らせ給ふも哀れなり。いみじき御功德ども、然るべきよりも過ぎさせ給ふ。擧ての世にも惜しく、いみじく歎き申したり。五節御覽止まりぬ。正月なども有りし世とも覺えず、月日ばかり往けども、つゆの御湯なども御覽じ入れさせ給はず。夜の大殿に籠りおはしまして、埋もれ過ぐさせ給ふ。月毎に丈六の御佛を造らせ給ひ、御堂を造らせ給ふ。世の常ならず訪らひ申させ給ふ。前の世の御契推し量らる。世の人もいみじう哀れがり申しけり。

　及び無く影と見ざりし月なれど雲隱るるは悲しかりけり

又の年の九月、女房の許に右大辨通俊、

し御有樣のめでたさに、歸さ御覽じに、又の日、紫野に渡らせ給ひし御有樣のめでたう美くしくこそ。北の陣に大殿御容車寄せさせ給ひて、若宮抱だかれさせ給ひて、殿差し添ひおはしますに、殿上人、上達部、然るべき限り御供に侍ふ。紫野の遥かに廣きに、御供の人、皆下りて居並みたり。二の宮、御車より差し出でて御覽ずる度毎に、見參らする人、愛で申さぬ無し。殿の御有樣、常よりもいとめでたく見えさせ給ふに、宮の差し並ばせ給へる事をぞ、行末遥かに光添ひ出でさせ給へる御有樣と、祭の歸さよりも、心殊に御車の邊りを、めでたく世の人愛で申さぬ無くなん有りしとぞ申し傳へたる。

紫野

殿には宮達若君の御袴著など、御準備のみ頻る。めでたき御事のみ多かるに、天王寺に詣でさせ給はん御志し亘るに、自ら障る事のみおはしまして過ぐさせ給ふ。應德元年九月十二日詣でさせ給ふ。四條の宮も具し奉らせ給ふ。殿の上、同じ御車にて詣でさせ給ふ。女房の車、殿の御方に三つ、宮の御方に三つ、樣樣の花紅葉、色色を折り盡して、日毎に更へさせ給ふ。羅絹の衣に綿を入れたる日も有り。中に薄樣、紅葉、檀、また紅にて裏は色色なるも著、菊は蘇芳菊、唯だ推し量るべし。日毎に裝束更へ、えも云はずめでたし。上達部、殿上人殘り少なく參らせ給へり。裝束など、唯だ推し量るべし。御音樂など有るべき

右の大殿は殿の御心は騒がしげならねど、「女の御徳に恥隠し給へり」と人は聞えけり。大饗の程の事など殿の人人参り混み、御前なども殿の人ぞ参りける。内の大殿の女御も、准三宮にておはしませば、いとめでたし。内裏の御心の大方の御掟は哀れにおはしませど、殊の外なる御前渡りなどのあさましく、近くては見じと思召さるるなるべし。大将殿、右の大殿枯れさせ給ふ事、月日に添へて増さるべし。右の大殿、年頃「病名ヲ聴セルカ」と云ふもの有りけるが、倒れ給ひて、いみじう煩ひ給ひてうせ給ひぬ。内の大殿も物の怪だちて亡せ給ひぬ。打続き、あさましき世なり。月日過ぎて、夏つ方、大臣召あるに、右大将殿、例の官途の御事、託言に恥したるも道理なり。兄の大納言の然のみ隠され給はんもいとほしく、世をも恨み給はず、宮仕を勤め、才もおはする人の、つと世に仕へ給はんを措きては如何でかはと思召す。左大将殿、一の人の御子にて今まで成らせ給はぬだに有り。東宮大夫、内裏の御叔父にて望み給ふ、其れも道理なり。権中納言、一の大納言にて望み給ふ。然れど源大納言二人、左右の大臣に成り給ひぬ。殿の大将殿、内大臣に成らせ給ひぬ。廿二ばかりにやおはしますらん。殿は十八にてこそ成らせ給ひしか。所所の大饗など、いとめでたし。土御門右大臣殿の上を大臣三所拝し奉らせ給ふ程こそ、世に無くめでたけれ。度も更へず同じ折に、いと珍しくめでたき御事なりかし。御年も御幸ひも、いとめでたくおはしましけり。小一条の大臣頼宗公、左の子、右の子と、小野宮殿、九條殿を申させ給ひけるを、世にめでたき事に語り伝へたるを、斯くこそはと、めでたくおはします事を、世の人申しけり。二の宮の五つにおはしましに、祭の桟敷にて物御覧せ

大夫などのは云ふべきにもあらず。昔には勝りつゝぞ萬づの事有りける。中宮また尋常ならず成らせ給ひて、此度は男宮にておはしませば、思召す事無くめでたく嬉しく思召す。大將殿も御容貌、有樣、匂ひやかに愛敬づき、めでたき御有樣なり。若君のいと愛くしき出でおはしましたれば、殿に迎へ奉らせ給ひて、殿、世に無く限り無きものに愛護き思ひ申させ給へる樣、道理なり。又も宮は尋常ならず成らせ給へり。女御殿も世の中の有樣、心病ましく思召さるれば、里にのみおはします。姫宮の三つ四つばかりに成らせ給ふを、徒然の御慰めに見奉らせ給ひて、明し暮させ給ふ。中宮には此度女宮にておはします。四條の宮に徒然におはしますにとて渡し奉らせ給ひつ。大將殿の若君も先づよりおはしまし通はせ奉らせ給ひつゝ、何處にも飽かず思召したり。上の御中らひ、怪しく枯れ枯れにのみ成り增さらせ給ふ。民部卿其事と無く惱ましくし給ふにも、「亡からん後誰も如何にし給はんずらん」と歎かせ給ふ。然れど此上は「若君を殿のいと愛しくし給へば、賴もし。殘りの君達如何にし給はんずらん」とぞ述給ひける。いとをかしげにて並み居給へる、外人のだに、いと心苦しげなる御有樣なり。大臣に成り給ふべきに、東宮大夫殿、年頃故大夫の御方樣にても成るべき樣を申し給ひ、捨て難くいとほしく、內裏思召したり。民部卿兄にて、一の大納言にて壓され給はん事を、いみじう歎き給ふ。內の大殿は太政大臣に成らせ給ひぬ。民部卿も右大臣に、東宮大夫は內大臣、源大納言「宮達の御面伏にて、我が今まで斯くて有る事」と、いみじう申し給へば、大將に成らせ給ひぬ。樣樣いとめでたし。兄の大納言は道理なれど、歎かしく如何がは思されざらん。

せさせ給ふ。例の左右競み、えも云はぬ洲濱など例の事なり。何事にもいとめでたくおはします世にこそ。集など人人に召して撰らせ給ふ。「過ぎにし事を失はじ、今よりの事をも散らさじ」と有る「古今」の序思ひ出でられける。昔に復りて、大井の行幸、賭弓など、いとをかしき御時になん。四月十餘日、齋宮の御禊濟、齋宮にやがて立たせ給ふべし。美くしき御有樣にも、打延へ涙こぼれ給ふ人人の御心の中なり。中宮、五月十八日いと安らかに女宮を生み奉り給へり。口惜しき事を誰も誰も思し歎く。殿の上取り分きて愛しき奉らせ給ふ。程も無く宮は入らせ給ひぬ。御覺え月日に添へて、一水の白波にのみ成り増さらせ給ふ。九月廿三日、殿の上具し奉らせ給ひて八幡へ參らせ給ふ。女房、紅葉、附さは菊を折りて侍へり。御車の中思ひ遣られて、めでたくいみじ。細かには女などの心及ばぬ事にて止めつ。めでたき事の入譲させぬ世の中の御有樣にのみなん。五節、大將殿出ださせ給ふ。世の常ならんやは。女院、四條の宮など、童女、下仕の裝束、月も彩に爲させ給へり。美くしき童女など撰り調へさせ給へり。師走に姫宮の御袴とて、世の中擾すりて準備がせ給ふ。女房廿人、色色どもを常の色重なりよりも過ぎて、いみじう爲させ給へり。女房、然るべき人人の女の後護くを、皆召し出でさせ給ふ。いみじう惜み、樣樣の障りを申せども、親親を然は催促めば皆參らせたり。中に物引きなどして、見え交はさでぞ在りける。御輿の後には、故閑白殿の御女にて、女御殿に物せさせ給ふ、資仲の中納言の北の方侍ひ給ふ。小一條院の信宗中將と聞えしが御女、師大納言の子の攝津守師家、小野宮右大臣の御子の出雲守など、斯樣の君達の親あるを皆召し出で、諸

給ふ。いとめでたし。曇り無き庭に、紅葉、菊の色色、黄なる光も紅きも光も添ひたらんと見えて、所から匂ひを增し、御堂の氣高う物物しきが新しう赤く塗り立てられたるに、青やかに見え渡されたる御堂の飾りなど、極樂に違ふ所無げなり。瑠璃の池に黄金の砂子などを敷かぬばかりなり。池の水澄み渡り、船樂、打たぬに鳴ることは無かりけれど、大鼓掛けたる樣、事事しう、獅子、狛犬の舞ひ出でたる程も、いみじう見ゆ。三百人の僧の端麗しく裝束きて行道し、衆僧などを爲加へて、千人の僧も拜みつべし。童部花を折りて裝束きたるもをかしう見ゆ。行幸などの程も、いとめでたし。別當、檢校より初めて、寺主、供僧何かなどなり。阿闍梨など、いとめでたし。甚う夜更けてぞ歸らせ給ひける。如何で斯く思召し寄らせ給ひけん。御年も若くおはします、位にても久しうも成らせ給はぬを、げに前の世より思召しける御願にこそとぞ見えさせ給へる。供僧にやんごとなき僧綱など成りて、供養法行ひ勤めけり。「天狗、え造らせ給はじと妬たがり云ふ」と聞きしかど、斯くて供養も過ぎぬめり。五節、臨時祭など例のやうにて過ぎぬ。若宮の御事ぞ盡きせず思し歎かせ給ひける。年換りて御戴餅の折も事忌せさせ給はず、いみじき御心の中なり。殿の上などは、唯だ月日の過ぐるに付けても、類ひ無くいみじかりし御容貌、有樣の戀しう、いみじう限り無きものに思ひ聞えさせ、慕ひ纏はさせ給へりし御有樣など、いみじう思召し申させ給ふ。二月一日、宇治にて故入道殿の御料に八講など爲させ給ふに、四條の宮も殿の上に渡らせ給ひて、四五日ありて歸らせ給ひぬ。中宮の御産屋近く成らせ給へば、やうやう御祈りなど、いみじう爲させ給ふ。三月晦日、内裏に歌合

御承香殿と聞えさする、九月十餘日女宮生れさせ給ひぬ。口惜しく思したれど、いと美くしき御有樣にぞ思し慰みさせ給ひける。中宮は、「内裏に參らせ給へ」とのみ申させ給へど、思し沈みておはしますを、あさましき御事も、一所にて聞えさせ合せさせ給はんとにや、促めて聞えさせ給へば、入らせ給ひぬ。内裏には先づ打具し奉らせ給ひておはしまさましものをと思召し出でられて、悲しく思召さる。物などいとよく仰せられしも、樣々思ひ出で申させ給ふ事限り無し。御容貌などの世の常ならず、美くしうおはしましを、如何でかは斜めに思召さん。然らざらんにても疎かなるべきかは。大納言殿など先づ抱きおろし奉り、御衣、御撫來などし給ひし心地好げさは、左右にいみじかりしに、限り無き光を失ひ給へる、如何ばかりかは思されけん。内裏には齋宮まだ日頃に此上無く大人びさせ給ひにけりと、愛くしく見奉らせ給ふ。いみじう慕ひ、哀れに懐かしき御心ぞおはしましける。齋宮に居させ給ふべき定め出で來たるを、中宮は二所おはしましを、只だに哀れに疎かに思召すべきにもあらず、況して此宮を然は餘所に見なし奉らせ給ひこん事を、いみじう思召し歎かせ給ふ。まだ尋常ならず成らせ給ひぬ。猶然るべきと見えさせ給ふ御有樣なり。白河殿とて宇治殿の年頃領せさせ給ひし所に故女院もおはしましが、天狗ありなど云ひし所を御堂建てさせ給ふ。此二年ばかり受領どもに當りて、金堂は播磨守高家ぞ造りける。御堂も佛も、尋常ならず大きにおはします。疾くと急ぎ造らせ給ひて、十月廿餘日供養せさせ給ふに、中宮も渡らせ給ふべく申させ給ふを、然らでもと思召したれど、「斯ばかりの大事に、如何でかは御覽ぜでは」と、促めて申させ給へば、渡らせ

そおはしますに、是れはいとめでたき事なり。參らせ給ふ事も此二三年ばかりは無きを、促めて「參らせ給へ」と申させ給ひければ、其年の九月廿三日に入らせ給ひぬ。師走に六條殿に內裏渡らせ給へば、出でさせ給ひぬ。六條殿は所狹ければにや入らせ給はず。中宮ぞ宮宮具し奉らせ給ひて入らせ給ひぬる。此程女御殿尋常ならず成らせ給ひにければ、東宮大夫、嬉しなども世の常ならず思したり。四五月ばかりより赤瘡と云ふ事出で來て、世の人病むなど聞ゆるに、六七月に成りては、いみじう病み增さりて、殘る無く聞ゆ。五十三年に出で來たれば、老いたる〔と脫カ〕若きと無く、親子も分かず、一度に病みたれば、起きたる人少なくぞ有りける。六七十の人は人の許にも少なければ、いといみじくなん有りける。昔だに斯かる瘡出で來りける。尙侍の殿の亡せさせ給ひし折は、いと斯くは有らざりけり。三百年ばかりに成りたるになん斯かりける。秋深く成りては貴き人人病ませ給ふ。內裏、中宮、宮達、關白殿の上、大將殿など、皆同じ程少し打違がひなどして出でさせ給へば、御祈り數知らず。式部卿の宮亡せさせ給ひぬ。御女におはしませば齋宮下りさせ給ひぬ。八月に、故右の大殿の御子堀河中納言、右京大夫道家、兵衞佐惟賢、藏人家賢亡く成りぬ。中納言、兵衞佐は、上も亡く成り給ひぬ。あさましき世にぞ。但馬守高房、東宮亮經輔など亡くなりぬ。民部卿の北の方、但馬守の女、東宮亮の北の方など、大方あさましき頃なり。過ぎ過ぎて內裏の一の宮、御瘡の名殘猶え怠らせ給はで、八月六日終に亡せさせ給ひぬ。誰も誰も思し歎かせ給ふこと限り無し。內裏にも殿にも云ふ方無く歎かせ給ふ。大納言殿など如何なる御心の中なりけん。東宮大夫殿の女

ど、え參らせ奉らせ給はで、末の世に後朱雀院にこそは參らせ給へりしかど、后の御本意協はせ給はず、際無かりしを御覽じて、思し絕えさせ給ひにしかど、いとめでたく、中宮を斯く見奉らせ給ふ。殿の上の子にし奉らせ給ひて、斯くもし奉らせ給ふ甲斐ありて、御覺え世の常ならず、世の例にも爲つべくておはします、いとめでたし。大將には殿の三位中將、宰相に成らせ給ひて、大將掛けさせ給ひつ。宰相の大將と聞えさする、いとめでたく今めかし。殿こそは中納言の中將にておはしましか。四月に萬づの事始まり、有るべき事ども殿にて爲させ給ふ。大將殿の上も渡らせ給へり。いと美くしき御匂なり。今年ぞ大將殿十六に成らせ給へど、いと大きやかに、美くしう愛敬づき、めでたくおはします。行幸は此御時には、年毎に、御生の日せさせ給ふ。始めたりし年、資綱の中將、[次ニ有ルベキ歌ヲ缺キ、古本ニ此間二行明キタリト云フ]と詠み給へりき。關白殿の御賀茂詣に、例の世に有りと有る人御前し、上達部、殿上人參り給ふに、殿いと麗りかに、めでたき御有樣なり。中納言、宰相など、渡り給ひて、末つ方に宰相にて、大將殿隨身しておはします。いとめでたし。いと豐肥らかに愛敬づき、匂ひやかなる御有樣にておはします。東宮大夫殿の女御は、世を思ひ歎きて里にのみおはします。いと哀れに、准三宮に成し奉らせ給へり。殿も女御殿も、如何がは哀れに嬉しく思召さざらん。中宮の御事思すにや宜しからん。如何でかは然のみは。是れと顯らけの事にも有らず。前前も斯かる事は無かりしを、二條關白殿の御時に、然のみいとはしうやはとて、皇太后宮の成らせ給へりしにこそ。昔は后一人立たせ給ひぬれば、御子達多く物せさせ給へど女御にてのみこ

宮を見奉らせ給ふ。關白殿の上を御女にておはしまし、大納言二人、宰相中將、また法性寺座主僧都にてなど、いとめでたき御中らひなり。斯くて終に亡せさせ給ひぬれば、誰も誰もいみじき事を思し惑はせ給ふ。大將殿の上、今姬君など、申し遣るべき方無し。殿の上も、斯かる事も御覽じ習はぬ御心に、あさましういみじう思召さる。御衣の色變らせ給ふ程など、いと哀れなり。上の御心地など如何なりけん。中將と申しし折より、多くの年頃、七十餘に成らせ給ふまで見奉り習はせ給へるに、云ふ方無き御心地ならんかし。哀れにいみじけれど、宵曉の念佛、御經供養せさせ給ふ。殿ばらも籠り物せさせ給へば、然ても紛れ過ぐさせ給ふに、御忌果にて、僧ども退かで、殿ばらも我殿に渡らせ給ふ程、いみじう哀れに、心細く長閑やかに、何事も有りしに變る心地せさせ給ふ。云ふ方無く哀れなり。昔御姉妹達皆、后にて三人おはしまし、東宮の女御、院の女御などにておはしまししに、中將にておはしまししを、婿取り奉らせ給ひしかば、あさましと思召し歎かせ給ひけり。然れど彼の宮達四十にだに足らせ給はで、皆亡せさせ給ひにき。女院のみこそ一所長くおはしまししか。大臣の北の方にて、七十餘まで差し並びおはしまして、數多の君達の御親にて、長く見奉らせ給ふ、いとめでたし。后、女御と申しし、めでたけれども、いと疾く過ぎさせ給ひにしに、關白殿の上、大納言達二人、御孫にて中宮の一の宮、姬宮など生み給へるを見奉らせ給ふ、いとめでたし。大將殿の上などを、內裏に參らせ奉らせ給ふべかりしかど、後一條院には、入道殿の故中宮侍はせ給ひ、後朱雀院には、陽明門院の一品の宮と申ししを參らせ奉り置かせ給ひてしかば、故二條關白殿、堀河の右の大殿な

とめでたし。女房、紅梅の匂ひに、萌黄の打ちたる著たり。制されば数在つなり。然れど綿いと厚くて少なしとも見えず、数多あるこそ厚きも餘りなれ。打ち出でたるは淡きは物げ無きに、いと清げに見ゆ。上達部、殿上人参り給ひて、御音楽あり、右の大殿、物誦んじなど奏させ給ふ。中将殿は三位にておはします。去年の冬、民部卿の時に成らせ給ひにき。内裏の御妹の宮達になど聞えつれど、如何に思しつるにか、斯く成し奉らせ給へれば、いみじう持て愛護き聞えさせ給ふ。同に常に添はせ給ひ、頑普になん物せさせ給ひける。此民部卿は男一人、宰相中将にて物し給ひしは、去年の春亡せさせ給ひにき。異腹どもには、いと多くておはすべし。大方入道の右の大殿の御末、いと多く物せさせ給ふ。斯くて今の右の大殿、十餘日より風起らせ給ひて、日頃に成れど更に癒らせ給はず。如何に如何にと御方方思召す。廿十一日に陽明門院に行幸あり。東三條に渡らせ給ひて、いみじうめでたきにも、院の御前には、哀れにいみじう思召さる。拝し奉らせ給ふ程など、涙ぐましく思召す。人人加階多く賜したり。右の大殿の風更に癒らせ給はで、いと苦しう病ませ給へば、恐ろしき事を思召す。二十日の程などには、いと重く成らせ給へれば、殿の上も渡らせ給ひておはします。二月十七日に太政大臣の宣旨下りぬ。いとめでたき御有様になん。村上の帝の御孫、中務の宮の御子、式部卿の宮の御女の御腹、云はんかた無く貴にやんごとなき御有様なり。中務の宮の御孫女御、麗景殿の女御と申ししも、中務の宮の御女にておはしましき。然ればかたがた、常人の筋に離れさせ給へりき。御容貌いと美々つき、物物しく物せさせ給ひ、御才おはしまし、御手めでたく書かせ給ふ。中宮を御孫にて、一の

の女、伯耆の乳母と云ふ人なり。若宮物いと能く仰せられて、姫宮を競み申させ給ふ。樣樣に愛くしうめでたき御有樣なり。若宮に駒競の形御覽ぜさせんとて、金の埒結ひ、馬に人の乘りたる形など造らせ給ふ。物見車など造らせて御覽ぜさせ給ひけり。其頃、殿、布引の瀧御覽じにおはします。道の程いとをかしう、樣樣の狩裝束など、云ふ方無し。業平が云ひ續けたるやうにぞ有りけんかし。

聞しけん甲斐も有るかな山姫の尋ねて來つる布引の瀧　　　　關白殿

水の色唯だ白雪と見ゆるかな誰れ晒しけん布引の瀧　　　　皇太后宮大夫顯房

珍しく雲居遙かに見ゆるかな世に流れたる布引の瀧　　　　皇太后宮大夫祐家

雲居より轟き落つる瀧つ瀬は唯だ白絲の絕えぬなりけり　　　　皇后宮權大夫經信

水上の空に見ゆれば白雲の立つに紛へる布引の瀧　　　　三位中將師通

立ち返り生田の森の幾度も見るとも飽かじ布引の瀧　　　　權中將雅實

世と共に此や山姫の晒すなる白玉解れぬ布引の瀧　　　　中將公實

水上に霧立ち籠めて見えねども音ぞ空なる布引の瀧　　　　播磨守爲家

幾尋と知らまほしきは山姫の遙かに綜たる布引の瀧　　　　家綱

年換りぬれば承保四年と云ふ。所所の有樣、常よりもめでたう見ゆるに、中宮には、男宮、女宮、御戴餠の程、いみじうめでたし。御乳母達の美くしうおはします樣、云ふ方無し。二月は殿に臨時客などい

させ給ひけり。見奉らせ給ひて泣かせ給ひければ、「大臣は何ど泣く、頼き所や有る。腹取の女に取らせよかし。我も然こそはすれ」と仰せられければ、泣き笑ひせさせ給ひてぞおはしましける。皇太后宮、内の大殿などをも思し歎かせ給ふ。上も今更に如何がは思召しけん。左の大殿の御有様いとめでたし。此御腹の若君は、一年御元服せさせ給ひて、中将にておはします、春日の使に立たせ給ふ。昔宇治殿の少将にて使せさせ給ふに、入道殿の「心使を」と詠ませ給へる、思ひ出でられて哀れなり。殿は皇太后宮に[illegible]が女侍ひけるを思召しけるに、男二人物し給ひけり。少将と聞ゆ。今一人、仁和寺の宮に奉らせ給へり。散りたる御子ども、いと多くおはしますも、同じ程にぞ此様に生ませさせ給へり。やんごとなきには有らで、然るべき容貌好き名取りなる所所の中臈の人人なり。故女院の中納言の君とて、右の大殿の御子に美濃守基貞と聞えし人の女の腹にぞ、數多物し給ひければ、女院いと心苦しとて、女君をばいみじう愛護かせ給ひて、上に、乳母なども、やんごとなきを取らせ給ひて侍はせ給ひて、今更にと人に云はれさせ給ひけれど、是れに後の世の事の妨げられればこそは有らめ、此世は然ばれとてぞ思召し愛護かせ給ひける。然れど女院崩せさせ給ひにしかば、如何が物し給はんずらん。男君は二所ながら迎へさせ給へり。斯くて中宮には、此度は女宮にておはします。珍しき様におはしませば、いと嬉しと殿の上も思召す。男にて打續きおはしますもめでたし。また斯く樣樣にておはしますも、めでたくなん有りける。心苦しき方添ひて、美しういみじと思ひ申させ給へり。御乳母は宇治の大納言の女、頼國が女の腹におはしける、宰相の乳母と聞ゆ。また四條中納言

若う物し給ふ。弘徽殿にぞおはします。御五十日、百日など、云はん方無くめでたくて過ぎ行く。東宮、三の宮、御年の程よりは、物を愛くしう述給はせ、あさましく大人しくぞおはしましける。此若宮もいとめでたくおはしませば、殿の上、つと抱だき奉らせ給へり。上も片時立ち退かせ給はず、持て遊ばし奉らせ給ふ。御乳母二人、俊輔の兵衛佐の女、信濃守清實が女、周防守良綱が女、少將隆家が女など參れり。宮また尋常ならず成らせ給ひぬ。餘りなる事は、とも斯くも申さんに言葉足らずぞ有りける。好き人人も參り集まりて、華やかなること道理なり。九月廿四日に、左の大殿、大井河に紅葉御覽じにおはしますとて、殿上人、上達部參り集まり、殿も例ならず、尋常ならぬ狩の御衣奉らんと爲させ給ふ程に、關白殿御風の氣色おはしますと有れば、止まらせ給ひぬ。三四日ばかり有りて亡せさせ給ひぬれば、左の大殿、關白の宣旨蒙らせ給ひぬ。朱器臺盤など持て渡り、めでたき事限り無し。內の大殿に讓り奉らまほしく思しけめど、宇治の關白殿の讓り奉らせ給ひし御心を思召せば、如何でかは。また然りとも、內裏の御氣色などの然るべきにもあらず、故院の御時に、「內の大殿になん讓らせ給ふべかなる」など聞えし折にも、「宇治殿の聞かせ給はんが片腹痛き事」とぞ述給はせける。御心いと和らかに善くおはしましけり。一院いと鮮かに直し く人に從はせ給ふべき御心にもおはしまさざりしかば、關白殿も、え御心にも任せ給はずなど有りしかど、末に成るままには、御中らひ善くおはしまして、御心地の程も、つと侍はせ給ひ、立ち去らせ給ふ折は、尋ね申させ給ひける。然れば故院の御事を思へばとて、東宮をも、物へ渡らせ給ひ、參らせ給ひなど爲

に、朝日華やかに差し出でたらんやうに、若宮の御光さへ添ひて、殊更に鏡を見るとも斯くこそはと覚ゆ。雪も庭にいみじう降りたり。人の心の中に思ひける。承保二年正月二日、七日の夜に當りたれば、上達部、殿上人残り無く参り給へり。白き袖口、褄の重なり、頓たして押し出で渡したれば、袿は殊に知られぬ雪と見えたり。折しも積る雪、殊更のやうなり。今日は内裏の御產養にて、例の作法に事を添へ、いみじく殿の御馬御前に引き立て、禄賜はる程など、繪に書きたるやうに、をかしうめでたし。後一條院の御產養に紫式部の云ひ續けたる、同じ事なり。模倣び損ひに、ただなかなかなればなん。年頃位におはしますに、斯かる御中らひに男御子の生れさせ給へるは久しく無かりけるに、いとめでたし。五日は七日にて、色色著更へたり。やがて東三條へ渡らせ給ふ。紅梅の匂ひを著たり。内裏には心もとながらせ給ひて行幸あり。女房二人づつ色を替へたる匂ひを著たり。行幸の次に入らせ給ふ。儀式、有様、此度は況して今一際添ひて、響きて入らせ給ふ。何時しか入らせ給ひて、宮見奉らせ給ふ。夜甚う更けぬれば、[illegible]し奉らせ給ひて、具し奉らせ給ひて上らせ給ひぬる、猶猶いみじき御有様なり。御子生れ給ふとも、暫し何方にでもおはしましなん。また何方にても覚え宜しうてもおはしまさで、三つの事の差し合ひて、斯くしもおはしましけんこそ、あさましくめでたけれ。暫し待たれてもおはしまさで、二十にだに成らせ給はで、斯くしも讓はせ給ひけんこそ、また見せまほしき人ありて、口惜しくなど思ふ事も有るを。此方、彼方、祖母上、祖父殿など、またいと甚うも老い給はで物せさせ給ふ。右の大殿も上も長ひさせ給へる。治部卿の上などは、また

じう傅かれ過ぐさせ給へる人人も、雲烟にて上がらせ給ひぬる、猶いみじう哀れなる事なり。侍ふ人人泣き惑ふ樣限り無し。おはしまさざらん後も、「女房などの、其處の人とて、卑しき樣にて散り失する、いと心憂き事なり。此西の院に斯くながら在れ」と仰せられ置きて、變らず在るべき事どもなど爲置かせ給ひけり。此御堂の事は、關白殿の御子、院の小式部の内侍と云ひし人の腹に、木幡の僧正と聞えしが領り給ひしを、亡せ給ひにしかば、長谷の法印とて、同じ殿の御子領らせ給ふ。是れは嫡妻腹の御子なり。御忌の程なども、殿、籠り侍はせ給ひて、昔の御事思し出でつつ萎れさせ給ふ。女房は道理の御年の程とも覺えず、いみじう月日の變るに添へても、寄る方無く、なかなか里ならば在るべし、おはしまし所を見るに付けても、殿上人も亡くなりもて行く、大盤も塵積り、然るべき人人、一人二人寄り居つつ、哀れにいみじき氣色、晴明に成りゆく空の氣色にも、かき昏らしたるに、哀れなる事盡きせず。まことや、中宮は今暫しとのみ惜み留め奉らせ給へば、え退かで遣らせ給はで、程近く成りてぞ出でさせ給ひける。師走の五日ばかりより御氣色おはしませば、御裝飾更へ、御修法の御加持數知らず喧騷り合ひたり。伊豫守の家、下邊りなる所なり。狹くて、御修法の壇など向ひ邊りの小家ども取らせ給ふ。いみじう堪へ難げなる御氣色を、如何に如何にと誰もいみじう思召す程に、いと麗らかなる男御子にておはしませば、誰が御心の中も云はん方無し。殿、大納言殿などの御氣色、云へば更なり。内裏の待ち付け聞えさせ給ふ御心の程、思ひ遣るべし。然らぬだに有る御使、況して唯だ此殿の人にて、四五人も侍ふ。朔日の日の御裝飾・雪の山に入りたらん心地する

う侍させ給へば、三四日ばかりおはします。皇后宮「渡らせ給はん」と申させ給へば、「然らん折だに御對面あるべく思召せど、旅所におはしませば、猶くてはえ二所はおはしまさじ」と有れば、口惜しう思召す。十月十六日御葬送とて、世の中遣騒ぎ満ちたり。女御代には故民部卿殿の大納言をば兼大納言と聞ゆる、姫君に、内の大殿幼なくより子にし奉らせ給ふぞ立たせ給ひける。然らぬ折だに物の色、爲様、心殊なる事に、如何に況いて尋常ならずと思召せど、色はいと麗はしう關白殿定めさせ給ふ。「色色に勝る物無し」と仰せらる。目慣れて口惜しう思召せど、申させ給ふ儘なり。紅の打衣は[illegible]ありとて、山吹の打ちたる、黄なる上衣、龍膽の唐衣なり。薫物の香なん勝れたりける。「前前も所所よりなん侍ひし」とて申させ給へば、大女院、二條、關白殿などより、車二つ三つづつ奉らせ給ふべしと有りしを、大女院、終に十月三日崩せさせ給ひぬ。關白殿いと哀れに、「道理の御年の程なれど、又誰に物をも申し合せて過ぐさんずらん、何事も院に參りて申さんとこそ思ひしに、老の末に樣樣斯く打捨てられ奉りぬる事」と泣かせ給ふ。二條院、皇后宮など、心細く哀れに思し歎かせ給ふ。内裏よりは關白殿を御訪ひの事にて、「たゞ籠らせ給ひそ」と申させ給へど、「いみじき事ありとも、如何でか此度の御事を仕まつらでは有らん」とて籠らせ給ひて、御葬送の夜も歩ませ給ふ。いみじう哀れなり。少しおはしまし退きてぞ御車には奉りける。此殿は七十九におはしましけり。如何でか歩ませ給はん。院は八十七にて崩せさせ給ひぬるぞかし。悲しとても終の事なる、いと哀れなり。此殿のおはします折に、斯くて扱はれ奉らせ給へる、いとめでたし。年頃めでたくいみ

をば太皇大后宮。中宮の御有様を、大納言殿、殿の上など、如何に見奉らせ給ひけん。東三條曇り無く磨き装飾ひて、御髪上げて倚子の御座におはします程、猶云ふべき方無く、めでたくいみじ。女房三日が程、樣樣爲替へたり。例の髮上げ渡し、御饌參る作法など、猶いとめでたき事なり。内裏よりは、「疾く入らせ給へ」とのみ、聞きにくきまで申させ給ふ。御使夜晝分かず隙も無く、「昔も今も覺えおはすなど云はれ給ふ人人物し給ひしかど、いと斯かる類ひは又無かりき」とぞ、内裏の藏人も、世の人も申しける。東宮大夫の女御の物し給ふ前より響きて入らせ給ふをも、如何がは聞かせ給ひけん。御輿に奉りて、殿より初め奉りて、上達部、殿上人殘り無く響きて入らせ給ひぬれば、また此方にのみおはします。後冷泉院の式部の命婦と云ひし人の腹に、源大納言殿の御子とて、いと美くしかりける人、東北院に侍ひけり。容貌いとをかしげに、心ばへなどいと善かりけり。内裏に聞し召して、忍びて召しければ、夜晝參りけり。山里に住みければ、其れより宵、曉に參り退かでするもをかし。尋常ならず成りて男御子生みたりけれど、愼ましくや思すらん、内裏よりは絶えて御消息も無し。女院は心苦しう思召して、心殊に持て成させ給ふ。大納言殿は、「我が女ならましかば參らましや、何處なる者の子とは云ふならん」など述給はすると聞ゆるは眞にやあらん。大女院をば上東門院とぞ男などは申しける。また此頃おはします所に從ひて、東北院とも聞えさす。宇治殿此春亡せ給ひにしを思し歎かせ給ひし事疎かならず。御心地打延へ惱ませ給へば、女院渡らせ給へり。此院をば二條院とぞ聞えさせける。苦しげにおはしませば、いと哀れに思召す。夜もすがらいと苦し

院も四の宮下りさせ給ひにしかば、小一條院の侍ひける人を思召して、瓔珞女御と聞えし頃に、中將と云ひし
中宮に成り給へると、また女宮二人物し給ひける、一の宮居給ひぬ。いとめでたき事のみ多かる世なれ。后
立たせ給ふべけれど、險無き事を如何かと思召されて、后を院に渡し奉らんと思召す。左の大殿の女御殿
尋常ならずおはします。六月四日、后の宣旨下る。廿日大饗とて、人人然るべき事ども參りなど、いとめで
たし。十六日に太皇太后宮、女院に成らせ給ひぬ。年頃も一所、院に成らせ給ふべし。次第にては、皇太后
宮成らせ給ふべし。然らずば中宮こそは故院の后にもおはしまし、内裏の繼母にもおはしませば」など申
す人も有り。また「成らせ給はで如何おはせん」など申す人も有りけり。帝の御親ならぬは、また成らせ給はざ
りければ、珍らしき事に人申す。帝の御親ならで受領などは得させ給はじとて、賜はらせ給はず。仙洞は
后におはしまし同じ事なり。「例は帝の御女、后に立ちて、後に女帝に相給ふも無くやは有りける。況
して院分何とか無からん」と申し給ふ上達部もおはす。大女院は、「我が御院分を讓り申さん」と奏させさせ
給ふ。四條の宮を太皇太后宮と聞えさせ、次次上らせ給ふ、例の事なり。中宮大饗の有樣、いみじうめでた
し。左の大殿の萬づを捧てさせ給へば、飽かぬ事無く、めでたし。大饗の日の有樣、囃子、前大將て參り、
火焼屋、陣屋などの居る程を、いとめでたく、拜禮など思ひ遣るべし。まこと北宮の御親の中納言に、一院
の御時に、故民部卿の御子右衞門督と一度に大納言に成り給ひにき。院の左衞門督を引き越させ給ひて。
齋院の御事に御心置かせ給ひければなるべし。先帝の中宮をば皇后宮、殿の皇后宮は皇太后宮、皇太后宮

なり。高倉殿の上、一の宮なども、如何がは疎かには。八十餘年世の一の人にておはしましつる御蔭に隱れつる人人幾十かは、高きも短きも、釋迦佛の隱れ給へる折の有樣に劣らず、涙を流したり。山山寺寺の僧なども樣樣に弔らはせ給ふ。折に付けて、夏は涼しかるべき樣に、冬は風を防ぐべき御心掟、寂しき程思し量り問らはせ給ひし。心清き奥山の聖どもに百萬遍を滿てさせ問らはせ給へるを、如何でか世には有るべからんと忍び申す樣、哀れにいみじ。入道殿の六十餘年榮えさせ給ひて隱れさせ給ひしだに、如何がは人の忍び申しし。是れはたゞ今年八十三にぞ成らせ給ひける。いと然急がしく事繁くもおはしまさで、靜かに宇治の御堂におはしまして、御心の限り、木深き人をも思召し尋ねつつ問らはせ給ふ。人をも顧みさせ給ひつれば、忍び申す人の多かるも道理なり。何の數ならぬ下部、年頃仕うまつりける者どもの泣き惑ひたる樣、道理にいみじ。土器造りなど云ふ者さへ、年頃幾年か參り仕うまつりて、「斯くて今は何地とてかは參り候はんずる」とて、聲も惜まず泣くもいと哀れなり。御四十九日の事どもなど、いとめでたく爲させ給ふ。今はとて京へ歸らせ給ふ御心の中、其日よりも顯に、いみじう哀れに悲しく思召さる。おはしまし所、御調度など、はかなく取り使はせ給ひし御扇、疊紙まで落ち散りたるを御覽ずるも、いみじう哀れなり。出でさせ給ひても、宇治殿へと思召す事の無き、あさましく思召さる。僧を問らはせ給ふを、御形見に思召したり。斯くて世の中の色改まりなどして、齋宮には小一條院の式部卿の宮、故侍從宰相の皇太后宮の女房に生ませ給ひける、居させ給ひぬ。宇治大納言の御子の安藝守の女にて、母君も中らひ貴やかなる人にて、齋

り。過ぎにし御事も同じ程にのみおはしませば、故院の大貳の三位の許に、少將の內侍

又も猶殘り有りけり五月雨に降り「濁り」盡して淚と思ふに

返し、

五月雨は昔も今も淚川同じ流れと水增さりけり

木幡權僧正、源中納言資綱の許に斯くなん。

墨染に衣は成りぬ慰むる方無きものは心「續後撰和歌集ニハ淚トアリ」なりけり

返し、中納言、

淚して衣を染むるものならば藤の袂に劣らざらまし

御忌に籠らせ給ひて、月の明き夜、仁和寺の宮、

山の端に入りぬと思ひし月影もまた出でけるは何づら我君

布引の瀧

宇治殿重く惱み渡らせ給へば、何時と無き御事にて過ぎつるを、終に二月二日に亡せさせ給ひぬ。左の大殿、皇太后宮など思召し歎かせ給ふ樣、疎かならず。右の大殿も年頃の御恩の程思召すに、劣らぬ御心の中

る。天の河と云ふ所におはしまし着きぬ。廿七日、今日京へ上らせ給ふとて、人人思ひ思ひに裝束更へたり。八幡の程におはしまし着きぬ。松の緑も常よりも殊に見え、霞の間よりこぼれたる花の匂ひも、春駒の澤に求食るも、をかしく見ゆる程に、淀におはしまし着きぬ。此程に左の大臣御迎に參り給へり。いと重重しく、淸げにめでたき御有樣なり。人の摸ねぶを書き作れる〔不〕附くれば一僻言、虛言ならんかし。歸らせ給ひても、日頃の有樣戀しう思召す。御心地、ともすれば起り起り惱させ給ふ。四月に成りては、いと重く成らせ給ひぬ。如何に如何にと誰も思し歎かせ給ふ。「御堂に渡らせ給ひて、とも斯くも成らん」と仰せらるれど、御車にもえ奉るまじければ、今日今日と延べさせ給ふ程に、四月廿九日御髮下ろさせ給ふと喧騷るに、中宮も「何か一日にても、常の樣にて在るべき」とて、尼に成らせ給ひぬ。斯くと聞かせ給ひて、女院にもいと哀れなりと思召したり。夢の心地のみして、いみじき御有樣なり。終に五月七日崩せさせ給ひぬ。宮宮、女院の思召し惑はせ給ふ樣限り無し。物覺えさせ給はぬ御心にも、其日やがて一品の宮、女御殿、尼に成らせ給ひぬ。後に戒なども受けさせ給ひける。御姉妹の前の齋宮も成らせ給ふ。あさましく哀れなりとも疎かなり。若くめでたき御髮どもを削がせ給ひぬ。如何にめでたくおはしますらん。容姿變へつれば四五十の人だに若くこそ見ゆれ、況して如何におはしましけん。御忌の程に堀河の院に行ひて物せさせ給ふも哀れなり。此院の御心地の程には、百壇の御修法や何やと殘る事無かりしかど、限り有りける御事にや。例の內裏邊りにも墨染にて、榮榮しき事も無し。五月雨はいとど淚催す緣な

遥かなる君が御幸は住吉の松に花さく度とこそ見れ　一品宮女房

行く水に長柄の橋は通ひけり人は名にのみ聞き渡りつつ

三島江の岸に隙無き澪縁君が御幸を待つ「松」にぞ有りける

橋柱其れとばかりを標にて昔ながらの「長柄」の跡を見るかな

三島江の蘆間に寄する白浪の立ち歸るべき心地こそ爲ね

君が代の久しかるべき例にや神も植ゑけん住吉の松

尋ぬれど昔ながらの「長柄」の橋も無し跡をぞ其れと聞き渡りける

打寄する難波の浦の浪よりも心ぞ掛かる蘆の若葉に

天降る神の驗に君に皆齢は讓れ住吉の松

跡ばかり見えしなりけり是れや然は長柄の橋の邊り「渡り」なるらん

立ち返り見るとも飽かじ三島江の蘆間を分くる水の白浪

待つ程は久しかりしを住吉の見ては程無く歸りぬるかな

昔にのみ聞き渡りしを君が代の長柄の橋を見るぞ嬉しき

數ゝ、遣る方こそ無けれ住吉の松の千年は一木ならねば

廿六日雨甚く降れど、然てのみやはとて御船出でぬ。上達部の船に殿上人乘り交りて、終日に遊びつつ上る

うちはへて見るとも飽かじ津の國の難波の浦の春の曙　　源中將季宗朝臣

有らじかし斯かる御幸は住吉の松より前の人に問はばや　　丹後守經成

飽かざりし都の花のいろよりも心ぞ留まる住吉の松　　左少辨師賢

住吉の千代に一度遇ひぬれば松の甲斐ある旅にも有るかな　　右少辨匡房

今はとて今日歸るさを急げども心は留まる旅にも有るかな　　兵部少輔通俊

萬づ代の君が御幸に行く末の年をば讓る住吉の松　　左兵衞佐顯實

色殊に今日は見えけり住の江の松の下枝に掛かる白浪　　因幡守忠季

住吉の神の御垣も世世を經て君が御幸を待つ「一松」にや有るらん　　左衞門大夫資清

住吉の松の綠も此春は君が御幸の色殊に見ゆ　　刑部丞俊範

二方に斯かる御幸を住吉の先づ「一松」珍らしく神も見るらん　　左近將監爲房

千年經ん君が御幸の例には霞たなびく住吉の松　　左衞門尉俊宗

住吉の松に絕えせぬ風の音に岸打つ浪の聲通ふなり　　女房

君が代は風も心を寄せつれば枝長閑かなる住吉の松

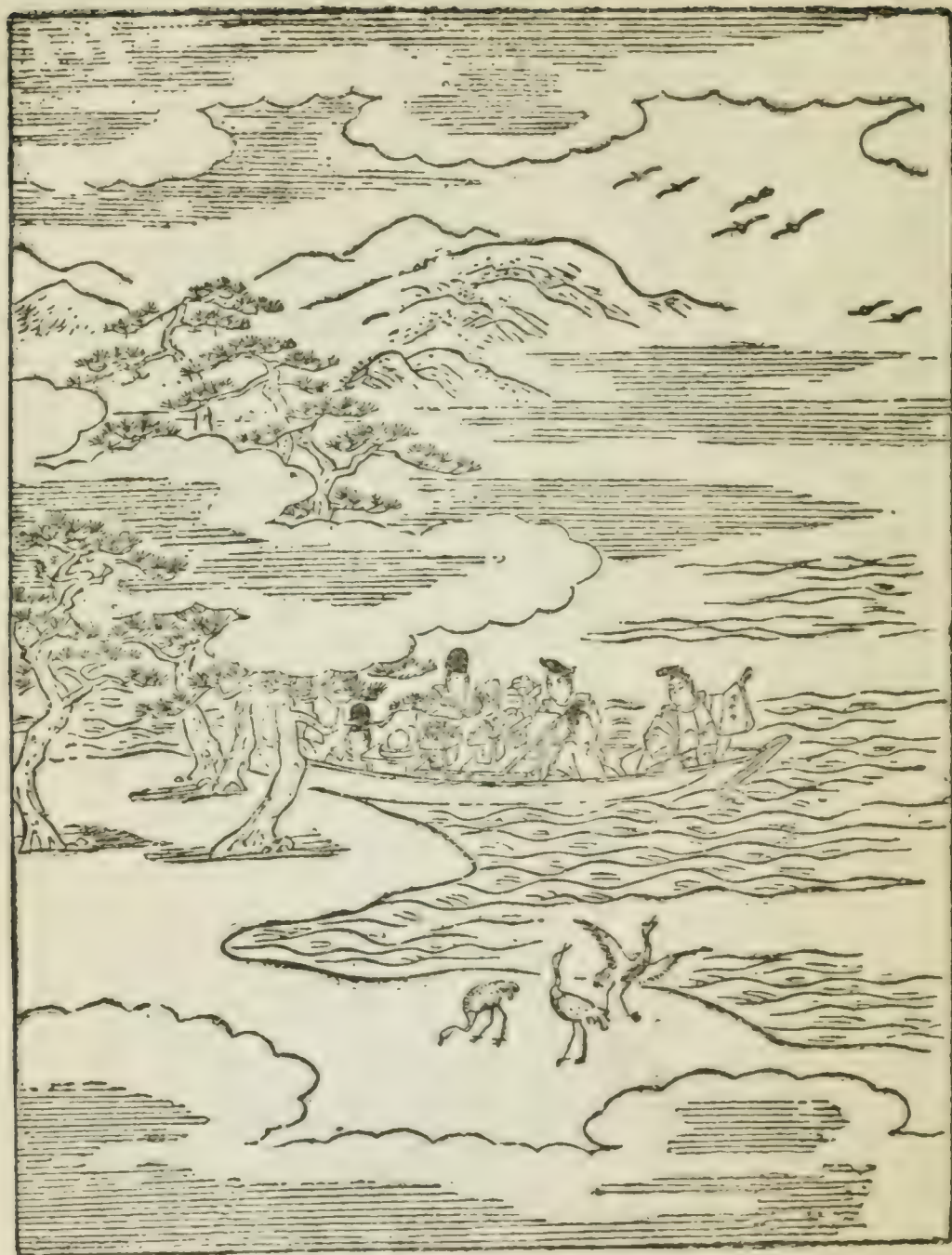
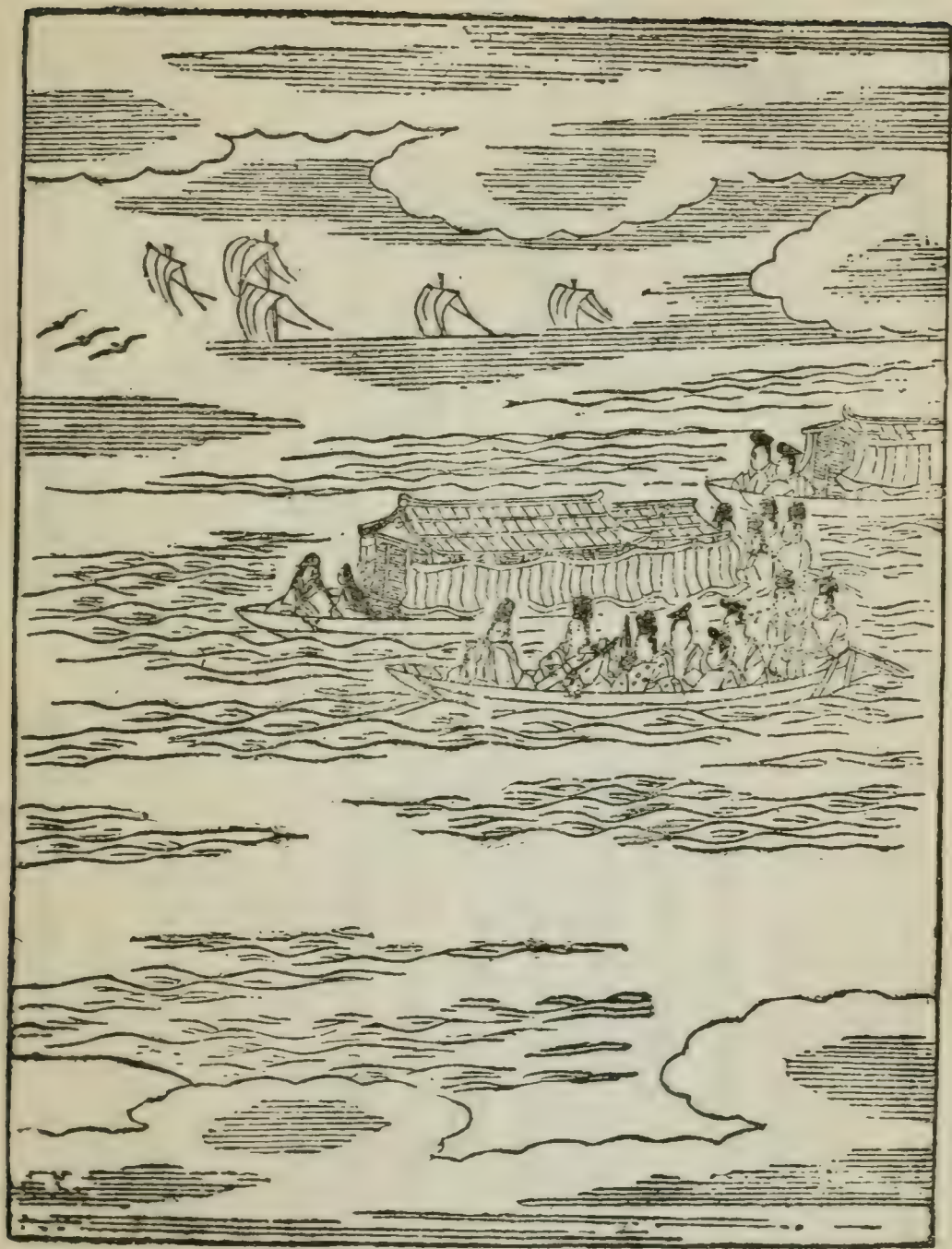
三島江の水に心の澄みぬれば影を宿して長閑かにぞ見る

其れながら其れとも見えぬ橋柱久しき跡の知るべなりけり

下り上る御幸を神も嬉しとや千年を君に奉るらん
年を經て多くの御幸見つれども斯く珍らしき度は無かりき
音に聞く長柄の橋は無かりけり千鳥ばかりぞ鳴き渡りける
沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白波
類ひ無き君が御幸の嬉しさに千年を讓れ住吉の松
いにしへは今日の御幸の爲めとにや天降りけん住吉の神
住吉の神の驗に往時の松の千年は君に讓れり
住吉の神に問はばや往時も斯かる御幸は有らじとぞ思ふ
住吉の松に千年を君が代の嬉しさのみぞ三「一見」島江の岸
いにしへも斯かる御幸は有りしや傳し夢にも語れ住吉の神
此度の祈りは容に知りぬらん天降りますす住吉の神
神代より生ひ添ふ松は住吉の今日の御幸を待てこそ知れ
難波江に心留まりて蘆の葉の裏返［歸］るべき心地こそ爲ね
若葉さす蘆の汀に浪寄るは此や三島江の邊りなるらん
住吉の神の驗に君が代は松の十返り生ひ更るまで

關白殿
春宮大夫能長
左兵衛督經任
左大辨經信
宰相中將隆綱
右大辨伊房
右兵衛督實季
前丹後守公基朝臣
備中守信宗朝臣
内藏頭經平朝臣
左中辨實政朝臣
右馬頭資宗朝臣
四位少將家賢朝臣
民部權大輔政長朝臣
右京大夫道家朝臣

一つ殘れり。「今は我身を二」と云ひたるに、昔も斯く舊りて有りけると思ふも哀れなり。中津河と云ふ所におはしましぬ。海の色も空の綠に見え紛ひてをかし。遠き船の帆上げたるなど云ひ知らず見ゆ。此程に攝津守、黃櫨の折櫃、繪など書きたるに菓子參らせたり。日やうやう暮れて、汀の鶴の、霞の絕間より見え亘り、河浪の音も、鶴の聲も、樣樣に心動かし、篝火の影も水底隱れ無く、面白きながら物心細し。鶯の聲も、歸る雁の響も、取り集め、殊更のやうなる旅の空なり。廿三日、日打下りて、霞棚引き亘りたる程に、御車ども方方の御船に寄せて、色色樣樣裝束きたる者ども立ち休らふ。先づ住吉に參らせ給ふ。關白殿、紅の出だし袿に柳の直衣奉りたりしこそ、いとをかしく、「此度の思ひ出でなれ」と人申しけり。況して他人の裝束云ふ方無し。御祓有りて、其後御社に參らせ給ひて、御音樂果てて歸らせ給ふ。女院の女房、白きどもに濃き打ちたる、端麗はしき物の、いと淸げに見ゆ。一品の宮のには萌葱どもに蘇芳の打ちたる。院のは色色に濃き打ちたる。日の暮るる程に天王寺に參らせ給ふ。雨甚く降りて物の榮も無し。御車寄せて御堂に渡らせ給ふ。此程に藏人少將公實、內裏の御使にて參れり。廿四日には御堂の事能く御覽じ、龜井など御覽ず。廿五日の辰の刻ばかりにぞ御船出だす。午の刻に左衞門督、權佐匡房參れり。色色樣樣に裝束きたる中に、赤き袍に事事しくて參りたる、いと珍らしく見ゆ。左中辨實政、題奉る。御幣島と云ふ所御覽ず。實政を御船に召し上げて、歌ども講ぜさせ給ふ。

住吉の神も哀れと思ふらん空しき船を棹して來つれば　御製

に一院、其後に一品の宮おはします。女房車二つづつ、女院のは櫻どもに蘇芳の打ちたる、一院のは櫻に山吹、一品の宮のは山吹の匂ひ、一の車は濃く、二の車は淡く匂ひたり。おはします道の程など、いとをかし。八幡に詣でさせ給ひて、暫しばかり在りて、内裏の御使、頭中將師忠の君參りたり。御返し受け給ひて歸り參りぬ。一品の宮、上の社に上らせ給ふべき由申させ給へば、舞人具して上らせ給ふ。石清水の程にて御祓あり。舞人に物など被けさせ給ひて歸させ給ひつ。四位の少將家賢、侍從道良、左兵衞佐顯實などを、御方々の御供にて侍ふべきにて、留めさせ給ふ。廿一日、今日は皆狩裝束にて、烏帽子姿ども、例ならぬ御心地にをかしく御覽ず。上達部にも皆狩裝束にて侍ひ給ふ。橋本の津と云ふ所に下らせ給ひて御覽ずれば、國國の船どもも、御船どもも、日も遙かに寄せ渡したり。皆御船どもに奉りぬ。御船の有樣は、來し方、行く來、有り難げに儀盡したり。讀みつつ人人遞り遞りに仕まつれる樣、年頃何事にも制ありつるを、此度ぞ殘る無く儀盡したりける。女房の衣は綺五つなり。上達部或るは御船にも侍ひ給ふ。上達部の船にも乘り給へり。殿上人は殿上の船に乘りて奏樂して下る。廿二日の辰の刻ばかりに御船出だして下らせ給ふ。程に、江口の遊女、二船ばかり參り合ひたり。祿などをぞ賜はせける。物などは脫がせ給はず。經信の左大將琵琶、權中將季宗笛、民部權大輔政長も笛、師賢の辨歌唄ふ。笛の音も、琵琶の音も、瀬瀬の河浪に紛ひて、いみじくをかし。「此處は何處ぞ」と問はせ給ふに、東宮大夫ぞ傳へ問ひ給ふ。「是れは長柄となん申す」と云ふ程に、「其橋は有りや」と尋ねさせ給へば、「候ふ」由申す。御船留めて御覽ずれば、舊き橋の柱唯だ

年官、年爵停まる」など、世の人は申すめり。帝は、何時しか下り居させ給ひなんとのみ思召して、此四月にも大極殿の修理など爲させ給ふに、「新しく造らせ給ひて、初めに世の變る氣色の有らんは便無かるべしと思召して」などぞ世の人申しし。眞にや、此師走の八日下りさせ給ふ。此近く成りては、重く煩はせ給ひて、下りさせ給ふに、いと哀れなり。「相も思はぬ」など弘徽殿の壁に、伊勢が書き付けけんなど思ひ出でられて、何事にも目のみ留まる。下りさせ給ひて、弘徽殿におはしまして、十六日にこそ「二字ぞ力」關白殿のおはします二條殿に出でさせ給ひぬる。東宮に二の宮居させ給ひぬ。女御は三宮の位にて、年官年爵得させ給ふ程など、いとめでたし。又も尋常ならず成らせ給へり。關白殿を御覽ずるにも、中宮、一品の宮、哀れに思召す。御兒生ひの初めのおはしまし所となん。哀れなり。上はわざとにはおはしまさねど、御心地惱ましげに、水など聞し召す。東宮も具し奉らせ給へり。梅壺の女御、又いと美くしうめでたき男御子生み奉らせ給へり。盡きせずいみじき御有樣なり。院の例ならずおはしませば、いと華やかなる事は無し。公基の丹後守の六條の家、院に參らせたる、御方違に晝渡らせ給ふ。上達部、殿上人、わざとの御物詣のやうに多く仕まつれり。めでたし。物見車などいと多かり。御心地はいと爽かにおはします折もおはします。梅壺の女御も六條に參らせ給へり。斯くて二月廿日、天王寺に詣でさせ給ふ。此院をば一院とぞ人人申しける。後三條院とも申すめり。女院も一品の宮も詣でさせ給ふ。然れど上達部、殿上人、多くも參らせさせ給はず。睦まじく思召す人人、然ては音樂の方の人人をぞ率ておはしましける。先づ女院の御車、次

く愛しきものに聞えさせ給ひて、抱だき持ちておはします。御姉妹の姫君達今四五人物し給ふも、參り給ひつつ、宮仕には有らねど侍ひ給ふ。一品の宮も見えさせ給ふ。故別當の御子は頭中將とて一人ぞ物し給ふ。一品の宮には入り立たねど親しく物し給ふ。梅壺の御兄人は中將に成り給ひぬ。容貌いと淸げに、物物しき樣し給へり。笛いとをかしく吹き傳へ給へり。齋宮には當代の女二の宮居させ給ひつる、九月に下らせ給ふ。哀れなる事ども多かり。大極殿にて別れの御櫛などの程、いと哀れなり。御髮上げさせ給ひて、いと神神しく爲立てておはします。またいと爽かにて、いとをかしげにおはします。此三年ばかり見奉らせ給はざりつるをだに、覺束なくあかず思ひ奉らせ給ひつるを、今日より後、又は何時かはと思召す。いみじく哀れなり。顧みにも膝行り出でさせ給はで、いみじく歎かせ給ふを、見奉らせ給ひけん御心の中も、如何ばかり思召しけん。雨甚う降りて、何の樂も無く、內裏よりも、一品の宮よりも、女房一車づつ奉らせ給ふ。歸らせ給ひても、上は齋宮の御事を哀れに思召す。梅壺の女御、此度は流產し奉らせ給ひてければ、口惜しき事を誰も思し歎けど、二の宮おはしませば、何かは切めては思召さん。御子數多生れさせ給はば、廿五に成らせ給はん年危かるべしと申したりけれど、平かに御因ら物せさせ給へば、いと好し。今の齋院も煩はせ給ひて下りさせ給ひぬれば、女院におはしましつる円の宮居させ給ひぬ。高倉殿の宮、齋院に居させ給ふべしなど云ふ事ありて、今更にとも思召しけん、尼に成らせ給ふとて、師走の八日、戒受けさせ給ふと喧譁れど、人は「成らせ給はぬ」とも申すめるは何れか眞ならん。「內裏にはいみじくむつからせ給ひて、

の宮の御母の女御は梅壺におはします。東宮は例の梨壺か、その北の屋に。春宮大夫の女御、宣耀殿におはします。左の大殿の女御麗景殿など、樣樣に内裏邊りいとをかし。中宮は登花殿に、五節殿掛けておはしましける。やんごとなく心苦しく思ひ申させ給へり。御容貌、御心、いとめでたくおはします。承香殿の女御も然る御美貌の族に物せさせ給へば、いとめでたくおはしけり。弘徽殿、登花殿の細殿には、萩、女郎花の几帳、色色に押し出だされたるが、上の御局より長長と見渡されたる、繪に書きたる心地して、いとをかし。梅壺の女御、また尋常ならず成り給ひぬ。めでたき有樣を聞えぬ人無し。内裏には年頃の御願とて、祇園、比叡などに行幸あり。其年の冬、祇園燒けぬ。あさましく思ひ掛けぬ事なりや。地震など、おどろおどろしく振りて、煩かしき頃ほひなり。若宮の御乳女の侍ふは然るものにて、やんごとなからん人をがなと思召して召し出づ。少納言實宗が妻、すけしげが妻、遠江守家範が妻、丹後守公基朝臣の女、女御殿の御伯父の忠俊の刑部權大輔の妻も召し出でたり。常陸前司基房が女、閑院の大將が孫、前前も常人の妻などは參りき。上達部の女も宮仕などして侍ひ給ふは、やがて仕まつり給ふ。斯く君達の妻などの參る事は又無かりつる事なり。末に成るままには、斯くのみ有る世なめり。書き付けたるは華やかならねば、何どてかはと見ゆれど、皆君達、殿上人にて有りしなり。後一條院の幼なくおはしましけるに、丹波中將の妻を入道殿催促みて召しけれど、然りとて出だし立てては有らじとて、子どもら一條院に皆渡して去りければ、參らで止みにけり。此世には斯く末勝りにぞ。女御殿の御有樣のみぞ猶猶めでたき。一品の宮も此宮をいみじ

有樣思ひ遣られて、めでたき御勢なれ。然ても御簾、御几帳なども、何時の程にか爲合へられたりけん。宇治殿の人ならぬ人、何か然ながら靡き仕まつれる。只今は二の人にておはしませど、關白にておはしましし宇治殿にも劣り申させ給はず。左兵衞督の上は、宇治大納言の御子の隆俊の中納言とて、皇太后宮大夫に物し給ひ、才あり、容貌清げに、好き上達部にて物し給ふ御女なり。參らせ給ふ儀式、有樣、いみじくめでたし。大殿の上も添ひ奉らせ給へり。然らざらんにてだに殘る人無く參り混み、疎かならず響きて參り給ふを、東宮大夫の御女、如何に聞き給ふらん、傍ら苦しげなり。晝渡らせ給ふ。内の大殿御供に侍はせ給ふ。然らぬ上達部殘る無し。主人方に左右の大殿を初め奉りて、縁戚の上達部、殿上人多く物し給ふ。左衞門督、源中納言、宰相中將など數ふべきにもあらず。此方彼方の御族、いみじう多く物し給ふ。御簾引き上げて入れ奉らせ給ふ程、女房ども、扇差し隱して、えならで居並みたり。今日の衣の色などは、宇治殿、宇治大納言など定め給ひて、事麗はしく清げに爲させ給へり。女房などいと多からず、殿の御掟のまゝなり。然るべき人人參りたり。本も女房いと多かる殿に、參り添ひて多かれば、留まる人ぞ多かりける。女御殿は十四五ばかりにて、いと若く美くしげにおはしましけり。御覺え、樣惡しく、まだしきより著き御氣色なり。東宮大夫殿の女御、三十ばかりにぞ物し給ひける。いと貴に艶めかしく、恥かしげたる御有樣なり。心解けず、物思し知り、心深げに物せさせ給ふ。御年云ひ立つるには長びたるやうなれど、「見るは老い給ふべき事かは」と見ゆる所無く、をかしき御人樣なり。大夫殿、母上おはせぬを、我れ獨り心苦しく

給ひぬれば、はかなき事も物憂しげなる御氣色ならば、内裏にも煩はしく、況して參る人などは有るべきならねど、然樣なる御氣色も無くて、上達部、殿上人など參り、いと華やかにてこそは有りけれ。然りとても道理の御事こそ有らめ、御心も斯樣にはえおはしまさざらまし。後冷泉院は何事も唯だ殿に任せ申させ給へりき。後の世にこそ宇治にも籠り居させ給ひて、「よも知らじ、物なども奏せじ」とて、世を捨てたるやうにておはしまししか。然れど除目あらんとては、先づ何事も申させ給ふ。奏せさせ給はねど、後の殿の人に、受領にても、常の司にても、善き所は成させ給ひき。同じ關白と申せど、二十より八十まで領させ給ふ。世の人難き申し怖ぢ聞えさせたる、道理なり。此内裏の御心いと直よかに、世の中の亂れたらん事を直させ給はんと思召し、制なども嚴しく、末の世の帝には餘りてめでたくおはしますと申しけり。人に從はせ給ふべくもおはしまさず、御才などいみじくおはします。後朱雀院を直よかにおはしますと思ひ申ししに、是れは此上無く勝り奉らせ給へり。世の人怖ぢ申したる、道理なり。大方の御持て成し、いと氣高くおはしましけり。女院の申させ給ふ事をも、然るまじき事をば更に聞かせ給はず。又も世にはめでたき事の有るべきにや。今の右の大殿の二郎、中納言にて左兵衞にて物し給ふ。此左の大殿の上の兄弟なり。其御姫君を左の大殿の上、子にし奉らせ給ひて、東宮に參らせ給ふべしと聞えつるを、俄かに此望日の日、内裏より「疾く參らせ給へ」と有りければ、この三月九日參らせ給ふ。唯だ十日にだに足らぬ程に、年頃人の思ひ準備がんにも勝りて、御裝飾までも、女房の裝束にても、少し飽かぬ事無く、めでたくて參らせ給ふこそ、常の御

ゝ、憚らせ給ひ頻はしかるべき事もおはしまさぬ程にしも、斯くおはします。東宮より外に御子もおはしまさずなどある程にて、誰も誰も疎かに思ひ申させ給ふべきならねど、後冷泉院に斯樣の事おはしまさましかば、また御子おはしまさずとも、公然りて斯くは持て成させ給はざらまし。「人知れず然る人おはしますなり」などばかりこそは、聞かせ給はましか。宇治の關白殿に憚り申させ給はで有りなましや。御劍遣はし、上達部、殿上人、參り集ひなどはえ爲給はざらまし。御乳母なども、斯く競ひ參る事は無からまし。なかなか東宮には、殿の許して立てなどはしもや爲奉らせ給はまし。斯く心のまゝに世を響かしては、え持て成させ給はざらまし。中宮、女御殿などおはしませど、女の御有樣は限り有れば、いみじく思召せども、色に出でさせ給ふべきにあらず。常人のやうに、然らぬまでも、煩かしくおはします。後冷泉院の御時に、大宮などこそは同じ事なれど、幼なくより女院も一つに思し奉らせ給ひ、やんごとなく頻はしくも思ひ申させ給ふべかりしかど、其れだに言に出でて申させ給ふこと無かりき。況して此世は唯だ御心なり。宇治殿の故中宮を參らせ奉らせ給へりしに、女院はやがて入らせ給はで止ませ給ひにき。人の御持て成しにや、我が御心と入らせ給はざりしにや。入道殿は我が御女參らせ奉らせ給ひてしかば、また他人は差し出ださせ奉らせ給はざりき。此殿は四條の宮奉らせ給へりしかど、中宮の御事をば所置き參らさせ給ひて、物を御覽ずるにも、何事にも、先づあの御方の事をと思し掟てさせ給へり。女院の思召さん事も有り、「人樣樣に參らせ給ふト云フ句アレド、實入ナラン」故院の御事も有れば、然こそは有るべき事なれど、我が御方樣に成らせ

の、珍らかにあさましとも疎かなり。源中納言の四位少將家實、御劔持て參るを見付けたる心地ども、「然るべきならで、唯だ打見る人もめでたしとは、是れをこそ云はめ、斯かる事を又こそ見ざりつれ」と、あさましくめでたく見給ひけり。御湯殿の儀式、有樣など、藏人、五位、好き限り二十人、弦打に奉らせ給ふ。云へば疎かなり。御乳母には小侍從の內侍とて侍ふを奉らせ給へり。上野守維國が女、下野守惟經が女、藏人より位階得たる式部大輔惟輔が女なり。三月九日入らせ給ふ。儀式、有樣、いとめでたし。車五つ六つ引き續けて、いと心殊なり。女御に成りて入らせ給ふ。「一更衣に」など云ひしをだに、世にめでたく珍らしき事に思ひ申ししを、氣鮮明にめでたくいみじく、世に例無き事に、世の人此頃の言草に爲たり。然らぬ事だに聞きにくき物言ひは、況して道理なり。斯く持て成させ給ふも、人の御程、御位こそ淺く物し給ひしか、侍從宰相、此齋院の御兄弟、小一條院の御子、堀河の右大臣の御姫君の御腹、何どてか惡ろからんと思召すなるべし。東宮より外に男宮おはしまさねば、心殊に若宮を思ひ申させ給へば、此女御殿を重々しく持て成し聞え給ふも道理なり。御兄弟は兵衞佐、少將などにて物せさせ給ふ。入らせ給ひぬれば、何時しか上へ上らせ給ひて、資房の宰相の女大納言の君、抱き奉らせ給ひて、侍從の內侍御劔執りて參れり。抱き取らせ給ひて、まだいと物げ無き御程を愛くしみ奉らせ給ふ程、哀れにめでたし。何時しかと汚たきわざを爲かけ奉らせ給へれば、御衣奉り更ふる程もめでたし。少し打泣かせ給へば返し渡し奉らせ給ふに、やがて續きて渡らせ給ひぬ。聞えさせ給ふ程の事、思ひ遣るべし。御幸ひのめでたかるべければ、制し申す人も無

聞ろげの人は參り給はぬものに習ひたるに、いとあさましきなり。入道殿に后、帝はおはしますものと思ふに、此關白殿、右の大殿だに大臣にてこそ參らせさせ給ひしか。昔に復りて、斯く人の宿世も定め有るべき事かはとなるべし。神事の隙には忍びて參らせ給ふ。心使ひ隙も無し。御修法、御讀經など爲させ給ふ程、いとめでたし。母方の伯父、東宮の權大夫、前の少將と云ひしは、刑部權大輔、また何の權守とか云ひても有り。阿闍梨などにても親しく仕へ出で入り爲給ふも、女御の愛護など爲たるも目易し。宮より萬づに何事も爲させ給ふ。然るべき人人を、番に宿直に指しつつ參らせさせ給ふ。一品の宮に參りと參る人は、宮の仰事にて參るべく仰せらる。内裏の思召し寄らぬ事無く爲させ給ふに、宮にも爲させ給ふなるべし。何れか疎かに思ひ聞えさせ給ふと申しながら、此内裏の、一品の宮思ひ申させ給へる御有樣、世の常ならず。然れば此宮に參り仕うまつらぬ人無し。其れを彼の宿直にも爲させ給ふなるべし。母上の御兄弟の姫君達も皆おはして、如何に如何にと、嬉しきものの恐ろしく思す。其程に成りて甚く惱み給へば、殿上人、上達部、殘り無く參り、内裏の御使、宮の御使の隙も無く參り交ひたり。験ありと聞かせ給ふ僧をば召して遣はす。其邊は四五町は路も去り敢へず、一の人の御女の后宮の生ませ給はんも斯くこそは有らめ、思ひしより過ぎたる御有樣なり。四五日冷然く明け暮れつつ、いとあさましく、如何に如何にと、内裏にも宮にも思召す。六日と云ふに、いと淸らかなる男にておはしませば、然るべき人人、置き所無く思さる。内裏の御使、宮の御使、「我れ先づ奏せん、奏せん」と急ぎ參る。斯ばかり年頃何方にも離かりつる御事

然も儲させ給はず。東宮も御心地惡しうおはしましければ、其程の御事ども聞きにくう煩はしくて、え作らさりけるなめりとぞ、人申しし。東宮とは、後三條院の御事なり。

松の下枝

一品の宮に參らせ給ひし侍從宰相の御女、內裏思召すと云ふ事、世に聞えて、唯だ其方になんおはしますなど云ふ程に、尋常ならず成らせ給へり。大方も宮仕樣にもあらず持て愛護き聞えさせ給ひて、唯だ宮の御同じ事にて、御藥など參らする事も、姬君の御樣とて、女房取りて參らするに、況して斯くさへ物せさせ給へば、いと心殊に持て成させ給ふ。本より帝の御料に成り給ふべき宿曜物し給ふ。御夢にも業の翼立ちてなん見え給ひけるなど聞ゆるを、「猶然こそ人は物は云へ」と云ひしを、「實に只今にては逢ひぬべきにや」と、人人は思ひ云ふめり。七月に尾張前司經平と云ふ人の家に出でさせ給ふ。「此度罷り參らせ給はんには、更衣などにてなんおはすべき」と云ひ傳ふる。出で給ふ夜は曉までおはしまし、御供の人などの立ち休らふも昔物語の心地す。然べき離きじき殿上人、御送りすべき宣旨ありて、いとめでたし。殿ばらなど、「猶女子こそ持つべきものは有れ」など愛で給ふ。此北の方も、良賴の中納言の女に物し給へる、中らひいと貴やかに、昔物語の心地す。御息所、更衣などに、皆中將、少將の女、受領のも皆參りけるを、此近き世には、

片ばかり敷く程にて、御簾懸り掛けて、唐綾の小紋の壁代、繪など書きて、掛け廻らせ給へり。中宮の上の御局は院のおはします西なり。例の藤壺の上の御局なり。渡らせ給ひて、中の戸開けておはします。今姫宮とも申しつべく、若くをかしげに、華々とめでたく、花を折りたるやうにておはします。「あな、忝な、此上におはしませ」と申させ給へど、いと狹き程なれば猶下におはします。東の方より打渡らせ給ひて、長押に押し掛からせ給ひておはします。左右に、帝、后をしも居ゑ奉らせ給ひておはします院の御有樣こそ、今始めぬ事なれど、猶いとめでたけれ。此方、彼方、猶いとめでたき御有樣を見奉らせ給ひて、如何が疎かに思召されん。此方、彼方の女房、折に付けて、をかしく裝束きたり。御前の水涼しげなるに御簾掛けたり。瞿麥、花橘など植ゑさせ給へり。月の入るを見て、中宮の女房、

　出で嘗さる泉の水に倣はなん入り方に成る夏の夜の月

斯くて過ぎさせ給ふ。中宮の造らせ給ひける御佛出でおはしましたれば、二條殿に出でさせ給ひて供養せさせ給ふ。白檀の御佛三尺ばかりにて、いと美くしうおはします。阿彌陀の三尊なり。是れも御八講に行はせ給ふ。女房、龍膽、菊、紅葉なり。日毎に更へつつ、例の若き人は劣らじと競み裝束きたれど、同じ事のやうなれば止めつ。次でに暫し里におはします。春止まらせ給ひにし宇治の行幸せさせ給ふ。十月九日なり。めでたしなども世の常なり。云ふにも疎かなれば、物損ひにもやとて、世の變る程の事どもも無く、俄かに宇治の人思召すことのみ出で來ることそ怪しけれ。後冷泉院の末の世には、宇治殿入り居させ給ひて、世の沙

して結び、玉を貫きたるなど三つ有りければ、源中納言隆綱、宮の亮成基の弁、民部卿の中将とぞ持給へる。東宮のは黄金の水瓶、鼎、やがて資仲の弁、女御殿のは錦の鎖、藏人の少将持たり。殿の一の宮は、香合の箱に室三つ据ゑて、黄金の葉を挿したり。忠俊の前少将持たり。前斎院のは、圓に水瓶、沓黄金たり。少納言資宗持ちて侍る。開く度毎に、斯く云ひ立つるも如何にぞや有れど、また然云はでは甲斐無き心地すればなり。絵などは目慣れたりとて、唐菓の作法説き給はでやは有るとてなん。打續き續る程に、尊さも忘れて、をかしくめでたくなん。左の大臣、右の大臣、内の大臣など、檜扇に、團扇、錢の大きなるなど持たせ給へりし。上達部は香爐を近葉の枝に附け給へり。殿上人は分籍なり。源大納言殿は今は内の大臣と聞えさす。其の御子の新中納言こそ梅の枝に猶附けて持たせ給へりしか。御几帳より出され給へれど、在りしやうに御簾の中には入り給はず。藏人、藏所の水取りなどして、南面には舞楽例の如面白くめでたし。五日が高講いと尊し。斯くめでたき事を世には有りけりと見ゆ。斯くて事果て、夜更けて皆歸らせ給ふ。上達部、殿上人、有るべき限り、鼓に附き給へる火影もをかしくめでたし。女房は對、渡殿に伴ひつつ参る。此頃は其れより外の事無くて過ぎ行く。更衣、五節、臨時祭など過ぎて、年も廻りぬれば、例の作法にて過ぎ行く。宇治殿に行幸あるべしと有りつれど、止まりぬれば口惜しく思召す。五月、最勝の御八講あるべしと有るに、女院も内裏におはします。皇后宮、上の御局におはします。清涼殿の北廂の妻戸、渡殿かけて、例の弘徽殿の上の御局の定なり。おはします程ばかりに、御帳よりは狭く、殊に長押小さやかなる、畳二

無く亡せさせ給ひぬる事をぞ、あさましく哀れに世の人も申しける。女院にも殿にも思し歎かせ給ふ。關白殿は宇治に御堂めでたく造らせ給ひて、籠りおはします。網代の罪に由りてにや、宇治に御八講せさせまほしく思召す。「宇治にては例無し」など申せど、思召し立ちにければ爲させ給ふ。九月廿五日なり。捧物なども御方方いみじく爲させ給ふ。中宮、皇后宮上らせ給ふ。裝束など、例の疎かならんやは。皇后宮には蘇芳の匂ひ二襲、例の黃金して菊紅葉を思し營みて、目も及ばずめでたし。中宮には紅を皆打ちて、龍膽の二重紋の上衣、白き紋を織りたり。常の事なれど麗はしく淸げなり。蘇芳の唐衣、菊の裳、又の日は紫の薄様、赤き薄様二襲に、靑き打ちたる浮線綾の上衣、草子など思しきなり。唐衣は龍膽、裳は黃なり。袴は赤き薄様、下様に白く重なりたる、いとをかし。袴、上衣は心心の色なり。斑濃にて象眼の裳なるも有り。麗はしくてと有れど、薄様の下襲の次でには、また爲ぬこと無くぞ爲なしける。五巻の日は、皇后宮下におはしませど、何事も向ひたるやうにて、行道なども、やがて同じ御覽じつべし。女房、今日は白き衣どもを幾つとも無く重ねて押し出でたり。なかなかいみじく淸げに見ゆ。中宮のおはします方に向ひたり。大納言より初め奉りて、捧物取り續きたり。いみじく見所あり。めでたき事なん有りける。女院の御捧物、優曇華を造りたり。三條院の中將持ちて繞る。皇太后宮の、華籠に菊さまざまの花入れて、玉を貫きて緒に爲たり。重ねたるを、やがて其宮の亮公基取り續きたり。次には中宮の、菊の花を蓮に結ひたり。黃金、銀、黃菊、白菊にて二つなり。新大納言の御子の四位少將基長取りたり。皇后宮のは如意寳珠、黃金の絲

も思召し歎く。若道も如何に如何にと思す。女一所、男二所ぞ物し給ひける。女は故大殿の御子の大納言の上、男は中納言にて右衛門督兼ね給へり。今一所は三位中将と申す。何れも御覚異なるに、萬におはす。左の大殿の子に三郎侍従と聞えしは、御伯父の内藏中納言の御女に婿はせ給へりしかど、聞え給ひて此程の帝には成らせ給へるなり。さて二世に人々有るとも知らせ給はず、内裏なとにも参らせ奉り給ふべかりしかども、中宮の斯くておはしませば、思し絶えたるにやあらん。其れに、此御心地の斯くて月頃に成らせ給へば、心細く思されて、哀れに月を見給ひても、風の音に付けても、物のみ哀れに思召されけり。遂に當月の九日亡せさせ給ひぬれば、哀れにいみじき事を誰も思し歎かせ給ふ。此十月に二位中将は宰相に成り給ひにき。斯くと人聞えさせ給ひしかど、打顰かせ給ひて物も遂にせざりけり。二十日ばかり物を言語にず成りにせ給へるなりけり。上なども如何なる心地し給ひけん。世にめでたかりつる御幸ひを、今とても劣り給ふべきならねど、有り難かりける年頃の御心を思すも、疎かならず、いみじかりけり。右の大臣も頓にはせ給ひて、大将辞せさせ給ひてければ、師走の廿七日に源大納言成り給ひぬ。まことや、内の大臣と左の大殿の辞せさせ給ひしに、大将には成らせ給ひにき。「若き人の喜び、受けざらんは口惜しき事なり。我が若かりし折、関白殿の辞し給ひて譲り給ひたりし、いと嬉しかりき」とて、辞せさせ給ふを、殿の人は、「斯く御心なる事を、大納言殿に譲り聞え給はで」と申しけれど、然思召されける事なれば辞せさせ給ひてけり。斯くて又の年の二月三日に、右の大将亡せさせ給ひぬ。いとあさましく、三所ながら程も

せ給ふ。此院の御後見は源大納言昔のままに仕うまつらせ給ふ。内の大殿の上も同じ樣の御心地に惱ませ給ふ。齋院、男御子生み奉らせ給へれば、あいなく世の人喜び申す。殿より初め奉り、殿ばらも思し喜ばせ給ふ。九月一日に、内の大殿の上いと甚く煩はせ給へば、如何にと思召すに、いと平かに、燦燦しき男君生れさせ給ひぬ。源大納言殿、方方に嬉しく思召さる。齋院には御乳母我も我もと參る。尾張守憲房が女、政長少將の妻なり。今一人美作守助定が妻、邦恒が女、御乳母子の命婦の君、左衞門督の御子生みたるなど、然らぬ人人も參らんと有れど、暫し後後にとて、美濃守實基の女も參らせんと有れど、止めさせ給ふ。御湯殿の作法など、いとめでたし。實任などが女も參れり。本侍ひける乳母と云ふは、院の中將の子生みたるなども仕まつる。容貌どもなども取り取りに好き人どもなり。女房の裝束、例の心心に競みたり。節皆き、鶴、龜、松、竹など心心に爲盡したり。先づは菊の七日に、「菊の中なる」など、折に合ひたる事どもさへ見えて、九月七日よりなり。浮線綾の裳、唐衣、象眼、羅など黄金して造りたるに、菊の折枝、松など繡ひたる、いとをかし。織物の上衣なれど、唐衣、裳などは多くは象眼、羅などを爲たり。織物は厚く、繡物は繪書くもなかなか惡ろければなるべし。若宮生れさせ給ひてと云ふに、亡せ給ひぬ。あさましき事を思召し歎く。世にも口惜しがり申す。斯かる折なれば、内の大殿の七夜忍びやかにて、音樂なども無し。御五十日、百日なども、めでたく過ぎ行くに付けても、若君の御事ぞ口惜しかりける。年も廻りぬ。例の作法にて過ぎぬ。斯くて民部卿水參る心地起り給ひて、いと重く成らせ給へば、如何なるべき御心地にかと、中宮

櫻花飽かぬ匂ひを春霞立ちながらのみ見てや過らん

かき拂ふ雪かと見れば朧ろなる月に散りかふ櫻なりけり

月影に散り敷く庭のさくら花かき集めても類ひ無きかな

見る樣どもをかしく見ゆ。また然らぬ人も有りけんかし。内裏の御前にて、殿上人に鞠蹴させて御覽ずる日の有樣、いみじくめでたし。其頃皇后宮の上の御局の泉に、大きなる櫻を挿させ給ひて、人人詠みける。

「古本ノ注ニ、此間十行ばかり餘白あり、歌ぞ書き入るべき料なるべしトアリト云フ。」

中宮、皇后宮と侍はせ給ひて、内裏渡りにも有らず、獨きに、然るべき折折なん代り代りに物御覽じなどに上らせ給ひける。た御殿、里に久しくおはしますを、「參らせ給へ」と常に有れど、頼みにも入らせ給はで、洪御の物し給ふ小野のいとをかしかなるも、御覽ぜまほしく思召して渡らせ給ひて、心長閑かに御逍遥など侍させ給ひておはします。山里の秋の氣色、蟲の鳴く音などの哀れに、「秋こそ殊に」などや思召し知らせ給ひけん。内裏より御使の霧を分けて參るも、物語の心地してをかし。殿上人など數多參りて、琴笛を遊びなどしつつ歸りぬる名殘も若き人人はをかしく思ふ。内裏より侍從の内侍とて、やがて懸けて侍ふ人ぞ奉らせ給へり。所の樣、御裝束もいとをかしく見ゆ。母屋の御几帳の裏打掛けて、わざと見えさせ給はねど、透きておはします程など、繪に書きたらん心地にてをかし。女房なども忍びやかに心にくき程なり。やがて二三日ばかり侍ひてぞ退かづる。東宮の齋院常ならず成らせ給ひぬ。如何がと思召して、御祈りなど讀さ

て、皇太后宮と一つ所におはしますに、御乳母子を語らひて、忍び忍びに參り給ひけり。然て忍びて迎ひ奉らせ給ひてければ、内裏、東宮いと便無きものに思召したる中にも、東宮は一つ御腹におはしまして、心病ましく目覺ましう思召して、内裏にも、「一人斯くのみ思ひ侍るべき事にもあらず」と、いみじく申させ給へば、畏まりて物し給ふを、猶飽かず、是れより增さりたらん罪にも當りなんと、甚く申させ給へば、如何なる事かと、大納言殿は思し歎かせ給ふ。六條にいとをかしき所、大納言殿の領ぜさせ給ひけるにぞ、おはしまさせ給ひける。大宮をも「すべて御文など通はさせ給ふな」など、東宮のいみじく申させ給へば、いと愛しくし奉らせ給ひしかど、かき絶えてはおはします。大納言殿の上、萬づに扱ひ申させ給ふ。宮の御有樣いとめでたくをかしげにおはします。中納言、物語の男君の心地し給ひて、いと貴やかに艶めかしき御有樣なり。東宮の齋院は、男宮、女宮、生み奉らせ給ひしかど、皆亡ぜさせ給ひにしかば、あさましき事を思し歎かせ給ふ。東宮大夫殿の女御頻はせ給ひて、やがて宮にて亡くならせ給ひにけり。あさましき事を思し歎かせ給ふ。大夫殿の上、母上など、如何なる御心地かは爲させ給ひけん。東宮の歎かせ給ふ樣限り無し。男宮一所、女宮四所ぞおはしましける。女二の宮は亡せさせ給ひにけり。哀れにいみじき事多かり。櫻のえも云はぬ盛りに、馬場殿に月の明き夜、中宮の女房行きて見るに、幾木とも無く咲き調ほりたるは、雪の降りに掛かれるに違ふこと無し。「室に知られぬ」とも見えたり。飽かぬ心地しながら、然て有るべきならねば、歸るとて、

立たせ給へる、あさましく悲し。女院の御傳などの、めでたくいみじかりつるも、夜の煙にて上らせ給ひぬる、猶猶いみじく悲し。誰にか有りけん、斯くぞ云ひける。

　分ちけん園の後の形見だに無き世に況して悲しかりけり

斯くあさましき事のみ多かれば、御心の中にもあさましく思召して、院下ろし奉らせ給ひて、麗景殿の姫宮居させ給ひぬ。下りさせ給ひても、御心地直らせ給ふことも無し。大宮殿も齋院に參り通ひておはします。齋院の女御殿は、いと尊く行ひておはします。月の傾くを御覽じて、

　急がずば光を見てぞ歎かまし中空を行く我身なりとて

御心地惜ましく思召されける頃、蟋蟀の鳴くに、

　明日までも聞くべきものと思はねば今日ひぐらしの聲ぞ悲しき

など仰せらるゝ、いと哀れなり。名殘無き世に背き果てさせ給ひておはしませば、いと哀れに賢くも見奉らせ給ふ。また類ひ無くいみじきものに幼なくより思ひ申させ給ふを、斯くて見奉らせ給ふ、いと哀れに口惜しげなり。御心地もやうやう怠らせ給へば嬉しく思召さる。せめて長くとも、他事よりは思ひ申させ給はざりけり。我れ無からん世に有るよりは實へ、心細くや思されんと、聞心き餘りには、我より後に、おはしまさでもありなんと思召しながら、目の前にはげしからん事は見じと思召さるゝは、如何がはおはしますべからん。理無き御心地にぞ。源大納言の御太郎君は新中納言俊房と聞ゆる。彼の朱雀院の二の宮に前齋院と

煙の後

七月七日、中宮の御前に、前栽に斑濃の絲を引きて、色色の玉を貫きたり。「よし、見ん人は」と帝の詠まひ給ひけんは、斯く思ひ寄り給ふ人の無かりけるにや。女房、

白露も玉を磨きて千代經べき秋の宮には讓きせざりけり

行き合ひの空より置ける露なれば殊に玉をば磨くなりけり

機織の糸に引かれてたまさかに斯く消え殘る露も有りけり

斯くていと數多ありけれど、餘りは何にかはとて止めつ。是れは此上無き前の事なり。先帝をば後朱雀院とぞ申すめる。其院の高倉殿の女四の宮をこそは齋院とは申すめれ。幼なくおはしませど、歌をめでたく詠ませ給ふ。侍ふ人人も題を出だし歌合をし、朝夕に心を遣りて過ぐさせ給ふ。物語合とて、今新しく作りて、左右方分きて、二十人合せなど爲させ給ひて、いとをかしかりけり、明暮御心地を惱ませ給ひて、果ては御心も違はせ給ひて、いと恐ろしき事を思し歎かせ給ふ。一條院の燒けにし事だに有るに、內裏、大極殿一夜に燒けぬ。いといとあさまし。是れは天喜六年と云ふ。同じ二月二十三日の夜、御堂燒けぬ。然ばかりめでたくおはします百體の釋迦、百體の觀音、阿彌陀、七佛、藥師など、丈六の御佛達、火の中に燦めきて

花ならで折らまほしきは難波江の蘆の若葉に降れる白雪　　民部卿

右　菊

紫のまだ惜まざりし二葉にも菊に心は染めてしものを　　内の御製（源三位に代らせ給へる）

左勝　祝

長濱の眞砂の數も何ならず盡きせず見ゆる君が御代かな

右

住の江に生ひ添ふ松の枝毎に君が千年の數ぞ籠れる　　宮大夫（隆國）

たどそ有りけん。明け行けば事果てて、大臣、大納言、次次の人人、御祿賜きて退出で給ふ。纐纈の裳、唐衣、纐纈、帶の御衣どもなど被き給ふ。云ひ盡すべくも有らずなん。世の中の往き還り、人の御幸ひなど昔物語のやうなる事どもも有るを、幼なき人などにも、斯かる事こそは有れとも見せんとて書き留むれば、近き程の事は、なかなか忘れ、年月の程も違ひてぞ。殿の大納言、大臣に成らせ給ひにきなど云ひたれど、此度合には中將にておはしましし程なりけり。人のせよと云ふ事にもあらず、物知らぬにぞ、人の非難き、心病ましくも思しぬべき事なれど、何の書き留めまほしきにか。過ぎにし事も、今の事も、しどけなし。斯く所所に書き留むるは、徒なるよりは、人にも非難かれんとなるべし。

右　萩　美濃

折りや爲ん折らでや見まし秋萩に露も心を掛けぬ日ぞ無き

左勝　子日　頭中將

何れをか分きて引かまし春日野のなべて千年の松の緑を

右　雁　伊勢大輔

小夜深く旅のうら〔後拾遺和歌集ニハ空〕にて鳴く雁は己が羽風や夜寒なるらん

左持　梅　相模

岩間洩る水にぞ宿る梅の花木末は風のうしろめたさに

右　小山田　伊勢大輔

秋の夜の山田の庵は稻妻の光のみこそ守〔洩〕り明しけれ

左　青柳　宮内侍

皆人の心に掛けて來る〔繰る〕ものは岸に浪寄る青柳の糸

右勝　紅葉　民部卿

大井河灑つ瀬も無く秋深み紅葉の淵と成りにけるかな

左　殘雪　但馬

そぞろにしかりしかつ

左勝　翌日祝　　　　内裏の式部命婦

春立てば先づ殿人も引き連れて萬づ代經べき宿にこそ來れ

右　八月十五夜月　　　　伊勢大輔

曇り無き空の鏡と見ゆるかな秋の夜長く照す月影

左勝　春日祭　　　　範永

今日祭る春日の山の神ませば天の下には君ぞ榮えん

右　[illegible]　　　　土佐

萬づ代に君ぞ見るべき鳳輦の行き合ひの空を雲の上にて

左勝　[illegible]　　　　右大臣

春雨に濡れて歸らん［金葉和歌集ニハ尋ねん］さくら花雲の返しの嵐もぞ吹く

右　駒迎へ　　　　下野

引く駒の數より外に見えつるは關の清水の影にぞ有りける

左　鶯　　　　宮大夫（陸國）

山里の垣根に春の著からん雪まぬ前に鶯の鳴く

し隱したり。挿櫛に、物忌、絲して、紅葉、菊にて附けたり。美濃の君、唐衣に黄金を延べて、「霰降るらし」と云ふ歌をも摺りたり。左の人人檜扇どもなり。衣には皆綿入れたれど、上衣、裳、唐衣は冬のにてなん有りける。右には櫻人と云ふことを銀の洲濱にて、歌書く者は草子十帖、銀、黄金、浮線綾、象眼を蓋して、二つづつ銀、黄金の絲を紋に結びて、玉を紋に居ゑたり。歌書くべき草子どもに、此題の心ばへを、男繪、女繪と書きたるに、兼行ぞ歌は書きたる。歌を旨としたる事に、何ど惡ろき者に書かすべき。繪書きいみじき者に書くべきなりと、左の人人非難きけり。負指には鶴を松に栖ませたり。歌は卷物二つにて、黄金の表紙、玉を貫きて紐にしたり。繪は是れも題に從ひて書きたり。經任の中納言、權大夫の堤北の方書き給へり。九十餘の人の、然ばかり塗り固め書きたる繪に、つゆも墨濁れせず書き匂め給へる、あさましうめでたし、負指は七月七日の棚機祭の形、細かにいみじう造りたり。左の方人左大臣殿、右の方人にて物し給ふ右の大殿定め給ふ。左の大殿おはします。負指には後家の二位中納言の子、太郎、二郎二人ながら角髪結ひておはす。殿上の人人、左には源大納言の頭中將、右には、やがて舅の隆俊頭中將。源中將は人に返さるべくもあらず、歌の善さ惡しさを定め、いと美くしうぞ物し給ひし。「故き事には、とこそ有れ、斯くこそ有れ」と、右の頭を能く云ひ追ひ貶し給へば、「あはれ利き給へる口かな」と、上達部、殿上人褒め申し給ふ。左には内裏の御製ありけり。此方、彼方劣らじと定め給ふ。民部卿、右の大殿、中宮亮兼房など云ひ定めさせ給ふ。然れど御製ありと聞きて、何れと知らねば、甚くもえ云ひ返さぬ。諍ひするやうたりしこ

非事しからぬ菊衛門様どもに、赤色の唐衣、小式部、楢の匂ひに、濃き打ちたる、紅梅の上衣、萌葱の唐衣、薄色の裳なり。右十人は東面に南の戸口に、内侍、色色を皆打ちて、青き織物に、色色の紅葉を皆織り盡したり。蘇芳の二重紋、浮線綾の唐衣。出雲、下衣、同じ紅葉を打ちて、上衣は赤朽葉、薄青の二重紋の唐衣、袴も同じ紅葉の打ちたる、上衣も白き。土佐、是れも同じ紅葉の打ちたる、青朽葉の二重紋の上衣、秋の花の色色を盡したり。紅葉の淺き濃き二重紋の唐衣、上衣、大井河の水の流れに、淵瀬を繍にて、花の色色の影見ゆ。袴は戸無瀬の瀧の水上、下、紅葉の散り交ひたる、いとをかし。三日月の形に青をして、緑の羅の上衣、浪の形を結び掛けたり。美濃、色色の綿の衣八つ、裏皆打ちたり。象眼の緑の裳、紺瑠璃の唐衣、是れも大井河を移したり。皆濃口して、袴同じ。五重の打ちたる、上に二重紋の上衣。筑前、同じ紅葉の打ちたる、上に黄なる二重紋の織物の上衣、無紋の朽葉の唐衣、秋の野を織り盡したり。袴同じ様なり。今五人は菊の色色なり。遠江、皆上は白き、裏を色色に移ろはして、紅の打ちたるに、白き織物の上衣、女郎花の唐衣、薄の裳。侍従、上は淺き蘇芳、裏は色色移ろはしたり。紅の裏に蘇芳の織物の上衣、女郎花の唐衣、萩の裳、袴、何れも同じ如打ちたり。下野、菊の織物どもに、紅の打ちたる蘇芳の唐衣、紫の末濃の裳、裳に葉手に玉を貫き掛け、繪書きなど爲たり。袴、二藍の上衣。平少納言、菊の移ろひたるに、二藍の上衣、草子の繪にて、斑濃の絲して、玉を總角に結びて、「後撰」、「古今」と織れり。黒き絲して、左も右も其色の花どもを造りて上に押したり。右は綿入れず。紅葉の人達、瑠璃を延べたる國どもを蓋

の衣著たり。殿上人誦んじなどして、いとをかし。やがて此詩を結びたり。八重紅梅の唐衣など、色色にをかし。臨時祭、上らせ給ひて御覽ず。皇后宮は下の御局なるにも御覽ず。清涼殿のやうに近ければ、やがて御前の事も見ゆればなるべし。拜禮には正月には中宮、皇后宮代りに、年を更へつつなん大饗は有りける。皇后宮、歌合せさせ給ふ。左春、右秋なり。裝束も、やがて其折に從ひつつぞ爲たりける。正月なり。其日に成りて、左の人人、春の色色を織り盡したり。種種の紅梅どもに、紅の打ちたる、萌葱の二重紋の「上衣脱カ」紅梅の象眼の唐衣、薄色の二重紋「の裳脱カ」。伯耆、松の葉襲、青き打ちたる、同じ色の二重紋に、松の枝織りたる、唐衣は地は白くて紋に青き象眼の二重紋の唐衣。淡路、梅の三重織物の上衣、皆打ちたり。紅の打ちたる、梅の二重紋の唐衣。但馬、櫻の織物ども、紅の打ちたる、櫻の上衣、樺櫻の二重紋の唐衣、梅の二重紋の裳。内侍の女、裏山吹ども三つにて、一重ども皆打ちたり。萌葱の打ちたる、山吹の二重紋の上衣、同じ色の無紋の唐衣。今五人、南の廂に居分かれたり。式部の命婦、躑躅どもに、萌葱の浮線綾の唐衣。源式部、藤どもに、紅の打ちたる、二藍の二重紋の上衣、[illegible]遊の裳、唐衣。若少納言、同じ藤の匂ひに、紅の打ちたる、藤の二重紋の上衣、同じ色の無紋の唐衣、池の藤波、唐衣には咲き掛かりたるを、歌繪にいとをかしく書きたり。女、山吹の織物の上衣、[illegible]遊の裳、唐衣。内大臣殿の御乳母、柳どもに、紅の打ちたる、柳の二重紋の上衣、裳、唐衣も同じ事なり。近江の三位、紅梅の淡きを皆打ちて、上衣、裳、唐衣、皆二重紋、御帳の側の方に參りて侍ひ給ふ。内侍、

り。然らぬ女房も四十人ばかり、心心に装束き、參り集まれり。内裏には三月に花の宴など云ひて過ぎぬ。五月には競馬殿にて駒競せさせ給ふ。東宮渡らせ給ひて御覽じなど、いとめでたし。相撲など賑はしうて過ぎぬ。九月十三日、月の夜の常ならぬに御遊あり。二位中納言の琴、政長の少將笛など、いとをかし。夜更くるままに、月澄み上り、遣水の例よりは廣く流れたる、いとをかし。内の大殿御年の程よりもいと長閑かに大人しく、恥かしげに物せさせ給ふ。御才などもおはしまし、然るべき折節の公事などにも、年大人び給へる人だに、自ら過まれ給ふ事も有るに、事の作法など、めでたく目易く掟てさせ給ふとて、大人び給へる上達部など愛で申し給ふ。御容貌いと清げに氣高き御有樣なり。俊家の二位中納言いと華やかに清げに、華貌人と見え給へり。堀河の右の大殿こそは、華貌の名取り給へりしかば、此殿ばらも、皆いと好く物し給ふなるべし。内の大殿、

冬ならでさやけき月に瀧つ瀬は音はせねども氷しにけり

澄む水にさやけき影の映ればや今宵の月の名に流るらん　　二位中納言俊家

千代までに澄むべき水の流れには月も長閑けく宿るなりけり　　中納言能長

岩間より流るる水に月影の映れるさへぞさやけかりける　　二位中將忠家

例の殘りは止めつ。流れて早き月日にて、過ぎもて行けば、五節に中宮の女房、「花蕊雪を含んで」と云ふ詩を装束きたり。梅の織物、香染、紅梅の紅に匂ひたるなどなり。「綠の文を帶びたり」とて繡たる、綠

る萌葱の織物の上衣、蘇芳の唐衣などなり。日毎に更へて、三日の程、いとめでたし。四月十日露れさせ給ふ。瞿麥に濃き打ちたる、蘇芳の織物の上衣、青朽葉の唐衣など有れど、心心に、菖蒲、棟など、折に合せたる色色を盡して、二重織物、打物、織物など樣樣に盡したり。祭には引き續き物御覽ずるもいとめでたし。女房車乘りこぼれて、事成りて所も無きに、裝ほしく華やかにて、固より有る車ども押し消ちて立ち並び御覽ずる、淸少納言が云ひたるやうに、めでたしと見ゆ。其又の年内大臣に成らせ給ひぬ。殿、太政大臣に成らせ給ひて、右の大殿左に、内の大殿右に、次次成り上がらせ給ふ。御喜びの程など、いみじうめでたし。また近衞司出ださせ給ふ。此度は唯だいと端麗しくて、一日は紅梅に龍膽の打ちたる、龍膽に紅梅の打ちたるなどなり。殿の御有樣のいと長閑やかに耻かしげに、淸げに物せさせ給ふに、御心ばへさへ飽かぬ事無く、御才などおはしまし、萬づに優れさせ給へるを、「榮華」の上の卷には、殿の御子はおはしまさずと申したるに、斯く樣樣にめでたく、世の固めと成らせ給ふべき一の人達出でおはしましけるものを、色めかしく浮華におはしますも、若き折に、然物せさせ給はぬ人やは有る。然ればこそ、をかしく艶めかしき事も出で來れ。いと端麗しきは荒涼まじく直よかなりかし。內裏の上も、いと嫺やかに、をかしくおはします。東宮は端麗しく嚴しきやうにおはしませど、才おはしまし、歌の上手におはします。女房なども御覽じ放たず。近江守實經の君の女侍ひけるも、男御子生み奉りたりける、四つ五つにて亡せ給ひにき。伊勢が心地ぞ爲ける。內の大殿に大饗あり。女房色色に、萌葱の二重紋の上衣、葡萄染の二重紋の唐衣など打出でた

先づと、此御方の御事をば思召したり。皇后宮、然らぬ樣に聞召さん所あれば、嚴かに持て成し聞えさせ給ふべきに有らぬを、御志淺からず、いとめでたし。御心ばへも飽かぬ所無く、めでたくおはしますべし。女房などは、華華とをかしう、はかなき事も故故しう、女房の中らひにも、をかしき事多かり。女御殿もいと麗やかに心にくくて侍はせ給ふ。斯く方方に御心の隙無きやうなれど、和らかに持て成しつつおはします。上らせ給へど、頓みにも上らせ給はず。斯く方方に心持ましき世の中を思召し立たせ給ひて、安らかなる心御持に成し、をかしうなん有りける。右の大臣の大納言は、高松殿の御壻に成らせ給ひしかば、山の井大納言と聞えさす。上は小一條院の御宮におはします。世に御覽に、めでたくおはします。殿の御行方も知らせ給はず。然るべき所歩りかせ給ふにも、露の御氣色も洩らさせ給はずなどぞ物せさせ給へば、殿乳母達などは「籠りにおはします」とて聞えさせけれど、掛けても斯く申す人をば物妬しき者に思し遣給はす。然りとて疎かなる御心にも有らず、忝く疎かならぬものに思ひ聞えさせ給ひて、然るべき宮仕人などの許におはしませど、夜など留まらせ給ひ、心長閑かに同じ所へなどおはしますこと無し。源大納言殿の御行を、勿なくおはしまししより子にし奉らせ給ひて愛護き奉らせ給ふ。東宮に參らせ奉らんと思召しけれど、御院やんごとなくておはします。東宮大夫殿の女御殿、御子達數多が御親にて、御志も薄かたならで侍はせ給へば、擬擬無き世に、なかなか心盡しに見ゆる事をと思して、殿の大納言殿をおはしまさせ給ふ。儀式、有様、世の常ならず。三月二十日の程なり。濃き淡き二つづつ反對の色なる十二、紅の打ちた

ます。五節に女房、梅どもに濃き打ちたる、青摺の裳、唐衣など著させ給へり。端下者、女房の局の人など、をかしく爲立てつつ、沓履り歩りく。四條大納言の名殘をかしく、故ある御方と人思へり。梅壺の女御殿はただに成らせ給ひて、いと尊く行はせ給ふ。御功徳の事殘させ給ふ事無し。此世の事を思召さぬには、后の位を何とか思召さん。凡常の人だに眞の心を見んには心留まるべきにもあらず。況して然ばかりの御心に、世を徒にのみ思召されんには、九品の御望こそ深くは思召さるるべけれ。殿の大納言、五節出ださせ給ふ。皇后宮の女房、中臈、下臈の卑賤なきどもを出ださせ給ふ。我はと思ふ際のは出ださせ給はず。裝束、有樣、云ふ方無し。此御時には制ありて、衣五つなど有れど、嚴しからねば、然るべき所所には、いみじく飾させ給ふ。後一條院の御時こそは斯かりしか。女房、童女、下仕の裝束、人人當りて心を盡すとも疎かなり。中宮より童女の裝束奉らせ給へり。紅の打ちたるに、菊の二重紋の其折枝織りたる袙、蘇芳の汗衫、龍膽の上の袴、皆二重紋なり。打ちたる袴など例の事なり。瑠璃を紋に押したるなど、いみじう盡されたり。世の中に珍しき五節の有樣なり。童女なども人の程異なるを撰らせ給へり。此御時は事多く、御心遣りてなんおはしましける。御心ばへめでたく和らかにをかしくおはします。中宮幼なくより限り無き御志にて、人の御程、女院の同じ姉生し立て奉らせ給へる、樣樣に疎かならず、忝く心苦しく思ひ聞えさせ給へるに、御方方に參らせ給へれど、更に御覽じ入れず、物憂しき御氣色にもあらず、外の事に思召して、貴に氣高く、聞し召し入るる御氣色にも有らねば、いとど哀れに有り難く思ひ申させ給ひて、何事も

殿と思しきにおはします。中宮は上の御局におはします。斯く旅におはします程は、殿上人、近衞司は、胡籙負ひたるもいとをかし。斯くのみ有るを、あさましと思召し歎かせ給ふ。是れより三月十餘日に四條の宮に渡らせ給ひぬ。狹く暑かはしき心地す。北の對を、馬道明けて、西には中宮、其方の廊掛けておはします。東には皇后宮おはします。相撲なども清涼殿にて中宮は御覽ず。儀式、有樣、然る方に見所あり。裸なる姿どもの並み立ちたるぞ疎ましかりける。御前に堤築きて、月日山など有りけり。女房誰れにか、

　浪の上池の堤は高くとも月日に如何で近くなるらん

と詠みけり。皇后宮は東なる屋にて御覽ず。斯くて九月に京極殿に渡らせ給ひぬ。師走の八日また燒けぬ。餘りに成りぬる事は云ふべき方ぞ無かりける。內裏は民部卿の三條に、女院もおはしますに渡らせ給ひぬ。中宮は權大夫の大炊の御門に、皇后宮は殿に出でさせ給ひぬ。一條院に冷泉院移し造らせ給ひて、御渡り同じ月の廿七日、東には皇后宮、北の藤壺と思しきには中宮、西の南に寄りて女御殿などおはします。世の中斯く物騷がしきやうにて過ぎぬ。皇后宮常に御物の怪に惱ませ給ふ。御祈り殘る無し。殿の少將殿、臨時祭舞人せさせ給ふ。いみじう美くしうて舞はせ給ふに、唯だ打見奉る人だに涙ぐまるるに、殿は況して、三條殿の、斯樣におはしますを見奉り給はぬ、哀れに思召さるらんかし。如何なりしにか、御簾の中にて、女房の中にて御覽じき。內裏の御心いとをかしう嫋びかにおはしまし、人を荒めさせ給はず、めでたくおはします。折折には、御音樂、月の夜、花の折過ぐさせ給はず、をかしき御時なり。辨の乳母をかしうおはす

事なりや。皇后宮其夜さり出でさせ給ひぬ。いみじう思召し歎かせ給ふ。此頃は内裏は冷泉院にぞおはします。御葬送の程の事どもなどいみじう、斯かるに付けても、殿の思召し掟てさせ給ふ程めでたし。御四十九日果てぬれば、宮入らせ給ひぬ。哀れに悲しう思ひ出で聞えさせ給ふ。其年の七月に、内裏の[illegible]のやうに悩ませ給ひて、いと甚く煩はせ給ふ。七月二つ有る年にて、暑ささへいと理無し。御祈等、御修法など有るべき限りなり。殿を初め奉りて、遥かでさせ給ふ事も無くておはします。御物の怪ども移りて[illegible]の行ひし、左大臣殿、冷泉院など、祈禱する御物の怪あり。御神とて、斯くて後へは、優れにくきとて、常に出で来臨す。斯くのみおはしませば、高陽院殿に渡らせ給ひなんとする事二十日と定まりぬ。十六七日より宜しく成らせ給ひぬ。斯様の御有様は如何でかは漸り付き参らせんと思へど、頓にも有りけん、宜しく成らせ給ひぬ。二十日御装束宣よかに、いと麗はしくて渡らせ給ひぬ。いとあさまし。其夜中宮渡らせ給ひぬ。皇后宮、女御殿、二三日ばかり有りて入らせ給ひぬ。高陽院殿の有様いと面白くをかし。西の對を例の清涼殿にて、寝殿を南殿などにて、小寝殿とて又いとをかしくて差し並び、山は真の奥山と見え、植木は中より落ち、池の面遥かに澄み渡り、左右の釣殿など、尋常ならずをかし。秋深く成るままに、紅葉の濃き淡きも、錦を引けるやうなり。今年の夏、関白殿の上亡せさせ給ひたれば、五節なども例の禁無くて過ぎぬ。臨時祭ぞ中宮上らせ給ひて御覧ずる。衣なども打出でず、例のやうにも無し。朔日の有様など例の作法なり。あさましき事は正月八日また焼けぬ。冷泉院に内裏、中宮と渡らせ給ひぬ。皇后宮は承香

うたた寢の夢にや有らん郭公またとも聞かで過ぎぬなるかな

三番　左勝　早苗　　藏人修理亮藤惟綱〔拾遺和歌集ニハ隆資トアリ〕

五月雨に日は暮れぬめり里遠み山田の早苗採りも果てぬに

右　　少納言源信房

さ少女の山田の代に下り立ちて急げや早苗室の早早稻

四番　左持　祝　　式部大輔藤國成朝臣

秋の宮出づる月日〔此二句新續古今和歌集ニ天の原めぐる月日〕のさやかにも萬づ世澄める雲の上かな

右　　左近中將源資綱朝臣

春日山枝さし添ふる松の葉は君が千年の數にぞ有りける

五番　左勝　戀　　相模

恨み佗び干さぬ袖だに有るものを戀に朽ちなん名こそ惜しけれ

右　　右近少將源經俊朝臣

下燃ゆる歎きをだにも知らせばや燒火の神のしるしばかりに

いとをかしくて過ぎぬ。皇后宮の御兄人の若君とておはしましつる、御元服せさせ給ふ。五月に駒競の行幸あるべしなど云ふ程に、俄かに三條殿亡せさせ給ひぬ。日頃惱み渡らせ給ひけるぞ、あさましく哀れなる御

宮に成らせ給ひて、年官年爵など得させ給ふ。内裏には根合せさせ給ふ。左頭中将、右頭内侍中納言の子經家の辨、若く華やかに覺えある人人なり。左右二十人づつ分きて、えも云はぬ淵濱の埴根を尋ねつつ、まだ知らぬ小泥に下りつつ引き出でたる、一丈三尺の根なども有りけり。また薹、打敷、華足などの有樣、云ふべきにもあらず。中宮、皇后宮など上らせ給へり。中宮の女房の裝束は、唯だいと麗はしく、殊更に菖蒲の衣を打ちて、瞿麥の織物の上衣、蘭葱の唐衣、棟の裳なりと。皇后宮のは菖蒲、棟、瞿麥、杜若など黄金して花鳥を造り、口置き、いみじき事どもを盡させ給へり。折折に付けて、をかしき事のみ多かり。

永承六年五月五日殿上歌合

一番　左持　菖蒲　　　左馬頭源經信朝臣

萬づ代に變らぬものは五月雨の雫に香る菖蒲草かな「金葉和歌集ニハ五句菖蒲なりけり」

右　　　少納言源信房「後拾遺和歌集ニハ良暹法師トアリ」

詫馬江の底の深さを外ながら引ける菖蒲の根にて知るかな

二番　左持　郭公　　　權左中辨藤資仲

ほととぎす唯だ一聲に過ぎぬればまた待つ人に成りぬべきかな

右　　　左近中將源顯房

給ひけれど、外ながらも、「參れ、參れ」とて、成させ給へるなりけり。人人いとど參り集まる。然るべき月夜、花の折過ぐさず、殿上人參りて、歌詠み、御音樂など常に有り。めでたしなども疎かなり。覺えもいみじうおはします。中宮も幼なくより、並ぶ人無くておはしましかば、睦まじく、哀れにやんごとなき方にも思ひ申させ給へり。殿も此御方の御事をば、忝く、心苦しう思ひ聞えさせ給ひて、有りしにも變ること無く仕うまつらせ給ふ。右の大殿ぞ、いみじう思し歎かせ給ひて、籠り居させ給ふ。女御殿も里におはしまさせ給ひ、后の御事を思し絕えさせ給ひぬるが、いと口惜しう、あさましく思召さるるなるべし。東宮には左兵衛督の姬君、東宮の大夫殿の御子にし奉り給ひ、參らせ奉り給へり。御容貌の名高く物せさせ給ふ。女宮一所出でおはしましたり。まことや、右の大殿の女御殿は、まだ皇后宮の參らせ給はざりし折、尋常ならず成らせ給ひて、中宮大夫の三條に出でさせ給ひにしかば、殿も皆其處におはしましかば、梅壺の女御殿は獨り殿におはしまして、

　行き返り故里人に身をなして獨り眺むる秋の夕ぐれ

など獨言たせ給ふ。若宮は亡せて生れさせ給へりとぞ。内裏にも殿にもいみじう歎かせ給ふ。殿の上の御姉妹の前齋宮、右の大殿に婿はせ奉らせ給はんとすと聞えし事も皆聞え止みにたり。右の大殿世の中を思し歎きて、山里に籠り居なんなど思して、然る御心設けせさせ給ふと世にも聞ゆ。斯く思すも道理にいとほしく、梅壺の女御殿も、後朱雀院の御時に本意無くて止ませ給ひにき。道理にいとほしき事も思召して、准三

も多かり。宮の上、殿の上と、三所おはします。殿の上は白き御衣どもに、紅の唐綾を上に奉れり。姫宮の御前には、櫻の匂ひを皆織物にて、紅の打ちたる藤の織物の御衣、萌葱の小袿奉りたる有樣、貴にめでたく、云ふ方無く見え給ふ。式部卿の宮の上は、尼にておはします。彼方には女院、中宮、鷹司殿の上おはします。二所ながら一向にぞ削ぎ捨てさせ給へる。二所尼にておはしませば、北の政所は宮のいと恥かしげにて御覽ずれば、いと恥かしと、恥ぢ奉らせ給へるものから、御衣は寒くやおはしますらんとて、「我が御衣を奉れ」など申させ給ふ。忘れ奉らせ給はざりけるにこそ。御年の積りに、久しう見奉らせ給はねば、如何がと思ひ參らするに。大方の儀式、有樣、云ひ盡すべき方無く、めでたし。事果てて還らせ給ふ。また樣々の御贈物どもなど、思ひ遣るべし。斯くて內裏に、內の大殿の三の姫君參らせ給ふべしと云ふ事出で來て、御調度の事書き立てて、思し準備く程に、俄かに關白殿に姫君おはしましける、やうやう大人びさせ給ひけるを、上に謹み申させ給へるを、然のみやはと思召しければ、內裏に參らせ奉らせ給ふ。內の大殿は聞き給ひて、競ひ顏にやとて思し止まりぬ。內裏燒けにしかば、京極殿に猶おはします。然るべき人人の女競ひ參り、いみじうめでたし。殿の斯く御心に入れさせ給へる事と思ふべかめれば、愛護く人の女、妹、參らぬ無し。女房の裝束など云ひつくすべき方無し。公信の左兵衞督の女の御腹の、故藤民部卿の女參り給へり。實基の中將、今は尾張守と云ふが女、源民部卿の子の信濃守の女など、君達の女いと數多參れり。其れならぬも多かれど書かず。諸大夫の女などは、數へ盡すべくも有らず。師走に參

姫君、内裏に參らせ給ひぬ。京極殿なれば、いと狹し。琵琶彈かせ給ひ、繪などいとめでたく書かせ給ふ。男繪など、繪師耻かしう書かせ給ふ。故故しう、をかしうおはします。御容貌もいとをかしげなり。愛敬づき、ふくらかに、細小やかにぞおはしましける。まことや、内裏に歌合せさせ給ひき。まだ女御殿も參らせ給はざりしに、十月晦日と有りしかど、延びて霜月の九日なり。殿上人左右に分たせ給ふ。文臺は黄金の洲濱に、黄金の五葉に、黄金の蔦、色色に彩りたる掛かりたる、いとをかし。師基の兵衞佐書きたり。右は黄金の透箱に、硯の箱と思しきに、草子どもを入れたり。歌の心ばへを、題に從ひつつ、下繪に書きたり。手は右の大殿の因幡の乳母、錦の表紙、次のは黄金の表紙を磨きたる、白栲に遙遙と見えて、山の立たずまひ、水の流れは微かなり。黄金を結びて、玉を紋に爲など、樣樣なる表紙、貫にをかし。黄金の硯、瑠璃の硯の瓶、筆、墨まで、いみじう盡したり。員指の洲濱どもなど、心心にいとをかし。中宮の女房まで紅葉を織り盡したり。打物、織物、斑濃など、心心にいとをかし。羅に打ちたるも、透かしたるも、彫物、銀の水遣り、紅葉の散り交ひたるなど、いとをかしく艶かし。菊の織物の御几帳ども、押し出で渡しておはします程こそ出だされ、少し差し退きて、好き程に押し出でたる衣の裾、袖口、いと目も驚きて見ゆ。菊の折枝、葛の紅葉、鏡の水など押したるが、羅より透きたる、打目に耀き合ひたる灯影、いみじうをかし。紅の打ちたるを中重にて、葛の形に彫りて、青きを下に重ねて、香染の羅に紅葉を透かし、裳の腰など、いみじうをかし。唐衣に紅葉を分けて出づる月、おどろおどろしうをかし。大井川、戸

日毎に三日の程参らせ給ふ。八月十七日内裏へ入らせ給ふ。伊豫守範國が、女房の局に云ひたる。

かねてより空の氣色ぞ著かりし降る跡に立つ紫の雲

是れならねど、斯様の事は多かり。其年の春、小野の宮の右の大殿亡せ給ひにけり。九十をしも待ち給へる心地してれ哀れなり。長しとても終には斯くこそはと見えたり。大宮の民部卿是れを聞き給ひて、

玉の緒の長き例に引く人も消ゆれば露に何か異なる

と述給ひけり。斯くて八月には内裏に参らせ給ひぬ。行啓見ける人の、

雲の上ぞ思ひ遣らるる秋の月光を添へて入ると見えしに

と女房の云ひたりける。曇り無くめでたき藤壺の御裝飾、何どてか疎かならん。菊の色色に濃き打ちたる、蘇芳の唐衣など著つつ侍ふ。御禊、大嘗會など、例の事なり。内の大殿は、今は右の大殿と聞えさす。大將殿、内大臣に成り給ひぬ。右の大殿の姫君、女御代に立たせ給ふ。作法、有様、前前に異る事無し。いとめでたし。五節、臨時祭など、例の作法にて過ぎぬ。正月など、いとめでたし。白河殿には盡させす昔を戀ひさせ給ひつつ、行はせ給ひておはします。天狗など煩かしき邊りにて、いみじう煩はせ給ふ。人人も次ぎて煩ひ、亡くなりなどして、いと憂たて有れば、「斯くてのみは如何が」と、殿など申させ給へど、聞し召し入れぬに、いと久しう、限りに成りて煩はせ給へば、「後の世いとあいなき事なり」と、殿の促めて申させ給ひて、四條なる美作守の家に出でさせ給ひぬ。然ても猶暫しは煩はせ給ふ。斯くて右の大殿の

る心地ぞ爲させ給ひける。光り合ひて、覺束なからぬに、女房どもの髮上げて、皆打出でたるに、殿、內の大殿など、御簾の中におはしまして、古女房の、故宮の御時より侍ふ召使、有るべき作法ども仰せられ、「御髮上げの典侍上れなど云はせよ」と仰せらるれば、辨の典侍參り給へりける、上りて、晝の御座に御倚子立てて、御髮上げさせ給ひておはします。此世の事とも見えさせ給はず。紅の御單襲、白き織物の御衣、裳、白きを奉りて、額ばかり上げておはします御有樣、いみじうめでたし。不備に物し給はん人の、居丈高に髮少なにて、倚子の御座に上り給はんは見苦しうや有らまし。微かなる灯影など、めでたきは著き事にぞ。拜禮など、いとめでたし。池の篝火隙無きに、白き鳥どもの足高にて立てるも、葦手の心地して、をかし。博士の命婦參りて、人人御簡に附け、御髮上げなどする、猶いと殊なる事なりや。其夜の御饌參る。御給仕は殿の上、宮仕うまつり給ふ。藏人六人髮上げて參る。女房は其夜は朽葉の一重襲、桔梗の上衣、女郎花の唐衣、萩の裳、又の日は紅の一重襲、女郎花の上衣、萩の唐衣、紫苑の裳、又の日は桔梗、朽葉、女郎花、紫苑などを、六人づつ織り、一重襲やがて同じ色の織物の上衣、裳、唐衣は映えぬべき色どもを更へ續きたり。樣樣の浮線綾、二重紋など、心心に競みたり。色許されぬは、黃金して、螺鈿し、繪書き、繡物など、いみじう物狂ほしきまで爲盡したり。筋遣り、口置き、袴の便きに、黃金して繡物にも、打袴を爲たる人も有り。其心ばへ有る歌を繡物にしたり。劣らじと競みたり。內裏の御使に四位新少將良基參れり。寢殿の西の端にて御返り待つ程は、人人と物など云ひて。(モトノママ)殿、內の大殿を初め奉りて、

ます。小姫君と聞えさするぞ、上の御方におはしまさせ給ふ。女御代せさせ給ふべかりける。三月晦の日、宮の御剃けり。何時しかと、あさましき事に思召す。内裏は内大臣殿の二條殿に渡らせ給ひぬ。一品の宮は、高倉殿の上、近衛に周防が家におはしますに、例の渡らせ給ひぬ。怖ろしき思ひ靜めて見渡せば、花いと面白く盛りなり。東宮におはしまいし折も、此處にいと久しうおはしまして、花の盛りには、人人參り給ひて、管絃など遊ばせ給ひし所なり。出羽の辨、

　覺まめ心に有りし櫻花靈鷲山の月を見るとも

など思ひけり。四月十餘日二條殿へ入らせ給ひぬ。六月には后に立たせ給ふべしとて、然るべき事ども、人人皆の思召し始むる程に、世の中の御心地をいみじう煩はせ給ひて、日頃經れど更に怠らせ給はで、いと重くおはしませば、六月十餘日に、三位の里の近きに出でさせ給ひぬ。御祈の數知らず、殿より初めおはしまして、怠らせ給ふこと無し。内裏よりも御使隙無し。二十日の程よりぞ少し宜しく成らせ給ひける。廿五日に后の宣旨下りて、七月十日大饗あるべしなど有る程、此宮には珍しかるべき事にも有らねど、猶漫ろ寒く、めでたし。七月朔日京極殿に渡らせ給ひて、十日立たせ給ふ。然ばかり廣き院の中、宮の隙無く女房の局に置渡し、御曹司、進物所などに、樣々邊り邊りに詰居たり。院のおはしましゝにも劣らず、徒らなる隙無く掛け渡し、水の流れも心行き、池の面澄み渡り、松の緑も鮮明に見え、いみじう面白く、めでたし。源氏の三條の宮おはせで後、大將昔に劣らず、内の大殿の姫君と、住み滿ちておはする事と云ひた

りければ、宮の司に十二月に渡らせ給ふに、雪の降りたる早旦、一品の宮の女房、南殿などを出でて見れば、雪に眞に花と紛ひ、池の氷は鏡と見ゆ。巖にも花咲き、いみじうをかし。御堂の方を見れば、唐繪の心地して見渡さる。庭の雪は消え方に成りけり。木末ぞ盛りと見ゆる。宣旨、出羽の辨に、

　賤の男は見るに甲斐無き朝かな又立ち返る行幸「深雪」ならなん

出羽の辨、

　言の葉の行き「雪」も遣らねばなかなかに面白しとも云はでこそ見れ

また人人、

　巖にも松にも花ぞ咲きにける斯かる雪見し折は有りきや

　赤根さす日より前にも出でて見で消えて悔しき今朝の雪かな

など、色は紛ひぬべきとも、紅梅の匂ひ、鈍色など亂れ來て、見る樣どもをかし。年廻りて、宮の司に出でさせ給ひぬ。人人柳、櫻などこき交ぜたり。殿上の側より下り上らせ給ふ。心の緩び無き道なり。齋宮には故式部卿の宮の姫君、但馬守則理の女の腹に物し給ひける、居させ給ひぬ。齋院に殿の二の宮の居させ給ひぬ。大方には四の宮におはします。然れど三の宮をも高倉殿の一の宮、此三人は聞えさせず。此程に、一品の宮は后に立たせ給ふべけれど、先づ齋宮、齋院の御事定まりてと思召す。內の大殿の中姬君は、奇しく此年頃惱み渡らせ給ふ。現し心も無きやうにて、二十年ばかり籠らせ給はねば、今は任せ奉りておはし

夜もすがら鳴き明すらん蟲の聲聞けばいを得ぬ心地こそすれ

七月七日に、

今日とても急がれぬかな並べて世を思ひ倦みにし棚機の糸

など打眺めさせ給ふも、いと哀れなり。白河殿の秋の氣色、いみじう哀れなるに、況して神無月の時雨に、木の葉の散り交ふ程は、淚止め難し。殿守の侍從の許に、大藏大夫範永、

往時を戀ふる寢覺や增さるらん聞きも習はぬ嶺の嵐に

いといと哀れに催されて、御前にも、人人いみじう思召さる。又の年の四月ばかりに、御前の花散り果てて、

惜まれし木末の花は散り果てて厭ふ緑の葉のみ殘れる

と、打思召したる氣色、いみじう哀れなり。今の内裏も前前の御有樣更らせ給はず、いみじう哀れに忝く思ひ申させ給へり。山里も寂しからず、萬づの人參り仕うまつり、御乳母子の但馬守高房、美濃守基貞、近江守實綱など集ひ侍ふ。然らぬ人人も參り仕うまつらぬ無し。殿上人、判官代、藏人など侍ひて、眞へこせ給ふ事も無し。めでたく帝二所の御親にておはします。上、此内裏に少し疎くおはしましつるを、御子の定にておはします。いとめでたしと思ひ參らすれど、御自らは「類ひ無き心憂かりける身かな」と思召したり。女房などは徒然のままには、花紅葉に付けても、をかしき事多かり。内裏に京極殿より方塞か

内裏邊り御服におはしませば、御簾などもいと怖ろし。上達部、殿上人なども、然ながら橡を著給へり。一品の宮の女房などは、鈍色、香染などをぞ著たりける。何の榮無し。皇后宮の、徒然と昔を戀ひつつ行はせ給ふ。女房なども、内裏邊りを戀しう思ひ出づ。春宮は十二におはします。閑院に皇后宮一所におはします。齋宮、齋院も下りさせ給へり。樣樣なる御服姿、いと哀れなり。十七、十九におはしませば、わざとの大人の美くしう細小やかなるにておはします。御容貌ども、いとめでたくおはしますとぞ。梅壺の女御殿は、内大臣殿、數多の御中に、勝れて思ひ聞えさせ給ひければ、今も見奉らせ給はぬ折無く、早旦、晝の隔ても無く渡らせ給ふ。いと匂ひやかに愛敬づき、氣高くめでたき御有樣を見奉らせ給ひて、是れは何處の人には劣り給ひて行ひもし給ひけるにかと、見奉らせ給ふ。御髮はいとめでたく煩たくおはしまして、御衣の裾に等しくおはします。いとめでたく隙無く掛からせ給へり。卅二三ばかりの人にて、いと盛りにめでたく物せさせ給ふ。院は今年ぞ三十七に成らせ給ひける。御位十年ぞおはしましける。女院の御前には世の中を思召し歎き侘びさせ給ひて、巖の中求めさせ給ひて、白河殿に渡らせ給ひぬ。京極殿をば一品の宮に奉らせ給ひつ。内の大殿の女御、女院の斯く渡らせ給ひぬるを聞かせ給ひても、

　憂しとては出でにし家を出でぬなり何ど故里に我れ歸りけん

とて、打眺めさせ給ふ程、いと哀れなり。秋に成るままに、蟲の聲を聞かせ給ふも、「草葉に掛かる」と思召されて、

御乳母に、皇后宮の辨の乳母、

あはれ君如何なる野邊の煙にて空しき空の雲と成りけん

返し、

思ひ遣れ同じ煙に交りなで立ち後れたる春の霞を

其三月、內裏の御前の櫻の盛りなりけるを、一品の宮の出羽の辨、

風吹けど枝も鳴らさぬ君が代に花の常磐を始めてしがな

また、人、

はかなさに比へて見れば櫻花折知らぬにや成らんとすらん

其四月、祭の日、葵に付けて、下りさせ給へる齋院に、女院の中納言の典侍、

去年の今日斯くや祈りし神山に摘みし葵の掛けまくも惜し

返し、皇后宮の辨の乳母、

掛けまくも畏しとこそ祈りしかはかなかりける葵草かな

叡山にて詠ひける山の座主明快、

雲の上に光消えにし其ままに「拾遺和歌集ニハ二三ノ句光隱れし夕よりトアリ」幾世と云ふに月を見つらん

召せど、殿の御許し奉らせ給ふべくも見えさせ給はねば、人知れ御心設け爲させ給ひ、御服過ぐさせ給ふ。四月に麗景殿の女御、女宮をぞ生み奉らせ給へる。四月八日には御即位あり。殘る人無く見る。門入る程、車どもの競ひ入る程、いと恐ろし。玉の冠して、床子どもの上に居並みたる、唐綺の心地して、女房などは吉に付きて侍ふ。辨の乳母、典侍に成りて、其日の御給仕し給ふ。めでたしなども世の常なり。丹波の乳母は、雅通の中將の女、宰相の乳母は、故致仕の大納言の孫、備前守長經の女なり。然るべき人人、殿上人など、花を折りたる心地して、めでたし。御輿寄する程、御乳母達如何なりけん。朝日の輝き出づるを見る心地す。今年ぞ廿一に成らせ給ひける。一品の宮は二十に成らせ給ふ。后に立たせ給ふべけれど、御服過ぐし、神事など過ぐしてと思召すなるべし。命婦、藏人十人は、禮服とて、赤色の唐衣の袖廣きをぞ著たる。今十人は摺唐衣著つつ、髮上げて並び侍ふ。威儀の親王、褰帳など、例の事なり。京極殿におはします。寢殿を南殿にて、西の對を清涼殿にしたり。北の對に一品の宮おはします。北の一の對を內侍所などに爲たり。西の中門の廊を陣の座にしたり。いみじの京極殿の有樣や。帝三所、后三所立たせ給ひぬ。又も一品の宮立たせ給ふべかめり。四條中納言は、後朱雀院崩せさせ給ひける頃、雪の消え殘るを見て詠給ひける。

　木がくれに殘れる雪の下消えて日を待つ程の心地こそすれ

とて、崩せさせ給ひにけるこそ、いと哀れに、先づ書くべき事を忘れてなん。院崩せさせ給ひて、源三位の

とも思召されけるに、院の御事は如何にと思ひ參らせながらも、御乳母達待ち付け聞えさせつる、嬉しさは限り無し。月のいみじう明きに、初めは御車にておはしましつるに、御輿にて、儀式、有樣、百官引き連れて還らせ給へる、めでたくいみじとも疎かなり。院の例の御有樣にて渡り申させ給はましかば、如何に思召すこと無くめでたからまし。思し歎かせ給へる樣、道理にいみじ。齋宮、齋院を又もえ見奉らせ給はず成りぬる、いみじう哀れに、限り無き御有樣も、斯かる事のおはしましけるも、哀れなりけり。皇后宮には「許さるゝめに思したれど、亡からん世には、思し出づる事多からんものを」と、唯だ去年の冬申させ給ひし、思し出づるにも、いみじう思召さる。皇后宮には起きも上がらせ給はず、思し沈みておはします。薄色の御衣どもを奉りたりけるが、何處とも無く濡りたる袖のみにもあらず、いみじけれど、干さで御覽ずべき方の無きこそ、いみじう哀れなれ。何方に落つる涙にか、殿は一向に恨めしう思したれば、輩かしうも恨めしうも思しもや侍けん。また哀れに上の御局にのみおはしまさせ、御志深げに聞えさせ給ひし御中らひなれば、一事の有るまじかりけるをば、如何が御心ばへの哀れに淺からず有りしは、思ひ出で聞えさせ給ふ事も、如何でかは無からんとぞ、人の心にも推し量り參らせける。殿の斯く思召したるも畢かしく、一向に忍ぶ樣にも思召すらんと思召せば、やうやう起き上がり、御行ひなどにて明し暮させ給ふ。本よりいみじう御行ひの御心深く、經など讀ませ給ふ隙無く、千部の經を度々讀ませ給ひ、書きなど侍らせ給ひければ、殊に御禪師かゝ給ひ、是れを營みにて明し暮させ給ふ。御念誦樣にめでたく侍らせ給ふ。世を背かん事を思

いみじう泣かせ給へば、「斯くな泣き給ひそ、上東門院に善く仕うまつり給へ、二の宮思ひ隔てず思せ」など申させ給へば、御顔に袖を押し當てておはします。「時成りぬ」と申せども、頓みにもえ動かせ給はず。内侍御劔の箱賜はすれば、髮上げて取る心地いみじうて、愼みも敢へず。「凶凶し」とて譴責む。水射奉れば、「いと堪へ難し、此世にてだに暫し安めよ」と仰せらる。いみじう悲し。甚く夜更けて還らせ給ふ。上達部、殿上人さながら仕うまつり給ふ。同じ事なる御事なれど、御車にておはしつるを、御輿にて還らせ給ふ。いみじうめでたし。他人に讓り聞えさせ給はば況して如何ならん。齋宮の御事をたゝん、いみじう申させ給ひける。「二の宮如何にせんずらん」とぞ、内内にも仰せられける。故院も、女院も、關白殿も、同じ事におはしまししだに、我どちこそ善かりしか。末末の人人は、善からぬ事を云ひ出で、自らなる事も有りしに、況して是れは御腹も異らせ給ひ、御後見も異らせ給へれば、如何にと思召すなるべし。御方方の御事ども、思召し申させ給ふ事ども有らめ、人聞かねば書き付けず。十八日の夕さり、俄に崩せさせ給ひぬれば、云ふにも疎かならず、いみじ。上東門院の思召し歎かせ給ふ樣、云ふ方無し。「命長くて斯かる御事を見る事」と、人の思ふらん事をさへ添へて、思し惑はせ給ふ。殿ばらもいみじう思したり。内の大殿に恨めしき方も添ひて、淪落ちさせ給ふ。二葉より事每疑ひ無く、后がねと敬侍き聞え給へるに、口惜しくいみじう思召さる。大將殿も、女御の御産屋四月なるに、今二月、三月を過ぐさせ給はず成りぬる、いみじう口惜しく思し歎く。今の内裏には、院の御事のいみじうおはしましつるを思召せば、御喜びも、何

らせ給ひて、見奉らせ給はんと申させ給へど、「他人人も如何が思はん」と仰せられて、上せ奉らせ給はず。重く成らせ給ふままに、内の大殿は、女御の御事をいみじう申させ給ふ。如何ならんと、殿の人も思ひ騒ぎたり。二の宮も入らせ給ふ。人に抱かれさせ給ひて、屈んじたるやうにておはしますも、いと哀れなり。十四日、春宮、准三宮の宣旨下り、年官、年爵賜はらせ給ふ。此折にやと世の人思ひ申したりつる梅壺の御事、然も有らず成りぬれば、いみじう思し歎かせ給ふ。女御殿も、殿の思召したる御気色を御覧ずるに、理無く苦しう思召さる。関白殿を「つゆ御心の寄せ無く、情無くおはします」と、恨めしう思ひ申させ給ふ。一の人の御女ならぬ人の、御子おはしまさぬか成らせ給ふ例に、又無き事と思召して、僻ませ給はぬなりけり。此御悩重く思召して、御髪剃り、御髪剃りせさせ給ふに、悪しき御夢をのみ御覧じて、御護持僧明快召して、仰せられけるに、「今は此世の断りたる様にて、年頃の願ひは都率天の内院なり。年頃の願ひ違へず、都率天に必ず来迎へ給ふな」と、仰せられければ、明快鉦打ちて祈り申しける時に、近う侍ふ人人、忍び難く、涙堪へ難かりけり。悪しかるべき様に知らせ給ふべき事も有りければ、「我身はとても斯くても苦しかるべきならねど、留まらん人の為めの疎かに思ふべき事ならねば」とぞ仰せられける。然るは「御志ありておはしまし、覚えおはします」と、世に喧騒りつるに、此事を聞させ給はず成りぬる事をぞ、奇しく人人申しける。然るまじきにこそはおはしましけめ。寛徳二年正月十六日に位譲りの事ありて、春宮渡らせ給ふ。糸毛にて参らせ給ふ。いといみじき御有様を外に思召しつるよりも、いみじう悲しく思召さる。

根合

内裏の御面疱の事猶癒らせ給はねば、如何に煩かしう思召す。朔日の有樣など同じ事なり。日頃の過ぐるままに、「御水など射させ給ひてや善からん」と申せば、其作法の御裝飾して射奉る。いと寒き頃、堪へ難げに見えさせ給ふ。上東門院の入らせ給ひて、見奉らせ給ふ御心、譬へん方無し。唯だ打慣みて物せさせ給はんだに有り、見る人堪へ難き御事の樣なれば、いといといみじう見奉らせ給ふ。殿ばら、殿より初め奉りて、集ひ侍はせ給ふ。内の大殿の、女御の御事を思すにもいみじ。年頃も后に立たせ給はん事を思しつるに、此際は況して如何に如何にと思召す。大將殿も、女御の尋常ならずおはしませば、如何がは口惜しう思されざらん。日頃の經るままに、いと堪へ難げにおはしませば、心を盡し給ふ人多かり。内の大殿は、后の御事をいみじう禱させ給ふ。御心にも、いみじういとほしう思召しながら、難げなる御氣色なり。院にもいみじう申させ給ふ。正月の十日の程、いみじう重く成らせ給ひぬれば、内の大殿の女御退かでさせ給ふを聞し召して、藏人長宗を召して、臥させ給ひながら、御文書かせ給ひて奉らせ給ふ。いみじう哀れなり。今暫しの程を近くて聞き果てさせ給はで、などやうに聞えさせ給ひけるにぞ、留まらせ給ひぬる。常の人は、添ひて如何なるまでも見る事なるを、如何なる事にか、皆出でさせ給ふべしと聞ゆるは。皇后宮上

なれど、上達部、殿上人、いと多く參り給へり。御堂の東北掛けておはします。秋の羅の御几帳ども繪をかしう書きたるに、若き人々、襲色々なる袖口ども押し出でたる、をかし。「秋の上風」「一秋の下露」押したる人も有り、秋の風に露寄り掛かる事など惜しき。萎れ、消えぬ程もをかし。唯だ枝ながらと云ふ人々も有らず。一二位の、紫苑色の衣どもに紅の打ちたる、赤色の唐衣着給へる、顔いと清げに、髮の掛かり、肩付など、人に優れ給へり。色々に移ろひたる菊の中を押し分けて、「置き惑はせる白菊」の袖の見えたるも、をかし。暮れ行くままに月の隈無きに、打ちたる衣どもに、羅の唐衣透きたるに、玉を貫き、露置かせなどしたるが、いとをかしきに、資仲の少將、「折れぬばかりも」とて寄り居たるも、折をかしかりき。十四日雨降りて口惜しきに、出羽の辨、

罪滅く昨日今日しも降る雨は是れや一味と見るぞ嬉しき

大和、

濯ぐべき罪も無き身は降る雨に月見るまじき歎きをぞする

斯くて麗景殿の女御、唯ならず成り給ひぬれば、春宮大夫いと嬉しく思したり。其の頃大將に成り給ひぬ。殿は御惱み申し給ふを聞かせ給ふにも、いみじうなん思召されける。師走の廿餘日の頃　内裏に御面瘡おはしまして、藥師ども參りなどして、少し煩はしう申しけり。如何なるべき御心地にか。

大將殿おはしまし初めける春、上の持たせ給へりける扇に手習など爲させ給へりけるを、御硯の下に有るを御覽じ付けて、書き付けさせ給ひて置かせ給へる。

手ずさびのはかなき跡と見しかども長き形見に成りにけるかな

后宮大夫の姬君、此後久しう音づれ聞えさせ給はざりければ、大將殿の上、

はかなしと思ひし程に露の身も消えやしにけん問ふ人の無き

御返し、

思ひ遣る心も露と消え返りえも云ひ遣らで歎かれぞ爲し

「今更に見のやうにて物せさせ給ふ事」とて、大納言殿の上、

風早み置き所無き白露を心に掛けて物ぞ悲しき

御返し、齋院の中納言の典侍、

數ならぬ身に沁みてこそ思ひ遣れ心盡しの秋の白露

殿は日に添へても思召し冷まさせ給ふこと無く、いみじくのみ思召し歎かせ給ふ。先打追ひて參らせ給ふと聞かせ給ひては、先づ入り給ふべき路の障子押し開け、心して待ち聞えさせ給ひ、萬づにいみじく見ても飽かず思召しつるに、あさましく云はん方無き御心の中なり。秋に成るままに哀れにいみじき事を何處にも思召す。月日はかなく過ぎて、九月の御念佛に、院に一品の宮渡らせ給ふ。女房十人ばかりして、忍びやか

ど其れは廿五にて大納言にてなん物し給ひける。彼の関白殿は御兄、権中納言、后宮など、いと数多物し給ひき。異腹に物し給ひけり。唯だ人柄の惜しく、容貌、有様などの物し給ひけるぞ、是れに唯だ一所類ひも無くて、御容貌、有様も優れたるに、御年の程、官、位、惜しかるべき盛りなりかし。御葬送の夜、物覚えず迷ひ合ひたる心にも、賢しらに、上、

空蟬の殼を賴むに有らねども又此は如何に別れ果つらん

と、いみじく思し惑はる。其おはしましける御帳の中に、蜘蛛の巣を掛きたりければ、

別れにし人は来べくも有らなくに如何に振まふ小蜘蛛ぞ此は

御返し、宰相の君、

君来べき程をひならぬ小蜘蛛はかきのみ絶ゆる心地こそすれ

御忌果の日、男女参り集ひたる、皆同じ様なる濃き鈍きばかりなり、纔なる標にて有るを御覧じて、

見渡せば皆墨染の衣手は起〔一本置〕居に付けて物ぞ悲しき

四十九日果てて、山に上りて申したりける。座主、

たぐひ無き君が別れに程経れど落つる涙の色ぞ変らぬ

返し、大納言殿、

思ひきや思ひの外の別れして深き涙を掛けんものとは

でたくおはしませば、同じき帝と申せど、斯くめでたくおはしますなりけり。御容貌も御心ばへも輕輕しからず、有るべき限りめでたくおはします。殿の駒競とて行幸ありき。女院も渡らせ給ふ。殿の宮の女房など、いみじう装束きて、其れ過ぎて内裏に入らせ給へりき。所狹くて、梅壺の上の御局におはします。やがて其御裝飾の儘なり。打解くる世無く、めでたき御裝飾なれば、然ながら下に下りさせ給ひて、讓り聞えさせ給へる、御几帳の帷子の御座なども、心殊に留まりたり。匂ひなども、尋常ならずと、人人愛で合へり。

蜘蛛の振まひ

世の中いと騷がしう心長閑かならぬに、關白殿春より久しく惱み渡らせ給ふに、四月に成りては、少し宜しく成らせ給ふに、大將殿、世の中の御心地煩はせ給ひけり。七日と云ふに亡せさせ給ひぬ。あさましなども世の常なる事をこそ。今年ぞ二十に成らせ給ひける。殿の思召し沈ませ給へる樣、道理にいみじ。母上の御心の中、大納言殿など、取り集め云はん方無き御心の中どもなり。摸似び盡すべくもあらず。大方世にもいみじく惜み聞えさす。御年の程、容貌、有樣のめでたく物せさせ給へる、世の中に斯かる事は無かりけりなど、男などは、昔の例を引きて惜み聞えさす。山の井の大納言と聞えさせけるなん斯く有りし。然れ

置て無く知らせ侍りし九重の煙かならぬに掛くる菖蒲を

この出羽の辨、いとをかしう風流者なるものから、「有心なること、出羽の匂ひや、色の様も殊にたん有る」と、殿上の人人云ひけるを聞きて、梅壺の女房の云ひける。

身に沁むと聞くぞゆかしき色ならで如何に染めける君が匂ひぞ

返し、

誰か然は語り散らすぞ日に添へて盛り過ぎ行く花の匂ひを

皇后宮の御方も、昔の皇太后宮の名殘り、華華と今めかしうをかしくぞおはします。此頃内裏の昔覺えてをかし。後一條院の御時は、唯中宮一所おはしまして、常人のやうにおはしまししを、此御時は様様御方方おはします。然るは御心は麗はしく、浮華ならずぞおはしましける。殿などにも、故院は任せられ奉らせ給ひて、萬づも知らぬやうにて、貴に氣高くぞおはしましける。是れはいと麗はしく、御容貌もいと清げに、才おはしまいて、善き帝におはしましけり。後一條院の御容貌もいとめでたくおはしまいて、世の人忍び參らせぬ無し。一品の宮、齋院に露の御事もおはしませば、上達部、殿上人いみじう參り、殿、内の大殿より初め奉りて、參らせ給へば、めでたうおはします。「帝の御名殘は斯くこそはおはしましけれ」と云ひ人申しける。此内裏いみじう有るべかしうおはしまいて、此宮にも、故院の御事を思召いて、東宮にも斯く參らせ奉らせ給ふ。然るべき折折、風の荒く吹くにも、御使など奉らせ給ふ。女院の御有樣のいとめ

京極殿に、一品の宮も具し奉らせ給ひて渡らせ給ひぬ。高陽院殿に一の宮、殿の上もおはします。めでたくいみじ。如何ならん事を盡して、御覽ぜさせんと思召したるも道理なり。一の宮は、女院のおはします寢殿の東面、其方の廊かけておはします。東の對は此度は無くて、山河流れ、瀧の水競ひ落ちたる程など、いみじうをかし。院の御方に、出羽の辨、

瀧つ瀬に人の心を見る事は昔に今も變らざりけり

伊勢が「塞き入れて落す」と云ひたる、大納言の家居も斯ばかりは有らざりけんと、めでたくいみじ。年廻りぬれば、所所の有樣ども、いとめでたし。梅壺の女御殿の御覺え、月日に添へていとめでたく、世の人は申せど、如何なるにか、「后にはえ居給ふまじ」とのみ申す。何事にて著きにか。この御時は、制ありて、衣の數は五つ、紅の織物などは制あり。物の榮無けれど、折折院の人の裝束などは、いとをかしく爲させ給ふ。然れど制あればいと口惜しくぞ。五月最勝の御八講に、上の御局におはします。菖蒲を皆打ちて、やがて菖蒲の唐衣、藥玉など付けて、長き根をやがて御前の御簾の前の遣水に浸して、出で居たるもをかし。麗景殿も折折の裝束をかしう、細殿にて、琴、琵琶彈き合せて、殿上人など物誦んじなどして遊ぶ。五日、加賀の左衛門、一品の宮の出羽に、

袂には如何で掛くらん菖蒲草馴れたる人の袖ぞゆかしき

と云ひたりければ、出羽の辨、

を渡りて參う上り給ふ。梅壺の御方もいと近し。東宮、一品の宮は同じやうにおはします。南面に春宮、北面に一品の宮おはします。方方に殿上人の參るも近くて聞ゆる、いとをかし。一品の宮の御方に、經家の辨、經信の少將、資仲の少將など參りて、琵琶彈き遊ぶ。辨、

　秋の夜の半の月を今宵しも

と云へば、出羽の辨、

　彈き止めつる事ぞ嬉しき

梅壺の中將、七月七日に殿上の資綱少將に、

　今宵こそ著くも見えれ天の河雲の上には有らぬ渡りか

返し忘れにけり。麗景殿の下り上り給ふ女房の衣の音、薫香の香りなど、近き程にて、をかしう心にくし。薫香の香こそ勝れたりける。鬼石宮の御方に賢くおはしまし好かるべきを讓させ給へれば、少し遺し。梅壺の女御は上にのみ物せさせ給ひて、此方にのみおはします。麗景殿の女御上らせ奉り給ひて、箏の御琴彈かせ奉り給ひけり。いと貴にをかしき御樣にて、いとをかしう彈かせ給ふ。同じ物の音なれども、貴き人の彈き給はんに逢ひてをかしきものになん。小野の宮の右の大殿、大將辭し給ひてければ、義の大納言成り給ひぬ。是れを歎きて、春宮大夫籠り居給へり。喜びなど申させ給ふさま、いとめでたし。斯くて十二月の一日、また一條院燒けぬ。あさましなども殊更の樣なり。内裏は高陽院殿に渡らせ給ひぬ。東宮は

また御返り、

　淺緑深くも有らぬ青柳は色變らじと如何が頼まん

と聞えさせ給ひけり。其年五節、臨時祭など過ぎて、師走の一日、内裏燒くべしと有る御物忌の日、況して今日明日と申したるを、然しもやはと思召し思ふ程に、二日と申しける果ての日燒けぬ。御方方出で騒がせ給ふ程、恐ろしく云はん方無し。あさましき事をのみと思召す。まことや、二條殿におはしまし時に、鵜の魚を食ひて候ひけるを、入道の大納言聞き給ひて、女御殿の御方に、鵜の魚を食ひて候ひける事など書き給ひて、

　如何でかは上の空には知りにけんかもめみゆるに世に逢へりとは

上渡らせ給ひて、御覽じて、

　祈りつつ綴ぶる網の驗には飛ぶ鳥さへも斯かるとぞ見る

是れを聞き給ひて、また大納言ぞ申し給ひける。十一月、殿上に雪山造らせ給ひて、人人詠めと仰せられ給ひて、

　天地の受けたる年の驗には降る淡雪も山と成るらん

是れは先づの事どもなり。斯くて一條院に渡らせ給ひぬ。いと狹けれども、さすがに有るべき限りなり。梅壺、下の御局はいと狹ければ、上にのみ侍はせ給ふ。麗景殿は一品の宮のおはします御格子の外より、緣

晴るくる方も無く、暑の曇りて有りしに、いとをかし。入道一品の宮、東宮大夫殿の姫君参らせ奉らんと申させ給ひて、参らせ奉らせ給ふ。一品の宮も入らせ給ひて、御対面など有りけり。三日ばかり有りて宮は出でさせ給ひぬ。大夫殿、是れもつと侍ひ給ふ。殿の大納言は権大納言殿の御供に成らせ給ひぬ。いと華やかに持て愛護き聞えさせ給ふ。内裏辺りいと今めかしくをかし。殿の宮も入らせ給へり。昔覚えて、女房など物哀れなり。梅壺の女御などの上らせ給ふを見るにも、思ひ出づる事多かり。四五日ばかりおはしまいて出でさせ給ひぬ。宣耀殿、麗景殿いと近き程にて、加賀の左衛門、出羽の弁など云ひ交はす。上の御局よりは况して向ひにて、いとをかし。琵琶、箏の琴弾き合はせ、殿上人参りなどしてをかし。四月ばかりのをかしきに、此方彼方の細殿、反橋の戸口などに、殿上人参りて、水鶏の打叩くも、尋常の所に似ぬぞ幸御なるや。猶内裏辺りに如くもの無しと、人人云ひ思へるも道理たり。まことや、梅壺の御方に昔春、上より、

春雨の降りしく頃は青柳のいと「糸、最」亂れつつ人ぞ戀しき

と申させ給へれば、

青柳のいと「糸、最」亂れたる此頃は一筋にしも思ひ寄「縒」られず。

と聞えさせ給へり。御返り、

青柳の糸は方方靡くとも思ひ初「染」めてん色は變らじ

見えて、はかなき事も故ありて物し給ふ。如何で斯く此大臣がちにて、母も無き子を生したてけん、手など書き給へる樣よと思召しけり。侍ふ人人も心にくく持て付けて、打解くる折無く、故故しき御方のやうになん有りける。七月七日、故中宮の御事を思召し出でて、若宮に、

去年の今日別れし星も逢ひぬめり例無き身ぞ悲しかりける

御返し、

秋來れば流れ增されど天の河影だに見えぬ人ぞ悲しき

東宮の御方より、一品の宮に、

逢ふ事は晩待つ星に借しつれど渡らまほしき鵲の橋

と聞えさせ給へりけり。内裏の上は直よかに煩はしき方に覺えさせ給へれど、歌の方にをかしうぞおはしましける。殿の中納言殿は數より外の權大納言に成らせ給へり。容貌、有樣、人に勝れ給へり。斯くて内裏造り出でて渡らせ給ふべし。皇后宮、二の宮の御書始にぞ入らせ給へる。あはれに大人びさせ給へるにも、年月の事思召し知られて、哀れに思召さる。やがて留め奉らせ給へば侍はせ給ふ。弘徽殿に皇后宮、藤壺には殿の姫宮達の入らせ給ふべきにて置かせ給へり。梅壺には内の大殿の女御、梨壺には例のやうに春宮おはします。宣耀殿に一品の宮おはしまいて、梨壺の北の屋を上の御局に爲させ給へり。細殿などいとをかし。反橋の妻戸、唐廂など、いとをかしう今めかし。藤壺にのみおはしまいて、一の所なれば、さすがに

御四十九日に雨の降れば、行幸の時に、田村の時、
　況して人如何なる事を思ふらん時雨だに知る今日の哀れを
また誰とか、
　霧晴れぬ秋の宮人あはれ如何に時雨に袖濡れ増さるらん
故中宮の出雲、下野が許に、
　如何ばかり君歎くらん数ならぬ身だに知られし秋の哀れを
など哀れなる事ども多かり。はかなく月日も過ぎて、内の大殿の御曹司、十二月に参らせ給ふ。宮の御事の程無きにかと殿は思召したり。今年ぞ廿六に成らせ給ひける。年頃何時しかと思召しける御事にて、殿御心を盡させ給へり。内の大殿の上は、三條院の女二の宮、此度は添ひ奉らせ給へり。誇しく人なども参らず、有り附き出場し。宣耀殿に参らせ給へり。いと愛敬づき、気高くてをかしげに、御髪などあでなる、おはしましける。覺えありて侍はせ給ふ。暫片時退かでさせ給はず、哀れに添ひ侍はせ給ふ。そのまたの年京極殿焼けぬれば、内の大殿の二條殿に渡らせ給ひぬ。あさましき事を思召し歎かせ給ふ。故院の二十餘年おはしましに、一度だに無かりし事を、程も無く斯かる事と歎かせ給ふ。この御時には明尊僧正の山の座主に成るべしとて、山の人絶り訴へしかば、殿の御理無くいみじかりき。斯くて内裏には女御殿いと覺えありて侍はせ給ふ。打解けさせ給ふままに、いとをかしく、御簾引き上げて渡らせ給ふにも、心有らんと

とて、いと美くしう物し給ひつるも亡せ給ひぬれば、いみじう思ひ歎き給ひて、母北の方は院の典侍と聞えさせつる、今は三位にて物し給へるも尼に成り給ひぬ。いみじう哀れなり。世の幸ひ人と愛でられ給ひつるに、斯くても劣り給ふべきには有らねど、大人び給へるが亡くなり給ひぬるが口惜しきなり。また姫君二所ぞ物し給ひける。民部卿殿もいみじう思し歎く。御子左殿とて、大宮なる所を、いと面白く造りてぞ物させ給ひける。水の流れ、神さびたる松の氣色など、尋常の所に似ず。斯くて中宮には又尋常ならず成らせ給へれば、世にめでたき事に聞えさす。其頃伊勢の託宣など云ひて、「藤氏の后おはしまさぬ、惡しき事なり」とて、内の大殿の御匣殿參らせ給ふべしと云ふ事出で來て、七月朔日頃と準備がせ給ふ程に、六月廿七日内裏燒けぬ。内裏は京極殿におはします。一品の宮は御堂に、女院へ出でさせ給ひぬ。あさましう「年頃斯かる事無かりつるに」と、内裏にも思召し歎かせ給ふ。讃岐守憲房が家の近衞なるに渡らせ給ひぬ。寢殿に一品の宮、女院おはします。西の對に東宮おはします。女院のおはします京極殿に、内裏渡らせ給ひぬ。前の齋院は故宮の御處分なる小二條殿造り改めて渡らせ給ひにき。内の大殿にも口惜しき事に思召しける。九月に中宮此度も女宮生み奉らせ給ひて、九日と云ふに崩せさせ給ひぬれば、哀れにいみじき事を思召し歎かせ給ふ。姫宮を殿の上、御形見と撫で愛護き奉らせ給ふ。阿波の大進下らんとて、入道一品の宮に參りたりけるに、斯かる御事にて留まりぬらんとて、相撲がおこせたりける。

時雨する秋の深山の嵐には世に大淀の船出せじかし

など書かれたる、いと哀れなりければ、常の人の言とは覺えぬも哀れにめでたし。三月ばかりに、院、内裏に入らせ給ひたり。路など隙無くて、一品の宮に御對面無し。宮より、

君は猶散りにし花の木の下「子の許」に立ち寄らんとは思はざりしを

御返し、

花散りし路に心は惑はれて木の下「子の許」までも行かれやは爲し

御手などいと若く貴に書かせ給へり。斯くて淸涼殿壞たれて新しく造らるべしとて壞つが、藤壺より見ゆるも、いと哀れにて、

動き無き玉の臺と見しものを淚と共にこぼれぬるかな

また人、

曇り無く磨きし時は思ひきや淚降る屋「舊屋」にこぼれ果てんと

數多ありしかど忘れにけり。中宮出でさせ給ひて、御修法、御讀經數知らずめでたし。女宮ぞ生れさせ給へる。口惜しと思召せど、御乳母、然るべき人々數多參る。程無く入らせ給ひぬ。姫宮も入らせ給ひぬれば、内裏には前帝の宮達の餘所におはしますに、珍しく愛くしと見奉らせ給ふ。女院は盡きせず故院の御事を思召して、有りし樣に物好みも爲させ給はず、女房なども、衣の音甚く高くもせず、靡やかに、いとどもてなしたり。「世は再びも」と仰せられしかど、猶一院に背き果てさせ給ひつ。其頃民部卿の御子の大夫の君

び申しなどし給ふ。いみじうめでたし。皇后宮には、齋宮伊勢に下らせ給ふ。齋院は本院になど、皆外外におはします。貴き人も猶苦しげにおはします。内裏の御心、いとめでたく有るべかしく、直直しうさへ有りて、制も嚴しくなどぞおはしましける。御容いとめでたくおはします。一品の宮をいと心苦しう思ひ聞えさせ給ひて、雨風の荒き音なひに付けても、御使奉らせ給ひ、故院の申し置かせ給ひし思召せば、辱なくて哀れに思ひ申させ給へり。淸涼殿には北塞がりて、まだ内裏にはおはしまさず。秋の月隈無きに、人人歩りきて見るに、南殿へ上らせ給ひし長橋の朽ちたるを見るも哀れにて、

　君が代を渡しも果てぬ長橋の何にか僞まし我れ朽ちずとも

　盡きもせずめぐりて見れば影をだに留めざりける君ぞ悲しき

　何事も變らざりける百敷にあはれ君しも何地なりけん

また宴の松原にて、

　哀れにも今は限りと思ひしを又めぐり逢ふ宴の松原

など云ひ集めたる言ども書きたる草子を、院の女房の見んと有りければ、奉りたるに、書きて押し付けられたる。辨の命婦、

　掛けて聞く片端「橋」だにも悲しきに同じ邊り「渡」を如何に見るらん

　かき絕えて影見ぬ闇に惑ふかな月も澄みける昔ながらに

ひて、二の宮に思ひ志し聞えさせ給へり。別當とは公成の兵衛督なり。御服果てて、一品の宮、齋院の御髪剃がせ給ふ。殿ぞ剃ぎ奉らせ給ふ。色色の菊の御衣の上に白き唐綾奉りて一品の宮おはします。いと氣高く、華華と、めでたくをかしげにおはします。御髪の掛かりなど、繪に書くとも筆に及ぶまじ。齋院のいと見めかしく、らうたげに美くしうおはしますを、樣樣に有り難く見奉らせ給ふ。故宮、故院の御事を思召せば、此殿ばらも疎かにえ思ひ聞えさせ給はず。其頃は、殿の中將ときこえしは、中納言にて物せさせ給ふ。御容いとめでたく匂はせ給へり。內の大殿の三位中將、今は中納言にて物せさせ給ふ。小一條院の高松殿の姬君にぞ婿取り聞えさせ給へる。一品の宮、其年の十二月の十三日に御裳奉りて、やがて其夜春宮に參らせ給ふべしと、準備ぎ立たせ給ひたり。殿準備がせ給へば、故院のおはしまいしにも劣らず。其頃氷を扇の形にて、御硯の蓋に置きて、東宮の御方より此御方に奉らせ給へれば、敷きたる紙に葦手にて、出羽の辨、

　君が代に扇と見れば氷すら千代をかねてぞ結び貫く

と書き付けて參らせ給へり。其日に成りぬれば、春宮の御裝飾は寢殿の西面にし、一品の宮の御方は本の東面なれど、今少し廣く、中の戶の此方、やがて裝飾はせ給へり。御帳などは殿より奉らせ給へり。葡萄染の二重織物、一重は打ちたる、白き紋を居ゑたり。紐は紅梅、靑きに梅の折枝を織物にもし、織物にも織りたり。いとおどろおどろしうめでたし。御調度は故院の作物所にて心殊にさせ給へりしかば、いとめでたく尋常ならず。御櫛の筥、片つ方は常の黃金の筥、今片つ方には透筥なるを、二つづつ殿上人に賜は

宮の御返し、

方方に引き別れつつ菖蒲草合はぬ根をやは掛けんと思ひし

と聞えさせ給へるを、いと哀れと思召す。内裏には齋宮をぞいみじう愛しうし奉らせ給ひける。男宮をば、また如何でかは疎かには思ひ聞えさせ給はん。女二の宮をば、いと愛しう持奉らせ給ひける。中宮は藤壺といとめでたくておはします御有様、世に氣高くおはします。六月に内裏の一の宮御元服せさせ給ひて、東宮に立たせ給ふ。思ひつつる事なれど、差當りてはいとめでたし。大夫には、やがて春宮大夫、權大夫には權大納言、亮には近江守時輔、權亮には内裏の大殿の公成の侍從、宣旨には宰相の乳母、備前の前司長經の君の女なり。大進には伊豫の守仲行なり。京極殿の寝殿に、東面には一品の宮、北面には院の御料、齋院とおはしまいて、西の對に東宮の御装飾に飾りたり。一品の宮の御裳着果てんままに、御裳奉りて、東宮に參らせ給ふべし。「内裏に」と故院は申させ給ひしかども、后も數多おはします、御年も此上無しなど思召すなるべし。十月に院に行幸あり。いとめでたくおはしますにも、二所打續きておはしまししは、先づ思召し出でられて、かき暮らし思召さるれど、然りげ無く紛はしておはします。中宮には、前栽合、菓合など催させ給ひて、をかしき事多かり。皇后宮には、萬づを外に聞かせ給ひて、思召し歎く事限り無し。大夫は故中宮の御忌の程煩ひ給ひしが、ともすれば起り給ひつつ煩ひ給ふ。故皇太后の御折より、此宮をば取り分き扱ひ聞えさせ給ふ。枇杷殿焼けにしかば閑院におはします。大夫殿の上は、別當の御女を愛護き奉り給

立たせ給ふ。一品の宮をば皇后宮、此宮をば中宮と申す。大夫には民部卿、權大夫には公成の兵衛督、亮には頭辨經輔、權亮、大進、行親、泰憲などなり。宣旨には故左兵衛督の女、但馬守則理の朝臣の女、御匣殿には左衛門督の女、左の大殿の女御の御腹の姫君なり。中務の宮の御女など侍ひ給ふ。皇后宮は陽明門の院におはします。女一の宮は齋宮、女二の宮は齋院、「左の大殿の上に成らせ給へりト云フ句アレド後人ノ注ナラン」男二の宮は一つ院におはします。皇后宮、一二の宮、齋宮、齋院に居させ給ひぬれば、一所若宮打遊ばし聞えさせ給ひて、物をのみ思召しておはします。中宮は程無く入らせ給ひぬ。皇后宮は入らせ給へと有れど、如何に思召すにか、入らせ給はず。まことや、女院は月日の行くも知らせ給はず、思召し入らせ給へり。北の政所も、宮のおはしまいしかばこそ内裏にも參りしに、思ひ滯りしかとて、一向に剃り捨てさせ給ひておはします。院の西の對の南西掛けて、一品の宮おはします。北東掛けて齋院はおはします。いとど愛くしげにて、鈍色の御衣透き透きなるに、いと黑き御衣重ね奉りて渡らせ給へる、いと哀れなり。御前の庭曇り無きに、月の明さを眺めて、昔思ひ出で參らする人なるべし。

　曇り無く尋ね行かばや月よりも明き蓮に君を住ませて

など、忘るる世無く戀ひ忍び參らす。四月は故院の御果てにて、いとど「今朝鳴く聲に」驚かせ給ふ御心の中ども云ふ方無し。九月までは宮達猶黑くておはします。五月五日、内裏より皇后宮に、

　諸共に掛けし菖蒲を引き別れ更に戀路「小泥」に惑ふ頃かな

いみじくめでたきに、さし雙びおはしましいしは、又いみじかりし事ぞかし。大頭など云ひて、例の恐ろしげに筋太き紙縒り掛けて、さすがに麗はしくて渡る。馬に乘りに持たれば、心心にて、「やや」云ふ程もをかし。內裏の女房十人馬にて仕うまつるこそ、如何に顯證に理無からんと、いとほしけれ。殿此度は御車にて、引き後れて候はせ給ふ。一の宮いと美くしき御直衣姿にて、まだ童にて、御乳母達、御車の後に乘せさせ給ひこ、御覽ずる、いとめでたし。大嘗會、例の月日の標山引き、卑しの者まで、靑摺に赤紐艶めかしうて、急ぎ歩み倒れぬべく、惡しき道を續き立ちて行くもをかし。然るべき人は歩まで、人より後まで敬持かれ、肥大りたる近江守などは、人に押されなどして、歩み行くもをかしくなん。猶尋常の事にはあらず。今年は五節舞ふ人は、皆位冠など賜はる。女御代、內裏に參り給ふべしと聞ゆれば、今だにと思すべき內の大殿、春宮の大夫、只今は思し斷えたり。年も暮れぬ。晦の日、權大納言、一品の宮に參り給へるに、宣旨の君、

憂きもののさすがに惜しき今年かな遙けさ增さる君が別れに

返し、權大納言、

悲しさはいとゞぞ增さる別れにし年にも今日は別ると思へば

また大納言、手習ひに、

春立つと聞くにも物の悲しきは今年の去年に成ればなりけり

出羽、

　數多さへ別れの道を知らましや君に後れぬ我身なりせば

御帳の前に、いと事事しくて向ひ侍ひし獅子、狛犬の、人離れたる壁の下に捨て置かれたるを見るも、いとど哀れにて、

　見る儘に夢まぼろしの世の中は獅子の果てこそ悲しかりけれ

宣旨の君、

　然もこそは君が守りの失せぬとも斯くやは獅子の果ても有るべき

五節、臨時祭の程なども、斯かる事ども多かれど止めつ。世の中は御禊、大嘗會など云ひて、心長閑かなる折無し。北野の宮にとて、里人出で立ちなどすれど、此宮にのみぞ哀れに濕やかにて、盡きせず昔を戀ひて、宮達の幼なくおはしますを見奉り仕うまつりて、涙の干る世無くて明し暮しける。女御代には故式部卿の宮の姫君、殿の上の子に爲奉らせ給ふ、立たせ給ふ。御禊の有樣いとめでたし。先帝は廿一年位におはしましかば、絶間久しくて珍しく思ふべし。絲毛にて、女御代は、殿の上一つ御車にて渡らせ給ふ。また奉りたるを放ちて、絲毛、黄金造り、檳榔十、女房四十人、童女八人、例の作法なり。色色二つづつに、萠黄染の上衣などに有りけん、十二三ばかり重なりたり。下仕の挿したりしなど、尋常の事には似ず面白くめでたし。御輿の内のめでたさ、物物しく鮮やかにめでたくておはしますに、猶女院の御有樣は、

十月廿一日、宮宮は院に渡し奉り給ひつ。人人は猶留まりて侍ふに、宣旨の君「退かで給はざらん前に、今一度參らん」と述給へるに、出羽の辨、

　君在さぬ舊き宮には淚河渡るばかりの瀨こそ無からめ

返し、

　斯くばかり淚の雨の日を經ればげに宮城野も海と成るらん

人人「今は」とて退かづる程に、宮の亮爲善、雨の降るに、

　泣く淚天雲霧りて降りにけり隙無く空も思ふなるべし

返し、

　悲しさぞいとど數添ふ天地も君を戀ふると見ゆる氣色に

「一品の宮より」とて有る御文に、「仰事繁になん」とて、宣旨の君、

　もみぢ葉の心心に散りぬとも木の下「子の許」は猶思ひ出でなん

返し、

　もみぢ葉の木の下をだに賴まずば散るにもいとど悲しからまし

また「今や出で給ふ」とて、齋院の小辨の命婦、

　悲しきに添へても物の悲しきは別れの中の別れなりけり

前栽もやうやう枯れ枯れに成り、蟲の音も弱り行き、雁の連れ渡るも稀かれ、七條の后崩御し給へる折、「荒れのみ増さる」と、伊勢が云ひたる程の心地も、斯ばかりや有りけん。檀那、宿直所に、長閑やかに經など讀みて、眺めける氣色も哀れなるに、云ひ遣る。

出羽の辨、

　目の前に斯く荒れ果つる伊勢の海を外の渚と思ひけるかな

返し、兼隆、

　往時の海人の住みけん伊勢の海も斯かるなぎさは有らじとぞ思ふ

御前の火焼屋を見て、肥後の命婦、

　君が侍る年經て見えし火焼屋の今は我身の胸を燒くかな

出羽の辨、

　美くしき飾りと見えし火焼屋も今日は心を焦すなりけり

齋院の小辨の命婦、

　如何にせん衛士の焚く火も消え果てて長き思ひに燃えぬべき身を

また、

　木枯の風に任する紅葉だにまだ散らぬにも人は散れなん

もにも、思し惑ひ戀ひ申させ給へる、いみじう哀れなり。女房認も惜まず泣き惑ひたる、云ふべき方無し。物思ふとても、斯く心に任せたるやうなる事は難きものを、いとあさましく哀れなり。一品の宮は女院におはしますべければ、關白殿にぞ聞えさせ給ひける。宮達の院に渡らせ給ひし程は只今の事ぞかし。例ならず起きさせ給ひて、見奉らせ給ひし御有樣の、涙に浸ぢて、明し暮させ給ひて、引き裝はせ給ふ事も無かりしかど、御髮の淸らに、露も亂はせ給はず、大方も重りかに、恥かしげなりし御樣になんおはしましける。萬づに思ひ出で參らする事多くて、女房達思ひ惑ふ中にも、出羽の辨は死ぬべしと人人いとほしがる。母屋の御簾少し參りて御饌參る。御給仕は命婦の君、左衞門の內侍、侍從の內侍、出羽の辨などやうの人人取りて參る。平常におはしまいし折、然樣のみ仕うまつりし人人よりは、立ち勝りたる人して仕うまつらせ給ふ。中宮の大夫は亡せ給ひにしかば、權大夫ぞ大夫にてやかで物し給ふ。殿は籠らせ給はず、大嘗會、御禊などの事行はせ給へば、日頃過ぎ、長閑やかなるしも、物の哀れなる事は增さり行く。「物覺ゆる今日は如何にせん」とは、眞にぞ。女院いみじう哀れなる事を、いとど思召し、「我が命長さこそ恥かしけれ、宮は心に任せたるやうにこそ物し給ひけれ。斯く立ち後れ奉りて、一日にても在らんと思ひけんや」と思し宣はす。內裏の一の宮は高陽院殿に、御乳母達など具しておはします。二の宮は一品の宮の御腹に三つばかりにておはします。女一の宮は齋宮に、女二の宮は齋院に居させ給ふべしなど聞ゆ。斯くて、鷹司殿には、頃さへいみじう哀れに、秋の暮つかた「有るを見るだに」と、吹く風も身に沁みて哀れなり。

思召し立たせ給ひにたり。此宮達の御事を、院のいみじう樣樣に思ひ聞えさせ給へりしものをなど、いみじう哀れにのみ思召さる。一品の宮の御事をいみじう思召したりしに、二の宮のいみじう傅き聞えさせ給へりし、齋院に成らせ給ひにしかば、心苦しう哀れに、ゆかしう思ひ聞えさせ給へりしものを、やがて見奉らせ給はず成りにしなど思召すも、いみじう哀れなり。此宮達をも見奉り果つべきにもあらずと、物心細くのみ思召さる。御心と沈み増さらせ給ひつつ、世を厭はせ給ふ御心深し。「一品の宮はやがて院におはしますべく」など申させ給ふにも、齋院の御事をぞ、また心苦しう思召しける。女院には待ち付け聞えさせ給ひて、いとどしき催しなり。「如何に多かる」とは頓にこそ。此方彼方珍らしげ無く、「唐土船」も寄せつべかりける。打過かひ、えも云はずめでたくをかしげにて、御年の程よりも御髪は長う美くしうて、黒き御衣奉りつつおはします。いみじう哀れなり。一品の宮の御供には、中宮の宣旨、少將の命婦、右衞門の内侍、小馬の内侍、齋院には中納言の典侍、侍從の命婦、出羽の辨など侍ふ。故院の人人の交りて侍ふを聞かせ給ふにも、いみじう哀れに思召さる。三四日ばかり有りて、歸り渡らせ給ひぬ。其年、疱瘡夏より出でて、人人煩ひけるに、中宮、初めの度、然もおはしまさざりける、然樣の御氣色おはしましける、憎ましさに事托けさせ給ひて、九月三日の程に、尼に成らせ給ひぬ。然るべき事とは思召しながら、差當りては鷹司殿の上も、侍ふ人人も、いみじと見奉り思したり。いとめでたき御髪を削ぎ果て奉りつれば、他人にておはしますも、いみじう哀れたる事なり。九月六日崩ぜさせ給ひぬれば、云ひ遣らん方無くいみじ。宮宮の幼なき御心地ど

兵衞の内侍、

さやかなる月も涙に曇りつつ昔見し夜の心地やはする

五節の君、月の明き夜、

雲の上に見し夜の君が無ければや月も涙に曇るなるらん

五月雨はいとど晴間無く、軒の菖蒲も知らず顔にて過ぎぬ。はかなくて御法事なども過ぎぬれど、御心どもは晴間無くて、明し暮させ給ふ。齋院は下りさせ給ひにしかば中宮におはします。今年ぞ八つに成らせ給ひける。御髮は肩ばかりにて、黑き御姿いみじう哀れなり。一品の宮は十一におはします。御髮、御身長に唯だ少しぞ足らせ給はざりける。女院見奉らせ給はんと聞えさせ給へば、八月晦日方に渡らせ給ふ。黑き御單襲に黑き御小袿奉りて、二所ながらおはします。今日ぞ大宮も少し起き上がらせ給ひて、見奉らせ給ふ。乳母達皆引き裝ひ奉り給へれば、いとどいみじうをかしげにて並びおはします。大宮、日頃にいみじう面瘦せ給へるしも、御色は雪恥かしうて、黑き一重の御衣に、御髮は御衣よりは色にて、いと煩たくは有らで、艶艶と御衣に溜まりたる程、いと哀れに艶めかしく、心苦しう見えさせ給ふ。母屋の御簾に、御屛風添へておはしますを、少し疊み除けておはしますを、女房など、いと哀れに珍しく見奉る。一よし見よ、我れ見しと思召したるも、いみじう哀れなり。いみじう若き年にて、皆單襲一つなとを奉りたり。此方彼方に、御乳母達、尋常の女房三人ばかり參る。美作三位も、尼に成りて侍ひ給ふ、いと哀れなり。宮も然樣に

世の中の哀れなるには大空の雲も涙を惜まざりけり

などぞ聞ゆなりし。御乳母の典侍、假初に退かでて、尼に成りにけり。子の縫殿助と云ひけるも、法師に成りにけり。

大方の餘所の雨とや思ふらん戀ふる涙の降ると知らずや

後れじと思ふ心に背けども此世に留まる程ぞ甲斐無き

など、物覺えぬ心の中に覺え給ひけり。少將の内侍、

今までも世に在り經んと思はぬを背く道にも後れぬるかな

女院に僧の裝束せさせ給ひて、御念に籠れる僧に賜はせんとて、故院の御方の女房に縫はせさせ給へば、

今朝見れば歎き明せる涙には右の袂ぞ顯はれにける

御服に成る夜、女院の兵衛の内侍、

形見とて著れば涙の藤衣しぼりも敢へず袖のみぞ漬づ

御葬送の又の早旦、いみじう雨の降りければ、

上りにし煙は雲に紛ひつつ忍びも敢へぬ雨の音かな

是れも女院の女房、

戀ふる間にいや遠ざかる別れには止めん方も無きぞ悲しき

形見にと思ひ寄るより青柳の目〔芽〕の暇〔糸〕無くや悲しかるらん

など忍びつつ、涙の隙には云ひ交はしける。顯基の中納言、人よりは殊になどや思召しけん、法師に成り給ひにけり。世に哀れなる事に云ひ喧騒る。女院より御消息遣はしたりけるに、

世を捨てて宿を出でにし心にも猶戀しきは昔なりけり

と申し給へりければ、侍從の內侍、

時の間も戀しき事の慰まば世は二度も背かなましを〔此句不背かれなまし〕

仰事めきて有りけるなるべし。內裏よりとて御使の參り、御文など參らせさせ給へるにも、先づかき暗してのみ思召し惑はせ給ふ。御葬送の夜、

出羽の辨、

掛けまくも思ひ初めてし君なれば今も雲居を仰ぎてぞ見る

中宮亮兼房が許に、入道一品の宮の相摸、

程經れば慰む方も有るべきを絕えぬ涙の雨は如何にぞ

齋院の下りさせ給ひける夜の有樣などの、いみじう哀れなりけるを、或人、

掛けてだに思はざりけん去年の今日葛城山に跡絕えんとは

四條中納言定賴、

も、章任の伊豫の守、資綱、經房、義通など仕うまつる心地ども思ひ遣るべし。兼房の中宮の亮、云ひ續けて泣く聲のおどろおどろしきも哀れなり。昔は斯く位にて崩せさせ給ふは、正無き事多く、所狹かりけれど、今の世は、然る嚴しき事も無し。關白殿も同じ殿におはしまし、今の上も如何でかは情無くもおはしまさん。院も、宮も、唯だ亡き人にておはします。二十一日の夕さり、京極殿の東の對におはしまして、其處にて御念佛など有るべければ、曉に中宮、一品の宮も、北の政所のおはします鷹司殿に出でさせ給ふ。位ながらの御有樣は、所狹くいみじかるべければ、太上天皇に成し奉らせ給ひてけり。殿は今の內裏の御事ども行はせ給へば、內大殿、他殿ばらぞ添ひ奉らせ給ひて出でさせ給ふ。曉の月の隈無きに、物覺えぬ心の中に覺えける。出羽の辨、

　めぐり合はん賴みも無くて出づべしと思ひ掛けきや有明の月

女院も、京極殿に出でさせ給ひぬ。院も、宮も、おはしますやうにも無く、沈み入らせ給へり。鷹司殿の上は、待ち付け聞えさせ給ひて、萬づに慰め聞えさせ給へど、「螺捨」にのみぞ書き誦すべくもあらず。關白殿、內大殿、殿ばらより初め、泣き戀ひ聞え給はぬ人無し。殿の內には、初めて、世の光を取り出でさせ給ひしより初め、御心ばへのめでたくおはしまして御年の程惜しく、いみじく夢かと思し惑ふ。女院の御心の中に、生れさせ給ひし程、殿の思し喜びしより、今日今までの御心など、萬づをば申すべきにもあらず、唯だ戀しう悲しういみじう思召し惑はせ給ふ。中宮も露の御湯をだに聞し召さで日頃に成らせ給ひぬるを、

く篤させ給ひて、「我が今日斯くて有るべきものと思ひけんや」と仰せらるるは、御覽奉らましものをなど、思召すなるべし。今年ぞ廿九に成らせ給へば、まだいと盛りに惜しき御程なり。院も、中宮も、如何に如何にと思召す。殿、内大臣殿、然らぬ殿ばらも、片時退かで給ふ事無く侍ひ給ふ。御祈り、世の中揺すり満ちたり。如何がおはしまさんと、いとこそ恐ろしけれ。

著るは侘びしと歎く女房

内裏の御悩み、日を経て重らせ給ひて、四月十五日ばかりより、日毎に絶え入らせ給ふ。女院、中宮殿に昏れておはします。三位達も、いと睦まじき人なれば、一つにておはします。終に四月十七日の夕方崩せさせ給ひぬれば、二所ながら、院も宮も同じ様にておはしませば、聞えさせ煩ひて、斯くてのみは如何でかとて、御兄弟の殿ばらぞ、下の御局に、御衣に押し括みて率て下ろし奉らせ給ふ。今暫しだに長閑かに見奉らせ給ふべきを、御心にも有らず、いみじう思し惑はせ給ふ。御讀經漫り聞えつつ、いといみじ。世の中揺すり満ちたる心地するに、確かに聞えさする人も無けれど、一品の宮の幼なげに泣かせ給ふも、いみじう哀れなり。何時の間にか、東宮の御方には、除目ありて、頭、五位藏人、六位藏人など成り、萬づに、皆獅子、狛犬、日記の御厨子、御劔など渡り、引き代へたる有様、夢の心地なんしける。例の作法に、御乳母子ど

ならずと思したり。御屏風の繪、此國の、唐の、繪所に、繪師召して、いみじく爲させ給ふ。女房の裝束、裳、唐衣、上衣、童女の裝束など、人人當り、三日が程、大人三十人、童女六人が裝束を、色色樣樣に、尋常ならずと思召す。明くれば、先づ渡らせ給ふ。御調度召して、且つ御覽じ、其事、彼の事など、他事無く思し準備がせ給ふ。貴に氣高くおはします御心にも、此道に限り無き御事にこそ。經任の辨、宰相に成りて、後家の中將、頭に成り給ひぬ。御心に思召しけるは、限り有る位なりとも、此頃東宮に讓り聞えて、一品の宮をやがて參らせ奉り給はんと思召す。世の人は若宮にぞ參らせ奉り給はんと思ひ申ししかど、如何に思召すにか、東宮にと思召す。然りとて、前の一品の宮、疎かに思ひ參らせ給ふべきにあらず。唯だ見る世に、今少し動き無く見奉らんと思ふなりなど、人知れず御文通ひけり。斯かれど、內裏には、內大臣の御匣殿參らせ給ふべしと申すは、如何なる事にか。內裏には水聞し召し、面痩せさせ給ふなどぞ人人申すめる。如何なる御事にかと、思し歎かせ給ふに、三月晦日よりは、わざと苦しう爲させ給へば、中宮も上らせ給ひて、上の御局におはします。御裳著の延びぬれば、いと口惜しき事に思召す。然るべき人人は、如何なる事にかと、人知れず思ひ歎き給ふ。女院も入らせ給ひぬ。四月朔日に成れば、わざと苦しうせさせ給、ば、御修法數多始めさせ給ふ。御祈り殘る事無し。殿ばらも退かでさせ給ふ折無く侍はせ給ふ。御物の怪ども移りて喧騷る樣、いと恐ろし。例の堀河左大臣殿、女御殿具し給ひて出でおはし、然らぬ者、樣樣名告り、いと苦しき御心地に添へても、一品の宮の御裳著の事延引きぬるを、口惜しく思召して、七日程苦し

五月闇天つ星だに見えぬ夜に照射のみこそ山に見えけれ

右　　赤染

五月闇火串に掛くる燈火の後ろめたくや鹿は見るらん

右歌善しとて、輔親其方に心ある程に、左人人「燈火とは、例の人の宿に點すをこそ云へ、更に斯からず」と申すに、「古き歌に點す火はと詠みたり。然らねど、火串に斯くと云ひつれば、他燈火を然云ふやう無し」と申せば、輔親も、眞に歌は心ばへあり、をかしけれど、斯ばかりにても然か云はれぬればとて、右負くるに爲す。

九番　左　祝　　能因法師

君が代は白雲掛かる筑波嶺の峰の續きの海と成るまで

右勝　　資房の少將

思ひ遣れ八十氏人の君が爲め一つ心に祈る祈りを

左歌、山の海と成り、海の山と成りけんもあい無し。海は海、山は山にて有らんこそ善からめとて。

十番　左　戀　　能因法師

黒髮の色も變らぬ戀すとてつれなき人に我れぞ老いぬる

右勝　　春宮大夫賴宗

五番　左勝　瞿麥　　四條中納言定頼

床夏の匂へる庭は唐國に織れる錦も如かじとぞ思ふ

右　　赤染

庭の面に唐の錦を敷くものは猶床夏の花にぞありける

猶床夏と云ふこと惡ろしとて、右負けぬ。

六番　左持　郭公　　義忠朝臣

啼かぬ夜も啼く夜も更に郭公待つとて安き睡やは寢らるる

右　　赤染

夜もすがら待ちつるものを郭公またとも啼かで過ぎぬなるかな

七番　左勝　螢火　　左馬頭良經朝臣

澤水に空なる星の映るかと見ゆるは夜はの螢なりけり

右　　赤染

名に立てる五月の闇も無かりけり澤の螢の飾ふ光に

八番　左勝　照射　　式部少輔公資

右　赤染衛門

宿からぞ月の光も勝りける夜〔世〕の曇り無く澄めばなりけり

二番　左勝　五月雨　相摸

五月雨に御津の御牧の眞菰草刈り干す隙も有らじとぞ思ふ

右　東宮學士義忠朝臣

五月雨の空を眺むる長閑けさは千代を兼ねたる心地こそすれ

三番　左　池水　式部大輔資業朝臣

千代を經て澄〔住〕むべき水を塞きれつつ池の心に任せたるかな

右　少納言經家

年を經て住〔澄〕むべき君が宿なれば池の水さへ濁らざりけり

塞きるる惡ろしとて右勝。

四番　左　菖蒲　左馬良賴朝臣

あやめ草尋ねてぞ引く眞菰刈る淀の邊りの深き沼まで

右　東宮大夫賴宗

昔より盡きせぬものは菖蒲草深き淀野に引けばなりけり

指貫、青色にて、黄金の洲濱に、池の緑青したる、黄金の常夏の草むらを彫まれたり。讃岐は河に書きたるぞなと、心にくき程に、早き花に蝶のいみじうをかしきが十ばかり居たるなりけり。負方の物は、內裏の御前と申して、竹の臺より抽き出でたるを、籬には椅たり。鑓水、池の石立てて、撫子の草を下草にて、色色の蝶飾して造りたるを、蓮葉と見させばをかし。斯くて殿人取りて、負方には據たり。左右揃へて方分きける程に、殿の若君左に渡り給ひにければ、興ましくてかなはねとて、右は輔た論題なり。左の講師左中辨經長、右の講師右中辨資通參りて侍たり。三位侍從ぞ此歌の勝負定むべき人にて召したる。試の籌し惡しは如何が定むらん。簀子にて居たる面持、青色、皆に着さるる心地して、是れより外に誰をかはと見えたり。暗う成れば、火など點して、左行經の小將寄りて、御簾を掲げて、取り物に金銀の籌を瑠りて、脚の心を推測に書きたる箇を一つづつに取りて、講師經長の筆に取らす。歌は內裏の御乳母侍從內侍、書きたり。右には女房の右衛門佐、硯居ゑたる常夏の枝を折れて、資通に取らす。少く近く參り寄りて居たり。左は米、右は雨にぞ在りける。講ずる程、限り無くをかし。夜やうやう更けて、月の澄み昇りたる程、池の心清さも、歌の題の心さへ添ひてをかし。殿の女房の裝束は、羅を撫子にて、色色にて登り重ねたり。眼に傾ききやうに人の思へれど、斯く云ひ云ひて書かざらんも本意無ければなん。

一番　左勝　月　　　　四位少將行經

夏の夜も涼しかりけり月影に庭白妙の霜と見えつつ

り。左には殿の若君、行任が子、範國が子、章任が子、右には家經が子、範永が子、賴國が子分たせ給へり。是れは御賀に舞せし人の子なり。右少し事違ひたるやうなり。十二日に成りて、上達部の然るべく若やかなるを分たせ給ひたり。左には兼賴の宰相中將、公成の左兵衞督、右には顯基の宰相中將、隆國の右兵衞督と述給はす。何時しか如何がと思ひ申す。申の刻ばかりに、左の方の人人、色色の羅を屋形に張りて、黃金の常夏の花押したる船、二つに乘りて、笛氣色ばかり吹きすさびて、伊勢の海歌ひて、池の心に任せて、棹さして參るを見れば、二藍の直衣、指貫に、紅の打ちたる白き單衣をぞ著たる。藏人は織物の指貫、青色の水に映りたる影をかし。池の上の反橋に船を寄する程に、上達部二人立ちて向ひて、然るべき人人少しばかりを具して、參り居たる後に、藏人俊經二藍の美くしき取りて、擴げ敷くを見れば、紫の浮線綾に、青き象眼を付けて、伊勢海と云ふ催馬樂を、蘆手に縫ひたり。鏡の水、黃金の砂子など爲たる洲濱を、季通、貞章取りて、打敷の上に居う。黃金の透箱を彫り物に爲たる、黃金の机に居ゑたり。負指の物は、黃金の洲濱に沈の石立てて、鏡の水など爲たる上に、尾上の松を植ゑ移す樣に爲たり。章、負指と思しくて居たり。斯かる程に、右人間近くなる程に、車の音續け、先追ふ。眞に山川の淺つ瀨の音よりも騷に喧囂りて參る。殊更にすると聞えてをかし。劣らず爲んと思ひし事の違ひぬるが口惜しきなるべし。先づ然るべき人人は、俊家の中將、常夏の出だし打衣、二藍の直衣、青色の織物の指貫、通基の四位侍從、二藍の直衣、青色の織物の指貫、濃き打衣、實綱の少將、二藍の直衣、指貫に、青き織物の單衣、藏人二人、織物の

返し、御前の撫子を折りて、源少將、

　百敷の花や劣れる霧分けて立ち交るらん野邊の錦に

新嘗會の日、雨の降り暮らすに、源少將、

　日影も見えず曇る今日かな

江侍從、

　天照す豐の明りと思へども

と云へりけり。一條院の一品の宮をば、入道一品の宮と申す。皇太后宮のをば、東宮の一品の宮と聞えさす。當代のと三人おはします。齋院は二品におはしませど、年官年爵賜はらせ給ふ。春宮の一の宮は、内裏に御子もおはしまさねば、疑ひ無き儲君と思ひ申したり。越後の辨は此宮の御乳母にて侍ふ。三月に、藤民部卿亡せ給ひぬ。口惜しき事に朝廷より初めて思召す。大納言に左衞門督成り給ひぬ。源大納言と聞ゆ。内大臣殿の太郎三位中將、二郎信基、三郎信長と聞ゆる。二所ながら侍從にて物し給ふ。四郎は法師にて、長谷の僧都に奉り給へれば、いみじきものに愛護き聞え給ふ。殿には御子のおはしまさぬ事を、口惜しなども世の常なり。上の御兄弟の源大納言、内大臣殿の中將をぞ子にし奉らせ給ひける。若君一所こそ十ばかりにておはしますめれ。鷹司殿の上ぞ具し奉らせ給へる。御容美くしう愛敬づき、ふくらかに匂はせ給へり。故式部卿の宮の左兵衞督の女の腹なりけり。殿に二所候ひけるを、姉君は則理の但馬守の妻にておはす。

瑠璃の女御と世の人聞ゆめり。蕾名なるべし。昔も今も斯かる幸ひ人見え給はぬにこそ。五月十餘日ばかりにぞ、如何に思召しけるにか、檢非違使など立つべき宣旨下りけるこそ、院は世の中變しと思召したる、道理なり。內大臣殿は此院の御妹の女二の宮をぞ上にておはします。御心掛ありて、いとほしく、世評も惡しく聞えかせ給ひけり。御女御參らせ奉らんとは思し道給へど、中宮にも御氣色賜りて參らせ給ひて、宮達を誘ひ聞えさせ給ふ。院の麗景殿に渡らせ給ひておはします。殿の上に御調度など有り。殿の御前は如何ならん淸淨を盡しても御覽せさせんと思召したり。泉の上の渡殿に、四條中納言參り給へるに、出羽の辨參りたるに、殿、內より御火取持ちておはしまして、薫香せさせ給ひて、薫ひおはします。なかなかいと惜しく、物聞え給ふも打出でにくく覺えけり。皆に靡きたる心地す。其句伊豫の中納言の君、瀧の音を聞きて、

沸きかへれ岩間をなくて瀧の絲の亂れて落つる音高きかな

出羽の辨、

絶くれども沫にも有らぬ瀧の絲を常に寄「縒」りても見えはしきかな

など、はかなき事を云ひつつ明し暮すも、をかしくなん有りける。八月晦日に、殿上の人人、嵯峨野に花見に行きたるに、中宮の臺盤所に、女郎花の小さき枝を、国の貢を引き變りて挿したるに、書き付け侍る。東宮權大夫、

一枝の花の匂ひも有るものを野邊の錦を思ひ遣らなん

きにておはしましけるにこそ。三月晦日方に、藤壺の藤の花、えも云はず面白く塀に咲き掛かりて、御溝水を遣り水に堰り分けて流させ給へるに、咲き掛かりたる、いとをかし。此花の宴せさせ給ふ。上達部、殿上人參りて御音樂あり。資通の琵琶、左衛門佐のり季和琴など彈き合はせ給ふ。大夫、權大夫など物誦んじ、歌うたひなど遊び給ふ。女房、

紫の雲立ち紛ふ藤の花如何に折らまし色も分かれず

夏にだに契りを掛けぬ花ならば如何にか爲まし春の暮るるを

女房、殿上人など多かれど止めつ。四月、祭など物騷がしくて過ぎぬ。祭の車を小一條院の下部打ちたりなど云ふこと有りて、院の人、責められさせ給ひて、撿非違使ども居並みて、人も易くも步りかず、いみじき事どもに世の人申し給へり。日頃經れど、非など騷ぎて、いといみじく忝き事と、世の人も申し思へり。院の下部の知りたりける下種の、出だし車に附きたりけるを、蹴ぶれて打ちたりけるを、車打ちたりと聞し召したりけるとぞ。小一條院には、故左大臣殿の女御の御腹に、男二人、女一所を、一の宮は中務の宮なり、齋政の播磨の守の壻にて物し給ふ。二の宮は三井寺に大僧正愛護き聞え給ふこと限り無し。高松殿の御腹の若宮は亡せ給ひて、女宮一所ぞおはしますは、高松殿の上の、御傍放たず愛護き聞えさせ給ふ。東宮大夫殿の姫君の御腹にも、男、女、數多おはします。高松殿に侍ひける人を思召して、片時も御覽ぜではえおはしまさで、西の院と云ふ所に居ゑさせ給ひて、男女數多生ませさせ給へりける。下野の守たりける人の女なりける、

作り歌詠みなど、古への人に劣らずぞ物し給ひける。賭弓にも、宮上らせさせ給ふ。權大納言、左衞門督などの射給ふ樣、方々に心寄せの人念じけり。賭物は中宮せさせ給ふ。權大納言、頭中の宰相中將は、一品の宮の御方、左衞門督、公成の宰相は齋院の別當に物し給ひけり。然れば一品の宮の女房も、齋院のも念じ聞ゆるに、御方勝ちたれば、人人賀茂に詣でて、歸さに齋院に參りて、音樂などして出づる程に、追ひて車に、

引き違へて歸るを見れば梓弓諸矢はいとど嬉しかりける

陸國の頭中將、

嬉しさは諸矢のみかは梓弓君も方引く心ありけり

歸り參りて、内裏にて鬼の間の方に侍へば、御前に召して、有樣など問はせ給ふに、一歸さに、院に參りて候ひつれは、めでたき手して、斯く書きてなん候ひつる」と奏す。返事など問はせ給ひて、をかしと思召したりけり。三月三十日方に、いと藤房長く花面白き藤を奉らせて、鷹司殿より、

藤壺の花はことわり劣らじと源さへも開けたるかな

御返し、宮、

藤の花神さびにけるみなもとに匂ひ劣れる末ぞ折り憂き

唐の紙に、いと今めかしくをかしく書かせ給へりければ、殿の上、いみじくめで奉らせ給ひけり。數多おはしまししか、御容、御髮、何れとも無く美くし。御手も一所惡ろきおはしまさざりけるが、前の世の然るべ

幸、行啓など、いとめでたく待ち付け奉らせ給ひて、先づ御輿寄せぬ程も、曇り無き御前に、長長と陣引きて、中門に御輿寄せて、渡殿より入らせ給ふ程、いとめでたし。頭、御佩刀執りて内侍に傳ふ。内裏の女房かわこて參り居て、御膳參りなど、例の儀式なり。拜し奉らせ給ふ程など、見る人、常の事なれど、涙こぼれて、めでたくいみじ。女房えも云はず裝束きて、押し凝りて侍ふ。打出づる事は無し。中宮には大饗ありて、拜禮などいとめでたし。正月二十日の程に内宴あるべければ、他事無く、藏人の有樣、容の事を、人に勝れてと思召す。御給仕は齋院の御乳母の中納言の典侍仕まつり給ふべし。藏人十人を、内裏に四人、院、東宮、中宮、二人づつ出ださせ給ふ。院には容好き人多くて、内裏、東宮にも、二人づつ奉らんと思しけれど、煩ふ由申して參らざりければ、然しも思召さざりける劣りの人をぞ爲させ給ひける。仁壽殿に御裝飾せさせ給ひて、院、中宮の御局して參らせ給へり。今日も打出でなどは爲ず。此方彼方いみじく裝束きて侍ふ。藏人は、院のは唐綾を泥、紺青して、紋を染めて四つ、錦の上衣なり。中宮のは色色の二重紋に、一重は打ちて、其れも赤地の唐菱なる錦の上衣なり。扇、裙帶、領巾など、いみじく心を盡して、當り給へる人、競み給へり。院のは權大納言、中宮のは左衞門督ぞ爲給へる。上達部など、今日は皆青色著給へり。儀式、有樣など、いと珍らしうをかしき事の樣なり。三月には、また賭弓あれば、前方、後方と、事ども分きて、前方は賀茂に參り、今一方は北野に詣づ。其頭の頭は、故民部卿の御子、隆國の頭中將、今一人は小野の宮の御孫經任の辨、齊信の民部卿の御子にし給ふ。才など有りて、麗はしくぞ物し給ひける。詩

覺えさせ給へど、二十ばかりとぞ見えさせ給ふ。下臈などだに、善き人は長びて見ゆる事も無し。況して盛年過ぎなど爲させ給ふべきにはあらず。御髮は御衣に五六寸ばかり足らせ給はで、色に、淨潔に、嫋嫋として、隙無く掛からせ給へり。女房はかねて例の陣に出で居にけり。美作三位御髮上げ奉り給ひて、やがて御輿に侍ひ給ふ。女房は二つ色の濃き、薄き、蒲萄染の織物の上衣、紅梅の龍紋の唐衣、萌葱の裳の腰なり。例の事なれば、釆女馬乘りなど、儀式、有樣、前前の同じ事なり。入らせ給ふ程の亂聲など、目慣れたる事も無く、めでたくいみじきに、鷹司殿の上は、然ばかり御覽じ盡してしかども、また今日も御涙こぼれさせ給ふ。御堂供養に四所渡り合はせ給ふ行幸行啓ありし折に、準らふべくも思はくは有らねども、儀式、有樣、異る事無くめでたければ、斯く思召すにこそ。昔の御事をも思召し出づべし。舞は殿の若君せさせ給ふべしと有りしかど、然も有らで、諸大夫の子どもぞ舞ひける。其日の儀式、有樣、女の知る事ならねば記るさず。院の女房は、皆薄色に紫の唐衣ぞ著せさせ給へる。尼の御裝束せさせ給へるも　いと哀れにめでたく見えさせ給ふ。夜さりは皆樣樣に歸らせ給ひぬ。樣樣の御贈物など、いとめでたし。まことや、又の日は、昨日の有樣、儀式を、清涼殿の東面にて爲させて御覽ず。一品の宮の、所狹かりなんとて、出でさせ給はず成りしかば、御覽ぜさせ給はんとて、爲させ給ふなるべし。樂など同じく爲させて御覽ず。東宮も渡りて御覽ず。中宮の女房、上の御局の蔀、長長と上げ渡して押し出でつつ、居並みたる前より、東宮上らせ給ふ。いと物物しく、めでたき御有樣なり。中宮、一品の宮は、二間にて御覽ず。今日は、紅どもに、

と聞え給へば、女房、

神垣には月も紅葉も有りけれど

など聞えさせ交はしけり。心長閑かにもおはしますべけれど、飽かで歸らせ給ふ。斯かる御有様は苦しげなりやとぞ。

歌合

中宮司殿の上、七十賀せさせ給ふ。女院、中宮など、例の渡らせ給ふ。院は曉に渡らせ給ひぬ。宮は里內裏より出でさせ給ふ。儀式、有樣、前前讃りにし事なれど、猶いとめでたし。御輿寄せて奉る程など、內裏の御前、上の御局の簾取り除けて御覽ず。弘徽殿、藤壺の間のいと狹きに、上達部、殿上人立ち混み、近衞司、細鉋負ひて立ち休らひたり。名對面の程など、いといとめでたし。內大臣殿參らせ給ひて、「御酒に參れと候ひつるなり、大臣は、彼處の事ども御口入れ候ふ。事繁くて」など申させ給ふ。いと物物しく、綺羅らかなる御有樣なり。春宮大夫、權大夫、權大納言など、御兄弟の殿ばら、皆參り給へり。宮は櫻、萌葱の五重の御衣を、皆織物にて、五つばかり奉りて、赤色の唐の御衣、地摺の御裳奉りて、めでたき御有樣にて、御もてなし、用意など、耻りかに恥かしげにおはします。三十五六に成らせ給へば、思ひ遣りは大人びて

まさず」など、揚焉に褒め申し給ふ樣、誇りかに愛敬づき給へり。大宮夜さり上らせ給ひて、中の戸開けて御對面ある程、いと安らかに、疎からず、めでたき御間なり。貴き人の御間は、耻ぢ交はし申させ給ひて、つゆ氣はひも漏さじと愼み、女房なども心したり。内裏、東宮渡りおはしますも、いとめでたしとも疎かなり。一月ばかりおはしまして、出でさせ給ひぬ。東宮には、一品の宮御腹に、姫宮二所おはしませども、其れは疎くて見奉らせ給ふこと無し。今年も十月に齋院に行啓あり。此度は五六日ばかりおはします。十月廿餘日庚申なるに、上達部、殿上人參り、音樂の方の人も、詩の道の人人も召し集め、殘る無く參りて、歌詠み、音樂など有り。下臈も其道の人は交りたり。權大納言、

　萬づ代に色も變らぬ榊葉の散るもみぢ葉に木綿や掛けまし

色寒み枝にも葉にも霜降りて有明の月を照す白菊

左衞門督、（補任）

　今宵しも隈無く照す月影は殘りの菊を見よとなるべし

多かれど書かず。女房、

　月影に照りわたりたる白菊は磨きて植ゑし驗なりけり

多かれど止めつ。月明くをかしき夜、權大夫口ずさびに、

榊のみこそ殊に見えけれ

衣、唐衣なり。紅の濃き、薄き、紫、山吹、青き、蘇芳など、皆二人づつなり。歸さには、其濃にて、袴、上衣も、裳、唐衣も、羅にて、紋には黄金をし、繍物どもをし、心心に繪など書きたれば、涼しげに艶めかしう、をかし。上達部も、殿、内の大殿を初め奉りておはしませば、いみじうめでたし。上達部、殿上人殘る無し。日毎にいみじき見物にてなん有りける。此程過ぎぬれば、長閑やかにて、内裏入りも徒然に思召されれば、女院入らせ給へり。上の御局におはしまして、女房ぞ弘徽殿に局して下り上りける。珍らしき細殿住みもをかし。東宮、一の宮は、此院におはしませば、入らせ給ひて、東宮の御方におはします。一品の宮は此宮の一つが御弟におはしませば、世の人まだきより、「いみじく善き御間なり」と聞えさするも、げに然もやおはしまさん。女院の御方に、一品の宮渡らせ給ふ。幼なくおはしませば、晝も渡らせ給ふ。下の御局より、關白殿など具し奉らせ給ひて、上らせ奉らせ給ふ。撫子の織物の單、裹、菖蒲の小袿奉りたる、華華と、盛りに櫻の咲きこぼれたる心地して、氣高く、匂ひ臈﨟しく、今めかしうをかしげなる御有樣、類ひ無し。今年ぞ九つに成らせ給ひける。いみじくめでたしと見奉らせ給ふ。院も斯かる御有樣をば、まだ御覽じ習はせ給はず。男宮をのみ習ひ申させ給へるに、哀れに珍らしう美くしと見奉らせ給ふ。齋院は、また懷かしうをかしげに、らうたげに、匂ひやかに、撫子の花を見る心地ぞ爲させ給へる。美作の三位など、「また、貴き人あまた見奉れど、此御前達の樣なるはおはしまさざりき」。一條院の女二の宮、故女院におはしましかば、見奉りし、其れぞいとをかしげにおはしましかども、此二所の御樣には、えおはし

いと飽かず口惜しう思召さる。內裏の御使の、霧を分けて參るも、いとをかしう思召さる。十月、衣更、五節、臨時の祭など云ひて、心長閑かならで過ぎぬ。一品の宮は明暮月枯れず愛護き奉らせ給ひて、一御對面など有るべし」と有れど、一品に成らせ給ひぬるは忝し。御角髮など結はせ給ひて、上らせ給はんとて止まりぬ。尋常ならず、いみじく持て愛護き聞えさせ給ふ。殿上人朝夕に參り退かで、鞠蹴、小弓射など、をかしく遊び合へり。子の日に山菅を手まさぐりにして、權亮兼房、

　おぼつかな今日の子の日を山菅の引き違へても祈りつるかな

と云へば、出羽の辨、

　今よりは松をもおきて山菅の長き例に引きや比べん

など云ひ交はす程もをかし。殿上人など參りて小弓射などするに、大夫、

　今日よりは子の日の松と梓弓諸矢に千代を懸けて引かなん

返し忘れにけり。年廻りぬ。例の事騷がしく過ぎぬ。春深く成るままに、齋院渡らせ給ふべき年にて、心殊に思召し進備がせ給ふ。內裏には繪所、作物所にて、女房の裝、唐衣に繪書き、彩色繪など、いみじく爲させ給ふ。宮には宮司承はりて、染殿、打殿に遣はし、思し營ませ給ふ。御裝束には八重山吹を摺り重ねて、八重八重の隔てには、靑き一重を重ねつつ、幾重とも知らず重ねて押し出だされたり。眞の花の咲きたる夕映と見えて、いみじくをかし。祭の日は反對の色なり。濃き二人、薄き二人、やがて同じ色の上

ど侍りて乗り給ふ。御乳母達は、他車にてぞ参り給ひける。三歳にはおはしませど、御丈長く、例の六歳ばかりの子どもにておはします。此程泣かせ給ひて、え下りさせ給はねこそ、見には似させ給へりけれ。宮の内侍は左兵衛督通へ給ひつつ、更に参らせ給はず。斯くて内裏の御乳母の大弐の三位と聞ゆるは、殿の上、御前殿の御乳母子なり。其人の子に丹波の守高雅と云ふ人の家に、三條なるに出でさせ給へり。隔など侍す程、平常の事には異りてをかしく見ゆれど、内裏にも宮にも思召し入りて、御使隙も無く参れり。御有様もゆかしう、いみじく思ひ聞えさせ給へれば、殿上人、上達部、我も我もと先づ参りて後になん、内裏にには参りける。上達部も、殿上人も、参りたる人に、「院にや参りたりつる」と問はせ給ふに、「然も候はず」と申すは荒涼をしく、「参りたり」と申す人には、「誰にか逢ひたりつる。何事かおはしましける」など問はせ給ふに、誰も誰も、如何でかは先づ参らんと思はざらん。右衛門督と聞ゆるは、故中務の宮の御子なり。東宮権大夫兼ね給へる、斎院の別当に成り給へり。長官には蔵人の兵部丞、帥の中納言と聞ゆる、道方の子なり。六條の左大臣殿の御孫なり。四月には御禊の日、やがて大将に入らせ給ふ。内裏近くて、女房など参り通ふ。侍など具して、露けき道を分け参るもをかし。御禊の女房の装束など思ひ遣るべし。闕など、殿上人、心心に盡し競むべし。内裏よりは覚束なき事多の人思召す。八月二十日に、中宮行啓あり。薫芳の濃く薄き匂ひなどに、草の香の御衣など奉る。いとをかしう艶めかしく、めでたき御有様なり。日頃の程に、此上無く大人びさせ給ひけるを、哀れに見奉らせ給ふ。二日ばかりおはしまして歸らせ給ふを、

名に高き君が御幸ぞ住吉のうら「浦」珍らしき例なりける　　兵衛の内侍

眺めつつ見まくぞ欲しき住の江の松も宜べこそ年の經にけれ　　辨の内侍

淺瀨行く綱手の繩も珍らしき君が御幸を例にぞ引け　　辨の命婦

是れも少しを書くなり。丑の刻ばかりに、御船より下りさせ給ひて上らせ給へば、都には曉方におはしまし着かせ給へば、人の家どもに驚きて、初めの名殘を、日頃忘れ難く思ひければ、門開け騒ぎ、見し曉の朝顏、夜の衣など、反へ樣などにて、やがて有る人など有りしこそ、をかしかりしか。日頃の有様、浪の上、蘆間を分けし程を思ひ出でつつ、若き人などは語ひ合へり。此程は是れにて世の中過ぎぬ。齋院に遂に姫宮定まらせ給ひぬれば、帝、后、思し騒がせ給ふこと限り無し。此頃は、他事無く、二所の御中におはします。十月に御袴着せ奉らせ給ふ。女房、菊紅葉を織り盡したり。其日に成りては、上の御局にて、二所御涙も止めさせ給はず、ゆゆしくなん見えける。日暮らし、二所の御懷におはしまさせ給ふ。御乳母は、雅通の丹波の中將の女の權中納言の君、仰ぎの中納言(忠輔)の女中納言の典侍、左兵衛督の北の方に成りたる宮の内侍なり。年頃侍ひける侍從の君とて、容などいと好くて、内侍なるぞ侍ひける。御車に奉る程、侍從の内侍に抱かれさせ給ひて「是れは乘らん」とて、下りさせ給はざりければ、「如何かはせん」とて、宮の香の御衣をぞ賜はせて、色許させ給ひて、乘せさせ給ふ。「程程に付けては幸ひ有りけり」と云はれけり。中納言の典侍、丹波の中將の君の侍ふべきにて有りつるを、斯かれば中納言の典侍ぞ、御佩刀な

住吉の岸の姫松いろに出でて君が千代とも見ゆる今日かな

君が代は長柄の橋の初めより神さびにける住吉の松　関白殿

祈り來し事は一つを住吉の路には心千千に有りけり　内大臣

多かれど止めつ。紅葉襲の薄様に書きて、

長らへん世にも忘れじ住の江の岸に並み立つ秋の松風　伊勢大輔

打驚く蘆の末葉に問ひ見ばや斯かる御幸は何時か三「見」島江　同じ人

蘆分けて今日は此處にも暮らさばや打過ぎ難き三島江の波　辨の乳母

先づ「松」見れば歸らん方も忘られて眞なりけり住吉の岸

都には待遠なりと思ふらん長らへ「長柄經」ぬべき旅の路かな　小辨

住吉の岸見えぬまで浪寄れる都の方も忘れぬるかな

住吉の先づ「松」も御幸に有りけめど此に珍らしき三「見」島江の浦

橋柱殘らざりせば津の國の知らずながら「長柄」を過ぎ果てなまし　辨の乳母

背にのみ聞きしも著く住の江の浪立ち歸る事ぞ物憂き　小辨

留まるべき浦にも有らぬを如何なれば葦分船の漕ぎ歸るらん　武藏

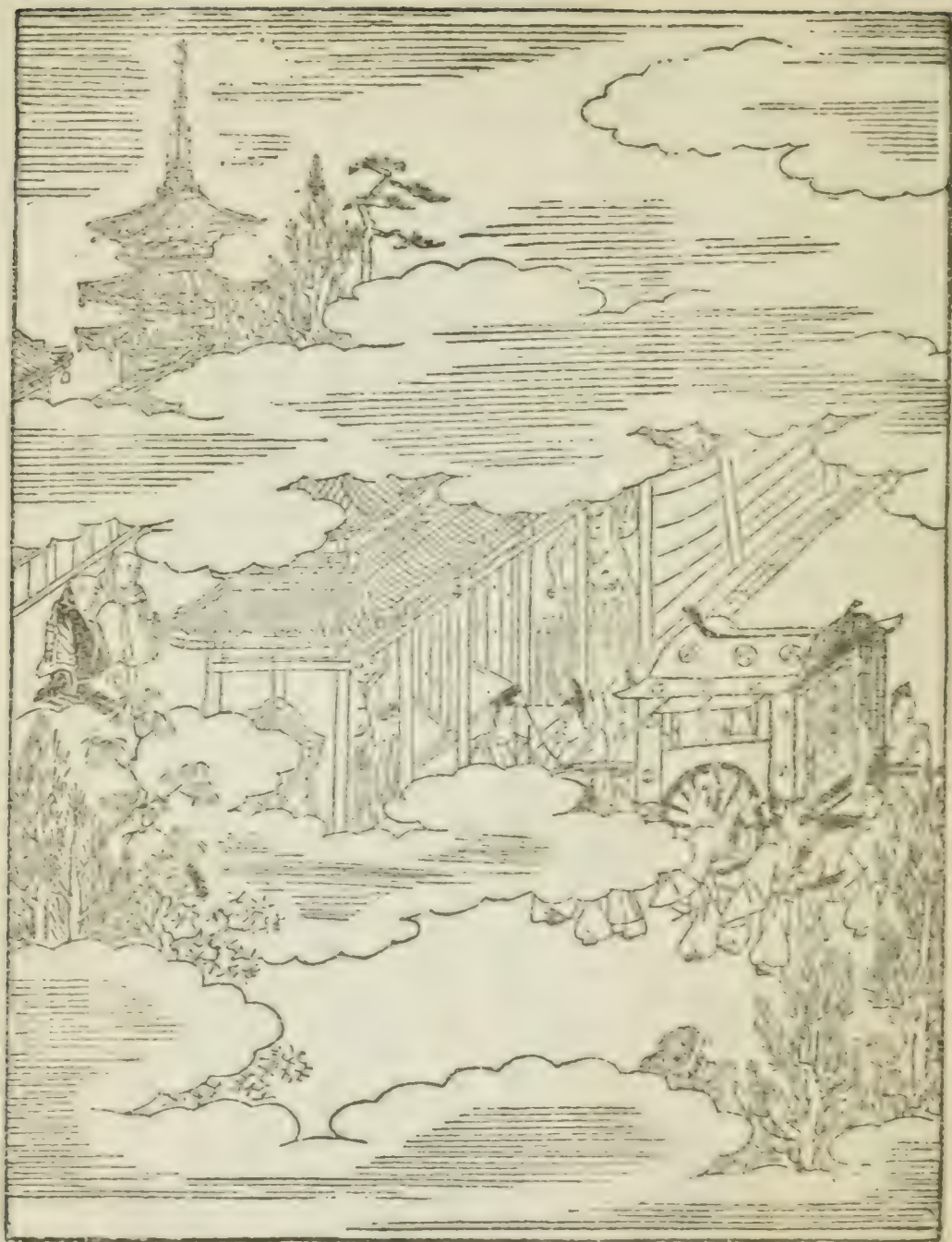
都出でて秋より冬に成りぬれば久しき旅の心地こそすれ　伊勢大輔

りし蘆の宿り、柴の扉も、げに住吉に造りてけりと嬉し。繪手の、めでたき事の例には、然は是れをこそ引かめ」と思ひ云ふを聞くも、をかしげにと覺ゆ。岸のまにまに並み立てる松も千年まで、斯かる事を、波風靜かに吹き傳へ奉らなんと覺ゆ。酉の刻ばかりに、天王寺の西の大門に御車留めて、波の際無きに、西日の入り行く折しも、拜ませ給ふ。此程に、何の契りにか殘りてと、めでたくこそ。次に御經供養せさせ給ふ。散眞僧都、講師仕うまつりけり。此程に、東宮の御使に、大進隆佐參りたり。二十九日に還らせ給ふ次でに、龜井の水の下に寄らせ給ひて御覽ずる程に思召しける。

濁り無き龜井の水を掬び上げて心の塵を濯ぎつるかな

と仰せられたりけんも、げにいとをかしくこそ。還らせ給ふ海道に、思ひ思ひに競馬などするさへをかし。難波と云ふ所にて御祓あり。判官代おほねなか御使なり。御船に奉りて、河尻に着かせ給ひて、十月一日午の刻ばかりに雨降りて雷鳴れば、是れは神の喜ばせ給ふと云ふ人人數多あり。二日、天の河と云ふ所に留まらせ給ひて、遊女ども召して、物ども賜はす。人人皆物脫ぎなどす。日打暮るゝ程に、歌詠ませ給ふ。住吉の道に、述懷と云ふ心を左衞門督師房、

母儀仙院、巡禮住吉靈社。關白左相府以下、卿士大夫之祇候者、濟濟焉。或棹花船而取水路、或軒金車而備陸行。蓋屬四海之無爲、展多年之舊思也。于時秋云暮矣、日漸斜焉。向難波兮忘歸、舊風留顏。過長柄兮催興、古橋傳名。遂抽詞翰、各設詠歌。其詞云、

尼四人、辨の尼、辨の命婦、左近の命婦、少將の尼君、二の車には、侍從の典侍、越後の辨の乳母、大輔、平少將、武藏、三の車には、江宰相、美濃の小辨、兵衛の內侍、御車の後には宣旨、三位ぞ侍ひける。宣旨は源大納言の御女、三位は內の御乳母の大貳の三位なり。奧寄りての名は、斯う殊の外にてぞ有りける。然れど御車の後にも侍ひ給ふ。其れに由りて惡しき事にもあらずなん。尼は薄鈍、然ての人は皆紅をなん著たりし。日每にぞ更へさせ給ふ。此出だし車の後に、狩衣姿の人いと多からで、殿、唐車に乘りて侍はせ給ふ。內大臣殿打續き同じ樣にて參らせ給ふ。賀茂河尻と云ふ所にて御船に奉る。御船は丹波守章任が仕うまつらせたりける唐屋形の船に、こまかたを立てて、鏡、沈、紫檀などを、樣樣をかしき樣に盡したり。船掉す人八人、綠衫の狩衣、袴に、黃金して繪を書きたるに、蘇芳の袙を著たり。次次女房の船、邊り邊りに劣らじと競みたれば、心心見えて、いとをかし。水の上は然らぬだに有るに、いとめでたくをかしう見ゆ。戌亥の刻ばかりに、山崎と云ふ所に着かせ給ひて、物など奉らせて後に、石淸水に上らせ給ふ。鳥居の程にて御車に奉りて、殿上人、手每に火を點して、御車に添ひたる火影どもの、山隱れいとをかしう見ゆ。先づ御祓、次に御幣奉らせ給ふ。次に舞樂、物の音ども、常よりも殊に聞ゆ。曉方に御經供養し奉り給ふ。明尊僧都、御導師にて候ふ。其後船に還らせ給ふ。廿六日に成りて漕ぎ下らせ給ふ程に、人人の姿ども、思ひ思ひに變へて、水の面も所無く浮きたる程に、船に異事たる物と云ふ物をかしく造りて、八幡の別當元命と云ふ者、御菓子折敷て參らせたり。繪さへをかしく見ゆ。三島江と云ふ所過ぎさせ給ふ程

と聞えさせ給へり。民部卿、関白殿に、

いにしへの花見し人は尋ねしを老は春にも忘られにけり（後拾遺和歌集ニハ知られざりけり）

入道殿など先づ誦じ聞えさせ給ひけるを思しけるなるべし。これは法住寺の大臣の二郎なり。殿の御返し、

尋ねんと思ふ心もいにしへの春には有らぬ心地こそすれ

と聞えさせ給ひけり。斯くて長元四年九月廿五日、女院、住吉、石清水に詣でさせ給ふ。是れに侍ふ人は、甲斐甲斐しき事にぞ思ひける。午の刻ばかりに出でさせ給ふ。前に御前ことごとしくて候はず。「事成りぬ」など、物見る人人申して、車無く見る程に、殿の人人、済政朝臣、行任朝臣、兼任、範国、師任、定任、能通、泰通、むねなか、のりすけ、良頼、国資、是れならぬもいと多く候ふ。誰も誰も目馴れさまて装束きたり。殿上人、蔵人の頭中将、経輔の左中弁、実基の中将、資頼の右京大夫、師良の兵部大輔、行経の少将、経季の蔵人少将、上達部、東宮大夫（頼宗）、権大納言（長家）、左衛門督（師房）、右衛門督（経通）、右兵衛督（朝任）、三位中将（兼頼）、直衣、袍、数多に狩衣装束、云ふ道も方無きに、織物、打物、錦、繍物など、心心にめでたくをかしく見ゆる程に、頭弁の仕うまつりたる御車に乗りておはします。左右の御前に、霜の月を出だして、御前を、いみじき道の儀たり。蘇芳の狩衣、袴、同じ色の綾綿たる狩衣と云ふ、楽下人内させたり。車副、青色の狩衣、袴に、山吹の衵を着て侍ふ。出だし車三つ、東宮の大夫、権大納言、左衛門督奉り給へり。思ひ思ひたる今様車の道を通りたるなり。一の車には

の御兄弟の權大納言も、上二所亡せ給ひて後、世にも在らじなど思し述給はせけれど、女院の中將の君と聞ゆる人をいみじく思して、男君數多生れ給ひにけり。如何なる世のやうにか、關白殿いと然持て出で顯はれてには有らねど、尼上の御方に侍ふ人を忍びつつ、いみじう思召すと云ふ事出で來て、常に尋常ならで、子など生み給ふと云ふ事聞ゆれど、上の御方に思召さん事を愼ませ給ふなるべし。故中務の宮の御女などぞ聞えさすなりし。齋院下り居させ給ひて、御兄弟の入道兵部卿の宮に對面させさせ給ひて、聞えさせ給ひける。

今日ぞ思ふ君に逢はでや止みなまし八十餘りの年無かりせば

いみじう此上無き程の年月なりかし。いと若くて齋院に成らせ給ふ。兵部卿の宮容殊に成らせ給ひにしかば、如何でかは見奉らせ給はん。御兄弟にぞおはしましけること、まことや、殿上の人人も花見、關白殿も御覽じけるに、齋院より、

殘り無く尋ぬなれども注繩の中の花は花にも有らぬなりけり「玉葉和歌集ニハなるべし」

と聞えさせ給へりければ、東宮大夫の御返し、

風を甚み先づぞ川邊を尋ねつる注繩結ふ花は散らじと思ひて

此歌の返しは、斯くこそ集には。

殘り無く成りぬる春に散りぬべき花はかりをば數まざらなん

せ給ふ。心心に一品の宮に參らんなど、大方にもて違はず申す人人ありけり。冷泉院は村上の十の宮居させ給ひて、年久しく成らせ給ひぬるが、下り居させ給ひぬれば、二の宮居させ給ふべしと、院、帝思召し歎かせ給ふこと限り無し。今年ぞ三歳に成らせ給ひける。御髮、稚よりも長くおはしましけり。定まらせ給ひなば、え削がせ給ふまじければ、削ぎ奉らせ給ふ。御髮いと長く美くしうおはします。御心いと懷かしうて、内裏をも慕ひ奉らせ給へば、いと哀れに思ひ付き聞え給へり。此事を歎き思召すこと限り無し。まことや、侍從大納言など亡せ給ひての頃、入道大納言、

見るまゝに人は嫗と成り果ててこう火〔劫火カ〕の家は哀れなりけり

と述給ひける。入道大納言とは四條大納言に物し給ふ。世に心にくく覺え給ひける人人、公任の左衞門督と聞えしなり。民部卿、式部卿の宮の源宰相、故太政大臣殿の實成中將などこそは聞えしを、實成の中將は、其頃右兵衞督にて中納言にて物し給ふ。大貳に成り給へり。御子は男子一人、公成の宰相、滋井の左兵衞督とて、容はいと好く、貴き上達部にて物し給ふ。女子は中宮權大夫の上にて物し給ふ。今一所物し給ひしは、顯基中納言とて、故源民部卿の子を關白殿の子に爲させ給へる、壻取り給へりしかど、男子一人生み起きて亡せ給ひにしかば、此頃十五六ばかりにて、實綱の少將とておはす。左兵衞督は、滋井に女君一所生ませ給へりけるは、大夫殿の上、子にし奉らせ給ひて、いみじく愛護き聞えさせ給ふ。我は中宮の御乳の母子に宮の内侍とて、容など目易かりける人を、いみじう思して、我が許に迎へなどして物し給ひける。后

り候はず、已れは然る事は如何でか」と申させ給ひけり。内大臣殿の御匣殿も、手書き、歌詠み、漢字をさへ書かせ給ふ。御容もをかしげに、御髪もめでたくなん物せさせ給ひける。やんごとなき人の御事は、申すも片腹痛く、なかなかなれど、昔も今も何を業にか。中宮は此頃ぞ卅二ばかりにおはします。打聞くには長びさせ給へるやうなれど、いと若く盛りにめでたき御有樣なり。物思召し知り、心深くぞおはしましける。殿などもおはしまさず、我が方樣は何事も盛年過ぎ、打解け怪しき月移しに、華華と持て愛護き、然るべき人添ひ給へらん、若く盛りに、今咲き出づるやうならん人には並びて在らじと、深く思召したり。内裏には、「有るよりはやんごとなくなん思ひ聞えさすべき。若し此思ふ事取り出づる人もやと思ふばかりなり」などぞ申させ給ひける。大方の有樣、持て付け、心にくく立ち襲ぶべき御有樣なめれど、御心に斯くのみ思召すなるべし。宮達の、日に添へてはめでたく美くしうおはします。中宮は持て愛護き聞えさせ給ひながらも、心ゆかず口惜しう思ひ聞えさせ給ひて、心解けず思召したり。内裏の上は、一品の宮を限り無きものに思ひ聞えさせ給へり。宮は二の宮を「荒涼まじ」と人の思ひ申したりしも心苦しくて、人知れず譲る方無くて、哀れと思ひ聞えさせ給へり。斯く御心少しづつは方分かせ給へれど、上も宮も劣らず、何れもいと愛しうし奉らせ給ふ。藤壺の東面は一品の宮、西面は二の宮の御方に設飾はせ給ふに、一品の宮の御方には、殿上人さながら御設飾し騷ぐ。二の宮の御方には、后宮の宮司さながら侍ひ、設飾樣樣にをかしくなん見えける。殿上人を、上は一品の宮、姫宮の御方に分たせ給ふ。内裏には女房を宮分た

殿のおはしまいしに變らず、居立ち營ませ給へば、いとどめでたし。其日の儀式、有樣など、云へば疎かなり。皆紅に、蒲萄染の上衣、柳の唐衣、色許されたるは、二重織物、背の人人は綺書き、繡物し、えも云はず競み盡したり。上渡らせ給ひて、御腰結ひ奉らせ給ふ。いとめでたくをかしげにおはしませば、限り無しと見奉らせ給ふ。二の宮又いと美くしうて、差し次がひておはします。今宵は何事も物騒がしくて過ぎぬ。又の日、上渡らせ給ひて、上達部、御前に召し有れば、御簾の外に侍ひ給ふ。「和歌など有るべし」と仰事あれば、權大夫「杯」執りて、關白殿に參らせ給ひけるに、一獻聞しきに、今日の有樣少し書き記るして有らんなん好かるべき」と、御氣色ありければ、權大夫なん其日の歌の序題書き記るし給ひける。心は祝の心になん。

誰が爲めと何か譬へん君が代は萬づ代を經て盡くる世も無し　權大夫能信

姫松の木高く成れば移ろはぬ雲の上こそ緑なりけれ　關白殿

生ひ添はる行く末遠き姫松と「をカ」木高き蔭と結びつるかな　內大臣殿

わたつみの龜の背中に居る塵の山と成るべき君が御代かな　大夫齊信

多かれど、是れより下は何かはとて止めつ。御管絃あり。人人物被き給ふ。今日は女房白き衣どもに濃き打ちたる、紅梅の唐衣打出で渡したり。映え渡り、をかしう見ゆ。又の日は紅梅に萌葱の唐衣など、三日の程いみじう裝束き盡したり。內裏の御乳母達、大貳の三位、美作の三位、上野など皆參りて、打出で侍ひ

哀れなり。女院は内裏、春宮の御祖にて、太上天皇の定にておはしまして、御車にてのみ御堂へ渡らせ給ふ。内裏へも入らせ給ひなどして、なかなか心安くめでたき御有様なり。御兄弟の殿ばらより初め奉りて、やんごとなくいみじう思ひ奉らせ給へり。世の人も讃め申したること道理なり。いみじく気高く、侍ふ人、聲高からず、打解けず艶やかに心にくく、めでたき院の様なり。容を好ませ給ひて、今も好き若き人ども参り集まりて、めでたく有らまほしき御有様なり。若き人讀み交はし、扇を差し隠しつつ詠み侍ふ。装束より初めて、我も劣らじと[illegible]ひ詠み交はしたり。然れど琴の囂ましからず、寛舒やかに心にくき院の様なり。皇太后の宮、様異り、言葉と持て出で好ましかりしも、然る方にて、をかしかりしを、殿ばらも思ひ出で聞え給ふ。中宮只今の、時の后にて、又雙ぶ人無く、常人のやうにて侍ひおはします。いとめでたし。是れも盛りの御有様なれば、人人参り集まり、宮達御孫はせ給ひて、御乳母参り集まりて、いとめでたし。好き若人、童女など参りて、心心に好ましくめでたき御有様、御心ばへより初め、幸ひは然もこそおはしまさめ、如何で斯く飽かぬ所無き御有様どもなりけんと、御兄弟の殿ばらも見奉らせ給ふ。高松殿の御腹には、春宮大夫、中宮権大夫、権大納言など申して、男三人おはしますなり。姫君は右衛門督の上にて物し給ふ。上の巻に記るしたれば、新しくも申し立てず。中宮には、女宮二人おはしまして、男宮のおはしまさぬ事を口惜しう、内裏にも宮にも、殿ばらも思召す。姫宮は入道殿の御懐にて、一年は御袴も奉らざりしかば、五歳にて奉る。十二月の十餘日になん有りける。帝、后、御心に入れさせ給ひて、思し営ませ給ふ。殿も故

堂設けて、安らかにおはしましものを。佛も然べき人に後れ奉らせ給へば、斯くこそは哀れに見えさせ給へ。釋尊入滅の後は、世間皆闇に成りにけり。世の燈火消えさせ給ひぬれば、長き夜の闇をたどる人、幾そばくかは有る。主人去らせ給へる御堂準備がせ給ふは、御果ての事、やがて思召したるなるべし。女院、中宮、内裏に参らせ給ひても、哀れにいみじく思召したる御氣色を、内裏の上も道理に思召す。御果てより前に、百體の觀音の御堂は、關白殿造らせ給ふ。あはれにめでたく幸ひおはします人も、身一つこそ有れ、後の御事どもなどは、思はずなる事ども必らず有るを、此殿の御心掟て遍くめでたくおはしまし、世の恨つゆも聞かせ給ふべくもおはしまさねば、あはれに忝く、世に有ると有る人、仰ぎ申したり。今行末に世を政治ち直させ給はん御末にも、變らず斯くおはしませば、世の人の歎き云ふ者あらじと見えたり。

殿上花見

入道殿亡せさせ給ひにしかども、關白殿、内大臣殿、女院、中宮、數多の殿ばらおはしませば、いとめでたし。尙侍の殿、皇太后宮のおはしまさぬこそは、口惜しき事なれど、如何でかは、然のみ思ふ樣にはおはしまさん。光源氏隱れ給ひて、名殘も斯くやとぞ、さすがに覺えける。めでたきながらも哀れに覺えさせ給ふ。后宮、右大臣殿、薰大將などばかり物し給ふ程の覺えさせ給ふなり。さすが末に成りたる心地して

に描きあらはさんと見えたり。仏どもの御装へ物、荘厳など、すべて、なかなかなれば、書き続けず。いみじう世に珍らしき事にこそ有めりしか。宝物ども、積れて取り敢へぬ様なり。少し家も狭からんは、置き処あらじと見えたり。其日やがて、殿ばら、宮宮渡らせ給ひにしかば、御堂かき冷ましたるやうに成りしかば、御堂の上下、皆涙を流してぞ、哀れに道理にこそ見えしか。殿の御前の御有様、世の中に、まだ若くておはしましより、行ひ人と等しく成らせ給ふ。朝廷に次次仕まつらせ給ひて、唯一無二におはします。出家せさせ給ひし頃の御事、終りの御時までを書き続け聞えさする程に、今の春宮、帝の生れさせ給ひしより、出家し道を得させ給ふ。法輪を転じ、涅槃の際まで、発心の初めより、音楽「二字何ノ衍ニヤ」の終りまで書き記るす程の、悲しう哀れに見えさせ給ふ。彼の侍従大納言の御法事も、同じ日ぞ世尊寺にて修給ひける。此僧どもも、暁明くるを待ちて、夜ぞ帰らせ給へる。哀れなる殿の御頓死にこそ。斯くいふ程に、日頃は過ぎて、二月二十日の程に除目ありて、殿の中納言は権大納言に成り給ひぬ。四国の受領さまざまに成り集まり、喜び申す。中宮の大夫は民部卿に成り給ひぬ。まことや権大納言は此民部卿の御婿を、一昨年立たせ給ひて、殿の上のおはします、今の大貳惟憲が家の内にぞ住ませ給ふ。余所余所なれど、猶此民部卿の御許にぞ猶斯くて頼り聞え給ふ。昔より此殿をば、上の御子に侍奉らせ給ひしかば、斯う心細くおはしませば、同じ所に参りて住み給ふなりけり。次次の有様ども、まだまだ有るべし。見聞き給はん人も書き付け給へかし。御堂の百體の観音は、阿弥陀堂にぞ宿り居させ給ふめる。あはれ殿のおはしましかば、許多御

て御法事に申し上げさせ給ふべきなり。千部の法華經思し始めたりしも、いみじう準備せさせ給ふ。是れも此度同じうはと思し急がせ給ふ。九月よりは、殿ばら皆、皇太后宮の御服にて、薄鈍にておはしまし、宮司なども濃やかなりつるに、黑橡に成らせ給ふ。世の中の人、十が九は、皆鈍み亘りたり。云はば諒闇とも云ひつべし。朝廷よりも、諒闇せよと云ふ宣旨下りたればなりけり。斯くて萬壽五年に成りぬ。今年は、世の中に新しき車見えず、先華やかに追ふこと無く、小舍人、童部だに、華やかなる衣着せたる人無し。女院、中宮、關白殿など、皆斯くておはしませば、世の人は皆御堂に混みたり。御法事は、正月に爲させ給ふべければ、夜を晝に萬づ準備がせ給ふ。御佛には極樂淨土を繡佛にせさせ給ふ。御經には金泥に書かせ給ふ。正月廿八日なれば、いと近く成りぬと準備ぎたち給ふ。除目は二月に有るべき年なめり。殿の上は御惱ありつれど、宮の御事無くば、いと只今は、斯くおはしまさざらまし。御堂の事どもをぞ、返す返す關白殿には申させ給ひける。「女院は高陽院におはしまさせて、關白殿は土御門殿に住ませ給ひて、御堂を常に見させさせ給ひ、修理を爲させ給へ」とぞ申させ給ひける。また「一品の宮の御事をなん思ふ事なる。あなかしこ、疎かに誰も思ひ聞えさすな、我が遺言違ふな」とぞ、返す返す聞えさせ給ひける。こまと、彼の高松殿の中納言殿の上は、殿の亡せ給ひにし頃ぞ、御産は有りし。關白殿、萬づに扱ひ聞えさせ給ひける。斯くて二十日に成りぬれば、萬づ搖すり合ひたり。御誦經、朝廷、東宮、一院、女院、中宮、關白殿、内大臣殿、北の政所達、次次の殿ばら、中納言殿の上、高松殿、大方すべて庭の隙無し。世の中の絹、布と云ふ物、すべて今日

御佩刀などは、かねて御堂の藏に置かせ給ひて、やんごとなからん折に、皆御堂に借り申させ給ひし事なり。御領、御庄、然るべき領りは、四方の所皆寄せ奉らせ給ひて、殘りの所は、「上のおはしまさん限りは領ろし召して、後は」とぞ讓り給はせしかば、其儘にと思召すを、納殿まさのりが許に仕ひ殘さひ給へる、つやつや絹五六千疋、例の綿萬疋、綾、絲、綿、樣樣の唐綾、すべて數知らず。其れは關白殿の方、左府、中宮、一品の宮、高松殿の上、中納言殿の北の方などに分ち奉らせ給ひて、殘りは皆上の御前に奉らせ給ひつ。また世の中の六十餘國の上馬、「是れなん一なる、一なる」と奉り集めたるも、殿ばら受領の下り、僧達などにも分たせ給ひて、殘り、いみじと思召すを、撰り置かせ給へりける馬、御廐の加へて百疋はかりぞ候ひける。皆召し集めて、殿ばらに配り奉らせ給ふ。御忌に籠り侍ひ給ふ僧達に皆賜はらせ給ふ。殿の御前の御心おきてにも、關白殿さし進み、有るべき限りめでたくおはします。哀れ上の御前、四十餘年と云ふに別れ奉らせ給ふに、いといみじう思したり。前前の御物思ひだにこそ、類ひ無く思されたるに、此度は萬づに付けてさへ思し歎き増さりたり。此御忌に侍ふ僧達、關白殿を初め奉り、殿ばら、他上達部、受領、數を盡して、非時せさせ給ふに、添へ給ふ物、あさましうおどろおどろし。また七日七日の御誦經、僧達一れたり、引き渡すばかりの事どもをぞ爲させ給ふ。すべていみじかりし御名殘なれば、未までめでたしと見えたり。十二月の廿八日、女院、極樂淨土書かせ給ひて、色紙の御經などして、申し上げさせ給ふ。その御法事、有樣、書かずとも推し量るべし。殿の御前には、百體の觀音を造り奉らせ給ひ、夜を晝に急がせ給ふ。えか

宮の御前、「いと思はずに、然やは」と道給はせければ、此僧、「如何でか斯うまでも、朧ろげの事には候はぬものを」と申す、と御覽じければ、夢ばかり、「然には往生せさせ給ひけるにこそ有なれ」此御堂の事を、晝夜御營みに心に掛けさせ給ひ、臨終の觀念、有るべき限りおはしましつるに、いみじう嬉しきかな」と思し道給はする。三位の中將入道道給ひけるは、「いと苦しげにおはしましし折、念佛切に勸め聞ゆ。自らも侍しに、眠りたりしかば、いと心地よげなる御氣色にて、「下品と云ふとも足んぬべし」と云ふ言を、返す返す殿道給ふと見しかば、功德の相なめりと思ひ給へて、人にも聞かせで止み侍りにしを、此御夢に聞き合はするになん、いと頼もしう成りぬべき」とぞ聞え給ひける。また二三日ばかり兼ねて、永昭僧都、融碩たんどが、御枕上にて御念佛しければ、融碩が夢に、九重の中尊の御左の肩の脇より、いと美くしき小法師の出で來て、香爐を持て來て、殿の御前の御枕上に置きつと見て覺めにけり。其夢は、まだおはしまし折、人人に皆語りけり。往生の記などには、人の終りの有樣、さては夢などをこそは聞き置きて、往生と定めたれ。定めて往生せさせ給へりと見えたり。「先づ亡せ給ひし有樣、御腰より上は温まらせ給ひて、御念佛の絶間無く爲させ給ひしに、功德の相著く見えさせ給ひにきかし」など道給ひ定めさせ給ふ。法華經をいみじく歸依し奉らせ給ひければ、現世安穩、後世善所と見えさせ給ふぞ、世に無くめでたきや。御忌の程、關白殿、法華經一部、阿彌陀經あまた、經一偈を上げさせ給ひて、日日に爲させ給ふめり。またおはしまし折、はかばかしき御處分も無くて亡せさせ給ひにしかば、此頃ぞ關白殿せさせ給ふ。然べき御領、御

誦經、念佛、數知らぬに、日日の所作に大佛頂をこそ七遍讀み給ひけれ。おほろげならず、必ず往生の有樣ならんと賴無し。其が中に、父君義孝の少將、方便品誦して亡せ給ひて、往生の記に入り給ふめり。一條攝政の御族、奇しう命短くおはするに、此殿は五十に餘り給へりかし。然れど此殿は、御心の限り無くめでたくおはしつればにや。今までおはしつ。位も正二位、官も大納言ばかりにて、恥無き程なれ。朝廷より初め、世の人いみじう惜み聞ゆ。いみじき物の上手の亡せ給ひぬる事と、口惜しう思ふ人多かり。然りげも無く、盛りにおはしつる殿の、思ひ掛けぬ程の御有樣こそ、返す返す哀れに悲しけれ。殿の御有樣は、然れど御年も滿りて、許多の年頃榮えさせ給へりつれば、道理に思ひ聞えさす。此殿の御死こそ、いと合へ無き御事に世の人聞ゆ。中納言殿、斯からぬ折ならましかば、疾く聞えてましと、口惜しう、人知れず哀れにこそ歎かせ給へ。此事どもを聞き給ひて、長谷の入道の御許より、中宮大夫に聞え給ひける。

見し人の無く成り行くを聞くままにいとど深山ぞ寂しかりける

中宮大夫、御返し

消え殘る頭の雪を拂ひつつ寂しき山を思ひ遣るかな

となん聞え給ひける。御堂には、宮宮、殿ばら、哀れに聞えさせ給ふに、十日の夜、中宮の御夢に、いと若くをかしげなる僧の、いと貴やかに裝束したるが文を持て參りて、「是れ」と申せば、「何處よりぞ」と有れば、「極樂の御文」と申せば、喜びて取り入れて御覽ずるに、「下品下生になん有る」と侍る御消息なれば、

然るべき事をも、心の限り申し給ふ。爲ん方無く僉く悲し。世の人も諸行無常の偈をば唯だ涅槃經の偈とのみこそ知りたりつれ。多くの事ども持たり給へりけるものを、宜べこそ雪山童子身にも換へけめと、聞く人人のみ有り。六道の佛菩薩の御名ども、泣く泣く皆云ひ續け給へれど、え聞き留めず成りぬることそ口惜しけれ。然て萬づに悲しくて、曉方にぞ、殿ばら、然べき僧など集まりて、御骨拾はせ給ひて、瓶に入れて、年頃親しく仕うまつりつる左少辨章信掛け奉りて、宗基僧都諸共に、木幡に率て奉りつ。然べき年頃の人人皆參る。然て殿ばらは歸らせ給ひて、御堂に皆おはしましぬ。何事も哀れに悲しかりつるに、忠命内供と云ふ人こそ、鳥邊野にて覺えけれ、後に洩り聞えたりし。

　煙絶え雲降り敷ける鳥邊野は鶴の林の心地こそすれ

となん有りける。彼の娑羅林の涅槃の程を詠みたるなるべし。長谷の入道殿は聞き給ひて、一薪盡きと云はまほし」とぞ述給ひける。殿ばらの、御堂にて、日の過ぐるままに、哀れなる御事を盡きもせず思し歎く。また此程にあさましう哀れなりつる事は、侍從大納言殿、朔日の日より、奇しう心地の例ならぬには、風にやとて、朴を參り、湯ゆでなどして試み給ひけれど、いと苦しうのみ思されければ、如何なるにかと思し、殿の內も、萬づに御祈し騒ぎけるに、四日の夜さり、殿の御前の終らせ給ひし折にこそ亡せ給ひにけれ。いと苦しう思されければ、姫君と行經、信經の君の御手どもを、左右に捉へてこそ絶え入り給ひけれ。哀れに悲しとも疎かなり。北の方、君達、惑ひ給ふ。此殿は年頃道心にて、行ひいみじう爲給ひつる人なり。法

給ひける。御棺は悩み初めさせ給ひし日より造らせ給へれば、やがて入棺し奉りつ。いみじき御装束ども正無きまでおはしまさふ。又の日、陰陽師召して問はせ給ふに、「七日の夜せさせ給ふべし、所は鳥邊野」と定め申して退かでぬ。七日に成りぬれば、早旦より準備ぎ立たせ給ふ。例の事ども推し量るべし。日暮れぬれば、御車に舁き乘せ奉りておはしますに、其日早旦より夜まで雪いみじう降る。然るべき人人、例の装束の上に、怪しの物ども着て、雪かき敢へず降り掛かりたるも、樣樣に哀れに悲し。「萬づ事削ぎて、唯だのやうに」と仰せられけれど、事限り有りて、人の續き立ちたる程、十、廿町ばかり有りぬべし。今は出でさせ給ふ。無量壽院の南の門の北の御門より出でさせ給ふ。彼の釋迦入滅の時、彼の拘尸那城の東の門より出でさせ給ひけんに違ひたる事無し。九萬二千の人集まりたりけんにも劣らで哀れなり。此世界の尼どもも、心を盡して參り送り奉れど、許多ある人なれば、何れとも知り難し。萬壽四年十二月四日亡せさせ給ひて、月立七日の夜御葬送、御年六十二に成らせ給ひけり。儀式、有樣に、夜も唯だ更けに更けもて行く。所所の念佛僧、奈良、三井寺、比叡、石藏、仁和寺、横河、法性寺、すべて云ひも遣らず。關白殿、内大臣殿を初め奉りて、許多の上達部の歩ませ給へるも、すべて哀れに數を盡したり。物見車さへ數知らず、いみじく哀れに悲し。事始まりて、山の座主、御導師仕まつり給ふ。猶初め終り導き奉るべきにこそ有りけれ、先だち奉るやうも有らましかばと、先づ悲しく涙を流し給ふ。然てえ仕まつり遣り給はず。夜更けて鳴り止み、いと靜かなるに、云ひ續け給ふ事も、いとどしき涙の催しなり。「淨飯王入滅度の朝、悉達太子、銀の

八十にて涅槃に入り給ふ。佛日既に涅槃の山に入り給ひたれば、衆生生死の闇に惑ふべし。但し是れは邪生に生れ給へ、非滅に滅を現じ給ひしが如く、眞に滅し給はずば如何に嬉しからんや。十二月二日、常よりもいと苦しう惑はせ給へば、女院、中宮、上の御前も、いとゆゆしう思ひ奉らせ給ひて、關白殿に切に申させ給へば、人々出だして、見奉らせ給ふに、哀れに悲しういみじうて、悉御誦經立てさせ給ひつべし。さて閉ぢらせ給ひぬれば、僧達近う候ひて、御念佛をして聞かせ奉る。然れど其日暮らせ給ひつ。此程、內裏、春宮より御使いみじかりつ。今に猶弱げにおはしませど、唯だ此御念佛の聲ばかりせ給はぬをのみ、おはします定にて有るなり。又の日も、「今や今や」と見えさせ給へれど、事無くて過ぎさせ給ひぬ。四日巳の刻ばかりにぞ亡せさせ給ひぬるやうなる。然れど御胸より上は、まだ同じやうに温かにおはします。猶御口動かせ給ふは、御念佛せさせ給ふと見えたり。許多の僧ども並み居て、涙を流して、御念佛の聲惜まず仕うまつる。「臨終の折は、風火先づ去る。かるが故に動熱して苦多かり。善根の人は地水先づ去る。かるが故に、緩慢して苦無し」とこそは有なれ。然れば善根者と見えさせ給ふ。哀れに內裏、東宮の御使頻繁きに日頃いみじう忍びさせ給へる御前達、顔ばかり、聲も惜まさせ給はず、げにいみじや。上達部、殿上人すべて、何くれは更にも云はず、御堂の內の卑しの法師ばらの、物思ひ無げなりつるが、庭の前に伏し轉び泣くも、げにいみじ。世界の尊き尼法師さへ集まりて「佛の世に出で給ひて、世を濟し給へる涅槃の山に隱れ給ひぬ、我等が如き如何に惑はんとすらん」など云ひ續け泣くも、いみじう悲し。夜中過ぎてぞ冷え果てさせ

は如何でか」と、殿の上切に聞えさせ給へば、參り給ひて、御枕上にて、念佛絶えず勸め奉らせ給ふ。山の座主、常に參り給ひて、いみじき事どもを申し聞かせ奉り給ひて、ともすれば打顰み泣き給ふ。只今はすべて此世に心留まるべくも見えさせ給はず。此立てたる御屛風の西面を開けさせ給ひて、九體の阿彌陀佛を凝視らせ奉らせ給へり。いみじき智者も、死ぬる折は、三つの愛をこそ起すなれ。況して殿の御有樣は、樣樣めでたき御事どもを思し放ちたる御氣色なるを、現世、後世具したる御身と見えさせ給ふ。女院、中宮をだに今は相見奉らせ給ふこと無し。朧ろげに申させ給ひてぞ、「然は」とて唯だ僅かなる程にて、「早還らせ給ひね、還らせ給ひね」と申させ給ふ。すべて臨終の念佛のみ思し續けさせ給ふ。佛の相好に有らぬより外の色を見んと思召さず、佛法の聲に有らぬより外の世の聲を聞かんと思召さず、後生の事より外の事を思召さず、御目には彌陀如來の相好を見奉らせ給ひ、耳には尊き念佛を聞し召し、御心には、極樂を思し遣り給ひて、御手には彌陀如來の御手の絲を引かへさせ給ひて、北枕に西向に臥させ給へり。萬づに此相ども見奉るに、猶權者におはしましけりと見えさせ給ふ。御堂の内に坊して侍ひ給ふ僧達、御堂童子に至るまで、唯だ物に當りて、水を浴み、人知れぬ額を突き、佛を入りも見奉る。御堂、御堂の僧など差し集まりて、或は搔膝をし、或は空を仰ぎて、如何で限り無き御身に、數ならぬ身を代り奉らん、代り奉らんと思ひ、淚を流すもいみじう哀れなり。世の中の尼どもは、阿彌陀堂の簀子の下に集まり居て、十方世界の諸佛の世に出でさせ給ひて、機縁既に盡きぬれば、必ず滅度に入り給ひて、近く釋迦如來、卅五にして佛道成り給ひ、

給ふ。有べい事ども申させ給ひて、いみじう泣かせ給ふにも、御心の中に、我世に過させ給はず成りぬる事を、哀れに口惜しうも有るかなと、心の中に見え奉らんと思ひつるものをと思さるるに、いと悲しう思召さるるなりけり。「今は斯く行幸、行啓にまかり合ひぬれば、今なん見奉る心殘る事無くて、極樂にも心清く參り侍るべき」とても、泣かせ給へば、いとど哀れにいみじう見奉らせ給ふ。女院の御方に入らせ給ひても、「此御事より外の事は何事かは有らん。然ても、疾く歸らせ給ふ。「惜しもと思へど、起き居給へるがいと苦しければ」と述給はせても、また泣かせ給ふ。殿の御前、「今はいと心安し、今日まで世には在りつるなり」と述給はするに付けても、僧俗、許多の人人、涙を流せど、いみじう忍びやかなれ。其後に、内裏にも、東宮にも、覺束なく思し歎かせ給ひて、思し入りたるも怖ろしうて、御慎みども有り。帝いみじう御孝心おはしませど、此御惱みの後、重く思し滯り、哀れなる御氣色におはします。何方よりも御使繁り、參り續きたり。筑紫、陸奥の國の守を放ちての國の守、殘る無く參り集まりたり。來年は交替なるべき國國などは、年も殘り無く成りぬるに、いと理無き事に思へど、「如何でかは」とて、何をも知らぬ際に掛り集まるなんめり。また御堂の僧などに參り混みし尼どもは、數を盡して、唯だ此御堂の邊りを去らず、夜晝額に手を當てて念じ奉りたり。「非常をおはしまさば、如何に哀れ」と、人知れぬ歎きどもも哀れなり。「此御堂は、三時の念佛、常の事なり。此の頃は然るべき僧綱、凡僧ども交代りて、やがて不斷の御念佛なり。見れば、いみじう尊き事も、やがて聞き合へるなりけり。三位中將入道、「尋常の折こそ有らめ、斯かる折に

の間にぞ御几帳しておはします。高き屏風を引き廻して立てさせ給ひ、人多うまじく候へさせ給へり。殊なる事無ければ、起き上がらせ給はず。猶「物つゝ聞し召せ」と、殿ばら申させ給へば、いみじうむつからせ給ふ。内裏よりも、東宮よりも、斯く今まで見奉らせ給はぬ歎きの御消息頻れば、「吉からん日して、おはしまさせ給へかし。唯だ思ふ事は、いと無礙に、臥しながら御覧ぜん事をなん思ふなり。然らば吉き日して」と遣はせ給ふ。此月廿五日宜しき日なれば、其日行幸の御用意あり。春宮の行啓は同じ日有るべけれど、心騒たゞしかるべければ、同じ月の廿六日と定めさせ給ふ。然て其日に成りて、辰の刻ばかりに行幸あり。昨日御髪など剃らせ給ひて、御袈裟、衣など奉らせ給ひて、世の常の御有様にて、御脇足に押し掛かりておはします。上いといみじう哀れに見奉らせ給ひて、塞き止めさせ給はぬ御気色のいみじきを、殿もいみじく泣かせ給ふ。あさましう有らぬ人に細らせ給へる御有様、哀れに悲しく心憂く見奉らせ給ふ。「然て何事をか思召す事とこは有る」と聞えさせ給へば、「今は此世に、すべて思ふ事候はず、世の中に朝廷の御後見仕うまつりたる人人多かる中に、上がりても、斯ばかり幸ひ有り、語るべき事の限り仕うまつりたる人は候はず侍らず。先づは朝廷の親父や、伯父やなどこそは、斯様にて候ふに、また斯かる折の行幸候はず。父帝、母后の御事にこそは候ふめれ。其れすら、然しも有らぬ類ひども数多候ふ。先づ近うは三條院、六月に位に即かせ給ひて、十月七日冷泉院の御心地重らせ給ひし、行幸あるべく仰せられしかど、公卿の定めに、猶御物の怪のいと恐ろしうおはします由申し侍りしかば、行幸候はず成りにき」など、いと爽やかに申し続け

に悲しき御渡りなり。殿ばらおはしまし、昔の女房皆侍へば、同じ樣なれど、唯だ一所おはしまさぬのみ、返す返すあさましきや。中納言殿の上も、此頃御子産みの事有べければ、三條なる安藝の前司よしすけが家に渡らせ給ふにも、やがて覺束なさに渡らせ給ふ。「萬づいと悲しくて、何事も知り聞えぬなり、疎かにな思しそ。今然るべき物は奉らん、白き物ども要るわざを」など、哀れに申させ給へば、中納言殿の上も、忍び敢へず泣かせ給ひ、「如何に、如何に」と、泣く泣く歸らせ給ひぬ。斯かる程に、中宮出でさせ給ひぬ。「今まで見奉らざりける事」と、いみじう泣かせ給ふ。女院、上の御前などは、初めよりおはしませば、中宮も「此處におはしまさん」と申させ給ふを、「いと便無き事なり、事の煩ひ有り、早う西殿へ渡らせ給ひね」と聞えさせ給ひければ、唯だ斯くておはします。殿の御前、いと苦しう成らせ給へば、此度と思召して、年頃御手づから書かせ給ひける御草紙二三帖ばかり侍ひけるを、女院に奉らせ給ふとて、殿、

　風吹くと昔の人の言の葉を君が爲めにぞ書き集めける

御返し、女院、

　慰めも亂れもしつつ惑ふかな言の葉にのみ掛かる身なれば

また、殿、

　言の葉も絶えぬべきかな此世には頼む方無きもみぢ葉の身は

斯くて日頃に成らせ給へば、本意の樣にてこそは、同じくは」とて、阿彌陀堂に渡らせ給ふ。もとの御念誦

鶴林

殿の御前畏く、此心地の、昨日の御法事を遂げさせつる事と思召す。御正日は來月五日なり。其れは皆、御經、佛など萬づ皆具したれば、いと安き事と仰せられて、いと實やかに苦しげにおはしませば、殿ばら御心地惑はせ給へり。日頃、上の御堂、定基僧都の御坊におはしませば、程狹くて、許多の殿ばら、人人參り混み給へるに騷がしければ「如何で、斯く騷がしからで在らばや」と宣給はすれば、いみじう忍ばせ給ふ。上の御前は、猶一品の宮のおはします方におはします。關白殿、御祈り御修法の事など掟てさせ給へば、「更に更に、己れを哀れと思はん人は、此度の心地に、祈りせんは、なかなか恨みんとす。己れをば、惡道に落ちよと、惑はさばこそは有らめ、唯だ念佛をのみぞ聽くべき。この君達、更に更に、な祈り在せそ」など仰せらるれば、「御物の怪の思はせ奉るなめり」など、私語き宣給はすれば、御祈り絶えたり。日頃に成るままに、いと苦しげにおはします。十一月に成りぬれば、宮の御正日の事せさせ給ひつ。内裏、春宮にも、此御惱をいみじき事に思召し歎かせ給ひたり。御心地俄かに重きにはおはしまさねど、去年より例のやうにもおはしまさず、物も聞し召さで、久しう成らせ給ひたるに、此宮の御事を、いみじう思召し屈折れさせ給ひつる續きなれば、斯くいと弱げにおはしますなりけり。月頃も、すべて御祈り絶えて籠させ給

堂の北の方の廊に下りさせ給ふ。明く成るに見れば、御前より初め、皆樂におはしまし合ふに、いと悲し。萬づ音立てて、未の刻ばかりにぞ事始まる。所所の御誦經ども、庭の面見えぬまで、池の際に出だして積み渡したり。殿の御前、女院、中宮、關白殿、次次の殿ばら、一品の宮、宮司ども、下部まで、盡きまで仕うまつるも片腹痛し。女房の御誦經、皆絹をぞ包みて仕うまつる。御誦經に御裝束二領なり。例の御裝束に、また尼の御裝束を添へさせ給へり。この御裝束を見て、典侍、

　掛けてだに思ひ掛けきや唐衣互に涙掛けんものとは

返し、辨の乳母、

　花にのみ染めし袂を打返し涙の掛かる色ぞ悲しき

佛は、此造らせ給へる阿彌陀の三尊、御經の程、推し量るべし。講師などの申し續け給ふ有樣、なかなかなる物摸ねびなれば書かず。斯くて事ども果てぬれば、かき冷ましたるに、一品の宮は、やがて今日の御局に留まらせ給ひぬ。十二月二日御正日なれば、其れ過ごして、九日枇杷殿に渡らせ給ふべきなりけり。殿の御前、萬づを信備めさせ給ひて、いとど心長閑かに、哀れに悲しう思さる。御心地の惱ましさ増さらせ給へれど、この御事をのみ、心に掛け思召しつるに、夜さりつ方より、いと苦しう思召さるれば、堪へ難くて臥させ給ひぬ。

少將、

　何どて君雲隱れけん斯くばかり長閑かに澄める月も有る世に

　さやかなる月とはいさや見え分かず唯だかき曇る心地のみして

斯くて、七七日の御有樣、爲させ給ふ事ども、え書き續けず。此度の御佛造らせ給ふ御飾りの御料には、大和守保昌の朝臣の許、玉を召しに遣はしたれば、京の家に、奉るべき由云ひ上げたりければ、參らすとて、和泉添へたり。

　數ならぬ淚の露を添へてだに玉の飾りを增さんとぞ思ふ

同じ御料の玉を、權大進爲政が請ひたりければ、赤染、

　別れにし玉は返すに難けれど淚のみこそ袖に掛かれれ〔底本ニハれるト誤レリ〕

殿の御心地も、去年より斯く惱ましうおはしませば、御堂の事、夜晝準備かせ給ふ。此宮の御事の後、いとど苦しう成り增さらせ給へれば、哀れに心細く思さる。いと怖ろしき事に歎き給へれば、御法事の僧の法服、御誦經の料の御衣の事、桑殿にも、大方の人人も、準備ぎ滿ちたり。斯かる程に、はかなく四十九日に成りぬれば、阿彌陀堂に莊嚴御裝飾など爲させ給ふ。また曉に、殿の上の御前、一品の宮、一つ御車にて渡らせおはします。殿の御方、宮の御方など、女房車二十ばかり有り。宮の女房、此度ばかりの宮仕と思ふに、殘り無く參りたり。萬づまだ暗き程にて覺束なければ、詳しく書き付けず。おはしまし着きて、此御

阿彌陀佛の三尊を造り奉らせ給ひける。昨日の講師、天竺の釋迦の涅槃の所の悲みの淚の、今に其邊りの砂子に染みて、紅の色なる心を說きければ、命婦の乳母、里より、

　君戀ふる淚の色はそのかみの別れの庭も斯くや有りけん

返し、辨の乳母、

　いにしへの別れの庭の淚にも身に染む事は猶ぞ勝れる

此程も哀れなる事ども多かれど、え書き續けず。

十六日の月明きに、典侍、

　君が見し月ぞと思へど慰まず別れし庭を戀しと思へば

辨の乳母、

　眺めけん月の光を知るべにて闇をも照らす影と添ふらん

少將の乳母、

　立ち昇る雲と成りにし君ゆゑに月ぞ憂き世の影とのみ見る

五節の君、

　憂けれども見し面影の戀しさに今宵の月を飽かず見るかな

命婦の乳母、

しく一所のみ雲霧に紛れさせ給ひぬるに、在りつる人人、皆歸り參れるも、數は知らねど、哀れに悲し。御忌に、權僧正を初め、然るべき僧綱達、皆侍ひ給ふ。此程の御願ありつれば、枇杷殿の西の廊にて、五大尊造り奉らせ給ふ。年頃もいと道心おはしまして、百萬遍の御念佛など、常に爲させ給ふ。貴き人と申しながらも、あさしまう心麗はしう、物むつかりなど爲させ給はざりつれば、功徳の人とぞ推し量り聞えさする。一品の宮御服奉れ、いと哀れに心苦しう、繪にも書かまほしうおはします。女房、宮司など、皆いと黑ましたれ。侍の人人は、さすがに濃き限り衣ばかりにて冠をぞ爲たる。中宮も女院も、覺束なくて止ませ給ひぬることを、哀れに悲しく思召さるべし。土御門殿にて、一年御堂供養や、殿の上の御賀に、四所さし集まらせ給へりし、一品の宮、殿の上など、すべて六所おはしましし程などの事、昨日ばかりと覺ゆるに、尙侍の殿の、哀れに若くておはしましに、この御有樣などの、すべて猶、世こそゆゆしけれ。一品の宮御方には、春宮より御使日日に參る。この春の御裝飾、女房の袖口、思ひ出づるも、いと黑き御簾、御几帳などの程、同じ御調度の事と見えぬにも、大人しき君達などは涙ぐむ折多かり。はかなく五七日にも成らせ給ひぬれば、日頃造らせ給へる五大尊、百の不動尊、供養し奉らせ給ふ。其頃は惡しき御物の怪どもにて亡せさせ給ひぬれば、佛道妨げにやとて、今は唯だ極樂へとのみ御心ざししなりけり。講師には教圓法橋いといみじう仕まつる。殿の上の御前など、いみじう泣かせ給ふ。女房など、あなかたはらいたと思ふまで泣けば、講師も涕れつつ、小止みがちなり。御法事は十月廿八日と定めさせ給へり。其れには銀の御具ども爲て、

り無くめでたきに、絵き立ちたる御有様などもいみじ。物見る人も、年頃の御有様の何事に付けても華や
かにおはしつる、思ひ續けて、目も昏れて見ただに偲き事なかりけり。女房の衣の色さへ見え分かるる月の色なれ
ば、皆な物の心知りたる人は、哀れに堪へ難く、世の常無き事をさへ、取り重ね思ひ續けて、女房の車を
見て思ひけり。

紫衣かへすがへすも悲しきは涙の掛かる行啓なりけり

と云へば、今一人、

花衣昔折かし袂も今はとて藤の衣を著るぞ悲しき

などぞ、人知れず我心どもを遣りける。宮の御前、おはしましも遣らねば、御簾に掛け奉り、引き率奉る。殿
ばら、人人、昔しう思さるべし。斯くて、おはしまし着きにたれば、いと嘆き暮れたりけり。晝よりも明かな
る月なれば、何事も殘り無く見分かる。おはしましては、今はの御事どもにて、夜深くなる御念佛の僧ど
も、聲長に立てて、泣く泣く哀れなるに、物の故、心も知らぬ者どもも、涙止め難く、山の座主、權僧正な
ど、導師、咒願仕うまつり給ひて、今は唯だ名殘無く、煙にて上がらせ給ふ程ぞ、いみじきや。今宵の御給
仕、輿御仕うまつり給ふ。然るべき女房など下りて、皆取り次ぎ仕うまつるも更なり。唯だ思ひ遣るべ
し。典侍正月の御事仕思ひ出でられて、泣き惑ふ様、以下脱文アルカ、或ハ様ハ衍ニテ、惑ふニテ切レ
タルカ然て曉方に果てさせ給ひぬる。御骨は木幡の僧都と、宮の亮輔任と、木幡に率て奉りぬ。あさま

じ。女院の御忌の日のみなん去らせ給ふべき。それにはた當らせ給はず、然らでは、え頓に爲させ給はじ」と申す。「然らば然にこそは有めれ、朧ろげにやは見えさせ給はざりし」とても、泣かせ給ふ。「祇園の東、大谷と申して廣き野侍り。そなたになんおはしますべきなり」と申せば、然ば明日まかりてぞ、然べきさまに仕うまつるべき」と、仰事賜ひてまかでぬ。御位も去らせ給ひしかば、御輿にて有るべきにあらず、故女院、四條の宮などの御例にて、絲毛の御車にてと思召したり。其日に成りぬれば、早旦より、宮司、然べき人人參り混みて、さまざま思し掟て仰せらる。道造り喧騷る。殿の御前は、力無く思召されて、「え歩むまじからんずらん」と泣かせ給ふ。日暮るるままに、準備ぎ喧騷るに付けても、宮司ども、涙に咽せて仕うまつる。女房達も、常の行啓のめでたかりつるを思ひ合はするに、あさましう涙におぼほれ惑ふ。やがて其折ぞ二火「入棺」仕うまつる。女房え仕うまつらねば、大納言、中納言、惟經、惟憲などぞ仕うまつる。然るべき御具など入れさせ給ふ。關白殿は御忌の日なれば、今日は見えさせ給はず。女房車四つ五つぞ參る。我も我もと泣き惑ひて、此度の御供にと云ひ續くれど、然のみ有るべき事ならねば、然るべき限り參り合へり。然て御車に乘せ奉りて、舁き出だす程の御聲ども推し量るべし。一品の宮は、東の廊の板敷下ろしておはしますべきなれば、差し合ひていみじ。乳母達え參らず、宮の御聲え忍び合へさせ給はず、哀れに悲しとは疎かなり。女房の、日頃、衣ども、菊や紅葉など爲重ねたる上に、藤の衣の重なる程ぞ凶凶しきや。常の行啓に有らず、押し返したるなり。有樣も哀れに悲しきに、秋を限りと思ふべきにや、曇

御衣を引き退けつゝ見奉らせ給ひて、「夢事とこそ覺ゆれ、やゝ」と申させ給ひ、御數珠を押し揉ませ給ひて、「御心强くおはしますかな、今まで生けさせ給ひて、斯かる目を見させ給ふ事」と、云ひ續け泣かせ給ふ事も、世の道理なり。上の御前、消え入りて臥させ給へり。關白殿、御湯など參らせ給ひて、扱ひ聞えさせ給ふ。御湯參らせ給ひても、いといみじき御氣色なり。一品の宮は、殿ばら殿方に渡し奉れ給へれば、殿も御帳にて泣き惑はせ給ふも道理に、悲しとも世の常なり。上の御前を御片手取りて、關白殿率て奉らせ給ひぬ。殿ばら、「殿をも今は率て奉らせ給ひなん、いとど苦しげにおはします」と申させ給ふ。久しう成りぬる御心地に、いとどしく苦しげにおはします。いと怖ろしうて、率て奉らせ給ふに付けても、いと悲し。女房達、大納言殿、中納言殿などは、御いと近く侍ひ給ふ。典侍、不便なるを、閑にて湯など勸むれど、見も入れず、いといみじや。心譽僧都は御修法果てて、今朝ぞ結願仕うまつれど、一拜だにて、と聞し」と、殿の御前道給はせければ、然て侍ひ給ひけるに、斯くおはします同じ事なれど、壇を壞たす成りぬるも、猶人より代りに見えたり。秋の夜長しと云へども、誰かは心安く寢入れ御殿籠らんずる。殿の御前すべて呆れ惑ひておはします。「然てのみやは」とて、守道召して事どもは問はせ給へば、「御前の初め、御贄など仕うまつりしに、斯からんとやは、思ひかけ侍ひし。御占などは宜しからず侍ひしかども、然ばかり侍らせ給ひし事どもに、然りとも、離させ給はじやとこそ、思ひ給へしか」とて、心憂き御事とぞ、涙も浮きて侍ふ。「然てとかくの日は明日にこそ候ふめれ、關白殿、御衰日なれど、其れに忌ませ給ふま

させ給へば、點頭かせ給ふを、泣く泣く成し奉らせ給ふ。御戒受けさせ給ふに、「持つ」と述給はする程、いと爽やかなり。上の御前も、今ぞ渡らせ給へれど、御目も昏れ惑ひて、何事も御覽じ分かず。心譽僧都、教圓已講など、然るべき僧ども集まりて加持參るに、御氣色の唯だ變りに變らせ給へば、中納言殿、大納言殿など侍はせ給へば、「阿彌陀佛と申させ給へ」と申させ給ふに、いと善く申させ給へば、此僧達、心慌ただしう加持參りて、承はるもいみじう悲し。内にも外にも搖すり合ひたる程に、殿ばらを初め、世の人人參り混み、搖すり滿ちたり。亡せもておはするままに、殿の御前、「あな悲しや、老いたる父母を置きて何地とておはしますぞや、御供に率ておはしませ」と、聲を立てて泣かせ給ふに、この里に退かでたりし人人も、何時の間にか參り集まりたりけん、いといみじう搖すり滿ちたり。三月六日より惱ませ給ひて、萬壽四年九月十四日の申の刻に亡せさせ給ひぬ。御衣のいと鮮かなる上に、殿の御衣、袈裟を、上取り覆はせ給ひて、鮮かなる御衣引き被きて臥させ給へり。御髮は居丈ばかりにや削がせ給へらんと見えさせ給ふ。結ひ際の髮より削がせ給へるなりけり。切れたる御髮を取らせ給ひて、殿の御前、三井寺の僧都に「是れ見給へ、斯くこそは長く生し奉りたりつれ」とて、引き立てさせ給へる程、六尺ばかりにぞ見えたる。いと目も昏れ、哀れと見奉りて泣き惑ひたるに、御戒の師も、やがて此僧都ぞ仕うまつり給ひける。「いと善く持つ」と述給はせつる程は斯くやは思ひ參らせつる。あさましう敢へ無き事を、一殿の中、搖すり滿ちたり。女房達惜みつつ、御年まで云ひ續け泣きたる聲、いとゆゆしう、凶凶しければ、取り分き心憂し。殿の御前、

めり」とて、九月七日の曉にぞ今南殿に渡らせ給ふ。御堂にては然りともと思召しつるに、渡らせ給はず成りぬるぞ、殿の御前も心憂き事に思し召したり。寢殿の東面に、御裝飾しておはします。此日頃、魚聞し召さでとこそ有れど、今日は難しき日、明日八日なれば、九日の早旦、關白殿より雉子の魚など持て參りたれど、すべて御衣を引き被きて、聞し召すべき御氣色無し。とかく萬づに試みさせ給へど、今は限りとのみ見えさせ給ふも、いみじう悲し。斯かる程に、九月十餘日に成りぬ。此處にも御修法、所の僧、心譽僧都仕まつり給ふ。日頃御堂にて、苦しう仕うまつりつる女房、十三日の夜さり里に退かでて、「明日の夜ばかり參らん」とて、出づるも多かり。萬づの陰陽師ども、十四日をぞ渡らせ給ふべき日に申したりける。其夜御前に人人侍ふを、ともすれば渡らせ給ひて物など仰せられなど侍させ給ふと思ふに、十四日の早旦、「如何で、湯少し浴みん」と仰せらるれば、侍士召して仰せ事賜ふに、各喜びを成して、準備き仕うまつる。「少し溫くとも、唯だ疾く疾く」と遣はすれば、進物所にかねやすに、「唯だ疾く疾く湯沸かさせて參らせよ」と、女房云ひたれば、急ぎたちて參らせたれば、陸行り下りさせ給ひて、いと善く浴みさせ給ひて、上らせ給ひぬ。日頃の御座、御衣、皆脫ぎ取り遣らせ給ひて、鮮かなる御衣、御帳などに臥させ給ひて、「殿おはせよ」と有れば、斯くと參りて申せば、「湯にまかり下りたり、只今參る」と申させ給へるに、限りと見えたるにぞ、急ぎ上らせ給ひて、御湯帷布ながらおはしましたるに、御氣色の例ならずおはしませば、「やや、參り侍る」と申させ給へば、御髮削ぐ様似を爲させ給へば、「尼に成らせ給はんとや」と申

く膝行り出でさせ給へれば、あさましう哀れに嬉しう見奉らせ給ふ。佛の御驗と見奉らせ給ふ。然て事始まりぬ。御堂の佛の供養、やがて御八講なれど、講師達他事無し。唯だ此宮の御惱の由を、返す返すも、心を唱へ祈り申し給ふ。例の皆百僧なり。法服せさせ給ふ。「百體の釋迦の一念の故に、御命を延べさせ給ふとも、百年は延びさせ給ふべし」など、哀れに尊く悲し。柱どもには、法華經の心を皆繪に書かせ給へり。廿五日、五卷の日に當れば、法服など、皆確實しく爲させ給へれど、大方の僧達も、只今は此御事のみ心に掛かりて、靜心無げなり。はかなう日頃も過ぎて、僧どもの布施、いと嚴めしう爲させ給へり。女院は、宮の近うおはしますを見奉らせ給はぬ事を思召せど、事限り有りて、やんごとなき御中は術無し。斯くて此月過ぎぬ。九月に成りぬれば、夜長に成り増さりて、惱ましき御心地いとど増さりて、睡眠ろませ給ふこと難し。闕り仕うまつりたる人人も、猛く思へど、餘りに成りて、眠りがちなり。典侍は、無下に呆けて、晝さへ眠り侍ひ給ふ。殿の御前は、今は何事をかは爲べからんと思召しても、昔の鎌足の大臣のいみじう煩ひて、萬づ爲給ひけれど止まざりけるに、新羅より渡れる尼の、維摩經講じけるにこそ瘥り給ひけれとて、奈良の僧ども、りうせい「永昭ノ誤カ」を初めとして、融碩、經救や、然るべき人人召して、維摩經講ぜさせ給へど瘥らせ給はず成りぬ。猶今は然るべき月日を待たせ給ふなめりと、思し見奉らせ給ふに付けても、涙止め難く、我が御命も縮まるやうに思さる。「すべて今は何事も驗も無し、如何で枇杷殿に生てくとも死ぬとも」と述給へど、「如何でか御病の起りし所へはおはしまさん。御物の怪の思はせ奉るな

ゆ亂れさせ給はず。此上無く長く見えさせ給へば、斯く苦しながらも、生ひさせ給ふためりと、有り難く見えさせ給ふ。然て渡らせ給ひて、五大堂の東の廂、北面かけておはします。殿の御前は、この同じ御堂の戌亥の方の間におはします。宮の侍には、大御堂の北の廂に、平張引きてぞ侍たる。御修法始めさせ給へり。關白殿、内の大殿の御前、上の御前、宮の大夫殿せさせ給ふなりけり。斯くておはしませど、二三日に成りぬるに、御物の怪つゆ聞えず、是れをいとあさましき事に、殿の御前も、僧達も申し給ふに、夜、ともすれば消え入らせ給へば、僧達集まりて加持參れど、御欠伸をだに為させ給はず。御物の怪の皆去りにたるかと思ふべけれど、御心地は同じ樣なり。權僧正などは、水を浴びて行を打つらんやうに、人の見苦しうとて、同じうおはしますに、いと心憂きことを、各歎き申し聞え給ひけり。然るは、この廿三日渡り給へりし月頃の御修法供養せんとて、多くの法服を設けさせ給ふ。やがて御八講と思し掟てさせ給ひて、捧物をさへ例の樣に調させ給へれど、この御惱に障らせ給ふべき事を、殿の歎かせ給へば、宮の御前「何どてか止めさせ給はん、心地は例の事に成りて侍れば、其れまでは、念じてこそは過し侍らめ」と申させ給へば、殿「哀れに嬉しうも仰せらるるかな」、斯く宣給はするに、佛、この御心地、今日明日の中に怠らせ奉り給へ」と、御數珠を押し揉ませ給ひて、念じ申させ給ふ。然て此事を思し準備がせ給ふ。所所の御捧物も「例の事非しみたらず麗はしき樣に」と思し宣給はす。其曉に、女院渡らせ給ひて、藥師堂の北の廂にぞおはします。一品の宮、上の御前、辰巳の方へおはしますに、宮のおはします程五六間渡るを、宮の御前、能

せられて、髯せ奉らせ給ふ。上の御前も宮にのみおはします。唯だ御胸のみ塞がりて、萬づゆゆしうのみ思し續けさせ給へば、如何で斯う思はじと思し直せど、猶いと理無くのみ思さる。八月にも成りぬ。月日の往くも知らせ給はぬ御有樣なれど、哀れに過ぎもて行く。斯くてのみやはとて、御堂の五大堂に籠らせ給ひて、御修法せさせ給はんと思し述給はす。その御堂の北面に、おはしますべき樣に、萬づ造り急がせ給ふに付けても、いと哀れなり。東宮よりは日日に御使參る。中宮、女院、いみじう思し歎かせ給ふ。この御心地は三月ばかりよりなれば、此月は六月に成らせ給ひにたり。つゆ物を聞し召さねば、今は唯だ影の樣におはします。御心地も少し爽やがせ給へば、御湯殿と有る折は、釜殿いみじう喜びを成して仕うまつるも哀れなり。女房達、侍士どもも安き睡も寢ず、我も我もと競ひ仕うまつりて、斯く有りて如何に「と戰カ、人知れず打語らひ、涙を拭ひつつ歩き合へり。夜も御格子も參らねば、やがて簀子に並み居て、勾欄に背中を當てて、其れを休まりに眠り集まり給ふ程、眞に心苦しう堪へ難げなり。內の大殿は、年頃造らせ給へる新しき殿に渡らせ給ひて、居籠り給へりと聞ゆ。八月十三日には御堂に籠らせ給はんとて、女房の服裝作ろはせ給ふ。この御惱怠らせ給はば、十月ばかりに御參り有るべしとぞ有るを。其日に成りぬれば、然るべき御調度ども、持て運び裝飾ふ。夜さりに成りぬれば、女房鮮かに出立てて參り集まれり。一品の宮、紫苑色に朽葉の御衣など奉れり。御前には白き御衣二つ三つ奉りたるに、御色も同じやうにて、唯だ直道に白うおはしまして、御髮は押し下して結はせ給へるままに、御結目の程は亂れて、其れより下は、つ

り並ばせ給へり。皆百體の御顏に佛具居ゑて、花添り、十弟子の御眼の心地どもも、其所思ひ遣られて、笑ましくも哀くも有り。迦葉の口の中に笑みを含める程こそをかしけれ。舍利弗は、御名に違はず痩せ給へり。阿難尊者こそ若く淸げに見え給ふめれ。常啼菩薩のいとめでたし。斯くて供養は後の日と思し掟てたり。然て後にぞ世継殿に心長閑かに出で入らせ給ふ。殿おはします折は、御心地宜しくおはしませば、其れを嬉しき事にておはします」 いと頼もしく常に護身參らせ給ふ。御修法、此頃は三昧堂に住うまつり、御堂の僧都なども參れり。彈正宮阿闍梨なども參るに、御物の怪もいざよひ居ゑたる樣なれば、常に召し籠む。然て隣衆と云ふ人、物の怪など顯はしたりとて、殿の御前、「これは行いみじうすと聞きし者なれば、必ず驗あらん」とて、阿闍梨に成させ給ふ。「この御心志は、宿世の幸ひなりけり」と、世の人申すめる。若君の、宮斯くておはしませば、世の中いと頼り無げに思したるも、いと心苦しく思されて、常に呼び參らせ給ひて、御乳子參り、掻き撫でさせ給ひて「哀れ」と打ち誦はするは、え見や果てざらんと聞召すなるべし。若君も、いみじう遊び給へれば、いと心苦しうて、御乳母、殿に「此頃ばかり迎へ奉らせ給へ、御物の怪の散りたるも怖ろし」と聞えさせたれば、げに然もと思して、七月十餘日に、三條院に迎へ奉り給ふ。「暫しはせ給はば參らせん」と申させ給へば、御前打ち頷かせ給ふ。御兄「內藏」の乳母、人笑はれにやと、人知れぬ心の中には願ひ立つ。何れの君も、御乳母どもの、是れを是れをと思ひ申したりしに、此君の渡り給へりしかば、安からぬ事に云ひ思ひたりしものをと思ふに、理無かるべし。苦しうおはしませど、御衣などの事仰

ぬ。此頃聞けば、民部卿、日頃いみじう煩ひて、出家し給ひぬと聞ゆるも、殿の御前は、いと哀れに聞し召して、殿の御前、〔此句衍カ〕いみじう思召すべし。月頃百體の釋迦造り奉らせ給へる、急ぎ給へりとて、此廿一日にぞ渡し奉らせ給ふ。藥師堂よりは北の端、大御堂よりは東に、檜皮葺の御堂造らせ給へり。中三間は高く上げ、南東三間は廊造りにぞ造らせ給へる。其日の早旦に成りて、雨降り雷鳴りて、空の氣色煩かしげなり。辰の刻ばかりに成りぬれば、空晴れて、日いと晴朗過ぎて、暑く侘びしきにも障らず、世の人例の混み喧騷りたり。中尊は、皆金色にて丈六におはします。今九十九體は等身の佛にて、皆金色にぞおはします。然れば人の參る程におはしませど、廣き御堂の程は、五つ六つばかりの兒の居たる身長ばかりにぞ見えさせ給ふ。丈六は力車と云ふ物に、然るべき替を爲ておはします。諸僧皆威儀美くしうして參りたる。九十九體は手輿と云ふ物に乘せ奉りて、青く裏盤〔原文えう〕じたる絹袴着て、四人づつ持ち奉りたり。御堂の池の上に、佛の御影また現はれ給へると見ゆるに、限り無く尊し。殿の御前は、五大堂の辰巳の隅の方に、御簾掛けておはします。女院、殿の上は藥師堂の北の廊に西かけておはします。關白殿を初め此殿ばらは、藥師堂の東の勾欄の下の土に圓座敷きて、次第に並み居させ給へり。皆薄鈍の御直衣、指貫にておはします。右馬入道の御服と見えたり。他殿ばらは皆さし退きておはします。佛おはします程に、殿の御前下りさせ給ひて拜み奉らせ給へば、殿ばら同じ如參り寄りて、拜み奉らせ給ふ。斯くて、佛、中の間の高きに中尊おはします。その御傍に十弟子並みたり。二王など立たせ給へり。傍の短き廊どもには、九十九體皆重な

侍はぬ物覚えず、有るべき様にも有らぬ様なり。此御殿には、怨霊の怪など人に駆り移しなど、其程御心地宜しうも成らせ給はず、唯同じ如然くおはしますに、いと怪しき事なり。御殿の中には、堀河の大臣の御気はひに、女房差し覗き出で給ひて、云ひ聞け給ふ事どもも、いと怖ろし。また御傍の殿の御気色などにやと見ゆるも、差し覗き申させ給へれば、上の御様、哀れにいみじう泣かせ給ふ。其れは、とかく慰め聞えさせ給ふに有られど、道理に成らせ給ひぬる人は、斯くのみ有るわざなるぞ、哀れに心憂きや。斯くて云ふ程に、一品の宮東宮たちを思し歎かせ給ふ中にも、右馬の入道の御服にておはしますべければ、六月二日に出でさせ給ふべしとて、女房の装束鈍色に、此御殿の御簾などす。御作をせ給ひし西の御方に、塗籠、方違の御座所なれば、此度は、東の面に相隣の大将立ちたるをぞ、更へ装束はせ給へり。然て宮出でさせ給ひて、何時しかと見奉らせ給ふに、「悲しくて泣かせ給ふ。何事も思いたれど、え聞えさせ給はず。殿の御前も「如何に、如何に」と、日日に出で立たせ給へど、え参らせ給はず。霊験寺の僧正も参らせ給へりしかど、其験と見ゆる事も無きぞ、日つはいとあさましき御心地なるや。宮の中の事は然るものにて、四方の山門、寺寺、験を尽す御祈も験見えぬ、いと心憂し。六月十六日の程の月明きにぞ、殿の御前参らせ給へる。御物の怪駆り移して喧れば、「何どてか、許多の年頃頼み申したる僧、験、然りとも」ただ頼もしげに祈らせて、御持参らせ給ふ。哀れに悲しき事、左に思すべかめれど、宮いと苦しうおはしますと、いと情ましき御心地にて、はかばかしう聞え交はさせ給ふ事無くて、「今宵は疾く疾く還かでて、今また参らん」とて、出でさせ給ひ

ば命長しとこそ申せ」と申し給ひければ、「命長からんを嬉し、長らへんを嬉しと思はばこそ有らめ。唯だ佛の告げさせ給ひつる嬉しきなり。然ても外に罷りなん」と聞えさせ給へれば、僧正、「何どて、斯くてこそおはしまさめ。げに昔より、茲に然る事侍らぬ所なれど、おはしまし着きて、また外へおはしますべきにあらず。唯だ御念佛を眞心に篤させ給へ」と勸め聞え給ふ。また懺法の際絶えず仕うまつる。御堂には、此御事を聞かせ給へど、宮の御心地にだにえ參らせ給はず。況いて山までの御歩き思し掛けぬに、樣樣に思し歎かるべし。斯く覺束なさを思しつる程に、五月十四日に亡せ給ひぬ。いとど哀れにいみじき御事なり。高松殿には聞し召して、唯だ思ひ遣るべし。御法師成りの時だにいみじかりしに、あさましう悲しとも世の常なり。院の女御の御事をだに、隙無く思し出づるに、「また此は如何に、世斯う成りぬるこそ」と、ゆゆしう思さる。御堂には、哀れに見ず成りぬる事、出家の折、辛し、心憂し、口惜しと思ひし、戀しう思ひけり。斯く久しう有るまじかりけるものをと、來し方、行く末、思し續けらるる事もゆゆしければ、唯だ御胸のみ塞がりて思さる。是れに付けても、宮の御事いと怖ろしうて、「今や今や」とのみ御心に掛かりて、堪へ難く思さる。殿ばらなども、いみじう哀れに思し歎かる。中宮の大夫、大納言など、御訪ひに、皆山へ上らせ給ひぬ。萬づ哀れなる世なり。女院なども、いみじう思召し歎く。枇杷殿には、「あなかしこ、御前に此事聞かせ奉るな」と有れど、氣色を御覽じて、いと哀れに心細げに思さるべし。唯だ常の御言には、「如何でか有らんと侍らん」と宣はせけるには、御乳母の典侍の事なりけり。其れを本になりて、典

し慰めける。殿の上も頻參らせ給ひて、斯かる御心地を如何におはしますらんと、思し歎かせ給ふ。すべての御心地、月日の行くままに、いと長閑かに冷然き御有樣見いて恐ろし。「然ば又は何事をかは」とて、例の御讀經に、また上手ども召して始めさせ給ふ。壽命經、かのう「觀音ノ普門カ一經」、藥師經などの御讀經、數を盡させ給ふ。東宮には、「折しも有れ」と思し歎かせ給ひて、わざとの御使常に參る。一品の宮は思召し續きたる事限り無し。何事も物のみ恥かしう思さるるに添へて、此御心地を、いみじき事に思されたり。枇杷殿には、此頃の三井寺の心譽僧都、めいそう「明尊ノ行カ」僧都、じやくせう「寂昭カ」など、御修法仕うまつる。斯かれど驗と云ふこと夢に見えさせ給はぬ事を、上の御前心細く思し歎きたり。五月四日には、御堂に阿彌陀堂よりは東、大御堂よりは西、細小やかなる御堂、十齋の佛、月頃造き立てて渡し奉らせ給ふ。例の樣樣の御儲あり。僧達前前の如し。此宮の御心地、更に怠らせ給はず。世の中の聞えあり。驗ありと云はるる人人も、斯う打延へ御修法仕まつりたり。御祭、祓、數を盡せど、怠らせ給ふ氣色見えず。一品の宮、此御氣色に、「出でん、出でん」と宣給はすれど、東宮「暫し、暫し」と聞えさせ給ふ程に、右馬の入道の君は、初めは無動寺におはせしかど、後は大原にて過ごし給へるを、月頃、物をつゆ參らざりければ、中堂に參らせ給ひて、二七日籠り給ひて、「唯だ生死を告げさせ給へ」と申させ給ひければ、何事とも無く、「唯だ死設けを爲よ」と夢に見給ひければ、無動寺におはしまして、權僧正慶命に、「斯う斯うの夢をなん見つる。然れば今は斯うなり」と遣給はすれば、僧正、「何どか、夢はなかなか然見ゆれ

今日は皆然べき樣の事ども、推し測り、細かに仕うまつらせ給ふ。然て渡らせ給ひて御覽ずれば、めでたさは日慣れさせ給へる御事なれど、何事もまた、其折の此處と爲立てたる、心殊なるわざなれば、いとめでたく御覽ぜらる。一品の宮は、短かき御几帳を身に添へさせ給へれば、顯露ならねど、まだ隱れ無し。美くしう細小やかにおはしまして、差し並ばせ給へる、繪に書かまほしく見えさせ給ふ。今年は十五にや成らせ給ひぬらん。東宮は十九ばかりにやおはしますらん、いと有らまほしき程の御有樣なり。今宵より此御方に御殿籠れば、御前の御曉起も苦しげにおはします。女房も理無かりつるに、いとど思ふ事無き世の有樣なり。各我が儘に磨き立てて、辰の刻ばかりにこそは御前に出づめれ。御堂には斯かる御有樣を知らせ給ひつれば、萬づ細かに哀れに、心しらひ參らせ給ふも哀れになん。枇杷殿の御心地いと苦しげにおはします事いとどしければ、明尊僧都、御修法三七日仕うまつり給へれど、癒らせ給はねば、並べて然るべき人、二壇三壇仕まつるばかりに、力を盡し加持參るに、更に御欠伸をだに爲させ給はず。然るべき御祭、祓、數を盡させ給ふ。斯かる程に、祭など過ぎて、心長閑かに成りぬれば、枇杷殿には、内裏の御有樣の覺束なさをさへ苦しう思さる。宮の御裝束、女房の事など、繁う思し當てがふ。殿の御前も、例もおはしまさぬ中に、御堂の事や、十齋の佛の御事や、樣樣いみじう靜心無く思召さるべし。淸涼殿の北面は、弘徽殿の南面なれば、上は常に此御方を御覽じ覗かせ給ふべし。昔の御心ばへも忘れさせ給はぬにこそ。若宮の御湯殿の事聞ゆる御聲も、いと近き程に隔て無きもをかし。枇杷殿には、内裏の女房の繁く參るにぞ、萬づ聞し召

せ、いみじう思召したるに、宜しくおはしましつれど、またいと苦しう惱ませ給へば、關白殿率て下ろし奉らせ給ひつ。いと苦しげにおはします事を、御堂に聞し召して、御祈り修せさせ給ふ。御物の怪やとぞ見えさせ給ふ。東宮よりも御乳母達など、「如何に、如何に」とて參り集まる。曉方にぞ宜しう成らせ給へる。

枇杷殿には、我が御心地よりも、「如何に、如何に」と思召すに、怠らせ給へるを、内にも外にも、嬉しき事に思し聞えさせ給ふ。夜頃斯く下り上り惱ませ給へば、いと心苦しく思召して、今は此御方におはしまし御覽じ籠るべし。程も無き御衣更への御準備に、御堂にも枇杷殿にも準備がせ給ふ。四月二日は東宮の若宮御袴着の事、女院準備がせ給ふなれば、此御方よりも、御裝束ども調て奉らせ給はんとて、準備がせ給ふ。四月九日にぞ東宮此御方へ渡り始めさせ給ふべかりける。御衣更への御几帳、皆卯の花の織物二重重ねにて爲させ給へり。女房の局、細殿や、局局の有樣なども、好み殊更めきたり。女房達、撫子を織り重ねたる。其日ぞやがて乳母達の賜り物ども、然るべき樣に爲させ給へる。常の御有樣に、また細長などを添へさせ給へりける。上の女房、女官、下仕などまで、皆前前の御有樣なるべし。殿ばら此頃は、夜晝分かず侍び給ふ。

玉のかざり

こよなう長閑かに成りぬるも覺束なく萬づ覺え明かさせ給ふ。內裏には日射し出づる程に御使あり。權亮良頼の朝臣參り給へり。御几帳ども、藤の織物三重にて立て並めたり。御帳も同じ色なりけり。何事もさまざま同じ如、めでたき御有樣なれど、猶此度は今少し氣高さ增さりてぞ見え給ひける。然るべきにや、萬づおどろおどろしき有樣にぞ。弘徽殿の東面なれば、御簾の際の女房の袖口ども、形容び遣るべき方無し。御乳母達、上﨟達など、上衣は皆二重織物、色色樣樣なり。すべて萬づいとめでたし。帝の御女斯かる御有樣は、故朱雀院の御女の、冷泉院の東宮と申しし時に參らせ給ひしこそは、斯かる類ひなめれ。其れは甚う與寄りたる中に、帝も例におはしまさずなど有りしかば、いと思ふさまにも見えずぞ有りし。此御有樣は、いといとめでたしや。關白殿、他殿ばら、皆おはしまして、御使いみじく醉はさせ給ふ。此御使の君も、固より酒飲む人なれば、いみじく强ひさせ給ふ程に、無下に醉ひたり。祿の程なども、殊に目留まりたり。甚う赤みて、しどけなげに亂れ參りぬ。其事ども、御裝飾などを、大宮の御覽ぜぬ事を、殿ばらいみじく口惜しき事に思し申させ給ふ。頻りて上らせ給ふ御使隙無く奉らせ給ふ。勞はりたる事のやうなれど、御志深げに見えさせ給ふ。是れを御堂にも宮にも、甲斐有り、嬉しと思召さるべし。宮よりも御堂よりも、御裝束ども持て參る。斯くて後四五夜ありて、上らせ給はんとする程に、俄かに御心地苦しう爲させ給へば、關白殿、つと抑へ奉らせ給ひて、いみじう思したり。東宮よりも御使「如何に、如何に」と頻りなり。少し寬舒まらせ給へれば、猶猶とて上らせ給ひぬれば、東宮「如何に、如何に」と思し亂れて見奉ら

どもに、青色に、柳襲の唐衣、裳の有様、例の御掻練よりも心殊なり。斯くて日暮るる程に、殿ばらの御出車ども牽て參り集ひて喧騒る。一品の宮いみじう美くしげにおはします。御方違におはしますとぞ聞らせ給へりける。大宮の御前のおはしまさぬを、「獨りは如何で」と歎かせ給はねに、萬づ聞えさせ慰め給ふ。御輿、南面の御階の間に寄せておはします。大宮の哀れに愛くしう見奉らせ給ふ。上の御前も哀れに見奉らせ給ふ。御堂より、「如何に、如何に」と、御消息頻りに有り。女房車などの有様思ひ遣るべし。參り着かせ給ひて、下りさせ給ふ程の儀式など、心殊におどろおどろし。御輦車や何やと有る程に、やや夜更くる程下りさせ給ひぬ。然て、何時しか、疾く上らせ給ふべき由、御使頻りなり。斯く云ふ程に、殿下に夜更けて、關白殿切に慫慂かし奉らせ給ふ程、我が御女などのやうに、哀れに見えさせ給ふ。御堂には、「我を哀れと思はん人人、我が代りに、細かに仕まつり給へ」と、泣く泣く聞え給へば、何れの殿ばらも、いと心殊に仕うまつり給へり。關白殿、御手捉へて、上り奉らせ給へど、動きも做させ給はねば、東宮出でさせ給ひて、かき抱き奉らせ給ひて、御帳の内へ入らせ給ひぬ。例ならず美くしうをかしき御様を、甲斐有りて思召さるべし。御供の人人、やがて然るべきどもは、皆上に侍ひ給ふ。殘りは下りぬ。鷄[illegible]啼けば、御迎への女房、續き立ちて參りたれど、頓に下りさせ給はず。「明うもこそ成れ」と思ふ程に下りさせ給ひぬ。枇杷殿には、宮の御前、御心地さへ惡しうて、さまざま思し惱れて、御帳籠り入らせ給はで明けぬ。北の政所の御前も御物語長閑かに珍らしくし、明かさせ給ひてけり。參らせ給ひて後、

萬づは御堂に皆掟て仰せらるれば、唯だ此宮には、女房の事をのみ準備がせ給ふに、其れだに各準備げど、猶靜心無げに思召すに、御惱みさへ斯かれば、いとど靜心無し。「今日明日に成りぬる御準備を」と忍び思召せど、猶此御心地のいと理無くて、思し紛れぬ樣なり。御堂には、此御準備も宮の御惱みも、さまざまに外に承はること、安き心も無く思召すままにぞ、唯だ關白殿を、其事彼の事と、方方聞えさせ給へば、いと御心の隙も無く思すべし。殿は、かれての御定めにて、內裏にはやがて大宮も添ひ奉らせ給ふべく申させ給ひしかど、帝の御母后、妻后を放ちては、他后のおはしますやう無かりければ、いと口惜しう思召す。廿三日の早旦に成りぬれば、然るべき人人、御裝飾に皆分散れ參る。弘徽殿に御裝束具したれば、差し覗き見る人人も、目も耀き、めでたしと思へり。宮には女房達の化粧を磨き騷ぐ。御乳母達も此度の御準備を世の大事に思へり。晝つ方に成りて、關白殿參らせ給ひて、然るべき事ども掟て述給はす。他殿ばらも同じ心に立ち騷ぎ給ふ。御堂よりも御使頻りて參り交ふ。斯くいみじきに、女院、中宮よりの御使參りたりければ、あさましく騷がしき紛れに、歸り參りにけり。口惜しく思召さるべし。女院よりの御裝束は、八重櫻をえも云はず匂はせ給へり。御扇、薫香など細かなり。御衣箱など、わざと本文を書かせ給へり。中宮よりは、藤をぞ紫に、濃く薄く織り重ねさせ給へる。小一條院、式部卿、中務の宮よりも、御扇數も知らず、めでたう爲させ給へり。關白殿より、童女四人の裝束めでたく爲させ給へり。紅の袙、萠葱の織物の袙、山吹、櫻の汗衫、三重襲の袴、扇まで、いみじく爲させ給へり。下仕四人、內大臣殿さまざまの絹

の止まるべきにもあらず。御堂にも、去年より悩ましげに思召して、此御事どもを外外に聞し召すを思し歎かせ給ふ。成典律師、僧都に成りて、此御祈りの折節しも、喜び仕うまつりたる事、「山口著し」など喜び申し給ふ。宮の内、いと心慌ただしう準備き立ちたり。常の御準備だに如何が有る。況いて是れは少さくおはしまししより、「然有らばや」など、御前にも、御乳母達も念じ給はせ聞えさせし事なれば、堪へんに從はん事を、謂ひ云ひ準備ぐべし。然れど、怪しからず疊口、螺鈿すべきにもあらず、唯だ例の装束をめでたくすべきなり。三具を皆準備ぎたり。大人、童女、下仕の數、前前の御參りの如し。日の近う成るままに、宮の內閙り滿ちたり。斯かる程に、十七日吉き日なりければ、「春宮の御使參るべし」とて、萬づの御用意違へり。御前の遣り水さへ心ゆく樣に涼しげなり。關白殿、內の大臣殿など皆參り集まらせ給ひて、待ち迎へさせ給ふ。申の刻にぞ參りたる。侍從大納言の御子少將行經の朝臣、御使にて參り給へり。東の廊より寢殿へ參る程の氣色、用意殊なり。大納言善く敎へ給へりと見えたり。御文、[illegible]の紙にて、柳に附けさせ給へり。見るより心殊にめでたう見ゆるも、率爾の目たるべし。中の御心は知り難し。南面の東の二の間に南殿きたり。關白殿などは少し西に寄りて、東向きにおはします。例の御簾際、日暮るるまで見えたり。斯くて御乳母達は妻戸の方に、他女房達は南面に居給へば、例の作法の事どもにて、暗き程に御返り賜はりて參りぬ。其後は日日に御使參る。殿の上などは、此頃は此宮におはしまして、同じ御心に思し扱はせ給ふ。尚侍殿の御事も、今更思ひ出だし聞えさせ給ふらんかし。春雨さへ長閑かに降れば、何事も心もとなし。

び參らせ給ふ。其の御消息には、「猶猶怠ませ給ふな、此亂り心地の、去年よりはいみじう苦しう侍へば、參りても申さぬが、いと口惜しく心もとなきと、唯だ此御事に由り、今まで生きて侍るなり。彼の日まで侍らんの心にてたん沓が君準備がせ給へ」と有る御消息頻りなるを、大宮の御前、ゆゆしく哀れなる事に聞し召せど、物の初めに忍ばせ給ふ。然れど御目に淚浮かせ給へり。承はる人人も、忍び敢へぬ氣色どもなり。斯かる程に、大宮の御前、怪しう惱ましう思されて、ともすれば打臥させ給ふ。御面赤み、苦しうて、御足叩かせて、起き臥させ給ふ。「心得ぬ心地かな」と述給はせつつ、起き臥させ給ひて、此御事を扱はせ給ふ。御風にやと、朴聞し召させなどすれど、同じ樣におはしまして、斯くて四五日に成らせ給ひぬ。關白殿參らせ給へるに、「何ど御氣色の苦しげにおはしますぞ」と申させ給へば、典侍、御前にて、「此四五日に成らせ給ひぬ、御風にやとて、朴など聞しめせど、怠らせ給はず」と申させ給へば、「いと不便なる御事にこそ」とて、侍士召して、守道召しに遣はすべき由仰せらる。然て參りたれば、斯う斯うおはします由を問はせ給へば、「御氏神の祟りにや、土の氣」など申せば、御前にて御祓仕うまつる。「總べて物をつゆ聞し召さぬなり、いと折惡しきわざかな」とて、御祓、日に二三度仕うまつるべき由述給はす。然て御堂に參らせ給ひて申させ給へば、「いと不便なる事なり、猶猶然るべき樣に思し掟てよ」と申させ給ふ。日頃一品の宮の御方の御修法、仁和寺の成典律師の仕うまつる、大宮の御方の御修法有べう、思し付け掟てさせ給ふ。宮の御前も「折しもこそ有れ」と思召せば、忍ばせ給へど、いと堪へ難げに思召したり。然りとて此御事

際やかに召さず。斯くて「御參りは内にや東宮にや」と、萬づに申し罵るめれど、宮の内には、まだ然る事も聞えぬ程に、三月にも成りぬるにぞ、宮の内に此事漸聞ゆるに、女房達打群れ居て、此御事を云ひ思へり。昨日今日、御堂より御消息集かんめる關白殿、參らせ給ふ。中宮の大夫殿など、物細かに申させ給ふ事どもも有べかめるは、此御事にこそと推し測らる。何時しかと心もとなく思ひつる程に、三月六日、「今日なん吉き日とて、關白殿參らせ給ひて、此御事ども定めさせ給ふべき」とて、宮司どもも參り集まる程に、未の刻ばかりに關白殿參らせ給ひて、御硯召して、「今日は唯だ氣色ばかりたり」とて、事ども少し書き付けて出でさせ給ひぬ。酉の刻ばかりにぞ、御堂より、「今日吉き日なれば」とて、絹綾など何くれ數知れず持て參り、宮の内の人人に配らせ給へば、「あなかしこ、夜を晝に急がせ給へ。廿三日なれば殘りの日も幾らぬなり。人人の唐衣、上衣の織物どもは、織物召して賜ばせ侍りぬ。唯だ此事どもを疾く疾く」と申させ給へば、然るべき人人に、皆配らせ給ひつ。「打物などを、如何で侍敢へんとすらん、織物も賜はせんをのみ着るべきにもあらず、如何にせまし、日の近く成りぬること」と、靜心無く各急ぎ思ふ。日頃「參らん、參らん」と案内申しつる人人も、一部をぞ召したる。故帥源中納言の女數多あるを、一人一人召すに、大夫の中將「更にえ知り侍らず」と啓し給へば、「御堂に聞し召して、「然るべき樣の物を選はせ」と申させ給へれど、「給ふ參るまじき」よしを啓し給へれば、殿の聞し召して、「さては總べて宮の内に寄せさせ給ふな、此邊りにも寄せ侍るまじ」とて、實基の君畏まり給ひぬ。斯うて御堂よりは、樣樣の物を取りも入れ敢へず運

します。其程の事ども、物騒がしき紛れにて細かなる事ども忘れにけり。內裏、春宮打續かせ給へる御樣の更なる事なれど、御容貌、御齢の程も、御心樣までに、とりどりにめでたくおはしまして、內裏の上廿にやおはしますらん、盛りに誇りかに愛敬づき、物物しく、なまめかしくおはします。東宮十九にや、いみじく染み深く、淸やかに、艶めきておはします御樣、更に聞えさせん方無し。皆色色しく華美におはしますしも、めでたげなり。女院の御幸ひ、度每に稀珍らかに、聞えん方無し。殿の御前忍びて見奉らせ給ひて、ゆゆしきまで思さる。歸らせ給ふ程に、院司、殿の家司など、皆さまざま加階し喜び、さまざまめでたうて歸らせ給ひぬ。斯くて此月の晦日は若宮の御五十日なれば、例の樣樣めでたき事ども有り。內の殿上、東宮殿、枇杷殿などに皆持て參り分かたせ給ふ。めでたき事ども有りけり。今日明日は司召なれば、世の準備にて過ぎもて行く。二月にも成りぬれば、さまざま神事ども繁くて、何とも無くて過ぎもて行く。中宮の若宮五十日打過ぎて、いみじく愛くしうおはしますを、侍ふ人人、是れを「抱き奉らせばや」と思ふべし。白くおはします樣は、雪に光を添へたらんやうにぞおはします。斯くて二月ばかりに聞けば、皇太后宮の一品の宮の、春宮に參らせ給ふべしと云ふこと、世に出で來て、然るべき緣に付きて、人人「參らん」など申さすれど、外は知らず、宮の內には、只今然る事無ければ、「物狂ほし、如何なる事にか」と聞し召しながら　人人はいと多く侍へば、今は「朧ろげならざらんは、上﨟なりとも」とぞ思召したる人、其程に成りぬれば、御覽じて、御心ゆかぬも、いとほしうてこそは留めさせ給ふめれ。頼めては置かせ給へれど、

數多重なりたるに、同じ色の浮紋の御直衣着給ひて、御前の勾欄に押し掛かりておはすれば、關白殿見奉らせ給ひて「やや、此方」と申させ給へば、唯だ慣れに差し歩みて參り給ふ。御髮のいと艶やかにて、御眉の烟り過ぎて、膨らかに愛敬づき、をかしげに、上達部皆目くはせで愛くしみ奉らせ給ふ。殿かき抱き奉らせ給ひて、御心の中には、我が御許に若宮の御前一所ならでは、また斯かる事のおはしまさぬを、口惜しく思召すらんかし。宮の御前は御覽じ遣らせ給ひて、「他兒どもは、恥ぢて甘えぬべき程なるを、能くも」と宣給はす。内藏の乳母の、いと物恥かしう、初初しき心地して、目眩く扇放たぬに、君の御有樣見奉りてぞ、差し出でざらましかば如何に口惜しうと、見遣りたる時、げに美くしと見奉りたるも道理に見ゆ。今年の宮の御贖物は典侍の仕うまつり給へば、宮の大夫より初め奉り、下部に至るまで、準備に思ひて、やんごとなげに爲立て聞えたり。拜禮など、事無しびにて、上達部など皆退かで給ふ。女院の土御門殿行幸、行啓など有るべければ、其心慌たゞしげなり。又の日の辰の刻ばかりに行幸有りと喧騒れば、是れは年の初めの事にて、世の人見騒ぐべし。殿の内の有樣、裝飾、何此は如何なりける勝地ならんと見えたり。斯くてやうやうおはします程に、京極大炊の御門と云ふ程に火出で來て喧騒れば、いと心慌たゞしうて、何の儀式も無くておはしまし著きて、例の寢殿の南の階の間に、御輿寄せて下りさせ給ひぬ。聞けば四五町燒けにけり。例の法興院も燒けぬれば、殿の御前にも、あさましく思召すべし。此の物見る人人の中にも、家燒けぬるなども有りて、急ぎ歸り騒ぐも、いとをかしげなり。院の内、いみじう慌たゞし。とばかり有りて、東宮おは

はしませ。若水して何時しか御湯殿參る。萬づ皆春の心付きて、空の氣色も引き更へ、さまざまに物鮮明にめでたし。殿の拜禮に、大臣二所を初め聞えて、例の上達部、殿上人、殘り無く參り給へり。其れより、やがて引き續きて女院の拜禮、其れより朝拜に參り給ふ。五日は、また殿の臨時客、女房、皆紅十に「小袿着たるに、萌葱の織物の上衣、赤色の唐衣などをぞ隱出でたる。北の政所のおはします所に、紅梅の二重織物の御几帳ども、殊に折に合ひたる、心憎くをかし。御音樂なども例の事ながらをかし。また枇杷殿の宮の臨時客に、關白殿を初め奉りて、萬づの殿ばら、殘り無く參り給へり。御前の庭の砂子、火炬屋なども、常より殊に見ゆるは卒爾の日なるべし。東の對の御裝飾鮮明にめでたきに、寢殿を見れば、御簾いと青やかなるに、朽木形の青紫に匂へるより、女房の衣の端、袖口重なり、猶外よりは匂ひ勝りて見ゆるは、大方此宮の女房は、衣の數をいと多く着させ給へばなるべし。中門の邊り、東の廊の妻戸などの見通さるるに、然るべき上達部の參り給ふ隨身ども緌して、事有り顏なる面持、足元などの見遣らるる、いとをかしきに、此おはします程は、また今少し事事しく、御隨身の聲遣ひ、氣色も、殊に見なされたるに、いと若う華やかに艶めかしき御事がらにて、やんごとなしと見え給へる上達部どもの、もてなし、敬仕き聞え給はする程など、御簾の内の人人、心殊に思ひ聞えたり。殿ばらの饗に就き給ふ程などは、きたなげ無き四位、五位、六位などの、樣樣取り續き持て參る有樣、奧つ方の御屛風などまで見るにも、質に繪に書きたる有樣、何處か違ひたるとぞ見ゆるに、内大臣殿の若宮の、御簾の内より出で給ふを見れば、紅梅の御衣の

す返すも喜び聞えさせ給ひて、御刀持て參りたり。前前は女宮には御刀は持て參らざりけれど、三條院の御時、長和二年七月、今の皇太后宮の一品の宮の生れさせ給へりしよりぞ斯く有る。内裏の女房などの、「同じくは、あたら口惜し」など申すを聞し召して、「此は何事ぞ、平らかに爲させ給へるこそ限り無き事なれ。女と云ふ事、普通の事ぞや。まことに同じくは男はめでたけれど、昔賢き帝に、女帝立て給へる例多くぞ有るや」と逆ひ給はするに、畏まり侍ふべし。次次の御産養、疎かならんや。三日の夜關白殿、五日の夜女院、皇太后宮より、七日の夜は朝廷より、例の作法持て參れり。さまざま云ひ盡さん方無し。九日の夜、宮司、關白殿の北の政所よりたんど持て參り贈る。まことや、御乳母は數多申す中に、先づ賢の宣旨の女、また出雲の前司頼經が妻をぞ先づ召したる。八日は人人色色に事ども改まる。内裏の女房達參りたり。さまざまの事ども有らまほしく、心もとなからず爲させ給へり。女房參りて、宮のをかしげにおはします御有様申すに、内裏にもいとどゆかしく思ひ聞えさせ給ふに、疾く入らせ給ふべき御消息隙無く參れど、宮暫し心安くてと思召しておはします。誰も同じくはと口惜しく思召ししかど、あさましきまで白う美くしき御様、聞えさせん方無くおはしますに、誰も御心解けて、いと愛しう爲奉らせ給ふ。御乳母「我も我も」と申せど、「暫しは」とて聞し召しも入れず。はかなく日數過ぎて晦日に成りぬれば、世の中の人人、家家高き、短き、皆此暇無く急ぎ立ちたり。若宮の御年の増さらせ給ふべき御準備もをかしう思召すに、夜の程萬づ變りたる空の氣色、世の中もをかしく、新玉の年よりも珍らしき若宮の御有様こそ、いみじう美くしうお

内裏よりの御使、夜夜中分かぬも、疎かならぬ御氣色著げなり。斯く云ふ程に、霜月に成りぬれは、内裏渡りの樣樣の事ども、若き人人は思ひ遣り云ふめり。萬づよりもおはします殿の狹ければ、許多侍ふ御祈りの僧なども、其の渡りの家どもの程廣きに、押し入る樣にて混み居たり。大方の御心に、ともすれば例ならず苦しげにのみおはしませば、殿ばらも、靜心無げに思したり。況いて此月に成りぬれば、待たせ給ふ事添ひて、恐ろしう思さるべし。御乳母に音なひ申す人多かり。此殿の中に、只今は此御事より外の事無し。女房達、人知れず白き物ども準備ぎ合へり。はかなくて月も立ちぬ。十二月に成りぬれば、立ちぬる月にだにおはしますべかりしに、怪しく心もとなさを思し騷ぎたり。朔日も過ぎ行けば、いと怪しく、如何にとのみ思召す程に、十日の晝つ方より例ならぬ御氣色なれど、わざとも見えさせ給はねば、心長閑かに思さるるに、日暮るるままにぞ、眞に苦しげにおはします。御兄人の殿ばらを初め奉りて、世の中の上達部何れか殘らんとする。露の暇無く參り混み給ふに、許多の僧ども驛合せたる程、すべて物も聞えず。殿の御前には、惱ましく思さるれど、護身參らせ給ふ。女院、皇太后宮、内裏、東宮などよりの御使續き立ちたり。近江の三位、宰相の乳母など皆參れり。戌の刻ばかりにぞ、いと平らかに爲させ給ひたるに、今一つの御事を喧騒りたり。萬づに其事どもを爲させ給ふ。其後有樣、音無きにて推し測られたり。殿の御前「平らかにおはしますより外の御事無し。物のみ恐ろしかりつるに、命延びぬる心地こそすれ」とて、いと嬉しげに思召したり。内裏にも聞し召して、同じうはとは如何でか思召さざらん。然れど平らかにおはしますを、返

らせ給ふべし。いと美くしうおはしますを、女院又無きものに聞えさせ給へり。今年は内大臣殿の御元服の御装束、御内裏参りなどぞ、世には聞えさすめる。人知り難し。八月晦日の頃、大納言の御許には、有りし御事ども、いみじう哀れにて過ぎぬ。中納言殿をば、我れも我れもと気色だち聞ゆる所所おはすれど、只今はすべて、ともかくも思し変らで、唯だ昔の「伏見の里」をのみ、荒れまく惜しげに思したれば、大納言殿いとど靡かなかず、悲しげに思ひ聞え給へり。去年の名残にて、今に哀れなる事ども多かる世の中をぞ、何事にも盡きせずのみ思さるべかめり。中宮は此頃里に出でさせ給ふべしとて、大殿、左衛門督の御院の御家にぞ出でさせ給ふべければ、左衛門督は皇后の三條の宮へ渡り給ひて、此処をば造り繕はせ給ふとぞ。

若水

斯くて中宮、霜月に成りぬれば、左衛門督の家に出でさせ給ひておはします。殿の御前も晝ぞ御堂へはおはします。夜は此宮におはします。上の御前もやがておはします。前斎の宮宮の御時の御祈りどものままに修させ給ふに、此度は物の恐ろしさ忌忌しさ添ひて思さるれば、いとど事繁り、萬づに修させ給ふ。侍ふ女房達の中にも、子などはかばかしからず死なしたる人をば尋ねさせ給ひて、此程に参るまじき仰言あり。

きける。斯くて其後、姫君をば大納言殿迎へ取り給ひてけり。童なる君は法師と思しけれど、其れも此殿冠せさせて、我れ爲立てんと思しける。いみじう哀れなる事ども多かり。中納言殿をも、「今は何どて」など、殿の御前申し思しけれど、大納言、「己が命を絕たせ給ふなり。斯かる事を聞かせ給へば、此中納言のおはせん方へ、今は己れも罷らん」と聞え給ひければ、「今は然は其殿遣給はんばかり」とぞ聞えさせ給ひける。中納言「兵衞督ノ誤カ」の姫君さへ此處におはすればいみじう哀れなる事ども多かりける。斯かる程に、內裏の御惱の事ありて、いと世の中物騷がし。樣樣の御物の怪ども、いみじう強し。故關白殿、式部卿の宮さへ出で給ひて、いと恐ろしきこと多かる中に、春宮の御乳母などの、貴船に祈り申したろなど云ふ事さへ、御物の怪申すを、大宮、いと聞き惜く、片腹痛く思さるべし。「如何に如何に」と思し歎きつれど、いみじき御愼みどもにて、籠らせ給ひぬ。此春より、中宮も尋常にもおはしまさずとぞ、世には云ふめる。殿の御前は、いみじう思されながら、物恐ろしう、御胸潰れて、四方八方の佛神を尋ねつつ、祈りの師ども居ゑさせ給ふ。前前のよりも、此度の御祈り、世に似ぬまで思し爲させ給ふ。いと道理に見えさせ給ふ。七月には、院に女御の御法事準備がせ給ふ。御堂には、八月十五日には、尙侍の殿の御果て爲させ給ふ。御調度どもの銀して、多寶の塔三尺ばかりに造り磨きて、其れをぞ申し上げさせ給ふ。哀れなる御事、初め終りまで、思し惱むこと無く爲果てさせ給ひぬ。女院の內裏におはします折は、若宮をば、東宮哀れに愛くしう思し奉らせ給ひつつ、抱き奉らせ給ひて步りかせ給ふ。上も、院の御方に渡らせ給ふ折は見奉

殿の宮の御捧物は、銀の臺の上に、籬結ひて撫子を植ゑさせ給へり。春宮大夫殿、銀の法華經一部を爲させ給へり。中宮權大夫、提持たせ給へり。いと寛厚なり。中納言殿は團扇、是れより外は、さまざまの物、をかしけれど書き附けず。其日の講師、朝座定基僧都、夕座りうせう「永昭カ」僧都なり。然て事ども果てぬ。果ての日は、垣根の卯の花を女房達殘り無く折れり。裳は澤瀉、上衣は菖蒲をぞ着たる。其れ又いとをかし。五卷の日は、中務の宮、猶人より殊なりし御氣はひを、東の對の女房達、侘びしう恥づかしげに思ひ聞えたりけり。其折は然て、後にぞ云ひ合はせ笑ひける。御八講過ぎぬれば、宮の中日頃騷しく人人思ひけり。女房里に出で、一部は侍ひけり。彼の法住寺には、兵衛督の御事ども、唯だ大納言扱ひ聞え給ふ。泣く泣く思し準備くも哀れなり。御法事の事などもと、萬づに思し準備く。少將は今の別當右兵衛督の御婿なれば、其由緒に、兵衛督をも哀れに思ひ聞ゆべし。いみじう雨降り、徒然なるに、法住寺にて彼の姫君、

　　思ひきや藤の衣を程も無く二つ重ねて涙掛けんと

年の程よりは哀れにをかしう述給へり。此の六月廿八日、法事など營給ひけり。七月一日正日、法住寺には、彼の中納言、非違の別當し給ひける折、人の申文、訴文など有りけるを、取り集めて紙に漉かせて、法華經書かんと思しける紙に經書き、また阿彌陀佛造り奉りて、其經に具して供養し奉らんと思し掟てたりけるを、其日は源信阿闍梨導師にて、説法せさせ給ひける、哀れにいみじう尊かりけり。講師もいみじうぞ泣

たる妻戸の下におはしまして、水の上の渡殿を、御休み所に爲させ給へり。殿の上おはしますべかりけれど、折しも、關白殿の若君甚う惱ませ給へば、いと口惜しく、え渡らせ給はず成りぬ。女房、初めの日、撫子を五つ着て、上に同じ色の羅、織物を着て、菖蒲の唐衣、摺裳なり。寢殿の西南面より、渡殿の西の對、東面、南とに皆居たり。御簾より初め、御几帳、菖蒲の末濃にて、皆繪ども書かせ給へり。上達部は寢殿の南の廂におはします。殿上人は上達部の後ろに勾欄に居たり。僧綱は母屋の東に寄りて、南を上にて西向きに侍ひ給ふ。凡僧は又東の廂に、同じ如、南を上にて北ざまに並びたり。斯くて五卷の日に成りて、女房、皆紅の匂ひ、同じ打ちたるを着て、上に二藍の織物、羅ども、菖蒲の裳、撫子の唐衣どもなれば、朝日に當りて輝き亘れり。所所の御捧物持て集まれり。いみじう何時しかとゆかしきに、殿ばら參り混み給ひて、未の時ばかりにぞ始まりて、捧物繞る。中務の宮の參らせ給へり。蓮の實を長く貫きたる樣にて持たせ給へり。其御次に關白殿、香の壺持たせ給へり。內大臣殿、銀の水瓶に孔雀の尾を挿させ給ひて持たせ給へり。女院より、瑠璃の壺に黃金五十兩入れさせ給へり。頭中將憲輔の君持たり。粟田殿の君なり。中宮同じ樣なる御捧物、中宮亮右中辨經賴の君持たり。小一條院、銀の琴を爲させ給へり。右馬頭兼房の君持たり。此宮のは、羅の綾の褂を、僧の數に爲させ給ひて、やんごとなき四位ども持たり。一品の宮の御捧物別盤、別匙ども、皆結び囊にて、造り枝に附けて、藏人二人持たり。殿の上の捧物、衲の袈裟、民部大輔實基の君持たり。殿の御捧物は、絹二十疋を群濃の絹に裹ませ給へり。僧の數なり。內大臣

にて世に喧騒る。四月十餘日の程にぞ小二條殿に渡らせ給ふべくて準備がせ給ふ。其夜に成りて、車十二して ぞ渡らせ給ふ。院もおはしまさまほしげに宣はすれど、「有べい事ならず」とて、中宮ぞおはします。院の殿上人ども、皆送りに奉らせ給へれば、様々の物被けさせ給ふ。中務宮の御方の侍主、御車副まで、皆其れに物被け、禄賜ふ。いとめでたく甲斐有る様なり。彼の御方の女房達など、世の中を哀れに思し「思ひノ歎かし」たり。斯くて皇太后宮には、故三條院の御為めに、御八講せさせ給はんとて、佛皆造り奉らせ給へるに、五月十九日よりと準備がせ給ふ。女房「何事を待ん」と、あさましき事多かれど「唯だ然様にては有らで」と急給はすれば、とさ斯くもえ思ひ立たず。世の常の装を準備く。御捧物の準備せさせ給ふ。所所に是れを準備ぐべし。彼の左兵衛督の此月立八日より、世の中心地煩ひ給ひし、同じ月の十五日の曉方に亡せ給ひにけり。哀れにいみじとも疎かなり。彼の有馬へだに離れたら思ひ給へる姫君を見捨て奉らん心地、思ひ遣る間無く悲しきなりけり。其夜の中に法住寺に渡し奉る。按察大納言の、「此君にさへ後れぬる事」と、あさましう心憂き事を歎きて、萬づを然こそ遣給はす。「我とそ是れに斯くは云はれましか。心憂き事」と身を観じ思すも道理にいみじ。姫君など返す返す、誰も誰もいみじう思ひ遣り聞えさせ給ひける。斯くて枇杷殿の御八講は、講師には山の座主、心譽僧都、講師十人が中に心譽僧都は入りたり。僧綱八人、凡僧二人あり。聴衆十人あり。斯くて廿一人の僧参れり。宮の御前は、一品の宮の御方におはしまして、宮のおはしまし所の寝殿四間、前東の廂掛けて装飾はせ給へりけり。殿の御前は、東の北の方に寄り

是れを傳へ聞きて、或人の聞えたりける。

夢と云へば分明なるだにはかなきを人傳に聞く程ぞ悲しき

と有れば、御返し、

傳に聞く程だに悲し思ひ遣れ微かに見えし夢の名殘を

此姫君、黑き御衣の綻びたるを見て、

形見とて染めたる色の衣さへ落つる淚に朽ちぬべきかな

哀れにて次次の御事ども仕果て給ひてけり。其後左兵衞督、物のみ心細く覺えて、心地も例ならず覺え給ひければ、風など云ひければ、有馬へと出で立ち給へど、此姫君の後めたさに、えおはせでぞ過ぐし給ひける。斯くて內の大殿には、三條院の姫宮を、院唯だ萬づに傳立てて、我が御子のやうに思し扱はせ給ひて、二月五日、山の井の向ひなる所にてぞ婿取り奉り給ひける。固より宮の人人多く侍ふ中に、若き人、童女など多く參り添ひたり。萬づいみじう今めかしうて、おはしまし初めさせ奉りつ。故宮の御果ても、二月に爲させ給ひてしを、猶宮は薄色に、紅をぞ奉りたりける。いと目安有りて、めでたく適ひ聞えさせ給ふ。四月十日の程は小二條殿に渡らせ給ふべし。やがて其東の殿を一度にと思召せど、猶いと惡しければ、「斯かる旅歩りき見苦し」と殿の御前申させ給へば、先づ小二條殿におはしますべきなりけり。其後、院の御歩りきに、先づ語ひ聞えさせ給ふ。萬づいと目安有る御中らひなり。斯くて四月に成りぬれば、賀茂の祭の準備

まに、内裏にも、東宮にも、ゆかしき御有様を、何時しかと心もとなく聞えさせ給ふ。齋院より斯く聞えさせ給へり。

背すらも闇の道に入りぬなり獨りや長き闇に惑はん

此御返し、殿の御前聞えさせ給ふ。

峰垂れて人導きに現はるるその宮仕へ惑ひしも信じ

と申させ給へり。まこと枇杷殿の御返り、物難かしくて、今までとて、

給ふらん衣の珠の亂れつつ猶まだ覺めぬ心地のみして

とぞ聞えさせ給ひける。斯樣に此世、後の世まで、めでたき御有樣どもを。故女院は御情ありてこそ尼には成らせ給ひしか。是れは、我が御心と思し立ち成らせ給ふぞ、聞えさせん方無くめでたき。殿の御前返す返す忝く思召したり。斯くて此の御受戒あるべしとて、無量壽院の辰巳の方に、夜を晝に成して急がせ給へば、世界の尼ども喜びを成したり。まこと彼の左兵衞督の北の方、正月廿餘日の程に亡く成り給ひにければ、男君は少將佐殿の君、まだ童にて、然ては十四ばかりの姫君の、いと美くしきぞ持給へりける。萬づ哀れ哀れと思しつつ、左兵衞督損ひ給ひけり。御忌の程、いと哀れにて過ぐし給ふに、此姫君の御夢に、此君の掻き撫でて詠み給ふと見えたり。

思ひきや夢の中なる夢にても斯く外外に成らんものとは

物忌をさへ附けて、思ふ事無げなりつる程は、然云ふとも如何がと思召しつるに、局に行きて、打成りて、押し返して、細小やかにをかしげなる尼君の、數珠引き提げて出で來たるに、あさましう哀れにて、殿ばら、「猶道心ある者には先ぜられぬべきものかな」と、いみじう感じ遊ばす。御前を初め奉り、皆拔受けさせ給ひて、僧達祿賜はりて退かでぬ。いみじう美くしげに尼剃ぎたる兒どもの樣にぞおはします。御髮上げさせ給へりし御有樣にも萬づ見えさせ給ふ。盡きも爲ずめでたき御幸ひ有樣の際限り無くおはしますを、いみじう見奉らせ給ふ。內裏より御使あり。下り居の帝と等しき御位にて、女院と聞えさすべき宣旨持て參りたり。御使祿賜はりて參る程、殿の御前欷歔も「よよ」と泣かせ給ふ。御前の火炬屋取り出でて、隨身屋壞ちなどすれば、衞士火を燒きさして、心慌たゞしげに思ひたり。隨身の吉上涙を流したり。いみじうめでたき御有樣なるに、やんごとなき宮司どもは、やがて院司に成りたり。然も有るまじきは、離るるをいみじき事に思へり。民部卿はやがて院の別當に成り給ひぬ。判官代は、例の院は藏人などには有らぬ人の望み成る事なり、是れは此院の藏人の中にも、やんごとなきを撰り成させ給へり。樣樣めでたし。又の日少し心長閑かにおはしませば、昨夜の宮宮の御消息ども、取り出でて御覽ずれば、皇太后宮の御消息に、沈の御數珠に、黃金の裝束して、銀の御筥に入れさせ給ひて、梅の造り枝に附けさせ給へり。

斯かるらん衣の裏を思ひ遣る涙や袖の珠と成るらん

とぞ聞えさせ給ひける。中宮より同じ樣の御事ども有りけり。然れど其れは覺束なし。日頃過ぐさせ給ふま

べきにもあらず。をかしげに、女房など聞えさせんに好げなる御有様なり。今年は萬壽三年正月十九日、御年三十九にぞ成らせ給ひける。いみじう若く、めでたくおはしますに、尼の御裝束いみじう似させ給へり。殿の御前も泣く泣く奉り、御裝束に好く物仕うまつりたれば、斯うておはしまさんも惡しからず見えたり。關白、内の大臣など、押凝りて見奉り給ふ。いと可惜しく、いみじく覺えさせ給ふ。日頃ある程に、御湯參りすこしなど頂く際に、内裏より、例の事ぞや、御使にて、官の使部ばらなど捧げて封持て參りたれば、御前の御階の下に、御隨身侍ふ。御文取り入れて御覽じて、御使に祿賜はせ、宮の使部ばらに正絹賜はする事のめでたさを、許多參り混み給へる上達部、山の座主、權僧正明尊、世にめでたき事に申し奉る程に、また東宮より、同じやうにて持て參りたり。御使、例の樣にて賜はせ給ふ。皇太后宮、中宮などより、宮司衣持て參り集まりたれど、物騷がしさに紛れて、御使遣けにけり。其物ども、明日御覽ずべし。斯くて今は成らせ給ふに、三井の僧都御戒師にて、内外し給へれば、御髮下ろし奉らんとて有るに、關白殿御刀奉らせ給ふに、御目も昏れ惑ひて、いみじう泣かせ給ふに、殿の御前、斯く成らせ給ひしを、「此世の御幸は極めさせ給へり、後生如何にと聞えさせ給へりつるに、いと嬉しう心安き御事なり」と慰め聞えさせ給へれど、然ばかりめでたき御有樣の俄かに引き更へさせ給ふをば、殿の御前を初め奉り、殿ばら、上の御前、塞きも敢へず泣かせ給へば、宮の御前いと慌ただしげに思召したり。年頃の宮司の長官、御簾の下にて、いみじう泣き給ふ。あさましく哀れなる御事どもになん。辨の内侍、[illegible]いみじう裝束きて、挿櫛に

思ひ遣る人も有らじを鶯の何ど春雨に濡ちては啼く

とて、尼上の御方に聞え給へれば、尼上、御匣殿の御方に、是れを奉り給へれば、御匣殿、

見る人も思ひ捨てつつ鶯の入りし山邊に如何で啼くらん

斯くて御調度ども出で來ぬれば、大宮、此月の中に思し立たせ給ふ。御屏風どもには、黄なる唐綾を張らせ給へり。下繪して、然るべき心ばへある事どもを、權大納言さまざまに書き給へり。緣には唐の錦の地青きを爲させ給へり。襲ひには皆蒔繪したり。裏には香染の堅紋の織物なり。御几帳どもも皆香染にて、御帳などにも皆綾を香染にて、紫檀地なるに爲させ給へり。大方、御簾、御座の緣まで、皆香染なり。御厨子どもの蒔繪には皆法文を書かせ給へり。云はん方無く見所あり、尊し。御持佛の有樣など、云ふも疎かなり。其日に成りて、殘る女房無く參り混みたり。源三位、伊勢の中將、中納言の君など皆參りたり。其日の女房の姿ども花を織りたり。月頃は我も我もと、後れ奉らじと申す人のみ多かりけれど、眞に成りぬれば空言なりけり。其事違へず、世を背き、同じ道に入る人人、少將の內侍、辨君、辨の內侍、染殿の中將、筑前の命婦などなり。此人人の姿ども、尋常なる折だに有り。別れを惜みたる、えならずめでたき中に、辨の內侍思ひ立ちぬるを、殿ばらなども、いみじう哀れがり述給ふ。宮の御有樣を見奉れば、紅梅の御衣を八つばかり奉りたる上に、浮紋を奉りて、えも云はず美くしげにて、御髮は身長に一尺餘ばかり餘らせ給ひて、御有樣、細小やかに豐肥らかに、美くしう愛敬づき、をかしげにおはします。只今の國王の御親と聞えさす

て然るべき昔の世の果報にこそはと思ひ給へれば、今まで世に斯くて侍る、いみじき事なり。然れど、仰せらるるやうに、惜しむ心を宥めんなど思ひて、月日を過ぐし侍る程に、先せられ奉り侍りぬれば、今は二の舞にて、人の御真似を侍るに成りぬべきが、いと口惜しきなり。然れど中納言の物し給へば、其れ頼みにて同じ様なる心地して過ぐし侍れば、中納言も然てのみ有るべき事ならず、入道殿も、今まで有る所、見苦しき事なりと西殿はすれば、此方の程をただ同じ所に在らんなど思ひ侍りし。其れさへ離れなば、況いて如何に如何に、何事に付けても、物思ひ煩ひ侍らんと思ふが悲しきこと」と云ひ續け給ふ。げに、げに」と聞えて、誰もいみじう泣かせ給ふ。入道殿、「げに然侍る事どもなれど、人の心の愛かめる、猶多かる君達を見て慰まん事は侍らず、愈哀れに戀しう、先づ見るにも涙流れ、離難がる心地してなん、一向に思ひ離れんと思ひ侍りしなり。げにこそ人の心いと侘びしきものに侍りけれ。すべて難げに思ひ立つべき事にてなん侍りし」など、萬づ哀れに、打泣き打泣き聞え語らひ給ふ。大納言殿出で給ふ心も無く、「斯くてやがて籠るべき心地こそ侍れ」と泣き給ふ。入道殿も、いと哀れなる御様どもにて、いとど思し出でられて、生憎なるまで、「よよ」と泣き給ふ。大納言哀れに云ひ續け給へる事どもこそ、哀れに聞え侍れ。世の中の有様こそ頼り難く、いみじき事は有りけれと、いとど哀れに打行ひて過ぐし給ふ様も、いみじうめでたし。此の大納言殿、入道殿とは、昔より今に斯く親しく睦まじき御仲らひぞかし。雨の降る頃、長谷より、「鶴の雨に濡れて啼くを、御匣殿に御覧ぜさせばや」とて、

縷りも敢へず泣き給ふに、入道も御目に涙浮きぬ。大納言「如何に斯く思し立ちにしぞ、某こそ、あさましくは思ひ立ちたれ、去年の八月の晦日より、胸は今に塞がりて、あさましくて侍れ」と聞え給へば、入道殿の御答に「此處にも斯く今までとは思ひ侍らざりしを、暫しいみじき程過ぐして、念佛、讀經をも心深くてと、思ひ寶給ひ侍りし程なり」と聞え給へば、大納言、「去年の有樣、あさましく、珍らかなる事ども多かり。京の中にも、某ばかりいみじき人は侍らず、斯かる事の類ひ、世に數多侍る中に、猶いと心憂き身になん侍る。入道殿の院の女御、尚侍と、月並びに失ひ奉り給へりし、いみじけれど、宮宮數多おはしまし、殿、内大臣殿を初め奉り、然るべき男君達も物し給ふ、すべて其御有樣聞ゆべきにあらず。右衛門督の頭中將の北の方いみじけれど、中宮權大夫の北の方物し給ふ、また頭中將いとめでたき子なり。侍從大納言の姫君の事こそ有りしかど、他女子も、男子も持給へり。斯う後の御事こそ姫宮の御折に、いみじかりしか、また故上の御事、いみじと有れば疎かなれ。然れども、其れは思し慰めぬべし。内の大殿の君達七八人おはす。御匣殿など、今日明日の女御、后と思ひ聞えさせたり。また左大將いと頼もしう物し給ふと云へば、萬づに思し慰めつべう頼もしきに、己れは、また二無き人の、唯だ明暮無きものと、愛護具に、是れ一人を思ひて、打見打見萬づを思ひ慰めて明し暮しし程に、やがて火を打消ちたるやうにて亡せ侍りにし後は、はかなき菓一つを食ふに付けても、易く入り侍らず、胸にのみなん侍る。如何がは爲ん、兒をだに留め置きて侍らましかば、命を掛け心を慰めても侍りなまし。其れさへあさましう侍りしかば、すべ

く参り給ひ見奉り給ふ。尼上、女御殿、いみじう哀れに思し入れ給ふ。女房達は、「見許るやうに慰籍へ置かせ給ひしに、斯くにこそ有りけれ」と泣き惑ひ合へり。御乳母の尼君、沈み入りて臥しぬ。日頃ありて、侍の君、里より聞え給へり。

故里の板間の風に夢覚めて谷の嵐を思ひこそ遣れ

長谷の御返し、

山里の谷の嵐の寒きには子の許「木の下」をこそ思ひ遣りつれ

雪のいみじう降る日、女御殿より。

思ひ遣る心ばかりは奥山の深き雪にも隔らざりけり

斯かる程に、三井寺より、入道の中将の君、聞え給へりける。

まだ慣れぬ深山隠れに住み初むる谷の嵐は如何が吹くらん

と有れば、長谷の御返し、

谷風に慣れずと如何が思ふらん心は安く住みにしものを

少し小長閑かに思さるる程に、中宮大夫おはしたり。山の嶺、谷の底と、見上げ見下ろし給ふに、哀れに凄く、めでたく、面白し。嶺は椿などいと盛りに面白く、前栽は常に見しかど、いとめでたくも有るかなと見給ふ程に、「此方に」と聞え給ひて、御対面ありて、萬づに御物語聞え給ひて、中宮大夫、先づいみじう

羨ましくも足らまほしかるべき子なりや、眉目容貌、心ばせ、身の才など、如何で斯く有りけんと、哀れにいみじう思さるるにも、御涙浮びぬ。然て山里の御主人、所に從ひ、をかしき樣にて、御供の人にも御酒賜ひて、歸り給ふ名殘戀しく眺め還られ給ふ。斯くて正月四日の早旦、御堂に、三井寺別當僧都尋圓に、御消息物させ給へば、參り給へり。然て心長閑かに御物語など有りて、御本意の事も聞え給へば、僧都打泣きて、御髮下ろし給ひつ。戒など授け奉り給ひぬ。斯くて歸り給ひぬれば、世にやがて洩り聞えぬ。是れを聞し召して、御堂より御裝束一領して參らせ給ふとて、

　往時は思ひ掛けきや取り交はし斯く着んものと法の衣を

御返し、長谷より、

　後れじと契り交はして着るべきを君が衣に裁ち後れける

とぞ聞えさせ給ひける。斯くと聞し召して、内の大臣の急ぎおはしまして、「何ど斯うあさましく賴もしげ無かりける御心かな。他人どもの御事は聞えじ、御匣殿のとからの御有樣を思し捨てつるなん、いみじう心憂く侍る」など、いみじう細やかに恨み申させ給へど、「然思ひ給へてこそ今まで侍りつれど、況いて然樣の御折に敢へて思ひ掛くべきにも有らねばなん、斯く思ひ給へ成りにし」など申し給へば、内の大臣、道理無く打泣きて、「今はいとど、如何でか疎かには思ひ聞えさせん、世に侍らん限りは何事も堪へんに從ひて」など、哀れに聞えて歸らせ給ひぬ。辨の君、童泣に泣き給へど甲斐無し。誰も皆聞き付けて、いみじう多

哀れに思ふに從はれ、或るは聊かましき事出で來、或るは幸ひ無くなど言ひて、基も出家せんに違へぬべき人の思ひ立ためけ、皆斯くにこそ有りけれ。大様けに心劣かゝらん人の、有べい事にも有らざりけり。斯かれば、淨土にも生れ、佛にも成る人は少なかりけりと思し知らせ給ふ。然て明けぬれば、昨日の程の事どもなど、時々に仰せられなど有るに、齊大納言參り給へれば、然るべき事など聞え付け給ふに、昨の昔、「夜昼にいみじう傷り侍りつる、聞し召させばや」と申し給へば、「精進近く成るとて人の魚食ふ、いと本意無き事なり」と講師はすれば、いと口惜しくて止み給ひぬ。斯くて女房などにも、「來年二月十日の程には出でぬべし、其程心細しと思はで有るばかりぞ」など迎給はせて、昨日の程の事どもなど思し捉て、十二月の十九日にぞ長谷へ入らせ給へば、女房など、「徒然に有るべき正月ならめかし」とて、「月日も過ぎて、歸らせ給ふべき程にこそ」など申し思へり。尼の君など、皆御送り仕うまつり給ひて、有るべき事ども聞え交はして還かせ給ひぬ。其後殿は參り給ふ。斯くて東山の御住ひ、本意有り、心長閑かに思されて、年も暮れぬれば、「一夜ばかりに變りぬる峰の霞も哀れに御覽ぜられて、「山里如何で春を知らまし」など打誦じさせ給ふに、睦月の日も暮れて、二日ばかりの時ばかり、尼の君參り給へり。思ひ掛けぬ程の事かなと思さるるに、御裝束持たせ給へりける、霞の方より變はしうして、御前に出でて拜し奉り給ふなりけり。人中の折の藤住ひなに、樣ながら心には哀れに見え奉る御有様の、泥いて然る山の奥谷の邊にては光るやうに見え給ふに、あないみじ、是れを人に見せばやと、見る甲斐あり、めでたの只今の有樣やと、人の子にて見んに、

てて泣かせ給へば、内の大殿には、昔を思し出づると見えさせ給ふに、堪へ難くて、やがて、差し向ひ泣かせ給ふに、御前に侍ふ人人も皆泣きにたり。猶いと理無く思さるれど、畏う躊躇はせ給ひて、萬づに御物語ありて、歸らせ給ふとて、尼上の御方に差し覗かせ給へば、例の短き御几帳引き寄せて居させ給へり。一舊り難の御物恥ぢや」と、哀れに見奉らせ給ひて、「此君達の珍らしがりて、領じ給へるこそ、いみじう哀れに」とて、また打泣かせ給へば、尼上もやがて止めさせ給はぬ程も、いみじう哀れなり。やや御物語ありて出でさせ給ひぬ。四條の宮に歸らせ給へれば、やがて女御殿の御方に差し入り給へれば、御行ひの折なりけり。何事も哀れに聞えさせ給ふ。「此屋に今年檜皮を葺き敢へず成り侍りぬる事の口惜しさ。板屋は雨の音の喧しさこそ、道理無く侍りけれ」など聞え給ひて、「御庄庄の絹などを濟やかに奉り侍らぬ事の怪しさに、年返りてぞ御使遣はすべかめる」など聞え給ふ。哀れに頼もしう、おはせぬ世にも有らば如何に心細からんと、先づ知ろものに思されけり。然て歸らせ給ひては、我が乳母の尼君の許差し覗かせ給へれば、「あなや」と畏まりて、起き上がる氣はひも、いみじう哀れなれば、「何、唯だ然てを」と遮給はす。「如何にぞ、寒くや物し給ふ」と遮給はすれば、「寒き夜や有らん、時時亂り心地の溫まり侍るは」と聞ゆれば、御衣を脫ぎ給ひて、「是れを着給へ、是れぞ綿厚き衣」と遮給はすれば、「畏まりて」と聞ゆる氣はひ、いと哀れに古代なり。我事を如何に思はんと、哀れに思して歸り給ひぬ。然てつくづくと物を思し續くるに、あさましう心憂きものは人の心にこそ有りけれ。世に有る人の、或るは愛しき子に後れ、或るは女男の

ぞ日頃さきも給ひける。十二月の十六日の程なりけり。今日然るべき人人にも對面し、然るべき事をも聞え給はんと思して、二條殿におはす。然るべき睦まじき人人、二三人ばかり御前にて參らせ給へば、御車入れさせ給ふより初めて、哀れに、「此度ばかりぞかし」と思すに、命しも人頼ろき御心出で來ぬべき心地し給らはして、西の對におはして、御匣殿を見奉り給へば、まだいと幼き程なれど、人のいとやんごとなくて、もてなし傅き居ゑ奉り給へれば、小さながら宮の君にておはする有樣、いと哀れに美くしう、悲しう見奉り給ふに、御手習をぞ習はせ給ふめる。中の君はまだいと何心無げに打見て居給へり。御匣殿の御手習ひを申して見給へば、あはれに美くしう書かせ給へり。唯だ昔續しき筆跡どもを、源氏若干帖かせ給へるにも涙止め難くて、其れに書き付けて、やがて泣かせ給へば、御匣殿もいみじう泣かせ給ふ。中納言も悲しと思したれど、其れは物恥かしうて、顔を赤めて見給へり。哀れにいみじう思されて、「此度ばかりぞかし、又は何時か斯様に見奉らん」と思召すぞ、いみじう堪へ難きや。然て何と言ひと思し亂るる程に、暮果らせ給へば、物何賣やかなる世の中の御物語、來年の除目の事や、また大將の御元服りの事などなど、「唯だ御車どもの出で來るを待たせ給ふなり」と聞えさせ給ふ程に、二郎君、三郎君騷めきておはして、「や、大丈がおはしたりけるを知らで、今まで來ざりけるは、疲れたりけるわざかな。あはれ、我れは殊に近からん、我れは膝にこそ居め」など、競ひ爭ひ、騷ぎ合はせ給へば、「いであな狼籍し、斯うな仕うまつりそ、仕うまつりそ」と制し聞え給ふに、何處かは、あやにくに睦び聞え給へば、え忍び敢へ給はず、御面に御衣の袖を押し當

ながらも口惜しう思さるべし。「何事かは有る」と思し廻しつつ、人知れず御心一つを思し惑はすも、いみじう哀れなり。此の御本意ありと云ふ事は、女御殿も知らせ給へれど、何時と云ふ事は知らせ給はず。斯かる程に、椎を人の持て參りたれば、女御殿の御方へ奉らせ給ひける。御箱の蓋を返し奉らせ給ふとて、女御殿、

　有りながら別れんよりは中中に無くなりにたる此身ともがな

と聞え給ひければ、大納言殿の御返し、

　奥山の椎が下をし尋ね來ば留まる此身を知らざらめやは

女御殿いと哀れと思さる。斯くて大納言殿は侍ふ人人などの、偏に賴み聞えたるをぞ、いと數多見捨て難く思さるるに付けても、哀れにのみ思されて、まだきに斯くと知らせじとや思しけん、「長谷に堂建てんと思ふに、北に當りたれば、いと怖ろしければ、彼の寺に、年の內に行きて、四十五日其處にて過ぐして、來年の二月ばかりになん京に出づべき」など云ふ事を述給はせつつ、萬づに有べい事を思し掟てければ、辨の君より初め奉りて、唯だ然のみ思したり。我が御乳母の、年いみじう老いて、然るべき人人にも後れて、唯だ偏に殿を賴み奉りたるぞ、有るが中にも哀れにいみじう思されける。其れにぞ、はかなき事ども此頃取り分きて哀れに爲させ給ふ。尼上も一條殿にぞ此頃はおはしましける。斯くて長谷の御出立を爲させ給ふとて、「彼處の僧の然るべきにも打取らせんと思ふなり」とて、わざとも有らぬ法師の裝束を

ん、渡し給へ」と、假初に有りければ、僧都、「唯だ此中河におはして見奉り給へ」と有りければ、和泉、

　　思ひて泣く泣く涙に袂は見えぬるを中河までは何か渡らん

とぞ云ひ續けける。はかなく師走にも成りぬれば、暦の軸本近う成りぬるを、哀れにも思ふ程に、十二月の御晦日頃聞けば、右頭中將顯基の君北の方亡せ給ひぬと聞ゆる。「あなあさまし、此は如何なる事ぞ」と聞けば、今の右衞門督の中の君なりけり。其れ日頃惱み給ひければ、何事も御覺ずる事無かりつるを、あさましう成り給ひぬれば、中宮權太夫殿も、いといとほしう、萬づに扱はせ給ひつるに、斯く成り給ひぬれば、閑院の太政大臣を初め奉り、いみじう思し歎き給ふ。すべてあさましう、え去らぬ人人を置きて別れ給ふ人多かる年の有樣、云はん方無く心憂しや。誰も外外なればこそ疎かにも有れ、各御家には是れに似たる事無しとのみ思し惑ふぞ、げにいみじう哀れに見え給ひける。返す返す世語にも傳へつべき年の有樣にこそ情無う心憂けれ。四條大納言殿は、内の大殿の上の御事の後は、萬づ倦んじ果て給ひて、つくづくと行ひにて過ぐさせ給ふ。法師と同じ樣なる御有樣なれど、是れもいと合ひ無き事なり。一日にても出家の功德世に勝れ、めでたかんなるものを、今暫し有らば、御匣殿の御事など出で來て、いとど見捨て難く、頼無き御讀經にこそおはせめ、然らば此程こそいと好き程なれと思し取りて、人知れず、然るべき文ども見したため、御庄の司ども召して、有るべき事ども遣給はせなど爲て、猶今年如何でと思し立つに、數知れず哀れに心細く思されて、人の心はいみじう云ふ甲斐無きものにこそ有りけれ、何ど斯く覺ゆべかるらん、いと我

ば、靜心無くて、此方にもえ侍ひ給はず思し歎きけり。斯くて十八日に、やがて此御寺にて御法事あり。大納言殿の年頃の御物、唯だ此度振ひ給ふ。中納言思し至らぬこと無く、嚴めしう爲させ給ひて、御忌も果てぬれば、廿餘日京に出でさせ給ふ。此もいと心憂く、思ひ出で無き身やと思せど、然りとてやはと思して、彼のゆゆしかりし所所にては有らで、田中の僧都と云ふ人の車宿にぞおはしける。あはれ若君おはせましかば、此頃如何に愛くしうおはせましと、東宮の若宮の御事など傳へ聞かせ給ひても、大納言殿盡きせず思さる。中納言殿は、內、春宮、宮宮などに畏まりばかりに參らせ給ひて、つくづくと物を思し明し暮す。院の女御などの御事を、暫しこそ有りしか、今は萬づに戲れさせ給ふめるを、いともどかしう心憂しと、思ひ聞えさせ給ふなるべし。霜月に成りぬれば、世の中には五節の準備し喧騷る。中納言御服なる上に、立ち出でんとも思されず。五節にも成りぬれど、例の樣に童女、下仕なども召されず、物荒涼じげなり。斯かる程に、此頃聞けば、大宮に侍ひつる小式部の內侍と云ふ人、內大臣の御子など持たるが、此年頃滋の井の頭中將の子生みて亡せにけり。人のいとやんごと無からぬ方こそ有れ、死に樣の御事に似たる、大宮にも、いと哀れに聞し召して、世のはかなさ、いとど思し知らるるにも、如何で疾くと思し準備がせ給ふにも、御調度どもをぞ準備がせ給ふ。小式部の母和泉式部、子どもを見て、

　留め置きて誰を哀れと思ふらん子は勝りけり子は勝るらん

と詠みけり。內大臣殿の若君をば、宮の僧都と云ふ人の坊におはしければ、和泉、「昔戀しければ見奉ら

あり。侍従大納言の姫君の顧君の御事いみじかりき。其れは大納言、女男数多持ち給へり。北の方ぞいみじう思すべけれど、少将の君持給へり。斯様なれば慰め此上無し。此大納言は、此御中どもに、様様いと数多失ひ給ひて、唯だ此上一所選り留まり給ひて、萬づに勝れておはしつるを、少少にて数多おはしますとも何にかは為んとのみ覚えつるに、あさましく心憂しとも疎かにぞ。神無月にも成りぬれば、大空の時雨も隙無く思されて、紅深き御涙も黒染に色増されれば、いみじうのみ思さる。御法事は、やがて此月十八日とぞ思して、萬づ準備がせ給ふ。中納言殿斯くて居させ給へれば、遠き程なれども、世の人参り混む。徒然も無きまで、物騒がしう思さるるに付けても、大納言殿は、今暫しぞかし、外へ渡り給ひなば、如何に慰む方無く、いとど寂寂しき事多からんと、今より其れをさへぞ歎かしう思さるべき。中納言殿、

憂き世なり思ひかけきや時の間も君に遂ひ見で過ぐすべしとは

此御事を、或人、外の袂も乾き難く覚えければ、いといみじき頃過ぐくして、斯くぞ聞えたる。

尋常にも有らぬ別れの悲しさは如何にとだにぞ問はれざりける

と聞えたりければ、母北の方、

今日までに有りとも人に知られじと涙に沈む身をば問ふらん

只今の左兵衛督と聞ゆるは、此大納言の、御弟を、やがて子に為給へるなりけり。其の北の方には、堀河殿の大蔵卿正光の君の御女をぞ年頃物し給へれど、月頃物の怪にて、ともすれば絶え入りつつ煩ひ給ひけれ

東宮、殿ばらの御誦經皆有り。東宮は驚きもせず思し召さるるにも、今日いとど思し昏らせ給ふ。御正日は廿三日にぞ有りける。其れにもまた御經、佛、樣樣いみじき事ども有り。若宮の御五十日は廿二日にぞ當らせ給ひける。いとゆゆしき程の御事なれば、二十七日吉き日なりければ、其れにぞ聞し召させける。大宮萬づに取り扱ひ聞えさせ給へば、いみじき事どもを爲させ給ひて、內、春宮、宮宮などに持て參り騷がせ給ふ。東宮よりも、思し至らぬこと無く細かに爲させ給へるに付けても、殿の御前いとど忍び難く思さるべし。花籠「籠物ノ略」や、折櫃物など、殿上人などに述給はせたれば、皆書き付けを爲つつ參らせたり。有べい限りは、めでたきに付けても況してとぞ思されける。若宮五十日打過ぎさせ給へる程、云ふ方無く愛くしうおはしますに、大宮も言忌もえ爲させ給ふまじければ、善く忍び敢へさせ給へり。彼の法住寺には、其の北の方の大門に其日の中に築土築き、檜皮葺の屋いとをかしげにて、其處にぞ斂め奉りける。萬づの御裝飾ども爲て、御車ながらに舁き下ろして斂め奉る。其程此殿ばらの御心地ども思ひ遣るべし。云はん方無く惑はせ給ふ。有べい限りの事ども爲て、今はと見奉らせ給ふ程も云ふ方無し。雲霧と見成し奉りつるは、暫しこそ有れ、さすがに爽やかなるに、是れは更に忘れもこそ爲奉れとて、大納言殿、法住寺の御步りきにも、忘れじの御心なりけり。あさましうゆゆしく、斂め奉りつ。大納言殿、返す返すも思し惑はれたり。四條大納言の姬君、一年失ひて歎き給ひしかど、內大臣の上に萬づ思ひ慰め給ひしに、また其上亡せ給ひにしは、いみじき事ぞかし。然れど其れは、彼の上の數多の君達、御代りにおはす。また左大辨の君

も有らんと、我ながら心憂く思さる。何事にも、如何で斯くし目易くおはせしものを、幼稚より初め、心樣、手打書き、絵書きなど、御心に入れ、前つ頃まで、佛供し御供して書き給ひしものを。此頃の絵を枇杷殿に持て參りたりしかば、いみじう興じ愛でさせ給ひて、納め給ひし。善くぞ持て參りにけるなど、思し殘す事無きままに、萬づに付けて戀しくのみ思ひ出で聞えさせ給ふ。年頃書き積めさせ給ひける絵物語など皆燒けにし後こそ、今年の程に蒐集めさせ給へるも、いみじくぞ多かりし。里に出でなば取り出でつつ見て慰めんと思されけり。月のいみじう明きに、故郷を思し出でて、

　　諸共に眺めし人も我れも無き宿には月や獨り住むらん

斯く云ふ程に、やうやう御法事の程も近く成りぬれば、彼の御裝束や、僧の法服など、綾錦他事無く、打泣き打泣き準備せさせ給ふ。御經、佛などにも、唯だ御具どもを備入れさせ給ふ。御堂には尚侍の殿の御法事、九月廿一日に阿彌陀堂にて修させ給ふ。隱し召しける御鏡を、佛に造り奉らせ給へるなりけり。其程の事ども思ひ遣り聞えさすべし。色色の御衣ども仕重ねて御誦經に修させ給ふ。御袂に結び附けさせ給ふ。殿の御前、

　　裁ち重ね見すべき樣も知らせねば鏡の音にて着つと知らなん

是れを皆分たす。山の座主賜はりて、

　　我し有れば確かに着せん心ざしいろいろ深き花の袂は

の車など引き續けたり。御供の人人など數知らず多かり。法住寺には、常の御渡りにも似ぬ御車などの樣に、僧都の君御目も昏れて、え見奉り給はず。然て御車舁き下ろして、次ぎて人人下りぬ。然て此の御忌の程は、誰も其處におはしますべきなりけり。山の方を眺め遣らせ給ふに付けても、わざとならず色色に少し移ろふ木末も悲しく、鹿の鳴く音に御目も覺めて、今少し心細さ增さり給ふ。宮宮よりも思し慰むべき御消息度度あれど、只今は夢を見たらんやうにのみ思されて過ぐし給ふ。月のいみじう明きにも思し殘させ給ふこと無し。內裏邊りの女房も、さまざま御消息聞ゆれども、宜しき程は「今自ら」とばかり書かせ給ふ。進の內侍と聞ゆる人聞えたり。

　契りけん千代は涙の水底に枕ばかりや浮きて見ゆらん

中納言殿の御返し、

　起き臥しの契りは絕えて盡きせぬ「ぬカ」は枕を浮くる涙なりけり

また春宮の若宮の御乳母の越後の辨、

　悲しさを且つは思ひも慰めよ誰も終には留まるべき世か

御返し、中納言殿、

　慰むる方し無ければ世の中の常無き事も知られざりけり

斯樣に思し述給はせても、いでや物の覺ゆるにこそ有めれ、況して月頃年頃にも成らば、思ひ忘るるやう

に、中納言殿哀れに戀しく悲しとも、世の常に思されて、文集の詩を思し合はせらる。李夫人の有樣も斯樣にこそはと思されて、「燈火を背け壁を隔てて語らふ事を得ず、何處ぞ、疾く來りて、早く相見え事をもて爲ん。心を傷ますること、獨り武帝のみにあらず、往時より今に及ぶまで、また多く此くの如し」と思し續けて、侍從大納言の姫君の御折いみじと思ひしかど、其れはいと若くて、なかなか物の覺えて、はかなき事にて過ぎき。此は大方有べう思されず。由無し文打書き、內裏邊りの宿直の折など、はかなき事ありしを、いと快からぬ御氣色にて、「麻呂が死なんをば如何に嬉しと思されん」など怨じしかば、「あなゆゆし、斯かることな宣ひそ。然らん折は、麻呂も世に在らばこそ有らめ、法師に成りなんものを。すべて更に今より後、斯からじ」など聞えしものを、世に在らば人の憂かにも紛れなんや。おはせぬ影にも聞かなる樣にや見え奉らん。斯聞えしやうに、法師にや成りなましなど、世の中を哀れに心細く思しつつ、夜、つゆ御殿籠らず、歎き明し給ふ。斯くて十五日に成りぬれば、此度の御有樣の例の樣に有りけれど、御車に物卷きなど爲て、また煩かしうて亡せ給へれば、御湯殿など爲て、やがて若君も同じ物に入れ奉り、かき添へて、御懷に抱きたる樣にし、臥せ奉る程、大方誰も賢しう見奉るべきにあらず。また參り寄る人も少なし。哀れに悲しくゆゆしとは、何事を云ふべきにもあらず。大北の方も、此殿ばらも、又押返し伏し轉ばせ給ふ。是れをだに悲しくゆゆしき事に云はでは、また何事をかはと見えたり。然て御車の後に、大納言殿、中納言殿、然るべき人人は歩ませ給ふ。云へば疎かにて、え學ねび遣らず。北の方の御車や、女房達

今なん出でて罷るとて、御邊りの塵をも打拂ひ、御衣を引き直し、入るとては、今なん罷り歸るとて、今日は世の中に何でふ事か侍りつる、何やかやと見聞く事をば、先づ聞かせ奉らんと思ひて、佛などを拜み奉らんやうに思ひ敬侍きて、懷離れ給ひて、この五年ばかりなり。この殿に奉りて後ぞ斯くておはしつるぞかし。子亡くなしたる類ひ多かれど、其れは取り代へも有り、殘りをも見て慰むらん。我がやうにあさましう、ゆゆしき事は有らじかし。如何なりけん前の世に、人の種を斷ち、思ふ人の中を避けけん。兒君をだに平らかに得させてぞ亡せ給はまし、何に付けてか暫しも思ひ慰めんとすらん。許多現はし奉りつる佛、我れを今宵の中に、彼のおはすらん方に率ておはせ」と惑ひ給ふ。母北の方も、すべて日頃いみじう泣かせ給へる人の、いとど物も覺えで消え入りてぞおはする。中納言殿、長き夜一夜思し殘す事無く、我が死ぬべかりける代りにこそ有めれと、思し遣らん方無きままに、我身一つを、と爲し斯く爲し、思し惑ふ。はかなく夜も明けぬれば、然りとてのみやはとて、陰陽師召して事ども問はせ給ふ。猶かくて世の常の樣に占ひ奉らん事は、いとほしく思されて、唯だ然るべく斂め奉らんとぞ思されける。然ればば其儘に速給はすれば、九月十五日の夜ぞ法作寺に率て奉りて、其月の廿七日に斂め奉るべう聞ゆ。是れを聞し召すにも、すべて此世の事とも思されず。許多の日頃、睡も寢で仕うまつり惱てつる人人の打休む氣色、はた慌けてのみ見ゆ。皆然るべき人人も過ぎて、御屏風などの立て樣例に變りて、哀れにあさましく、悲しう、ゆゆし。然れど、大方は變らぬ事どもなれば、「やや、此は如何に」とのみこそおぼめかせ給へ。やうやう日頃に成るまま

大北の方物語かしけれど、やがて尼に成らせ給ひぬ。此の上、猶更に頼み聞ゆべきやうも見え給はず、限り限りと見えさせ給ふに、いと哀れに心憂し。大納言殿、中納言殿も、這ひ寄り這ひ寄り、此の若君を打見打見泣き給ふ。「然て此の御心地いみじけれど、佛神を頼み奉りて過ぐし給ふ程に、廿九日、いと今日にこそと見えさせ給ふ。日頃すべて物を宣給はぬに、「殿、上に仕うまつらで止みぬることこそ心憂けれ。我れこそ後れ奉らましを、如何に思さんずらん」とばかり宣給へば、「やや、如何に思さるるぞ」と、大納言も母北の方も、つと捉へ奉りて、物も覺え給はぬ程に、やがて限りに成り給ひぬ。「然は是れこそ限りの御事なりけれ」と、動響み泣き喧騒り、内にも外にも、許多満ちたる人は出で入りもせず、大納言殿、云ひ續け泣き給ふ。御齋に有る限りの人、涙を流して立ち混みたり。中納言殿珍らかに泣き喧騒り給ふ。すべて心憂し。僧などの、前つ頃、倘侍の殿の御祈に參りたりしなどは、是れを世にいみじき事に思ひしに、是れいとどいみじうあさまし。御堂よりも、高松殿よりも、中納言殿の御有様の、いとほしく覺束なきままに、御使頻りなれど、聞き入るる人も無し。御堂には斯くと聞かせ給ひて、哀れに悲しく、我が御有様を思し合せて、大納言殿如何に思ひ給ふらんと、いみじう思されて、御齋食參らせたれど聞し召さず。打泣きておはします。大納言殿には、また二つ取り代へ有る御有様にもあらず、唯だ此の上一所こそおはしましつれ。斯かれば、殿も北の方も、如何でか物覺え給はん。日も暮れぬれば、世の響きも音もせず、大納言殿云ひ續け給ふ御聲に、隣の人も、つゆ眠まれず。「あはれ年頃我が君を、懐にて生し立てて、出づとては、

おはせで、八月ばかりに成り給ひにければ、殘りの月日も心もとなく思す程に、斯くいみじき御有樣を、如何にと思し合はする程、理にいとほしげなり。御堂よりも御使頻りに有り。八月廿餘日の程なり。猶任せてのみ有べい事ならねば、御修法始めさせ給ひて、數多せさせ給ふ。樣樣の御讀經の聲聲さし合ひ喧騷れど、いと堪へ難げなる御有樣なれば、大納言殿、何事を爲殘さんと思す。唯だ我が御身に代へんと思し惑へど、其れに由るべき事ならばこそ有らめ。また佛師どもを二三十人召し集めて、絹どもも取り出ださせ給ひて、等身の佛達を數知らず現はさせ給ふ。萬づの御願、祈りどもの料に、唯だ彼の御具どもを取り置かせ給ふ。「何に爲べきぞ」と御誦經に爲盡させ給ふ程、此御具どもも皆爲させ給ふに、中納言殿の「是れなん我がいみじと思へる物ども」とて、御佩刀と御鞍とを取り出でて佛師に給ふ程など、佛師どもも、哀れに悲しく思ひて、惑ひ書き奉る程に、廿六日の晝間に、いみじう惑はせ給へば、知る知らぬ多くの僧どもも、鳴り掛かり加持參る程に、兒生れ給ひぬ。あな嬉しと思して、何時しか先づ見奉り給へば、眞の程にて生れ給へる兒のやうにて、いみじう大きに嚴めしき男君の、やがて亡くなりて生れ給へるを、見付け給へる大北の方の御心地如何がは有る。大納言殿、中納言殿も、その御有樣いみじう思して、御心も慌れ惑ひて、いとど物も覺え給はず。子持の御心地、物も覺え給はねど、「兒は如何が」と述給へば、「いと美くしうおはす」と、在り顏に聞え成して、他方に率て奉りぬ。然て掻き臥せ奉りて、御湯を參るに、「兒を思へばなり」とて、露にても飲み入れ給ふに付けても見奉る事も樣樣涙こぼる。此兒の御有樣を、いみじく心憂しと思し惑ひて、

榮華物語　下巻

衣珠（ころものたま）

院の女御、尚侍の殿などの御事のあさましう哀れなれば、今年の秋は、嵯峨野の花も口惜しき匂ひなり。例は宮宮の前栽掘り、花見る人多かればこそ、自らをかしき事も有れ、哀れにて過ぎもて行けば、詠み人知らず、

人知れず心をのみぞ野べに遣る花見ん暇も無き秋なれば

返し、是れも覺束なし。

この秋は嵯峨野の花も甲斐無きに君獨りこそ心遣りけれ

などぞ、誰れも知らぬ事ども世には有べけれど、多くは書かず。中納言殿は、今は御心地も怠らせ給ひつれど、上の御有様のいみじきに、我が平かに癒りにけん事も悔しう思さるゝ。此の赤瘡は然るものにて、御物の怪のいみじければ、この御心地の名殘も怖ろしけれど、加持などもえ參らぬ程に、いとど御物の怪は強く成り増さりければ、弱り増さり給ふ。大納言殿も、中納言殿も、萬づ思し惑てたるに、いみじう心苦しう、萬づよりも大北の方は、此年頃より、正月には、兒の御衣や何やと、準備事を爲集め給ふに、斯く雜常にも

挿繪目次

榮華物語下卷目次

栄花物語

下巻

十二頁十行「大閣」は「大閤」。
七十六頁一行「一の御腹」は「一つ御腹」。
七十八頁二行「御惱」は「御惱」。
七十八頁六行「御使」は「御使」。
八十五頁十一行「前司相如」は「前司相如」。
八十五頁十三行「相信」は「相信」。
九十三頁十一行「大元帥法」は「大元帥法」。
九十八頁十二行「御心地云云」は「御心地にも、また」。
百十一頁九行「然らぬ事」は「然らぬ〔んノ衍カ〕事」。
百廿五頁十四行「此御方方」は「他御方方」。
百廿六頁十三行「我等云云」は「我等が交らひ」。
百卅七頁十二行「なさせん」は「まさせん」。
百四十一頁十行「勝れ」は「勝り」。
百六十六頁四行「一日」は「一日」。

に多少の文才ある人人は必ずしも多く自ら揣るに及ばない、熱意を籠めてさへ書いて置けば、如何なる文獻と雖も後人を益する所の存するものである。

一、附錄として「赤染衛門集」を「群書類從本」に由つて添へた。是れは著者が老後に自撰して置いたものが傳寫されたのである。傳寫の誤と思はれる所を校訂し、また讀者の便宜の爲めに「 」此印の中に少しく人名の注をも加へた。假名書の所に漢字を當てたる所も多い。此題簽は「群書類從本」を撮影した。

一、ついでに云ふ。「出羽辨集」には此「榮華物語」の「續編」に出た歌が自撰されて居ない。作者は恐らく意識して「榮華物語」に讓つたのであらう。此事もまた「續編」の七卷が出羽の辨の作である旁證の一つとなるのでは無からうか。

一、最後に「上卷」の「解題」と本文とに生じた誤植其他を、次の如く訂正して置く。

一頁四行「太安萬侶」の傍訓はオホノヤスマロ。

一頁十二行「正編十卷」は「正編卅卷」。

一頁十二行「天曆元年（九四六）」は「天曆元年（九四七）」。

四頁七行「歌人歌學者であつた僧顯昭」は「歌人にして明慧上人の叔父であつた僧上學（或は覺）」。

七頁十二行「藤原妍子（一三三一――一四〇八）」は「藤原妍子（九九四――一〇二七）」。

十二頁八行「――一〇五七」は「一一一九九」。

事なり」と書いてゐるのは、是れも此卷を評する他人の語に假托したる作者の自己辯護であつて、自家の女に皇子の降誕終に無きに失望して宇治に引退したる關白賴通と當時の曲折したる宮廷事情とに就いて書く事は、此作者の力を以てしては甚だ難しとしたのであらう。猶茲に「後三條院」と書いてゐるから、後三條天皇が太上天皇と成られた後、即ち延久四年以後に此七卷の書かれた事は明かである。

一、次に「松の下枝」より「紫野」まで三卷の作者は、同じく女房階級の婦人たる事は、其內容と筆致とに由つて十分に推定せられるが、何氏なるかは考へ得ない。其視野の狹く、想像力と創作力の乏しい事は前七卷の作者と同一であるが、作者自身が寧ろ顏を出さうとした形跡の無いのは、出羽の辨に比べて愼ましやかである。文才もまた出羽の辨以上に多く出て居ず、筆致もよく似てゐるが、唯だ聊か彼に比べて冗漫の病を免れてゐる。我我は初め、此三卷も出羽の辨の筆で無いか、出羽の辨の心境と文章とが是等を書く頃に少しく變化したので無いかと考へたのであるが、「紫野」の卷の寬治六年（一〇九二）以後には出羽の辨が八十一歲を越えて生存して居ねばならない。其れまで生き長らへて居たと想像する根據が無く、生きて居たにしても筆を執り得たであらうとは考へられない。三卷に出羽の辨の歌や彼れに關した記述が全く無いのも、出羽の辨の筆で無い事を推定せしめる。

一、我我は「正編」に比べて「續編」のすべてが續貂の譏を免れず、從つて其の文學的價値を低く評定する者であるが、然かも此「續編」の述作に由つて學問上に益する所の多い事を德とするのは勿論である。世

力と創作力との甚だ貧弱なる事を遺憾とする。之に比べて「正編」の作者赤染衞門の人格の高さと大きさとが今更の如く驚歎される。「正編」の作者は隨處に詩があり、精細な觀察、遒麗な妙文があつた。彼れを繼がうとした「續編」の作者は、せめて彼れの法成寺御堂供養の典雅華麗なる一章に對してだけでも、その御堂關白道長の榮華の結晶であつた法成寺の燒亡を叙するのに、渾身の力を揮つて悲壯哀婉の一章を示すべきであるのに、纔かに「二月廿三日の夜御堂燒けぬ。然ばかりめでたくおはします百體の釋迦、百體の觀音、阿彌陀、七佛、藥師など、丈六の御佛達、火の中に燦めきて火の中に立たせ給へる、あさましく悲し云云」の數行を以て平凡に叙し去つてゐるに過ぎない。また「續編」の作者の文章には精彩を缺くと共に、婦人の衣服を叙しては冗漫に流れ、想像と語彙とに乏しい爲めに空疎なる同語の重疊する所多く、且つ「斯かる事をまだ三島江の浪に打逢ふ事は有らじかし」(殿上花見)と云ふ如き、謬の掛詞を散文に用ひたる厭味なる技巧をも見るのである。如此きは「正編」の作者の假にも爲さなかつた所であつた。大石千引(一七七〇「明和七年」——一八三五「天保六年」)が「是れまでの卅帖の文勢、文法、凡人のしわざと見えず。是れより下十帖は、作者他人なれば文章も劣れり」と云つたのは確評である。

一、我我の臆測する所では、出羽の辨は「煙の後」の終りに至つて筆を擱いた。此卷の最後に「後冷泉院の末の世には宇治殿(賴通)入り居させ給ひて世の沙汰も爲させ給はず、東宮と御中惡しうおはしましければ、其程の御事ども書きにくく煩はしくて、え作らざりけるなめりとぞ人申しし。東宮とは後三條院の御

間を以て書きたがら、實際の筆は穩當を失して作者の交友關係に私し、「根合」の卷に「女房の中らひにも、をかしき事多かり」と作者自身に云つてゐる範圍の記事が多い。從來の學者達は殊に於てのみ出羽の辨作者說を立てたが、我我は卷中の取材が出羽の辨の周圍に偏にして他の重要なる記實に粗なる事を想ふと共に、作者出羽の辨の虛榮欲を特に最も露骨に示したものは「暁待星」の一卷である事を指摘したい。「この出羽の辨、いとをかしく風流者なるものから、有心なること、出羽の匂ひや、色の樣も殊になん有ると最上の人人云ひけるを云云」と云ひたる如きは、他人の筆に擬して自讚を企てたる事の甚しいものである。また「其頃氷を圓の形にて、御硯の蓋に置きて、東宮の御方より此御方に奉らせ給へれば、敷きたる紙に葦手にて、出羽の辨、君が代に經ると見れば氷すら千代をかねてぞ結び貫く、と書き付けて參らせ給へれ」とも書いてゐる。或は人あつて我我の所見を駁し、「若し作者が出羽の辨自身ならば、斯くまでの自讚を他人の筆に假託するに至らないであらう」と云ふであらうが、併し如何に平安末期の文藝頹廢期に入らうとしてゐる時であつたとは云へ、男子にも女流にも獨其人に乏しとしないのであるから、出羽の辨ならぬ他の何人が、「續編」の中七卷に多くの墨を費して是れだけの讚美と僭越とを出羽の辨に捧げる者が有らうか。想ふに作者出羽の辨は清少納言の皮相を學んで、遂に其價値に達し得なかつた一閨秀作家であらう。

一、我我は前述の理由から續く二「續編」の作者の一人を出羽の辨と假定し、さて此作者の視野の狹く、想像

仕へて居たと想はれるから、「煙の後」の卷に書かれた治暦三年（一〇六七）には六十歳になつて居た筈である。此人の歌集「出羽辨集」は自ら選んだものであり、其れに老年の作の多いのを見ると、六十四五歳頃までは確かに生きて居たと考へられる。即ち年代から云へば治暦三年以後、延久四年（一〇七二）から承保三年（一〇七六）までの五年間ぐらゐに六十四五歳の出羽の辨が右七卷の筆を執つたとする事には可能性が十分に有る。次に内容から云へば、既に契沖以來多くの學者と讀者とが氣付いてゐる通り、右七卷には出羽の辨の歌が多く載せられてゐる。當時には優れた女歌人に赤染衞門、和泉式部が年長者として生存し、外に相模、大貳三位の如き名流が時を同じうしてゐる。出羽の辨の如き程度の女歌人に至つては、何れの宮、何れの家の女房階級にも多い事である。されば文學の鑑賞に一隻眼ある者ならば、決して權衡を失した歌の採り方をしないであらう。此七卷の中に出羽の辨の署名ある十八首を見るのは餘りに過度である。猶其外に署名せずして出羽の辨の作たる事の推定せられる歌も少なくない。「出羽辨集」に自作の褒められた事を書いて得意としてある出羽の辨である事を想ふと、從來の學者の中に「續編」を出羽の辨の作であると推定したのは當然である。さう思つて讀み返すと、出羽の辨が自己の歌を吹聽する爲めに、わざわざ筆を著けたと想はれる記事さへも幾處か有る。一體に出羽の辨が此七卷に顏を出し過ぎてゐる。之を書くに他人の見聞をも材料としたであらうが、女房階級の作者の狹隘な視野と淺薄な趣味とを超えた所が甚だ乏しい。「正編」が關白道長を中心として書いたのに倣ひ、是れは關白賴通を中心とする意

の辨の誰作か」と述べてゐる。猶また之を二人の筆と見て、「殿上花見」より「根合」まで六卷を一人の作とし、「煙の後」より以下四卷を別人の作とする木下幸文の說があり、更に六卷までを一人、「煙の後」より「布引の瀧」まで三卷を一人、「紫野」を一人、合せて三人の作とする屋代弘賢、（一七五八「寶曆八年」――一八四一「天保十二年」）岡本保孝二家の說がある。和田博士は「下篇は上篇の如く統一する所無く、後より漸漸追加せしが如く見ゆれど、著者を數人なりとせんは、猶確かなる證無きことなり。先づは普通の說に從ひ、一人の著なりとせん事、穩當にして、難ずべきふしも無ければ、宜しく定說とすべきなり」と云はれてゐるが、既に諸家の異論を生ずる理由のあるだけに、「續編」の作者に關して定說を得る事は容易で無い。

一、さて茲に我我もまた「續編」の作者に就て臆說を附記して置く。我我は作者を二人とし、「殿上花見」より「煙の後」まで七卷は出羽の辨の筆、其後の三卷は逸名氏の筆であらうと推定する。出羽の辨は後宮の女房として、初め後一條天皇（一〇〇八「寬弘五年」――一〇三六「長元九年」）の中宮威子（九九九「長保元年」――一〇三六「長元九年」）に仕へ、威子の崩後、その所生の皇女である後冷泉天皇（一〇二五「萬壽二年」――一〇六八「治曆四年」）の中宮章子（一〇二六「萬壽三年」――一一〇五「長治二年」）に仕へた。父平季信が出羽守であつたのに因んで此女房名を得た。「殿上花見」の卷に初めて出羽の辨の歌が出てゐるのは長元五年（一〇三二）の記事である。此時出羽の辨は廿歲ぐらゐで中宮威子に

記に下編〔續編〕を引きたるを見れば、寛治六年（一〇九二）より後、嘉承元年（一一〇六）まで十四五年の間に著作せしものなること明たり」と云はれたのに從ふのである。

一、「續編」の作者が婦人であろ事は、その觀察、嗜好、及び文章に由つて明白であるが、猶作者自身も「女の記るす事ならねば記るさず」（歌合）「女などの心及ばぬ事なれば止めつ」（布引の瀧）と書いてゐる。之に就きて、岡本保孝（一七八七「天明七年」――一八七八「明治十一年」）は「女の書ける物語のさまに取りなして女と云へるか、猶考ふべし」と云ひ、和田博士は之を作者自身の語とせず、その引用したる女房達の「日記の原文なるべし」と云つて「著者の何れなるかに就いては考ふべき材料見當らず、……著者の男子なりや否やは判定し難し」と云はれたが、我我は婦人の筆たる事に一點の疑惑を容るべき餘地を認めない。是れは當時の男子の筆に成つた同種の歴史小說たる「大鏡」を取つて少しく兩者の內容と文章とを比較するなら忽ちに首肯せられるであらう。苟も著作をしようとする男子は、如此き淺い教養と狹い眼界とを以て筆を執る事を敢てしない。

一、「續編」の作者を女子と定めて、さて早く之を出羽の辨一人の筆であらうとしたのは僧契沖（一六四〇「寛永十七年」――一七〇一「元祿十四年」）である。即ち契沖は「百人一首改觀抄追考」に於て、「此卷〔殿上花見〕より出羽の辨歌初めて出でたれば、若くは以下十卷は出羽の辨の續け書けるにや」と云つてゐる。また土肥經平も「春湊浪話」に於て「此十帖の內に出羽の辨の歌多く出でたるにて思へは、此出羽

榮華物語下卷解題

一、此卷に載せたる「鶴林」までが「榮華物語」の「正編」と稱すべきもので、赤染衞門の作であると推定する事は、既に「上卷」の解題に於て述べた。初めは此「正編」だけが存在して廣く人に讀まれたので、鎌倉初期に追記された「大鏡」卷四の「世繼名」には「正編」のみの卷名を載せ、また和田英松博士が其力作たる「榮華物語詳解」（明治書院版）の解題に於て述べられた如く、平安末期の高倉天皇以後に書かれた「今鏡」が「榮華物語」の「續編」を參考してゐないのを見ると、「續編」はその最後の卷の「紫野」の示す寛治六年（一〇九二）以後に間も無く書かれて居ながら、鎌倉初期までは未だ多く世人の耳目に入らなかつた事が想はれる。

一、「續編」十卷が寛治六年以後に多く年月を經ずして書かれたと推定されるのは、和田博士が「本書の中、寛治以後なるべき人物及び官位等の混ぜしもの無く、また寛治以後に關る事がらの紛れつるものだに無ければ、其後程無く成りしものとせんに不可なきが如し。且つ上編「日本古典全集」編者等の謂ゆる「正編」は道長の薨去を以て結末としたるに、下篇（編者等の謂ゆる「續編」）の終には、中納言忠實が春日祭上卿を勤めし外には擧ぐべきもの無く、素より御代の末にても無く、攝關の代り目にても無く、甚だ無意味なるは、蓋し亦當時のものなる事の一證とするに足らん」と云はれ、また「鳥羽帝の始に書ける讃岐典侍日

日本古典全集刊行會板

日本古典全集

與謝野寛
正宗敦夫
與謝野晶子
編纂
校訂

榮華物語 下卷

附 赤染衞門歌集